女人藝術

NYONINREN MEI

靜夜讀書十一月號

附錄 女人大衆

女人藝術第三卷十一月號目次

—禁轉載—

靜夜讀書號

★★★

千葉龜雄・大宅壯一編輯

綜合ヂャーナリズム講座

豫約募集

ヂャーナリズムとは活字の假面を冠つて現れた近代社會の怖るべき暴君だ。彼の支配權は、上は一國の政治、經濟から下は各個人の感情の隅々にまで及び、文學や思想を鷲掴みにすると共に、選擧の勝敗も、內閣の更迭も、株式の變動も、すべてその魔の手に委ねられてゐる。この戰慄すべき二十世紀の怪物ヂャーナリズムの正體を徹底的に暴露し科學的に全面的に解剖せんとする世界最初の企てとして本講座が生れた。

全知識層の生活戰線に送る最尖最銳の武器!!

劃期的新聞型內容見本
全國書店にあり申込次第直ちに送呈

豫約規定

□體裁 菊判、假裝、函入、一冊紙數約三百五十乃至四百頁、本文九ポイント組

□頒布方法 全十二卷、豫約會員のみに頒つ、昭和五年十月より每月一冊宛を刊行し六年九月完結但し第一回配本に限り發表と同時に申込順に依て配本

□會費 (一)申込金(五十錢)最後の會費の一部に充當す但し中途解約者に返戻いたしません

□會費 (二)每月拂(一冊)に付一圓五十錢(每月一日迄に御拂込下さい) (三)一時拂(全十二卷)十七圓五十錢(申込の送料不要)

□送料 每冊金十四錢(書留十錢增)(東京市內六錢書留六錢增)

□入會申込 附近の書店又は本社に御申込下さい

□締切期日 十月三十一日

東京市京橋區桶町八・梅田ビル

內外社

電話京橋六三七七番・振替東京七六八四九番



羊毛を洗ふキルギズの婦人



（上）　左、右　東洋モス龜戸工場の爭議
で氣勢をあげる女工さん達





（下）　左　府下大島のプロレタリア小學校
右　深川沖の艀船爭議




プロレタリア
少年団
万才ー







秋夜講座の講師諸氏

上　演壇に立つ大塚金之助氏

下　右より平林たい子氏、神近市子氏

中島幸子氏

女人藝術

十一月號



世界經濟恐慌

大塚金之助

資本主義と恐慌

恐慌の歴史的發展——景氣循環——ブルヂョア景氣觀測の無能の曝露

今日は世界的の不況である、從つて日本も不況であるといふことは、毎日の新聞で御覽の通りであります。この世界的不況といふ言葉は、吾々の謂ふ世界の經濟恐慌といふことであります。けれども、支配階級とその代辯者は經濟恐慌といふのを嫌つて、世界不況といふ言葉で今日の經濟情勢を特徴付けて居ります。

諸君が毎日の新聞をよく御覽になれば、そこには世界經濟恐慌のあらゆる表れが出て居ります。今日、卸賣物價は非常に下つたけれども、小賣物價は餘り下らない。その結果はどうなるでせうか。昨年は、大抵七錢から八錢、高い時には十五錢もした大根が、それが今日は十五分の一の一錢になつて居る。これはなぜであらうか。又、養蠶家は非常に苦しんで居る。世界の貿易は段々に衰へて行く。會社の利益は減つて居る。綿絲紡績は日本では採算割れ——つまり拵へ

ても損である。斯ういふやうに、毎日の新聞は諸君の眼前に世界經濟恐慌の姿をまざ〳〵と示して居ります。

それで私の話を聽いてやらうといふ諸君は、先づ四つの問題を持つて來られたものと思ひます。なぜ恐慌が起るか？それが一つ。恐慌對策——今日世界のブルヂョアジイがやつて居る恐慌に對する方策——は、一體、効果があるものだどうか？　この先の景氣はどうなるものだらうか？　一體恐慌から逃げる道があるのかどうか？　この四つの問題を諸君が今日持つてお出でになつたと思ひます。私はこの四つの問題に對して諸君に回答を與へて上げたいと思ひます。先づ初めに資本主義と恐慌といふことに就て、大體總論的にお話して、それから具體的の事實をお話したいと思ひます。

先づ恐慌と資本主義の初めの題目——恐慌の歷史的發展に入ります前に、茲に掲げたグラフを見て戴きます。これは昨年まで萬年景氣を謳はれて居たアメリカ合衆國の景氣の有樣を曲線に現はしたものであります。而してこれはアメリカのブルヂョアジイの世界的に有名な機關紙であるアナリストといふ雜誌から取つて來たのであります。これを御覽になると、一八八一年から一九三〇年までの半世紀の間のアメリカ　於ける事業界の一般的情勢がどんな曲線になつて動いてゐるかゞ分ります。御覽の通り、上ると、下る。下ると、又そろ〳〵上つて行く。上ると、がたつと下へ落ちて又上るといふやうに、いろ〳〵曲折を經て來て居ります。今日は一九〇八年の恐慌の時と同じ深味に來て居ります。一九〇八年は歐洲戰爭以前の世界恐慌であります。さうして一九一四年になつて、又恐慌が來さうになつて居る所に、暫く戰爭で止つたのであります。戰爭中は茲に現れて居るやうに、空景氣であります。會社の資本も膨脹し、通貨も膨脹する。空景氣でありまして、戰爭後も暫くは空景氣の情勢が續いてゐましたが、すぐ一九二一年の恐慌が來ました。この時には本源地は日本でした。三月に日本に金融恐慌が起つて、それが直ぐに生産の方面に進行して、翌月はアメリカ、その翌月はヨーロッパに影響して、さうして主なる資本主義諸國全部に及んだのであります。それからアメリカは段々景氣が好くなつて來ましたが、今日は又世界恐慌で落ちてしまひました。

このグラフは非常に簡單なものでありますけれども、このグラフだけで、次のことが分る。昨年中、諸君は「朝日新聞」、「日々新聞」といふやうなブルヂョア新聞で、アメリカが非常に景氣が好いといふことをお讀みになつたでせう。全世界のブルヂョアジイは、アメリカの好景氣を非常に羨ましく思つて居たものであります。ところが、古今未曾有の

繁榮といはれたアメリカの繁榮といふものは、決して古今未曾有ではない、正確に見ると、一九二三年の頂點よりも、まだ低い、況してこれは沒落資本主義ですが、まだ資本主義の命のあつた時分の好景氣に比べると、ずつと低いといふこと。それから前の時代に見えないことが茲に一つ現れて居る。それは外でもありません。戰後、暫らくの間、景氣が一向上らない、ぐづ〳〵してだらだら動いて居ります。然るに落ちる方は一人前に落ちて居る。これは戰後の資本主義の病氣を現して居ります。日本にしても、イギリスにしても、ドイツにしても、歐洲戰爭以後二三年の空景氣の時代は除いて、景氣が好くなつたといふことはない。みな斯ういふ風に不景氣がゆるく長いのであります。併し、恐慌となるといふと、非常に激しい。戰後、資本主義が沒落期にあるといふことは、この曲線にもはつきり現れて居ります。アメリカの大統領フーヴアーは、アメリカは永遠の繁榮である、アメリカはどこまでも好景氣が續くのだと、いろ〳〵な宣言、或は新聞雜誌を通し、ラヂオ、敎會、トーキーを通して宣傳して居りますが、みな出鱈目であつた。この曲線が示すやうに、此の好景氣は二年も續きはしなかつたのであります。斯樣に資本主義經濟の下に於ては、景氣が循環して行きます。その景氣の循環の有樣をお話するのに見易いやうに茲にグラフを示したのであります。

資本主義經濟の下に於ては、この曲線に見えるやうに、景氣が一本調子には行かない、上つたり、下つたりして、景氣が循環して行きます。此のことは、既にマルクスが資本論の中で屢々述べて居ることであります。經濟狀態は、靜かに止まつて居る所から段々と活氣が出る。さうして繁榮が來る。過剩生產が來る。そこで大動亂が來て、がらりと落ちる。その次に沈滯の時代が來る。さういふことを資本論第三編の中に述べて居ります。或は他の言葉でマルクスは、斯ういふ風に言つて居る。ゆるみが出る、それから活氣の時期が來る、それから强い調子で景氣が上つて行く、恐慌が來ると。斯ういふ風にゆるんでは活氣が出、活氣が出ると、好景氣になり、直ぐに恐慌になるといふのが、資本主義經濟の景氣の循環であります。なぜさうなるのか？

資本主義的生產が段々進步して行くと、事業の爲に使ふ固定資本が非常に澤山になります。この固定資本といふのは、一年や二年では減らないから、非常に長く持つものであります。然るに、他方に於て、生產手段の變革といふことが常に行はれる。十年前の機械は最早今日使ふことが出來ない。機械の形は昔の儘であつても、その機械の交換價値が

なくなつて來る。例へばこの机は今でも使ふことが出來ますけれども、社會的にもつと便利な机が出來れば、これは値打がなくなります。他の良い機械を持つて來て之に換へるといふことにしなければ、外の生産者との競爭に勝てないといふ譯で、一方に長く使へる固定資本が澤山あるに拘らず、他面では生産手段を斷へず更めて行かなければならない。それから不景氣の時代になれば、これに應じて機械だの工場の編制換へをします。さうしてこゝから出直して段々やつて居る内に、又生産が過剩になつて、又落ちる。又やり直しする。今日が恰度、やり直しの時期であります。

少しむづかしくなりますけれども、週期性の問題――それでは一體、何年每に落ちるのかといふ問題があります。それに就ては、全世界のブルヂョア景氣研究者がいろ〳〵說を立てゝ居ります。マルクス　エンゲルスは、一八五〇年迄は、大體、五年で以て景氣が循環するといふことを言つて居りました。併し、一八五〇年以降、十九世紀の後半になりまして、マルクス　エンゲルスは十年だといふ意見を出したのであります。ですから、景氣循環を十年として、といふことがよく資本論に出て來るのを御覽になるでありませう。勿論、この十年といふのは、決して固定した數ではない。マルクス　エンゲルスが景氣循環を十年ときつかり決めた譯ではありません。エンゲルスが一八八七年、即ち恐慌がドイツを襲つた時に、アウグスト・ベーベルに手紙を書いてゐます。その中に景氣循環のことをよく書いてゐます。エンゲルスはその中に斯う書いてゐる。「又恐慌がやつて來る。君の經濟のことに就て取つてゐる考へ方は正しい。イギリスやフランスや、アメリカではつきりと確證される。斯ういふやうに度々恐慌がやつて來るやうでは、好景氣の際には、決して十分に延びないであらう。資本主義的生産樣式が完全に病みほうけた證據だ」と言つて居ります。

この景氣循環の行き方で、最近の現象として面白いことは、さつきお話した通り、歐洲戰爭以後の景氣循環の形であります。昔のやうに、非常に上つて落ちるといふ風にならないで、暫くぐづ〳〵と不景氣の間を彷徨つて居て、さうして恐慌の際だけ下へ深く落ちる。これはイギリスでも、ドイツでも、日本でも、皆、さうであります。最近、マルクス主義經濟學の中で、何年目に恐慌が起るかといふことが、又、ロシヤで新に問題になつて居りますけれども、それに就ては、まだ私達は深く知ることが出來ません。ロシアの學者にコンドラテイエフといふ人がある。その人が、大景氣循環といふ學說を立てた。景氣循環といふものは、さうまでせゝこましくやるものではなく、五十年位の長い期間を週

期として動いて行くのだといふことをいつて居ります。けれども、さういふ學說は、このグラフを御覽になつだだけでも間違ひであることが分る。景氣循環の動きを長く考へるといふことは、つまり資本主義的支配を長からしめようといふ考へに落付くのであります。今日の經濟學者や、全世界の景氣研究者は、矢張り週期の問題に付ても、景氣循環の問題に付ても、吾々とは違つた考へを有つて居ります。彼等の考へは、究極する所、矛盾は認ないで統一を見る、對立の代りに統一を見るといふことにある。若し、經濟がほんとうに統一されたものといふ風に考へるならば、恐慌が起るとは、どうしても考へられないのであります。從て景氣循環の說明に就ては、吾々とは全く違つた考へを持つのであります。社會の生産力と、社會の消費力とは矛盾を來たし、對立してしまつて、それが恐慌といふ非常な出來事の爲に無理やりに一に統一つされる所に恐慌が起つて來る。であるから、對立矛盾を認めなければ、さういふ恐慌が起るといふことも、考の中には出て來ない譯であります。恐慌の中には資本主義生産の有らゆる矛盾が曝露されるのであります。假に生産曲線が上に向いて行くとします。すると、フォードの自動車工場のやうに、工場を擴張する、勞働者を雇ひ入れる、いろ／＼な廣告をして自動車の宣傳をやる、アメリカでは學校の先生でも、勞働者でも自動車を持つて居ります。しかし、去年あたりは、自動車、一軒、一臺は足りないから、二臺位、買へといつて盛に宣傳をして居る。而も、それが月賦販賣でありますから、非常に買ひ易い。さういつた調子で、總ての生産分野で以て、生産をどし／＼進めて行く。從つて生産力は著しくなり、生産過剩になります。併し、品物を拵へても、結局買つて呉れる人がなくてはいけない。又生産物の中には餘剩價値といふものが這入つて居る。つまり資本家がたゞで取上げた勞働時間がその中にある。その勞働時間をお金に換へてポケットの中に入れなければならない。それには品物を倉庫に入れて置いてはいけない、賣らなくてはならない。買つて呉れる方はどうかといふと、一九二七年頃に段々、合理化の勢ひが激しくなつて、勞働者は工場で非常に强度に働かなければならん。段々良い機械や、非常に激しい勞働方法を採用しましたから、勞働者が餘り要らなくなつて、どし／＼と勞働者が工場から追出された。農業は歐洲戰爭以後、どこの國でも、特に情勢が惡くて、直ぐに恐慌が來さうな狀態を續けて行きました。であるから、全世界の農民の購買力は落ちた。世界中に失業者の波がある。彼等は購買力を殆ど持たない。支那は、御承知の通り、軍閥の戰爭で、內亂に次ぐに內亂を以てし

て居ります。民は疲弊して居る、おまけに、日本の新聞は報道しませんけれども、支那には非常にひどい饑饉があります。全世界の資本主義諸國の大衆の消費力、購買力といふものは、非常に落ちて居る。それなら、生産する力も、いくらか加減したら良ささうなものであるが、さうはいかない。自分が遠慮してをつても、外の者が拵へて儲けるといふ競爭といふことがあつて、これが斷へず資本家を脅かす。從て彼等は工場を擴張し、機械を增設し、どしどし生産する。諸君が何が着たいとか何が食べたいとかいふことは、資本主義生産の目的ではありません。資本主義社會で物が作られるのは、たゞ資本家が儲ける爲めである。從て諸君がどれだけの消費力を持つて居るかといふことは、彼等には問題でないのであります。兎に角、作つて買はせるといふことが彼等の眼目であります。さうすると、社會の消費力と、社會の生産力の間に大變な開きが出來て來て、買ふ者がないのに品物を作るといふことになります。そこでさういふ大きな開きが出來た儘動いて行くことが出來ない。生産力と消費力の矛盾は何とかして解決されなければならない。この生産力と消費力の矛盾を無理遣りに統一させるといふのが恐慌であります。つまり恐慌といふものは、生産力と消費力の矛盾を暴力的に無理押しに解決する道であります。

斯様に資本主義生産の一般條件から恐慌が出て來るのでありまして、資本主義のある限りは、何時まで經つてもこの恐慌のお見舞を受けるのであります。その證據に諸君は、資本主義以前のことを見て御覧なさい。德川時代には百姓一揆などはありましたけれども、恐慌といふものはない。德川末期から明治の半ばに掛けて、資本主義が十分發展しない頃には、天災凶作とかいふことに關聯して、つまり自然の出來事に關聯して、恐慌が起つた。併し、今日の恐慌はさうではないので、資本主義内部のカラクリ、組立から、どうしても恐慌にならなければならないやうに出來て居るのであります。だから、資本主義のある限り、諸君の臺所は恐慌のお見舞を受けるのであります。

ブルジョア學者達は斯ういふやうな恐慌の原因を深く探らうとしない。だから、天災地變的な出來事、凶作といふやうなことに恐慌の原因を歸して居る。或は戰爭に依て恐慌が起るのだといふやうなことを言ふ人がある。一九二一年の世界恐慌は、歐洲戰爭の直ぐ後に來たので、この恐慌は戰爭をやつたからだといふ風に說明して居たものであります。當時はそれで諸君は瞞され得たけれども、併し、今日はさういふやうなことでは、說明が付かない。社會の組立、資本

主義的生産のカラクリからこれを說明して行かなければならないのであります。

私は今お話してゐる項目を了るに當りまして、今まで度々申上げましたブルジョア側の景氣觀測が如何に出鱈目であるかといふことをお話しませう。資本主義經濟の動き、景氣を吾々は觀測することが出來ます。事實、全世界の諸國では、景氣觀測所を置いて一生懸命に景氣觀測をやつて居ります。アメリカの景氣研究と云ふのは非常に盛なものでありまして大きな銀行や會社には必ず景氣研究室と云ふものがあつて、有名な學者などを賴んで景氣の研究をして居ります。大學にも景氣研究室があります。其の他金持が金を出して景氣を調べてゐる所もあります。イギリスでも、ポーランドでも、ドイツでもさうであります。ドイツの景氣研究所といふのは、ドイツ第一の景氣研究家を集めて、さうして年に四度、非常に大きな報告を出して居ります。斯ういふ風に、全世界のブルジョアジイは非常に金を掛けて立派な人物を集めて景氣觀測をやつて居る。併し、今度の世界恐慌で觀測を誤らなかつたのは全世界の景氣觀測學者の中でたつた一人で、あとは皆、景氣觀測が外れたのであります。アメリカの景氣研究家として有名な大學教授であるアーヴィング・フィッシアといふ人は、昨年十月の取引所の大動亂が起つてアメリカ人が關東の大震災の時のやうに狼狽した時に、もう大丈夫だ、株の相場は直ぐ上るだらうと報告を出した。すると、その報告を出して二三日後に、又株ががらがらと下つてしまつたのであります。それ以來、株は上らうとして上り得なくて、今でも株の相場は安いのであります。ドイツの景氣研究所は學問的に、その他の意味で、非常に設備の整つた所でありまして、留學生などでそこに行つて居る人があります。ドイツの景氣研究所が今年の二月になつて、ドイツの恐慌はもう底を入れた、一番深い所に來てしまつて、これからそろ〳〵ゆるやかな上りの曲線に入るといふ報告書を出しました。所が五月になつて、それを取消さざるを得なかつた。五月になつて、まだ吾々は景氣の一番深い所へ來てゐない、これからだといふことを言つたのであります。アメリカの金融資本家の代辯人であるフーヴァ大統領——斯ういふ人のいふことは、勿論出鱈目である譯です。少し時が經つと、もう景氣が好くなるといふことを屢ゝ述べるけれども、フーヴァの聲明が出ると、直ぐに景氣が惡くなつて來るといふ狀態であります。その外世界的に有名な經濟學者であるカツセル、イギリスの經濟論客であるケーンズ、その外のブルジョア經濟學者の言ふことは皆さうであります。

さういふやうなブルジョア的の景氣研究者の一般特色は、恐慌の前には好景氣が續くといふことを必ず言つて居る。資本主義の歴史を顧みれば、恐慌が必ず來るのだといふことは分つて居るに拘らず、アメリカの好景氣の時のやうに聲が大きくなつて來ると、それを忘れてしまふ。それからもう一つの特色は恐慌が始つて居るのに、恐慌ぢやないといつて頑張る。これは決してブルヂョアとその代辯人であるブルヂョア經濟學者だけでなく、ドイツ社會民主黨の機關紙『進め』紙の如きも、アメリカで恐慌が始まつて居るのに、どうしても恐慌だといふことを認めない。前に引用したアナリストといふアメリカのブルヂョア雜誌でさへ恐慌だといふことを認めて居るのに、それでもアメリカの恐慌を認めないでゐるのであります。斯うなると、目が眩んでしまつて居るのであります。もう一つの特色は、彼等が理窟で考へて行けばどうしても出來ない筈の恐慌對策といふことに依て民衆を欺瞞するといふことである。フーヴアの恐慌對策であれ、ドイツの內閣の恐慌對策であれ、イギリスの勞働黨政府の失業對策であれ、皆出來ない相談である。紙の上に並べて民衆を欺瞞するだけであります。

一九三〇年の世界恐慌には、いろ〳〵特殊の性質がありますけれども、その中の主なるものだけをお話いたします。先づ第一に資本主義沒落期の恐慌であるといふこと、前にお話したやうに、恐慌の後に不景氣が來る譯ですが、この不景氣の曲線が非常に長くなるのであります。このことはよく覺えて置いて戴きたいのであります。恐慌が濟んだら、日本が好景氣になると、お思ひになつてはいけない。景氣が好くなるといふことは、それは幻想であつて、科學的の見方に依れば、決して好景氣は來ない。沒落期の恐慌である爲めに、恐慌が非常に早く世界的に廣まる。世界恐慌は、今度が初めてゞない、一九〇八年にもありましたけれども、今年のやうに、僅か數ケ月の中に、ヨーロッパ、アメリカ、濠洲、印度、支那、エヂプトと全世界の國々を一呑みにしてしまつたといふ恐慌はまだありません。のみならず恐慌が益々深刻になつて行く、これ等が沒落期の恐慌の特色から來る結果であります。もう一つは、今度の恐慌は獨占資本主義時代の恐慌である。御承知の通り、資本主義といふものは、初めは自由平等といふやうなことを唱へて世の中へ出て來た。それは資本家の搾取の平等、搾取の自由といふことであつたのでありまして、それが爲めに、自由競爭を資本家達が行つた。所が、今日はさうではない。資本主義的生産は辨證法的に自分の對立物を作り出した。即ち獨占者を

作り出した。日本でも、三井三菱といふ閥の大きな資本家が殆ど日本の全生産部門を抑へて居ります。アメリカに於ける今日の内閣の中には、さういふ大資本家が閣員として這入つて居ります。斯ういふやうに、非常に大きな獨占資本家が今日の世の中を支配して居る爲に、今度の恐慌には面白い特色が一つある。それは非常に猛烈な生産制限――新聞には限産と出て居ります――をして居ります。日本のセメント製造者の獨占組織が五割以上の生産制限を行つたのは三ケ月も前であります。昔の自由競爭時代の資本主義では、物價が急に下るといふと、損をしたのは資本家でした。ところが、今日のはさうではなくて、生産を制限することが出來る。フォードはアメリカ取引所大動亂の後で、直ぐ生産を七割五分制限してしてしまつた。即ち工場、勞働者の七割五分は要らないといふことになつてしまつたのであります。斯樣に生産を制限して勞働者の解雇その他いろ／＼の方法で、資本家は物價下落から來る損害を受けないで、逃げてしまふ。さうしてその損害を社會の大衆にふり分ける。自分は生産を制限して手を拱いて居る。だから、今日は、生産裝置が非常に完備して、非常に大きくなつて居るに拘らず、今日の恐慌の時期では、工場やその他の生産設備が五割から六割は世界中で遊んで居るといふことになるのであります。非常に無駄な話で、斯ういふ所に資本主義的生産樣式の大きな缺陷があるのであります。

今日の恐慌のもう一つの特色は、大失業を伴つて居るといふことであります。この失業には、御承知の通り、三通りある。合理化失業――合理化の結果、出で來る失業、それから季節的失業――時節に依て出て來る失業、それから恐慌失業――今度の恐慌に依て出て來た失業とがある。合理化失業といふのは、産業合理化の結果、工場や機械を整理して、從來三人でやつたものが一人で以て出來るやうになり、それで以て勞働者が澤山に街頭に投げ出されたのであります。季節的失業といふのは季節に依て、例へばヨーロッパの北の方では冬は土木、建築の事業は行はれませんから、その間大工等は失業することになる。さういふ失業者です。今度のやうな恐慌が襲つて來ると、生産制限をやり、更に恐慌を切抜ける策として、今日のやうに産業合理化を尚ほその上にやる。從て又、失業が增加するのです。生産制限、工場閉鎖……

（「辯士注意」と呼ぶ者あり）

今日、全世界の失業者はどれ位あるかといふと、計算は出來ません。正確な統計がない。官廳統計といふものは、どこでも皆、出鱈目であります。從て全世界の失業は、推算するより仕方がありません。去年まで世界で一番の繁榮を誇つて居たアメリカでは、つい最近までは二百萬、或は三百萬、或は四百萬の失業者があるといふやうなことを言つて居りました。併し、六月頃の調査では六百六十萬と稱して居ります。所が、これは官廳的の調査であつて、完全なものでない。今日は八百五十萬といふやうな數が擧げられて居ります。日本の失業に就ても、はつきりした計算はないけれども、いろ〳〵の事情を綜合して見た所では、今日、少くも百數十萬の失業者があるといふことだけは分ります。斯樣に勘定して全世界の失業者を集めて見ると、二千萬人になるのであります。所が、これは比較的推算の出來易い國に就て、これだけの失業があるといふだけであります。支那や印度、さういふ極く大雜把な推算も出來ないやうな國にどれだけ失業者があるかといふやうなことは、てんで分らない。それから五人家族として、二千萬の五倍、一億の人間が失業して居ると見て宜い。日本の失業者は一文も國家から金を貰つてゐないけれども、イギリスの失業者は失業保險のお蔭で幾らか金を貰ふ、ドイツの失業者もいくらか失業手當といふものを貰ふことが出來る。併し、失業手當や失業保險を貰つて居る人たちは、全體の失業者の何割かに過ぎない。斯樣に全世界は失業者で蔽はれて居る譯です。今日の經濟恐慌のもう一つの特色は、國際的の農業恐慌とぶつつかつて居るといふことであります。今日、大根一本の小賣値段は一錢です。だから、百姓が問屋に卸すのには四厘か五厘でせう。私の住んで居る吉祥寺邊では散歩して見ると、きやべつが畑に腐らしてあります。それはきやべつを青物市場に持つて行くと、一貫目一錢づゝ自動車賃が損になるといふのです。從つて畑に腐らして置く譯であります。

拵へても要らない!! こんな狀態が全世界を通じてある。品物が出來ても賣れない――言ひ換へれば、品物が世の中にあり餘つて居るのである。併し、大衆の口には這入らない。前にお話した通り、支那には非常な饑饉があつて、人は麵麭を欲しがつて居る。所が、アメリカでは農家が小麥を拵へても農產物が安い爲に賣ることが出來ない。從て、さういふ物は持ち腐れになつて居る。一方では足りない、他方ではあり餘つて居る。資本主義社會全體として見ると、斯ういふやうな矛盾が至る所にあります。ドイツの例を取つて來ると、ドイツには失業者が三百萬人もあつて、さうして

子供達は榮養不良に陷る虞れがあるといふから、麵麭をよけい食はしたらよささうなものでありますが、ドイツ政府はライ麥を强制買收しまして、さうしてライ麥の値段を下げないやうにして居る。又、全世界中には襯衣一枚買へない人が無數にあるに拘らず、アメリカ合衆國の農務省に於ては棉花の生産制限を奬勵して、農務省の長官ハイド氏は、ラヂオで以て、さう作つても賣れないから、止め給へといつて宣傳して居る。コーヒーは世界的の過剩生産で、品物はあり過ぎて居りますが、併し、諸君の喫んで居るコーヒーは値段は同じ一杯十錢であります。ブラジル政府は、數年來、コーヒーの値段を下げないやうに、一生懸命の方法を講じて居りますが、コーヒーの値段はがた落ちになつた。仕方がないからコーヒーを燒き棄てゝ居ります。イギリスやドイツには一杯のコーヒーを喫めない人達が無數に居る。斯ういふ狀態が歐洲戰爭以後の全世界の農業にあつたのですが、大概それが表に出ない形で續いて來た。いろ〳〵政府が對策をやりますから、表面に出なかつたのでありますが、それが最近は急に表に出て來ました。小麥、ライ麥、總ての穀物、家畜の飼料、木綿、麻、その他砂糖、コーヒー、ゴム、總て斯ういふものは、世界的に物價が下落して居ります。これは過剩生産の結果であります。斯ういふ所に矢張り資本主義的生産の矛盾がはつきりと出て居る。生産力は世界を擧げて增大して居ります。ヨーロッパでも、戰爭以後、每年々々農業生産物が澤山出るやうになつて居る。アメリカ、カナダ、アルゼンチン、濠洲、さういふ所では歐洲戰前に比べて穀物の生産は五割增して居ります。品物は非常に增して居る。所が、面白いことには、統計を取つて見ると、イギリスでも、ドイツでも、アメリカでも、一人あたりの穀物の消費高が減つて居る。つまり畑の方には澤山品物が出來て居るのに、吾々の臺所に這入つて來る穀物は減つて居るといふことになつて居るのであります。さうして穀物の持越高は每年々々增して行きます。終ひに供給が多過ぎて價格が下落した。それで全世界の小さな百姓は破滅して行て居る。恐慌の對策といふものは、どんなに無効のものであるか、役に立たないものであるかといふことがはつきり分る。ブラヂル政府のコーヒー價格釣上策も駄目であつた。ヂヤバの砂糖トラストの威力も世界的の過剩生産には兜を脫いでしまつた。矢張り値段を下げなければならない。カナダの小麥プールといふのは、小麥の販賣機關でありまして、これは全世界の八割の小麥を其支配の下に置いて、賣らうと賣るまいと、勝手にするほどの力を持つて居た。それで暫くは値段を釣上げて居りましたけれども、昨年のシカゴの取引所では

價格が暴落したのであります。さういふやうな恐慌對策は總て無效である。

今日はアメリカ合衆國を初め、多くの國々に於て、生産制限をやつて居る。日本でも生絲を造り過ぎるといけないといふので、生絲の生産制限、繭の生産制限をやらうといふことを言つて居る人もありますけれども、實行は出來ない。自動車とか、鐵とか、セメントとかいふやうな獨占組織がよく出來て居れば、相談をして生産制限をやらうといふことも出來ますけれども、併し、農業の生産は、各生産者が小さい。何百萬といふ農民が居る。その人々が假に集つて愈よ生産制限をやらうとして約束しても、その約束を守るといふことは出來ない。自分が正直に守つて居ても、隣村の百姓が生産制限をやらないで、品物を賣つて儲けるのを恐れる。

それからもう一つ今日の恐慌の廣さと深さに就てお話するに當つて、一言附加へて置きたいと思ひますのは、全世界の政治的情勢が違ふといふことであります。どこの國を見ましても、（朝日や日々には掲載されて居りませんが）ストライキの數が年々增して居る。一九二一年の恐慌の時は、階級鬪爭は下り坂でした。所が、一九三〇年の經濟恐慌になると、階級鬪爭が上り坂にある。茲に非常な違ひがあります。

これが諸君、只今の恐慌の特色である。御承知の通り、一九二一年の數年前、一九一七年には、ロシアに歷史的事變が起つて居る。それから一九一八年（歐洲戰爭が終つた時）にも、いろ〳〵歷史的事變が起つて居る。フィンランド、バヴァリア、ハンガリイ、この三ケ國には一時ではあつたが、兎に角、ソビエット政府が出來た。それを最高點として段々階級鬪爭は下り坂であつたのであります。それが今は上り坂である、このことが非常に大事な今度の恐慌の特色になるのであります。

昨日は極く大體の一般論的なことをお話しました。今日は極具體的な數字的なお話を致します。

昨日一九三〇年の世界恐慌の特色として、第一に資本主義沒落期の恐慌であると云ふこと、第二に獨占資本主義時代の恐慌であること、第三に大衆失業を伴ふ恐慌、第四に國際農業恐慌とぶつ突かつてゐる。五番目に世界の政治情勢が一九二〇年の世界恐慌とまるで違つてゐると云ふことをお話しました。

そこで今日はプリントにあります通り、恐慌がどんなに廣くどんなに深いか、又各國の政府がやつてゐる恐慌の對策と云ふものが果して効果があるか。（グラフに向つて）此曲線が示してゐるやうに、是はアメリカの鋼鐵生産、凡ゆる文明の利器の一番基礎的の鋼鐵の生産を表してゐるのであります。から云ふ風に……下つて來る。それをフーヴア大統領が凡ゆる手段を講じて喰止める、喰止めると少し上つて來たのでありますが、それは直ぐ下る、資本主義經濟は如何なる政策を行つてもそれ自身を貫徹して斯ういふ風になるのです。各國の失業對策の無能は、各國の國内の階級鬪爭を尖鋭化し、それから各國の國際間に色々な對立を鋭くしたけれども、今日の世界の中でたつた一つの國が恐慌を知らない。此曲線が示してゐるやうにロシヤだけが、是はロシヤの鋼鐵生産でありますが、ロシヤの鋼鐵生産の曲線だけが此やうに上向きである。是がなぜかと云ふことが今日のお話の結論になるのであります。――この曲線は獨逸です、日本でも同じことです、面倒だから省きます。

そこで先づ今度の世界恐慌の根源地は何處から來たか、一九二〇年の恐慌は日本から起りました。今度の恐慌は一ケ所から起つたものではないのです。著しく諸君の耳に響いたものはアメリカの恐慌である。好景氣々々々で凡ゆるアメリカの新聞、勿論ブルジョア新聞が宣傳して居りまして、日本の新聞もそれにつられて好景氣の太鼓を叩いて居りました。婦人毎日新聞は昨年の夏頃、アメリカの景氣が非常に好いと云ふことを書いたのであります。そこへ昨年の十月末に取引所の恐慌がやつて來た。此取引所の有様は當時の日本のブルジョア新聞、日本の金融資本の報道機關たる中外商業新報に依つて見ても、ニューヨークの取引所の周圍に數百名の警官を配置しなければならなかつた程狀勢が激しかつたのであります。さうして何十階の建物の上から飛降り自殺をしたとか、全ニューヨークは氣違ひのやうになつてゐたのであります。今まで好景氣々々でアメリカの好景氣が何年も續くやうに思つてゐた人達はびつくりした。だがしかしマルクス經濟學をやるものは、十月の來る以前に既にアメリカの恐慌を測定することが出來た。此左の黑い線が昨年の八月までです。此八月のアメリカの鋼鐵生産はちよつと五千萬噸、こゝだけでは分りませんけれども、去年の一月からずつと見て見ると是が非常な勢で高くなつてゐる。八月からがらりと鋼鐵生産が落ちた。是が十二月までがた〳〵斯う云ふ風に減つて來たのであります。ですから此當時の鋼鐵生産の減少、つまり恐慌の先ぶれといふも

のは、既に八月に見てとることが出來た。けれどもアメリカのブルジョアの代理人であるフーヴア大統領、其他の大學教授達は、取引所恐慌はさう大したことではない、直ぐに止まると言つてタカをくゝつて居たのでありますけれども、後でお話するやうに事態は益々悪くなつて來たのであります。

もう一つの恐慌の本源地は東歐羅巴諸國であります。ドイツ、オーストリヤ、ハンガリー、チエツクスロバキヤ、ポーランド、リトアニヤ、エストニヤと云ふやうなロシヤを周る東歐羅巴諸國の中にはアメリカ恐慌以前から既に恐慌があつた。一つ〳〵の國に付いては後でお話します。

斯う云ふやうな事情の時にアメリカに恐慌が起きたのです。此アメリカの恐慌はそれ一つだけでも十分世界の恐慌に相當するのであります。今日我々が使用してゐる非常に大きな生産物、ゴムタイヤ、自動車、鐵、棉花、玉蜀黍、小麥、其他多くの商品に付いて、アメリカ一國で以て全世界の三割から七割を持つてゐる。此處で恐慌が起きたと云ふことは、最早資本主義世界全體の半分以上が恐慌になつたと云ふことを示して居るのであります。ですから非常な勢で以てアメリカの恐慌が全世界に擴がつた。その二三の例を申しますと、取引所の恐慌が十月に起ると日本の生糸の相場が直ぐにがた〳〵落ちました。横濱に生糸が山と積まれてアメリカに出なくなつてしまつた。アメリカの取引所恐慌が直ぐオランダに飛火した。オランダは御承知の通り、南アメリカからダイヤモンドの磨かないやつを取寄せて、さうしてヘーグで磨きをかけてアメリカに送つてゐるのであります。クリスマス前のアメリカの恐慌で注文が來なくなつた。又、スウイスの時計商がやはりアメリカの恐慌のおかげで注文を杜絶された。南アフリカのダイヤモンド採掘業は非常な打撃を受けた。南米のコーヒー其他の生産物に對してアメリカの需要がなくなり、それが數ケ月の間に全世界に擴がつてしまつたのであります。

から申しますと、皆さんはフランスは近頃例外だらうと云ふ風にお考になるかも知れませんが、それはあとでフランスに恐慌があると云ふことを、世間の考とは反對のことを證明致します。

こんな風にして資本主義の歷史に未だ曾てないやうな早さで、全世界に一つの例外の無い程に恐慌が擴がつてしまつたのであります。此夏の恐慌の狀態はどんな風であるか、春から夏にかけて世界の經濟界の恐慌は益々廣く益々深くな

つて行きました。何處の國を見ても恐慌が底を入れて、恐慌が一番深い點に達してしまつて、そこから上り坂になるやうな兆候は何處にも見えない。その事は數字がはつきり示して居ります。ですから恐慌はまだ來てゐない。恐慌はないと言つて色々恐慌の事實を否認して居つた人達でも、厭でも應でも恐慌を認めない譯に行かない。誰も恐慌を否認する譯に行きません。英吉利の大きな資本家の機關雜誌を見てもさうであります。恐慌をはつきり認めてゐる。昨日到着したエコノミストと云ふ英吉利の大きな世界で一番舊い經濟雜誌は、此冬を非常に悲觀的に見てゐるのであります。恐慌に後れ馳せに參加したフランスでも既に此夏に生産が一般に低くなつて居ります。ドイツはあとでお話するやうに特別の事情があつて恐慌は殊に甚しい。ですからまだ／＼恐慌が底を入れないでどし／＼進展して居ります。合衆國でも景氣が少し好くなつて來るのは多分來年の二月頃であらうと云ふ意見がだん／＼殖えて居ります。又さう云ふやうな資本主義諸國の外にメキシコ、南アメリカ、印度支那と云ふやうな原料生産地があります。さう云ふやうな原料生産地は、その原料が賣れないから價格が下落して居りますから非常な深手を蒙つてゐるのであります。支那は御存じのやうに何時も反亂を續けてゐる。印度の革命は益々深刻になつてゐる。又諸君が朝日、日日と云ふやうな資本家の機關紙で御覽になつてゐる通り、南アメリカは革命流行りであると云ふ風に報道してゐる。その他埃及、アラビヤ、印度支那、全世界の植民地、半植民地には色々な騷ぎがあります。さう云ふやうな事情であれば勢ひさう云ふ地方の消費力は殖えないのであります。今日のやうに國際的に分業が出來てゐる時に、植民地の衰微と云ふことは工業國の恐慌を長引かせる原因になります。さう云ふやうな事情で今我々が經驗してゐる恐慌は、資本主義の歴史の上で一番ひどい恐慌の一つであるのです。

なぜ斯う云ふ風に恐慌が擴がり恐慌の深さが深くなるか。是は前にも申上げたやうに資本主義體制の全般的の世界的の危機の結果であります。私共は資本主義の一般的危機の中に今居るのであります。だからこそ今度の恐慌が斯うもひどくなり斯うも廣いのであります。それが此夏の大體の全世界の經濟恐慌の見渡しであります。詳しくお話すればきりがありませんけれども、例へば製品別、品物の種類に依つてお話するとしますれば、生糸、小麥、錫、銀、コーヒー、砂糖、綿糸、自動車、船舶、其他數限りありません。生糸が非常に下つて行くと云ふことは我々が毎日田舍から

聞いてゐる所であります。アメリカに於ける小麥の相場は二三月來の新聞で御承知の通り下つてゐる。砂糖はジャバの砂糖が今年は減さうと思つたのに又殖えて値段が下らざるを得ない。船舶業は世界的の不景氣でありまして、日本でも日本郵船、大阪商船、其他の大きな商船會社は一番良い船を港に繋いで放つて置くのであります。綿糸、自動車、其他總てさう云ふやうな状態であります。けれども一々それをお話してゐましても仕方がありませんが、各國別に極く大體のお話を致します。

先づ、、、、アメリカからお話を致します。アメリカは昨年宣傳的に景氣が好いと云ふことを言ひ振らされたのであります。斯う云ふ宣傳の二三の例を新聞の切抜きからお話を致します。三井信託の米山梅吉と云ふ人がアメリカから昨年の九月の末に歸つて來て、米國の勞働賃銀は益々高い、大いに消費も増加する。米國の好況は少くとも今後五年は大丈夫と云ふことを九月二十五日の中外商業新報に書いたのであります。歐羅巴、殊に獨逸の社會民主黨はアメリカに視察員を送つた。所もあらうに獨占資本家が勞働者を一番ひどく搾つてゐる所のアメリカの景氣の視察にやつたのであります。アメリカ流に賃銀を高くしてやれば自分のドイツの國も直るだらうと云ふことがドイツの社會民主黨の考であつたのであります。ところが十月に取引所恐慌がやつて來たけれども、取引所恐慌が資本主義の歴史の上で何を意味してゐるか、アメリカの經濟生活に取つて何を示してゐるかと云ふことが分らない結果、大きな活字で以て是は獨逸に取つて非常にトクなことだらうと云ふやうなことを言つたのであります。なぜさう云ふことを言つたかと云ふと、ドイツの勞働總同盟は前からドイツ政府の外資排斥政策に反對してゐる。アメリカで取引所恐慌か起れば、其取引所に集つてゐた貸付資本が當然取引所から他へ投げられる。從つて資本の利子が安くなり、それが獨逸に安い資本として入つて來るだらう——と云ふやうな勘定であります。今度は日本の例ですが、日本民衆新聞、是は社會民衆黨の機關紙であります。此日本民衆新聞の今年の六月十五日の社説……驚くべきことに社説であります、社説は次のやうに書いてをります。「米國の如く資源豐富にして資本主義の繁榮がある程度の勞働階級の生活向上を約束する國に於てはいさ知らず、其外の資本主義國に於ける云々……」あとはどうでもいゝ、そこまでが肝腎でありますが、それから「今日の不況に當面して勞働組合は先づ勞資の公平なる犧牲に依つて此産業苦難の打開を要求する。犧牲を勞働階級にのみ強要せずして彼（資本

家）自らも大いに之を分擔せよ、高額賃銀制度の匂ひを嗅ぐことも出來ない日本の資本家が勞働組合に對する態度に於てのみ米國に眞似んとすることは誠に笑止千萬沙汰の限りだ。」此中に社會民衆黨のアメリカ資本主義の見方、それからもう一つ大事なことには恐慌對策の基本的の態度が現れて居ります。資源豐富と云ふ言葉を使つて居ますが、是はまるでフーヴァ大統領を先頭に立てゝ色々なブルジョア學者が書いた書物、「合衆國に於ける近時の經濟的諸變化」と云ふ書物の中に、アメリカは資源が豐富だから別に心配することはないと云ふやうなことが書いてあります。資本主義の繁榮と云ふことはフーヴァが大統領選擧の時のスローガンでありまして、繁榮――プロスペリテー、米國はいざ知らずと云ふことを書いて居りますが、是こそ資本主義沒落期に於て、アメリカが何か特殊な地位を占めてゐるといふ。

アメリカが例外だといふのであります。しかし總て今お話した三つの點が間違であると云ふことは今度のアメリカの恐慌がはつきりと示してゐる考であります。例外ぢやない、例外どころか、他の國よりも甚しく鋼鐵生産なんかは落つこつてゐる。それからもう一つ今の論說は高額賃銀制度といふことを日本の資本家に向つて說法してゐるやうな形であります。是はドイツの社會民主黨も同じことを言つて居ります。ちよつとだまされますけれども、此高額賃銀制度といふものは一體何であるか。實は此高額賃銀制度と云ふのは勞働のインテンシテイ、强度を强める興奮藥として資本家が勞働者に與へてゐるのに過ぎないのであります。それはマルクス主義的の見解に依らなくても、ブルジョア的の見解に依つてもさうであつて、フォード工場の生産力はまるで殺人的のテムポで非常に早いのであります。自動車が一分間に組立てられて、それが倉庫の中にブーと言つて入つて行く。其忙しさは非常なものである。四五年も此工場で使はれると全く勞働力を失つてしまふ。生ける屍となつて、此工場を拋出された時は全く働けなくなる。ですから、フォード工場は時間短縮、一週間に五日間勞働と云ふやうなことを宣傳しますが、それは一週五日以上は勞働が出來ない程激しく働かされるからであります。斯う云つたやうに資本家、アメリカ資本家がやつてゐることを暴露して行くときりがない。例へば昨年の恐慌の時フーヴァが大資本家を招集して賃銀を下げないやうにしやうぢやないかと云ふ相談をして下げないことになつた。所がフォードだけは賃銀を多くしてやると云ふことを言ひ出した。それが日本の新聞にも三段抜きで出ました。さうしてフォードは賃銀を値上げしましたけれども、その反面では勞働者を澤山解雇しましたし、う

まいことをやる。つまり、初任給、初めて傭ふ勞働者の賃銀を幾らか高くする、又古い慣れた勞働者の賃錢を幾らか高くする。だから聲明通りに賃錢が高くなつた譯です。けれども古い勞働者を解雇した。さうして其中から働けるやうな人間だけを新しく傭つた。古い勞働者に對する高い賃銀に代ふるに今度は初任給の賃錢を拂ふと云ふやうなことになつた。だから資本家の賃銀引上げの聲明と云ふものも皆こんなものであります。所が之に對して科學的の認識がはつきりしないとかういふことにだまされる。其だまされた例が無產階級の利益を護るべき日本の無產政黨の一つだと云ふことは驚くべきことです。日本民衆新聞の一月十五日の記事に、「不景氣に耳よりの話」と大きい見出をして、「日給五圓を六圓に、これは素晴しいフォード工場の話」「日本と言へば大概不況……………とす、馘首、工場閉鎖と云ふやうな泥沼にもがいてゐる時に、日給六圓が初任給だと言つては嘘のやうな話だが嘘ではない、アメリカの大自動車王フォードは、……フォードの眼目とする所は一つには勞働能率を增進すること、二つには勞働者の懷ろを暖かくし而かも其金を使ふ暇を多く與へること、卽ち勞働者の購買力を旺盛にすること、さうして其結果產業界を益々活氣づけやうといふ所にある」是が民衆新聞の報道であります。何んと云ふ狂喜。禮讃もこれまでになると少し氣の毒であります。之は諸君が考へて頂けば直ぐ分りますが、自分の品物を買つて貰ふために勞働者に高い賃銀を與へ、お負けに其賃銀を使ふ暇を作つてやると言ふことは計算に明るい資本家がするものでない。フォードが賃銀を値上げしたと云ふやうな宣傳は極く手輕な廣告であります。日本の社會民衆黨の新聞がかう云つて禮讃してゐるのに、却つて資本家の御用新聞である中外商業は「これは瘦我慢又は見え張りだ」と述べて居ります。この方がまだ宜いのであります。アメリカの景氣がこれからどうなるだらうかと云ふやうなことに付ては、此七月頃の新聞は非常に景氣の好いことを言つてゐたのです。米國の事業界は愈底入れが……一番低い所に來たであらうと云ふことが七月二十一日のニューヨーク電報であります。斯う云ふ風にして資本家は何時でももつと景氣が好くなるだらうと云ふことをよく言ふのであります。それに乘つてフーヴアがもう大丈夫だから諸君安心しろと云ふやうなことを繰返して居ります。所が今になつて此やうな報道を讀んで見ると少しおかしいのであります。現在アメリカの景氣は決して好くなつてゐない。アメリカの重要生產物である銅は三十年來の安い値段に落ちてしまつた。是は九月二十一日であります。アメリカの鋼鐵生產は減少してゐる。九月十七日、ニ

ユーヨーク株式取引所で又相場が下落して三十種の工業株の平均相場は昨年の十月の取引所恐慌の時の相場に近くなつて居ります。九月二十四日、小麥は相變らず下落して居ります。株式取引所の狀態が惡くなるに連れて、其他の物產取引所、棉花の取引所、其他の商品取引所も一體に事情が惡くて下落して居ります。

失業者はこの前お話した通り六百六十萬、今日は恐らく八百萬を越してゐるでありませう。其他イギリスは同じやうです。或る雜誌は此冬失業者が二百萬になるだらうと言つて居りましたが、二百萬はとつくの昔に越してしまつて七月十日、約二百十一萬になつて居ります。ドイツは戰後植民地は失ひ其他の關係から、生產力は非常に伸びてゐるに拘らず、品物の買手がない。さう云ふ風な資本主義の行詰りは當然政治の方面に現れて參りまして、此夏議會が解散された。さうして九月の半に總選擧が行はれた。合法政黨として議會に出てゐるドイツ共產黨と、同じく合法政黨である一番右翼のファシスト黨が非常に殖えてゐる。議會に於ける階級鬪爭も非常に尖銳になつたのであります。財政は非常な危機に當面してゐる。財政切拔けの一つの策として失業保險を少くすると云ふことをやつて居ります。失業者が餘りに多くもうドイツの失業手當が續かないのであります。イタリー、やはり同じことであります。ムツソリーニの演說などを聞くと非常に良いやうでありますけれども、決してさうでない。イタリーにも非常な失業者があります。ムツソリーニは凡ゆる手段を講じてプロレタリアの集合を禁じてゐる。成るべくプロレタリアを田舍に歸さう、都市に集らせまいとしてゐる。勞働組合を成るべく抑へて置くと云ふことをやつて居ります。非常に軍隊的の政治をして居りますけれども、又イタリー新聞は常に政府の檢閱を經るために默殺して居りますけれども、却つて外國の新聞がイタリーの記事を載せて、餓えた人達が示威運動をやつたと云ふやうな報道を每日のやうにもたらして居るのであります。それからフランスですが、井上大藏大臣の書いた「世界不景氣と我が國民の覺悟」と云ふパンフレットを開けて見ると、フランスも決して好景氣でないと云ふことが書いてあります。ところが、日本で有數な經濟雜誌である東洋經濟新報の八月十六日の號に「フランスに恐慌なし」と云ふ大きな見出しで、どの生產方面を見ても、フランスに恐慌はないと云ふ記事を出して居ります。是はをかしいと思つて見ますと、エコノミストと云ふイギリスの雜誌の、フランスの所を默つて書き拔いたものであります。此エコノミストの見方は何處が間違つてゐるのか、尤もその後の東洋經濟に依ると少し恥しくな

つたと見えて、フランスはそろ〱恐慌に入つてゐると訂正して居ります。何處が違つてゐるかと云ふと、フランス經濟の統一の面しか見てゐない。何處に矛盾があるか、對立があるかと云ふことをちつとも知らない。同じ工業の中でフランスで一番いけないのは纖維工業、それから自動車工業であります。其事はちつとも書いてない。纖維工業と自動車生產とを見てゐない、纖維工業、自動車生產などは昨年の暮から事情が惡くなつてゐるのであります。それからもう一つ工業と農業との違ひ、つまりフランスに一番ひどい農業恐慌がある、それを見てゐない、フランスは葡萄が出來過ぎて困つて居ります。さうして葡萄を澤山作る者に重税をかけ、葡萄酒の釀造高を少くして葡萄酒の値段を成るべく高くして置かうと云ふ算段であります。

是が世界の恐慌のあらましです。日本のことはお話しませんでしたが、農業が恐慌にあると云ふこと、生絲が安くなり、纖維工業が非常に惡い、貿易が特に惡い、工場閉鎖が頻發する。其他の事實は諸君が每日新聞で見てゐる通りであります。

それから恐慌對策の問題でありますが、フーヴァ大統領は恐慌を防がうとして凡ゆる手段を盡して居ります。先づ鐵道に要求して、君達が今年やる注文は今やつてくれ、どし〱やつてくれと賴んだので、アメリカの鐵道は工場に向つて今年の注文を全部出してしまつたのであります。なし崩しにやるべきものを今出した、安いからやる譯です。所が今今年分の注文を出してしまつたのであとが續かない。其上、アメリカの鐵道會社は今年は非常な損である。事業の擴張までした注文がなくなりましたから、一時は鋼鐵生產はずつと上りましたけれども、今はずつと下つた。人間の力では資本主義社會の法則と云ふものは動かせない。フーヴァがどのやうな對策を講じやうとも資本主義社會の恐慌が必然的に來ると云ふことは變りはない、人爲を以て斯う云ふ風に吊上げるのはいけないのでありまして、これでは當然來なければならぬ恐慌を先きに延ばすと云ふことになる。こゝでずつと落ちてしまへば恐慌は早く解決出來るものが、こつち……の方までぐづ〱やつてゐることになる。これが六月までの狀態であります。之を取つて來た雜誌に六月までしか出てゐないが、もし九月まで出せば、この圖のずつとこちつへ下つて來ます。工業恐慌の方面で恐慌對策の効果がないと云ふことはこれで分ります。農業恐慌の方でも同じことであります。農業恐慌對策として各國の政府は何をやつてゐ

るか、フランス政府は葡萄の生産制限をやる、アメリカ農務省のハイド農務大臣はラヂオで以て農家へ生産制限をやり給へと宣傳してゐる。假に其農産制限が出來たとしても、出來れば物價、農産物の値段が高くなり、高くなるからもつと作らうと云ふ考が皆に浮ぶ、作ればまた下る。結局生産制限をやつて見た所で、生産制限の結果値段が高くなれば生産を刺激して供給が殖える。のみならず、大變に面白いことは農業恐慌を解決する政策として資本家が何を提案するかと云ふと、それは工業の方の恐慌の對策として彼等が考へてゐる、即ち生産制限、それを農業の方に當嵌めやうとして、それより外は頭から出て來ない、何と考へてもそれ以上の策が出て來る筈はありません。何となれば彼等の考は全く資本主義的の先入見に捕はれてゐるから。今日の全世界に亘つてゐる所の農業恐慌は資本主義制度の内部ではどうしても解決が出來ない。學問的にいくら考へても農業恐慌は解決し得ない。今日の恐慌對策は今までお話した外に尙ほ失業對策といふものも含んで居ります。これもだめです。

何處の國の失業對策が成功してゐるか、イギリスの勞働黨内閣は「失業撲滅」と云ふスローガンを立てゝ、イギリスの民衆をマンマとだまして政府を造つた。さうして何もしてゐない。相變らず失業調査會だけをやつてゐて、具體的の案は一つもない。あつても實行してゐない、勞働黨政府が内閣に入つてから却つて失業者が六七十萬も殖えてゐるのであります。アメリカでも對策はだめであります。土木事業を起す、何處の國でもやることでありますけれども、併し七八百萬もある人間を養つて行く其萬一の金錢だけを考へても少しやそつとのお金では到底出來ない、日本なんかでは、やはり失業調査會と云ふものがありますけれども、調査ばかりであつて一向實行し得るやうな案が立たないのであります。

――あとは時間がありませんからかけ足でお話します。

斯う云ふやうな恐慌を切りぬける策として各國の資本家は何を考へてゐるかと云ふと、それは海外市場に乘出すと云ふことです。日本の人造絹絲は南洋に進出しやうとしてゐる。亞鉛は印度に進出しやうとしてゐる。大阪の輸出業會は近東視察團と云ふものを拵へて南洋地方を視察し、淺野セメントは南米に、紡績聯合會はロシヤに品物を賣らうとしてゐる。政友會に新經濟國策委員會と云ふものがありますが、此委員會が作出した案に依ると、生産増進、輸出増加と云

ふ二項目に盡きて了ひます。所が日本だけがさう云ふことをやつてゐるならばいゝのですけれども、全世界が皆さうである。ついそこまで來てゐる英國の支那視察團、支那の市場からイギリスの織物が日本のために驅逐されてゐるので、それを何とかして取かへす方法がないかと云つて來てゐるのであります。支那のみならず、印度でも、日本はイギリスにどん／＼喰ひこんで行くので、イギリスと日本との利益は激しく衝突して居ります。フランスとイタリーとの間には色々と新聞に出て居りますやうに、軍縮會議さへもまとまらない程二つの國の間が仲違ひになつて居ります。イギリスとアメリカは南米に向つて資本を輸出する國でありますが、イギリスとアメリカはやはり南米を自分の資本の力の下に置かうとして互に爭つて居ります。そればかりでなくイギリスは昔から自由貿易、即ち國の中に入つて來る品物に關税をかけなかつたのでありますが、そのイギリスが到頭長い傳統を打破つて保護關税をかけるやうになるらしい。英吉利帝國の中では自由貿易にしやう、けれどもそれ以外の國との取引には關税をかけやう。是は言ふまでもなくアメリカ合衆國の商品輸出に對抗するために考へ出したものでありまして、英國が斯く保護貿易に傾いて行くと云ふことはつまりアメリカとイギリスの間が仲違ひになつて來ると云ふことなのであります。

ところで今までのお話とすつかり違ふのがロシヤの狀態であつて、ロシヤには恐慌がない。それは統計がはつきりと示してゐる。生産曲線は外の國では下つてもこつちは下らない。全體としては少しづつ上へ上ります。歐洲戰爭のおかげでロシアの生産はこんなにがたと落ちてしまつた。それが僅か五年位の間にずん／＼戰前水準にかへつて來た。たゞこゝ……だけを示してはロシアの經濟の發展は分らない。戰爭でめちやくちやになつてからどれだけ上つたかと云ふことを見なければなりません。しかしから見ただけでもロシアに恐慌がないと云ふことが分ります。今日ロシアの經濟は決して完全な社會主義的の經濟ではない、資本主義的の部分がまだあります。その資本主義の部分が少しでも殘つてゐる限りはやはり景氣循環に依る恐慌のやうな現象が多少とも現はれて參りますけれども、他の資本主義の國のやうではありません。なぜロシアではさうなのか。これは前からお話した通り、資本主義の内部のからくりから言つて恐慌は必ず來なければならないやうに出來てゐる。ロシアに恐慌が起らないのはロシアに資本主義が殆どないからであります。著しく資本主義が清算されてしまつてゐるからであります。斯う云ふ風に全世界が恐慌でもがいて苦しいのに、地球

の六分の一の面積を占めるロシアには恐慌がない。それで各國の資本家の眼は當然にロシアに注がれてゐる。そこで色々な問題を起す。何かと云つてロシアにつゝかゝる。それはブルジョア朝日、日日などの新聞を毎日御覧になつてゐてもよく分りますが、歐羅巴經濟聯盟と云ふものは何であるか。歐羅巴經濟聯盟はムツソリニーがロシアを入れよと要求してゐるに拘らず、ブリアンは入れないとはつきり明言してゐる。是はロシアを目の敵にしてゐるのである。それからこの夏でした。フインランドに政變が起つて内閣が更迭した、その時に新しく内閣に就いたものは反ロシアの政黨の主領であつたのです。フインランドはロシアの直ぐ西に續いて居ります。それからロシアの南に續いてゐるルーマニヤであります。皇帝のローマンスが新聞に書き立てられて諸君の眼をごまかしたやうでありますが、何んのことはない、あれの裏にはルーマニヤの政變がかくれてゐるのでありまして、ルーマニアはフアシズムへと進んでロシアと反對の立場をとつてゐるのであります。

最後に、私はこゝでたゞおしやべりをするだけの爲めに來たのではないのであります。諸君自身が統計の材料や曲線を使つて、それを根氣よく勉強なさるやうに、さう云ふ方が一人でも出るやうに、と考へて此處にやつて來たのです。（終り）

この速記錄には間違ひが多いが、それを訂正してゐる時間を與へられなかつたので、そのまゝにしておいた。なほ第二日は、時間の不足で甚だかけ足であり、且つ又、臨官が第二日には中止するかもしれぬと豫告して來たので、二三の大切な項目を全く省略し、言葉にとても苦勞しなければならなかつた。いづれ他の機會に缺陷を補ひたいと思つてゐる。大塚金之助

婦人参政權について

——講座の二——

中島幸子

一、婦人参政權論

婦人が法律的にも政治的にも又經濟的にも男子と比較して不平等の地位におかれてゐると云ふ自覺は、主として封建制度に對する新興階級たるブルジョアの反抗に依つて生じたものである。封建的社會の内部で徐々に發達して行つたブルジョアの急激な發展は、封建的社會關係を根こそぎに破壞した。それと同時に新しく生れた支配階級たるブルジョアに奉仕するところの學者が、ブルジョアに都合の良い學説の宣傳流布に努力した。ブルジョア社會の發展は、一方に今まで單に家庭奴隷に過ぎなかつた婦人をも、そのせゝつこましい臺所から追放し、大工場に纎細な勞働力を賣りに出さねばならぬやうにさせた。一方にブルジョアの學者たちの書いた自由思想的書物は、婦人のあらゆる層の中に歡迎されて行つた。斯うした種々の事情は、ブルジョアが且つて封建制度の桎梏から脱却するためにいろ〳〵な形式の反抗運動を形成したと同樣、婦人も亦永い間の抑壓から目醒めて、解放運動に携はるに至つたのである。勿論、婦人が大衆的な運動を開始するまでには、多くの犠牲者が血の滲むやうな苦鬪をなめたのであつた。婦人運動と云つても、種々あつて、兒童保護衞生、教育消費方面の改善、婦人禁買、娼妓制度廢止、婦人勞働者保護、母性保護、法律上の婦人の權利獲得などがある。けれども小ブル乃至智識階級の婦人が無産婦人をも包括して一番國際的に且つ大きな運動はと云へば婦人参政權運動であらう。然も此の運動で成功するまでには永い年月と多くの犠牲を拂つてゐる丈に、婦人運動の重要な部分を占めてゐると云つても誤りではなからう。婦人参政權の目的は、云ふ迄もなく婦人が選擧權を獲得することである。勿論廣義に解釋すれば議會に参加するための選擧のみならず地方自治體に参與する公民權獲得をも含んでゐる。

我國の最近の情勢から推測して見るに、先づ最初は公民權を婦人に與へ、政治的訓練をつんで、その結果よろしければ中央立法議會にも、婦人を參加せしめるといふが如き漸進主義が大體の政府當局の意見である。けれども婦人參政權の重要な目的とするところは、婦人も男子と同樣、中央立法議會に議員として參加できるといふことである。

何故、私達は婦人參政權運動をするか、このことに對して私達は之を階級的に解釋しなければならない。先づブルジョア婦人乃至智識階級即ち一般に女權主義者として知られてゐる婦人參政權運動家の說明から檢討しやう。

彼女等が最も期待するところは、若し婦人が參政權を獲得して議會に席をおくやうになつたなら、現在の社會に法律的に又經濟的に劣等であるところの婦人の地位は向上するといふのであります。そうして又、婦人が議會に參加するなら一切の社會問題の解決の促進に役立つといふのである。だが、議會への絕對の期待は、果して百パーセントも良好な結果をもたらしたであらうか。私達は之を實踐で證明したい。

例へばかう云ふ話は英國におこつた事であるが――英國政府はあの大戰當時、兵士と勞働者の子供に無料で牛乳を配給してゐるのであつたが、戰爭が終結すると、經費の問題で、その配給に著しい制限を仕樣としたのであつた。之が非常な問題となつた。勞働者達は一せいに立つて反對した、そして當時唯一人の下院の婦人議員であつたアスター婦人に一臂の力を乞ふたけれども何うであらうか、アスター夫人は婦人達から選ばれた婦人議員でありながら政府の配給制限に贊成して了つた。此の一事を見てもブル出の婦人は必ずしもプロの婦人の身方でないのである。であるから若し婦人が參政權を獲得し、多くの婦人代議士が議會に席を有するやうになつた時婦人一般を利益するやうな抽象的な事情にはプロレタリア婦人に身方するかもしれない。然し婦人も男子と同樣に、階級に區別されてゐる以上、必然ブルジョア出身の婦人代議士は、無產者婦人子供の身方をするどころか、反つてそのドタン場になると無產婦人を裏切つて了ふのであります。

私達は、現在の婦人參政權運動家の云ふやうな意見には絕對的に贊成出來ぬ。今婦人參政權運動家が、絕大の信賴をかけてゐるところの議會といふものの本質を明かにすることに依つて、一層彼女等の見解の誤りを曝露しなければならない。そうすることに依つて婦人大衆に眞實な戰鬪的見解を抱かしめそして正しい立場から婦人參政權そのものゝ利用に

婦人參政權について

勉めさせることは最も重要な任務であります。

では議會とは何か？　私達は憲法を學んだとき、我國での最も進歩的な學者である美濃部達吉氏はかう云ふ事を述べてゐる。「立憲政體とは國民の代表機關としての議會制度を有する近代的政體の意にして、近代的民主政治と立憲君主政治とに通ずる觀念よりその初めは英國に發達し、十八世紀の哲學に養はれて、英國の新政體となり、更に佛國大革命を經て第十九世紀に於いて漸次世界の各國に普及し、遂に世界の殆んど總ての文明國に共通の制度たるに到れるものなり」。それから尙「國會の最も著しい性質は、國民の代表者たることゝ、立法に參與し行政を監督するの權を有することにあるのである」。私達はかふした立憲政體といふ新しい衣をまとつてゐる文明國と稱する國家の政治機關としての議會が、果して本當に國民の代表が參加して法律の制度に參與し、行政を監督する權をもつてゐるかと具體的に吟味する必要がある。だが議會といふものゝ任務をはつきりさせるために、議會制度といふものが、いつ發生したかを今歷史的に觀察したい。

前に述べたことは極めて素朴ではあつたが、議會開設、參政權の擴張、普通選擧といふやうな要求が民衆の間に著しく熱烈になつたのは、封建的な生産關係が沒落し、近代の資本家階級が勃興してきた時と一致してゐることの事實であることを述べたのであつた。

一般に農業を支配的な産業としてゐた封建社會の内部の資本主義的な條件が、漸次具備してくるにつれ、如何にナポレオン一世が蒸氣機罐の發明者であるところのフルトンを狂癲病院に幽閉しやうとしたり、或は又織匠が新しい工場機械を破壞しやうとしても、それは單に愚昧な反歷史的な行ひに過ぎない。歷史の流れと云ふものは不斷に流れる河のやうなものであつて、それを阻止しやうとすれば、反つて猛烈な勢ひでもつて擡頭してくるのであつた。生産關係の變革は、一方に當然社會のイデオロギーの領域にも變革をもたらさずには置かなかつた。資本主義の發達につれて、自由と平等の觀念が熾烈になつたことはその著しい例である。

然しながら、社會の經濟的生活條件のかゝる激しき變革に續いて直ちにそれに對應する政治的秩序の變化が生じたのではなかつた。社會が益々ブルジョア的になつても國家は依然として封建的であつた。大規模の商業、即ち國際的な、進

んでは世界的な商業は、自由なその運動を拘束されない商品所有者を必要とする。これらの商品所有者は、それ自身平等の權利者であり、少くとも所定の地域に於いて凡てに對して平等なる權利の基礎に立つて交換するのである。手工業からマヌファクチュールへの轉移は、多數の自由勞働者の存在を前提とする。――一方に於てはギルドの束縛から自由であり他方に於ては自らの勞働力を自ら利用する手段からの自由である。彼等は自己の勞働力を賃貸借するために、工場主と契約することが出來る。即ち契約者として同等の權利をもつて對立してゐる。最後に全くの人間勞働の平等性と平等の價値、――それが一般に人間の勞働であると云ふ故をもつて、またその限りに於ては無意識的にではあるが、最も有力な近代ブルジョア經濟學の價値法則の中に表現されてゐる。此の價値法則に依ると、或る商品の價値はそれに包含されてゐる社會に必要な勞働に依つて測定されると云ふのである――だが經濟的の關係が自由と平等とを要求したときに、政治的の秩序は、同業組合の束縛と特權をそれに對立せしめて、一歩毎にそれを妨害した。地方的特權、保護税、各種の例外法規が商業上外國人や植民地人を妨害した許りでなく、あらゆる範疇に屬する自由の國家市民を妨害した。同業組合の特權は至る處に存して、常にマヌファクチュールの發展の障害をなした。何處に於いても通路は自由でなく、ブルジョア的競爭者に對する機會は均等ではなかつた。――然も此の自由と、機會の均等は最初の、そして益々切實となり來つた要求であつた。

封建的鐵鎖からの要求と封建的不平等を排除することに依る法律上の平等確立の要求は、それが社會の經濟的進歩に依つて日常問題となつた瞬間から忽ちにして益々擴大せざるを得なくなつた。一度びかゝる要求を工業及び商業の利害のためにするならば、同じ平等權を多數の農民にも要求せざるを得なくなつた。之等の農民は、純然たる農奴から始めて隷屬のあらゆる段階に於いて、その勞働時間の大部分を無償で封建君主に提供し剰へ君主及び國家に對して無數の貢税を收めねばならなかつたからである。

他方に於いてまた、封建的の特權、貴族の免税、個々の身分の政治的特權の廢止を要求せざるを得なかつた。

新興ブルジョアの要求は、議會に於ける參政權の要求となつて表現された。それ故に我々は歐洲に於けるブルジョアデモクラシイの獲得の爭闘に於ける歴史を觀察するならば、實に熾烈なものがある。

婦人参政權について

けれどブルジョアが、自由平等を確立しやうとゝいふ要求の根底をなすものは、封建的制度の解消にともなふ契約の自由であつた。それ故にブルジョアが議會の完成化の努力には必然に彼等の發生に依つて増大してきたプロレタリア群の自由平等ではなかつた。寧ろプロレタリアートにとつては封建制度が階級的國家である限り貴族の農奴に對する搾取であつた如く、代議制國家とても資本家階級に依るプロレタリアートの搾取の道具であつた。それ故に當時の勞働者階級の生活狀態の悲慘なことけ實にお話しにならなかつた程である。

マルクスが「議會と云ふものは、資本の最も嚴密なる搾取部面である人間的材料を擴大すると同時に搾取の程度をも最初から増進することになるのである」と云つた如く婦人子供を容赦なく勞働に追ひやつた。例へば子供の勞働狀態についてサミユエル キッドはかう云ふ事を云つてゐる。「惡臭の中で蒸暑い部屋の中で、多くの車輪の斷へざる廻轉の眞中で、小さい足や小さい指は斷へざる活動に置かれ無慈悲な監視者の重い手と足とで鞭打たれ、また何時迄たつても滿足されない我利の鋭い才能に依つて、發明された刑罰具による肉體的苦痛の措置によつて、脅かされ不自然なる活動を強制された子供達は粗末なやすい食物――それは主人の豚にやるやうなものを與へた。彼等は決して冷えたことはなかつた――何故なら一群の小兒達が仕事に行や否や又他の一群の小兒達が睡眠のために送られたら――不潔な床で代る代る眠らされた。しば／＼兩性の區別はなかつた病氣、貧窮、惡徳は傳染病の溫室の中の如くに蔓延した。哀れな小兒達は脫出しやうとした。その脫出を防ぐためにその疑ひある小兒は大腿部に達する所は鎖をつけられ、足首の上に鐵を釘でうちつけられ、これらの鎖にしばられたまゝで勞働させられた。若い娘や小兒たちは死んだ。そして夜人里離れた處に秘密に葬られた、それは他の人に墓の數を知られない樣にするがために多くの小兒は自殺した。殘虐と悲慘の見本は餘りに長くして書けない」。私は自由、平等を原則とするブルジョア議會の嚴然としてゐる現代の代議制國家の到るところにこうしたプロレタリアート婦人兒竜の搾取の事實を生々しく見るのである。この事實は、歐洲ばかりでなくシユトラツセルがその著「勞働婦人と產業の合理化」で云つてゐる如く東洋の國々、つまり支那、日本、印度に於ては今日では一般に前世紀の前半に於けるヨーロッパの發達しつゝあつた資本主義的諸國家と同一の過程が完成されつゝある。即ち暴風的工業化は次第／＼に婦人、プロレタリア的小農民婦人、廢絕せしめられたる手工業者の婦人及び娘を工場及び鑛

山内に追ひやる。此の事情は、封建的社會の支那にあてはまるばかりでなくブルジョア憲法學者、美濃部達吉氏が誇りやかに云ふ國民自治の精神を實行せる代議制の日本の紡績女工の有樣にも當てはまるのであります。議會は、ブルジョアは、何時もこんなことを云ふ——民意を代表した機關である。だがその民意たるやプロレタリアを包含したところの民意でなくして單に近代國家の支配階級であるブルジョアの民意を代表したものに過ぎない。

議會は凡ゆる具體的な實例から推察するに、それはブルジョアジーが封建的絕對勢力と戰ふ場合には、充分進步的役割を演じたものとすることが出來る。けれどもプロレタリアートが發達してきて、それ自體のための階級を形成して來た時には、反動的な機關に轉化して了つたのである。此の過程は日本の議會制度に就いても同樣である。ブルジョアの政治的支配の典型的な機關は議會である。議會政治は、政黨政治であり、議會政治に於ける政府の中樞は政黨內閣である。我國の資本家階級は明治廿年代は議會を得、その後三十餘年の鬪爭に依つて遂に政黨內閣主義の政治を確立し、それと共に政治的支配の實權を自階級の手に收めることが出來た。此の政治的制覇への過程は、我國の生產の支配權が次第に資本家階級の手に歸した過程とほゞ並行する。けれどプロレタリア階級の成長は、當然我國の議會をも反動化させずにはゐなかつた。よし日本の支配階級が、普通選擧に依つて「民主々義」と云ふコロモを着ても反動には變らない。却つて選擧法に依つて著しくプロレタリアートを束縛したり、制限を有する普選をおしげもなく民衆に與へたその目的はプロレタリアートの政治的進出に際しブルジョアジーは政治的な支柱を小ブル層に求めなければならなかつた。卽ち反動の陣容內部を强固にするための意圖に外ならぬのである。

ブルジョアジーが支配階級としての勢力を獲得したところの初期の段階には、議會は封建的殘存物をこつぱみぢんに破壞する機關であつた。その頃は今日の樣に單に饒舌やなぐり合ひの場所ではなかつたのでした。然しながら資本家主義が發達してくると、今迄資本家階級達の間にあつた競爭は獨占へ變化して行くのであつた。レーニンの云ふやうに、獨占寡頭政治、自由への傾向でなくて、支配への傾向、富有で强力な小數國民に依る多數の搾取と云ふが如き帝國主義の時代になると、實際上の一國民を支配する人間は、若干の融寡頭政治家たちなのである。その時は議會は旣に無力な形骸のみを殘して存在してゐるに過ぎないものである。

婦人参政權について

國民の輿論が議會に反映すると云ふことは淡い幻想である。勿論、私達は歴史の事實をいくら究明しても、議會が眞に輿論を反映したことなく、それは常に支配者階級たる資本家の意見の反映でしかあり得なつた。然し議會制度が最も理想的な政治形態として民衆の中に歡迎された時は、議會は恰も民衆全體の卽ち民意を反映してゐたかのやうに見えるが、しかし資本の獨占がすゝむと、議會制度の無能であることが露骨にあかるみにさらけ出されて了ふ。實際の政治の執行は、議會外の諸官房、諸司令部に於いて行はれてゐるのである。それ故普通選擧になつていかに勞働者の多くが投票する權利を獲得しても、資本家階級が權力を把持してゐる間は、何事もなすことは出來ない。それ故、普通選擧は——エンゲルスに依れば——勞働者階級の成熟の分度器たる以上なにものでもない。それは今日の國家に於ては決してそれ以上のものたり得ないし、又それ以下のものたることはないであらう。若し普通選擧を過重評價するなら、それこそ西歐の改良主義者たちは、普選は勞働する人々の多數の意志を現實に表現するといふやうな誤つた考へを抱くに至るのである。ブルジョア階級の發達した段階、卽ち金融寡頭政治の帝國主義の時代にあつて議會は既に機能的には無力になつて了つたところの反古紙同樣である時、吾々は議會をボイコットすべきであらうか？ 例へば無政府主義者達が議會をもひつくるめて一切の政治を否認するごとく、だが是に關してレーニンはかう云つてゐる。——議會主義は「歴史的に廢朽した」吾々は卒直にそう云ひ得る。そして更に吾々は社會民主々義の日和見的議會主義者が、議會の內部でブルジヨアーと醜い取引をして、プロレタリアートを裏切つた生々しい經驗を豐富に持ち合はせてゐる。例へば歐洲大戰の際の第二インターナショナルの裏切者達は、祖國の危急存亡を救ふためにと云ふ意味で、戰時公債に贊成の意を表した。彼等に排外主義者として、數千萬のプロレタリアを死に至らしめた。

「此の世界史的現象の經濟的基礎は何であるか？ その基礎は、資本主義の最高歴史的段階たる帝國主義の段階に特有な、寄生狀態と頽廢とのうちにある。資本主義は、極く少數の特に富有で强力な國家、極端にまで押しやり、それらの小數國家は世界住民の約十分の一か、多く見積つて、たかぐ五分の一しか擁してゐないにも拘らず、單なる利札切りで全世界を掠奪してゐるのである。資本輸出は年々八十億、乃至千億の利益をもたらし、然かもそれが戰前の價格、ブルジョアの戰前の統計に於いてもそうであつた。だからして現在ではその利益は更に巨大な額に達する。此の巨大な

剩餘利潤は、ブルジョアージーに勞働指導者、及び勞働貴族の上に上層の買收を可能ならしめることは明白である。事實、先進諸國の資本家はそれらを買收しており、しかも直接間接、公然、陰然の無數の手段によつて、それをしてゐるのである。

此のブルジョア化した勞働者の層即ち勞働貴族は、此の生活樣式、その收入、その世界觀に於て、徹頭徹尾ブルジョア的である。彼等は第二インターナショナルの支柱である。ブルジョアの社會的支柱である。勞働運動に於けるブルジョアジーの眞の手先、ブルジョアジーの無產階級代理人、改良主義及び偏狹愛國主義の眞の執行者は彼等である。」

吾々は獨逸革命の際にも、此の社會改良主義者どもが革命を抑壓することに氣を揉んだのを知つてゐる。こうした實例に依つて見ると社會民主々義者は、こうしたドタン場に、プロレタリアを裏切つて支配階級と取引するものである。

私達は、此うした傾向をブルジョア婦人參政權運動家の中にも考へることが出來る。彼女等は、我々と同じく女性である。然しながら階級的には彼女等の殆んど多くは小ブル出身の智識階級婦人である。特に彼女らの選擧獲得の目的は議會に依る改良主義であり、漸進主義である。若し幸にして彼女達が、婦人參政權を獲得して議會に一層の饒舌を吐くやうになつた時、果して彼女等はプロレタリアートの身方であらうか？ 否百パーセントまで小ブルジョア出身である彼女らは却つてプロレタリアートの敵になるであらう。丁度英國のアスター夫人が勞働者の子供を無慈悲にも飢餓に陷し入れるやうなブルジョアの決議に皆の願望に反對して進んで一票を入れたのは彼女達が貴族出の身分であるからだ。婦人參政權運動家は何時も吾々に向つて高らかに議會主義の御利益を說敎する、だが彼女らの信じてゐる議會が、社會の改革を遂行するであらうか、私達は欺瞞されてはならない、勞働貴族の典型者英國のマクドナルド首相の一徒は、議會に絕對多數を獲得して、眞にプロレタリアートの利益擁護のため全力をあげて盡してくれたか？ 先づ印度を見よ、プロレタリアートの祖國ソビエートロシアに對する態度を見よ、マクドナルド內閣は、高まる印度の××の波に對し、歷史の車を引き戾し大衆運動を抑止しやうとしてゐるではないか？ それればかりではない自國に於ける勞働者大衆の利益について、爪の垢ほども考へたことがあらうか？ 私達は、これらの實踐をブルジョア婦人參政權運動家の將來と結合させてよく考へて見なければならない。

婦人參政權について

「議會制度の××」「社會民主々義者の裏切り」「改良主義的參政權」此等に依つて、私達は飽くまで議會をボイコットすべきであらうか、否私達は社會民主々義的議會主義者とは別な意味で議會に參加しなければならない。プロレタリアートの婦人は、ブルジョア參政權運動家とは別な意味で參政權獲得につとむべきである。

意識水準の低い無產者大衆は、ブルジョアの巧妙な宣傳や手管に依つて、議會そのものに非常な期待を持つてゐる。私達は、議會の活動に依つて、此等の大衆を議會主義についての幻想から解放しなければならぬ、又議會の演壇を利用し、議會的活動と議會外の大衆行動との間の緊密なる結合をつくりだす事をしなければならぬ。

議會參加を、プロレタリアを、——啓蒙し、敎育し、更に組織する一手段として、勞働者解放のための政治鬪爭としての一手段として認める。」といふレーニンの言葉は、正しき態度と云はねばならぬ。

例へばドイツの社會民主黨は、普通選擧を實に巧みに利用し、最も銳利な階級鬪爭の武器の一としたかは、次に云ふエンゲルスの言葉に依つてもよく分る。彼等はフランスマルクス主義者の綱領の言葉で云ふと、今迄欺瞞手段であつたものを解放の道具に變化させたのである。そして若し普通選擧權は、次の如き利益以外には、何等の利益を與へぬとしても、卽ち三年每に吾々の數を勘定することを可能ならしめたこと、規則正しく確かめられ、かつ以外にも急速な投票數の增加によつて、勞働者の勝利の確實と、敵の驚愕とを同じほど增大させ、かくて吾々にとつて最善の宣傳手段となつたこと、吾々自身の力と一切の反對黨の力とを精確に吾々に敎へたこと、普選權を利用して大衆を敎育し、組織し、かつ訓練したところの獨逸社會民主黨が投票所に、二百萬の選擧人並びに、被選擧人としての彼等の背後に控へてゐる青年と婦人との團結は、强固な此の無數の大衆を、國際プロレタリア軍の決定的な「力の團塊」を形成するに至つたのである。

尙婦人參政權を私達は何に對して最も利用すべきであらうか?

ブルジョア婦人運動と違つて、國際解放運動の規準に從ふ婦人運動は、決して男女の性別の撤廢が目的ではない。私達はもつとも汚辱すべき生活をしてゐる我國の無產者婦人にも一票を獲得させることに依つて、現在甚だしく未組織狀態にあるところの彼女等を敎育せねばならぬ。

五ヶ年計畫とは何か？

神近市子

一

五ヶ年計畫のお話をすることになりましたが、短い時間にこの人類始つて以來の經濟的な一大建設事業を全面にわたつてお話するといふことは到底不可能なことであります。で、今度は『五ヶ年計畫とは何か？』といふ標題に忠實にごくザツとしたアウトラインをお話して、この問題について興味を持つてゐる方々、乃至は今後この問題について研究をして見たいと思つて居られる方々の御參考に供して見たいと思ひます。

何ヶ年計畫といふことは、私共にあつても時折り使ふことがある言葉であります。文士の間であると、あの人は二ヶ年計畫で大作を書くといふ風に云ひますが、その他の場合でも三年計畫で留學をするとか、何々の研究に從事するとかいふ風につかひます。が、五ヶ年計畫と云ひますと、私共の間では今日ではロシヤ共和國聯邦經濟年度一九二七——二八年から同じく三二——三三年にわたる國家經濟の發展計畫を意味するのであります。

先達て『トウルリシブ』といふロシヤの映畫が輸入され、『朝日』の講堂で一部の人々に公開されました。トウルリシブはトルキスタン—シベリヤ鐵道の略稱であつて、映畫『トウルリシブ』は、この鐵道をテーマとするものです。

この鐵道は南はカザツク自治共和國のルーゴワヤから、アルマアタに到り、北はセミパラチンスクにわたる、中央亞細亞を貫く延長千四百四十五キロの大鐵道です。ドニエープル發電所工事、ヴオルガドン運河と共に五ヶ年計畫の三大事業と稱せられるのですが、トウルリシブが豫定より一ヶ年早く先づ完成し、今年の五月一日をもつて發通式が行はれたのであります。

この五ケ年計畫は、一九二七年末に召集されたソヴエート聯邦共產黨第十五回大會に於いて大體が決定され、一九二九年——即ち昨年の春ソヴエートユニオン聯合協議　の代表者達にその詳細な內容が報告されました。報告者は計畫經濟委員會の委員長クリシヤノヴスキイで、演壇にはソヴエート同盟の大地圖がかゝげられ、クリシヤノヴスキイが五ケ年計畫の間に新しい發電所が幾つどこにつくられるかと說明しはじめると、地圖の上のその場所に小さな電燈がつきました。その通りに機械工場、炭坑油田、紡績工場、國家的穀物工場の上に電燈がつきました。特に穀物工場の場合にはこれ迄何人にも用があらうとは思はれなかつた暗い草原や荒れた無人の野原が電燈に輝き出しました。そして報告が終ると地圖全體が何千といふ赤、白、綠その他の色の電燈で覆はれて、その瞬間の壯麗さはそれに比較されうるものは一九一七年十月勞働者、農民、赤軍代議員から成るソヴエート大會に於いて一切の××の××が宣告された時のみであらうとある獨逸の著者が語つて居ります。これはこの計畫の重大性を理解できる者には容易に想像できるのであつて、クリシヤノヴスキーが何でもない聲で『これこそが我々がそのために戰つたところのものである』に云つた時、報告する者も報告される者も感極つて暫時は聲をのんだといふことであります。

二

ロシヤに××が成立してからソヴエート政府がとつて來た經濟政策は、大體三期に分けられて居ります。

一、戰時共產主義時代
二、新經濟政策時代
三、社會主義化經濟政策時代

第一の戰時共產主義時代は、名前が示す通りのものです。××直後の非常時强行政策時代であつて、軍隊と勞働者の給養のために、國民の私有權を極度に狹ばめ、農民は收獲物の剩餘を國家によつて全部徵發された時代でありました。

第二の新經濟政策は、內亂と外國の武力關涉とが終りをつげた一九二一年から一九二六七年にわたる時代を覆ふものであつて、これは戰時共產主義時代の後をうけ、工業農業共に荒廢した際に於ける一時的な、舊資本主義を組織による

生産の復活を許した期間でありました。

第三は一九二七年に始まるのであつて、この時代は社會主義化經濟政策の時代であります。即ち新經濟政策の採用によつて國家經濟が二十年をもつて戰爭前の水準に迄復活しました。そこで新しく社會主義的經濟の再組織、新建設が始められたのであつて、五ケ年計劃はこの經濟政策の具體的な現はれであるのであります。

それではどういふ風にこの五ケ年計劃のプログラムは實現されるのであるかと云へば一口に云へば、ソヴエートユニオンの國民經濟の全般にわたつての工業化と社會化とであります。

前にお話した地圖は、ソヴエートユニオンの工業化を示したものでありました。强大な、最新の技術に基づいた工業を建設せずしては、古いロシヤ帝國を自由な勞働者農民の社會主義國とかへることはできません。又プロレタリヤ國家として、資本主義の世界の中に存續して行くことが出來ません。卽ち工業化は社會主義國家の成立のためと、プロレタリヤ國家の存續のための技術的基礎をつくることを意味するのであります。

社會主義國家は又都會と農村との對立を無くすることが一つの重大なプログラムであるのでありますが、それには農村を機械力によつて行はなくてはなりません、原始的な鋤や鍬によつて行はれる農業を廢し、それを機械經營によつて置きかへなくてはなりません。そしてこの機械經營に必要な機械の爲めにもどうしても後れたロシヤの工業生産を最も進んだ資本主義國こ追ひつかせ、それを追ひ越す程度にまで改善發達させなくてはなりません。

かうした工業化が、五ケ年計劃によつてどの程度まで促進されるのかと云へば、一九二七――二八年度の工業年産額が、一八三億ルーブルであるのに對し、五ケ年計劃の豫想年産額は四三二億ルーブルに上る筈であります。前にお話したやうに一九二七――八年の年産額は、ロシヤに於いては大戰勃發以來の最高の數字であつて、この年に於いて産業が始めて戰前の狀態に復興した年とされてゐます。が、この年産額はロシヤに於いて資本主義が數十年を要して發達した結果であつたのに對して、五ケ年計劃はこの工業年産額をザツと二倍半迄高め、生産總額に於いては戰爭前の三倍の高さに達する筈であります。そして個々の工業部門にわたりますと十倍から五十倍、過燐酸石灰の如きは六十倍の年額となり、農業の社會化のため特に重要な農業機械の工業は、戰前の生産を七倍することになつてゐますが、實際には恐ら

く十倍にまで高められると云はれてゐます。

それと同時に工業勞働者の賃銀も引上げられます。即ち一九二二――二三年度には勞働者の賃銀は略々戰前の半分でありました。二七――二八年度にはそれが一二二・五パーセント即ち戰前より四分の一多くなりましたが、五ケ年計畫はこれを二〇八・九パーセント、即戰爭前の二倍以上に高めやうとしてゐます。

三

ある人は五ケ年計畫によつて示された驚愕すべき數字を見て、數字の交響樂又は數字によつて畫かれた一大繪畫だと評しました。が、しかしかうした席上で一々の數字を充分に頭に入るまで並べてゐることは出來ませんから、一二代表的な數字を紹介するに止めます。最初の數字は、五ケ年計畫の總投資額の豫算を、過去五ケ年の實際投資額と比較したものであります。

	一九二三―四年―一九二七―八年	一九二八―九年―一九三二―三年
總投資	二五・一 十億留	五六・五――六四・五 十億留
工業	四・二	一三・三――一五・六
電氣經濟（工業發電所を含まず）	〇・九	二・九――三・一
交通	二・七	八・三――九・六
農業	一四・〇	二二・八――二四・〇

次は豫想されてゐる生産增加額であります。

	一九二七―八年生産	一九三二―三年生産豫想
工業	一八・三 十億留	四三・二
農業	一六・六	二五・八

この五ケ年間の全工業生產額は、一四四六億ルーブル、農產物の總額は一〇五七億ルーブルに達するのであります。

その次ば基礎的生產手段の生產增加を過去の生產と比較したものであります。

	一九一三年	二七―八年	三二―三年	一三年を一〇〇とする指數(パーセント)
石炭(百萬噸)	二八・九	三五・四	七五	二六〇
原油(同)	九・三	一一・七	二二	二三三
泥炭(同)	一・六	六・九	一六	一、〇〇〇
銑鐵(同)	四・二	三・三	一〇	二三八
鋼鐵(同)	四・二	三・九	一〇	二四八
農具(百萬留)	六七	一二五	四九八	七四三

次は消費財の生產增加です。

綿製品(百萬メートル)	二七一	三二八	六二〇	二二九
羊毛品(同)	九五	九六	二七〇	二八四
砂糖(千噸)	一、二九〇	一、三四〇	二、六〇〇	二〇二
鹽(同)	一、九七八	二、三〇〇	三、二五〇	一六四

これらの數字は、五ケ年計畫について語る人なら誰でも擧げるごく解り易い初學者の數字であります。私共はこれによつて朧氣ながらこの經濟的動員がどんなことを意味するものかといふことを知ることができます。

四

ロシヤが社會主義國家として存續して行く爲めには、こんな風な工業の飛躍的進步を必要とはしますが、更に農業の

工業化といふこともこれに劣らない重要性を帶びてゐるのであります。農業の工業化といふことは機械による農業組織の經營といふことであります。この農業を工業化する爲めには共同經營といふことが問題となるのであります。そしてこの農業の共同經營――卽ち社會化といふことは、五ケ年計畫の大切なプログラムの一つであります。

ソヴエート同盟の工業は、全生產の八〇パーセントが既に大經營に移つて居り、それが五ケ年計畫が終る時には九二パーセントにのぼることになつて居ります。ところが農業生產はまだ僅かに二〇パーセントが社會化されてゐるだけであります。

それが五ケ年計畫によりますと、一九二七―八年度に社會化されてゐる耕地は僅か二三〇萬ヘクターであるのに對して一九三二―三年度には二七〇〇萬ヘクターの耕地が社會化されることになります。そして穀物生產の一五パーセント、市場に現はれる穀物の四三パーセントが、この大經營によつて生產されることになつて居ります。が、實際には非常な成績で五ケ年計畫の最初の一年に於いて、既に豫定の二倍以上にわたつて社會化が行はれました。それ故今日では市場に現はれる農業生產物の四三パーセントといふ豫想は、六〇パーセントから六五パーセントといふことになつて居ります。

市場に現はれる穀物の半分が個々の農民によつて供給されるのでなく、組織されたプロレタリヤ國家とその經濟機關と直接に結びついてゐる集團經濟又は國家的大經營によつて供給されるといふことは、ソビエートユニオンの內部にあつて何時でもプロレタリヤ××に對して敵意を示してゐる富農の力がそがれることになります。今日でもロシヤを旅行して歸つて來る人々の談話が新聞などに出てゐるのを見ると、物資の缺乏のことが屹度語られてゐるやうですが、それは富農の穀物賣惜しみといふことが可なり大きな原因となつて居ります。

このやうな農業の社會化を實現させる農業の工業化と機械化とはどんな風に促進されてゐるかと云へば、ロシヤの政府は農民の社會化のため又は貧しい農民達に主として機械を供給することによつてその實現に努力して居ります。この生產手段である機械をめぐつて、次第に農民達は組織的な經營に移りつゝあるのであります。（以下次號）

豫告!!!

本誌々友愛讀者にまみえざること二ケ月、その焦燥は慈雨にあはぬ大地の如しである。その渇を癒すため我々は力一ぱいに働く。既に九月末より十月初旬にわたりて、「秋夜講習會」をもつた。いままたこゝに、小展覽會其他、小さき企てながら、新らしき約束をもつことを悦びとする。幸に聲援、援助あれ！

既刊女人藝術

表紙・口繪・寫眞展覽會

誌友女流諸氏 自選畫陳列

十一月下旬・神田　東京堂畫廊

——詳細次號發表——

小説

“A Girl in Soviet Russia”

中島幸子譯

現フランス文壇新進女作家、アンリ・ヴイオリー女史が、ソヴエートを報告した最新の作である。

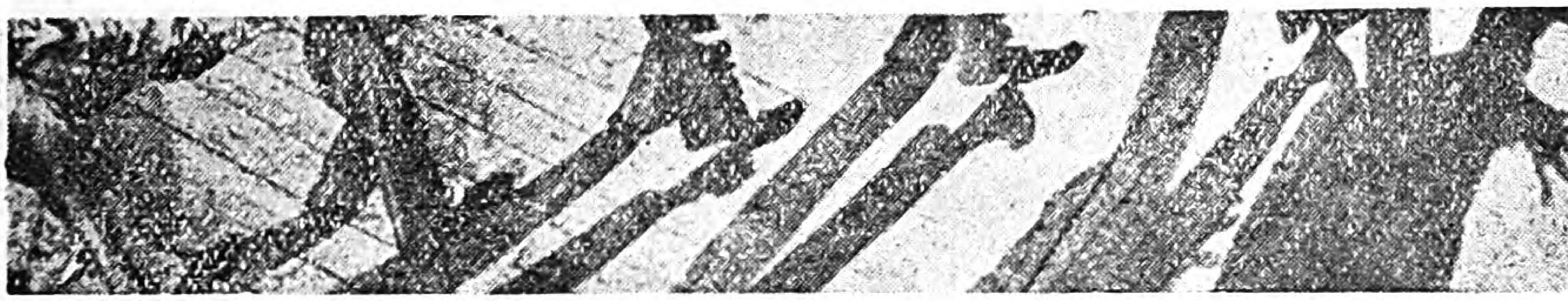
本誌は今年一月、この譯者の健筆にてコロンタイ女史の「偉大なる戀」を發表するや、グレートラブの飜譯は他からも爭つて出版された事がある。今回の譯も必ず讀者の讀書慾を滿すであらう。

新聞見學

——新聞人の婦人讀者に對する講話——

東京日日新聞社の厚意により一兩回にわかつて見學す。（一回三十人、女人聯盟員を主とす、日時、申込順に通知）

女人藝術社



氾濫

若杉香子

今日も亦
失業者の群が東海道を下る。

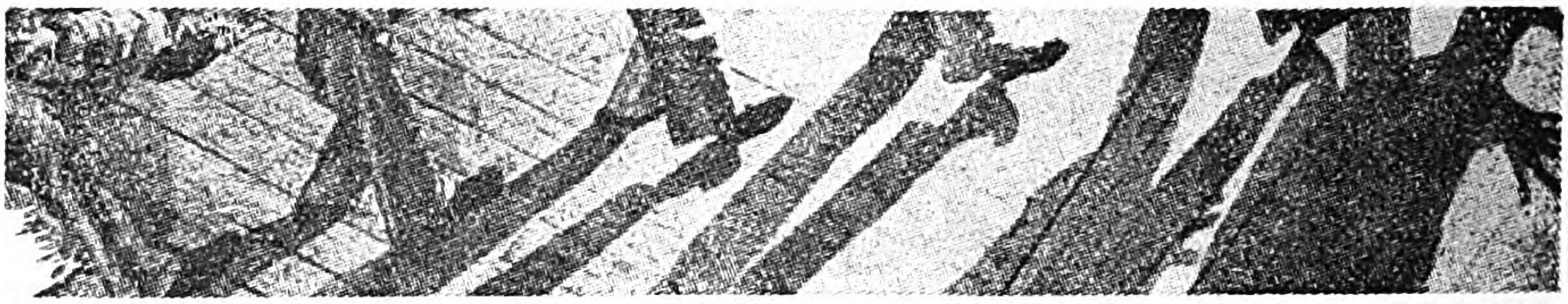
照りつける殘暑の陽に
蒼ぐろく萎びた皮膚をさらし、
汗に汚れた一枚のシャツに砂塵をさけて
トボ〱と西下する失業者の流れ。
健康も、意志も、生活も、その生涯の大半をも
失へる限りのすべてを失つた人間の群。
搾り粕の樣に投り出された人間の群。
昨日は二百、今日は三百。
只一つの希望を故郷へかけて
餓死線上の人々が喘ぎ〱箱根を越へる。
故郷(ふるさと)よ。

蛇を食ふ

菅原晴子

——若き農夫、兄のうたへる——

蛇、蛇、蛇よ!!
お前鹽引や乾鰊(にしん)の代りを務めて吳れるやうになつた
なあ
俺等お前は嫌だつたよ
彼奴等の搾取(て)のやうにしつこくからみ付くからよ
鱗は彼奴等の眼球のやうに光るからよ
からだは彼奴等の感情のやうに冷いからよ
だが今お前の成長は俺等の爲だ
點滴の血は酒の代りだ
筋だらけの肉は小糠といもの粥のおかずだ
女共食膳にお前のおばけをのせた時あ
飢餓に痙攣(ふる)ふ口を結んで水ばつかり呑んだが今では
お前無しでは粥も咽喉(のど)を通らねつてぬかしてらあ
俺等お前のむき〱した肉を腹にたたき込んで



そこには且つて彼等をはぐゝみ育ててくれた母が居る。
緑色濃い山の一隅には、なつかしい肉親がねむつてゐる。
其處へ行つたら人間一匹喰へる位のゆとりはあらう。
生れた土への執着とあこがれに、
今は只一つの希望のためにのみ、
彼等の足は動いてゐる。

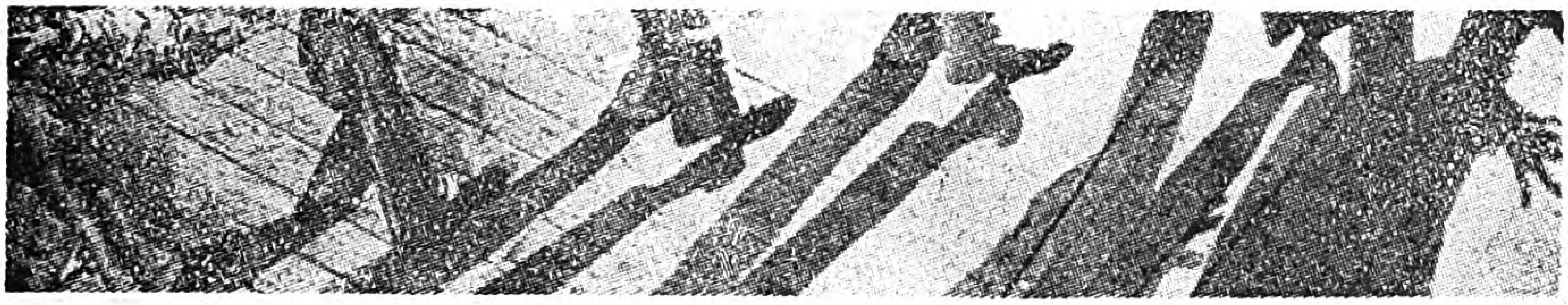
あゝ然し、うらぶれた彼等を待つてゐるものは、
昔日のまゝのなつかしい憩ひの郷土であらふか。
都會の貧困から彼等を叩き出した資本主義の颱風は
此處にも亦、その飽くなき搾取の牙をむいてゐるのだ。
不作にあらず、飢饉にあらず。
豐潤な作物の香り、
たわゝな稻の實(み)りをよそに
日に〳〵疲れすたつてゆく農村の生活、
のつぴきならぬ力に押しつぶされて
ゝましい没落の路を辿りつゝある彼等の故郷ではな

お前の血で血管を洗滌して
お前のやうになるんだ
みんなのからだで彼奴等に巻付いて
血の滲む程闘ふんだ
お前無しでは生き切れない俺等だ
野鼠だけは殖(ふや)してやるんだから
仔をうんと産んで育てて呉れ
そして俺等に俺等のすべてをたたき築く
血と肉を供給して呉れ
俺等お前のやうになつて脱皮し脱皮し
彈壓の穴をくり拔けくり拔け
俺等の××を取るんだ
お前を食はせやがつた彼奴等の手からよ——
蛇、蛇、蛇よ!!

一九三〇・九・二

植物愛護の水

吉田彌生



いか。

故郷へ、故郷へ、
ひしやげた胃の腑に
喰はねばならぬことの切實さを呪ひ、
一すじの希望を故郷へ投げかけて
ひたすらに西下する失業者の群よ、

あゝ、涸れつくした故郷へ辿りつく日
彼等は何を求め得られるといふのであらう。

彼に變りて

山縣章子

プチブルの、
女を戀し妻にせんとする我をなぐる
嘲罵のしもと。

星が嬉しいんだ
傘きてないお月さんが嬉しいんだ
今夜は芝生も乾いてらあ——。

臭氣と南京虫の木賃宿——なんて
それは失業しない者の夢だ
おれさまの御宿、天王寺公園！か。
今、天王寺公會堂は何だ
何だと、中國プロ萬歲！てのか
だがそいつは誰が見る芝居なんだい
見ろ、十萬近い俺達プロレタリヤだ
會堂の外の芝生に轉つたままなんだぜ

やつたなア！
ブルジョアの意志で降らせた雨だ
ホースの口から迸る雨だ
俺達のベッドはズブ濡れだぞ！

「植物愛護の涙ぐましき努力——」
A新聞は斯う云つたんだ
宿無しを追拂へ。芝草を枯らしちやいけないとよ。



主義と女との、
ヂレンマにある苦しみを忘れんとして、
卑怯者われ酒場にいりたり。

×××に、
參加したれど、泣いて我を、
とめし女の面影は去らず。

のゝしられ、
なぐられて、我力なき足を、
女のもとにはこべり。
此のなやみ、
ねむれぬ夜半を、もだえ苦しむ。

君を、我が胸にだきしめて、
情熱にやかれて死なん。
卑怯者、われ
排他的愛情に生きんとする！

一九三〇、九、

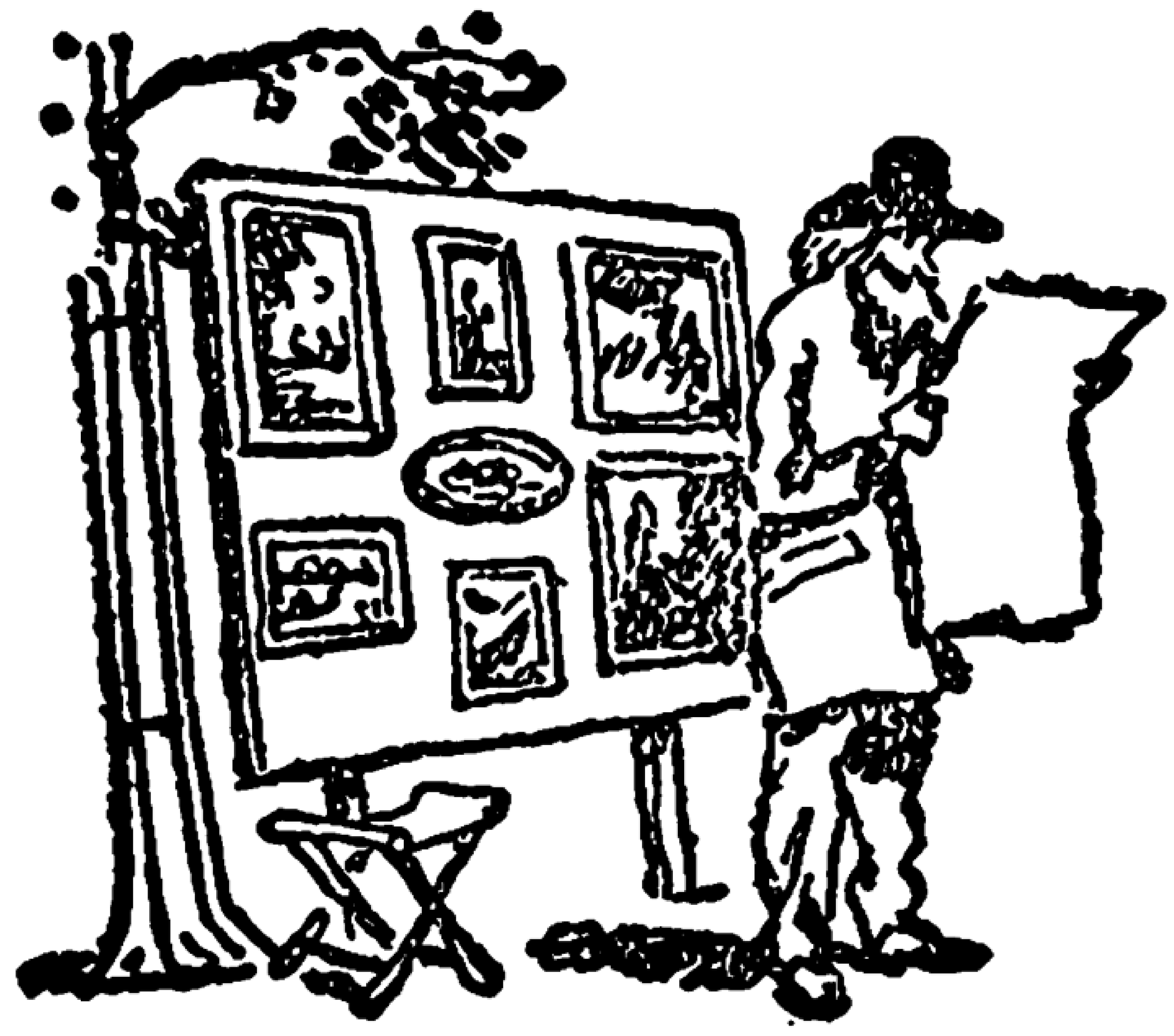
氷柱の陰やスチームにまどろむお孃樣達
明日は戀愛を樂しむ爲に
公園の草は必要だらうさねえ

芝草と、失業群と、
秤量にかけたか何かは知らないが
園丁は今宵も芝生に水を撒くんだ
植物愛護の涙ぐましい努力だ――。

意思

飯塚かよ子

辱かしめの
暗の中
堪へつゝ
發光體の
化石となれ



サボワ閑日帖

長谷川春子

眞青な眞青な中空に幻の白い月が浮いてゐる。九十七歳のトオション家最後のおばあさんは、赫い顔に鼻の頭へ大きなおできを載つけて、二時代位前の然し上等な黒紗で出來た平たい大きな帽子をかぶつて木綿の大きな服を着て、用心棒につかふ大きな杖をもち、これも十何歳になる白の小犬を從へて噴水に向つてもう腰掛けてゐる。

「おばあさん、おはやう。御機嫌どうですか」

エトランゼの言葉はぎごちがない。

「ありがとう。おなじことですよ。御孃さんお前さんは？」

大きないちいち力を籠めた聲で口をきく。

庭は二つに葛のはへた石垣で別かれてゐる。この老女の方の庭は、木も人と一緒にみんなもう大木になつてしまつて、湖水を背にした莊園は後ろの岩山も青い畑や牧場もちつとも見えなく暗く冷めたく鬱蒼としてしまつた。眞中の一番大きな樅の木の下に山の水で小さな噴水があつて、午後は木影から陽がさし込んで、樅の枝へ毎日虹をかける。噴水と黑い樅の幹の間の眞正面の所に、昔昔の流行の金の大きな球が臺へ載つて光つてゐる。

隣りの庭へ出るとこつちは大きな一面の草庭で萱葺の見晴の外は四角い平面の縁と圓模樣とに赤や紫の花が植ゑられて庭一面に陽がさしてゐる。下の湖水はエメロウド色に今日は大きく平らに見えて

«La France» だの «Mont Blanc» だのと白地へ大きく書いた車蒸氣船がごとごと走る。小さな蝿のやうにモーターがあちこち飛びかふ。飛行がぶんぶん湖水をかすめる。お寺の塔の鷄は城向きだから今日もお天氣だ。後ろの切り立てたような灰色の岩山は漸く陽が山を越えたばかりでまだ影が深く眠つてゐる。明るい方の庭は相鄰人になるらしいB將軍の夫人の庭だ。惡猫のマルゴッタンは杭に繋がれて遊んで居る。音無しい尨犬のアルギュスは門の傍で夫人が出て來るのを待つて居る。

おせつかいの將軍はちやんと、繪具と椅子を並べておいてくれる。

――構圖がキマリすぎて面白くない。前景にこの惡猫でも大きく入れようかな。

向ふの庭からお婆さんの大きな聲が響いてくる。女中のロザリーヌは朝五時に起きてから、一分も自分になれない。十四年間にこにこと彼女は氣のいゝ性質と無智と信心とで四十五六であらうが、まだ可愛いゝ童顔をしてゐて、あらゆる用を一人でやる。大信心なお寺も日曜の朝、一番早い禮拜にやつと行かれるのだ。口の惡い將軍には「聖女だよ」だ。

吝嗇で有名な老トオション夫人は四十年前死んだ夫のお墓の掃除もさせないで、食卓の肉はロザリーヌにはやらないで皆、犬にやつてしまふ。老犬は肉の過食で背中の毛が抜けて臭い。二三年前迄は非常にユウモラスで、年寄りの癖に頭のいゝ奇智縱横な話しをしたといふ此人は今でも耳は、夜そつと抜けだす家人の足音を聞きつけても、もう無言で、ユウモアの出あとの苦澁と憂鬱と怒りだけが殘つてしまつた。おばあさんは誰も居ない時死が襲ふのが恐くて、夜晝人を離さない。大きく喚く怒り聲は、死の方へ誘き寄せられまいとする最後の意力の戰ひだ。

「手紙が來てゐるよ、又泣いてはいけないよ」

犬が尻尾を振る。B夫人がまだ寐着で手紙を渡して吳れる。

「そんなにいつも動かされる事はありはしませんよ」

日本の親しい人達はみんな中々忙しいからめつたによき手紙をよこさない。故に或手紙で何心なく書かれた言葉に私がぽとりと涙を落したのを此の人は默つて見てゐたのだ。始め逢つた時には呑氣で人のいゝ所だけに見えたんだが男にした方が世間に相當通用しさうな性格でフランス女に珍らしい無口な人で、細い事には拘泥らずに默つて笑つてゐる。然し、しんは平凡な考へ方なりに確り物を觀る。脊の大柄なことといつて特色がない、ヒステリーでもないのにさりとて少しも肥らない。正反對の性格の將軍との長い二人きりの生活で二人の性格はなほ兩極にゆくのであらう。それでも髪の毛は斷髪で染めてゐる。流行はちやんと買ふが、さういふ點には迂濶なひとでしやれては見えない。サロンもヒステリー的歡待もないし呑氣だから特色がなくてもいつも氣樂にいろ〳〵の種類の人が集ま

る。この人丈けが一度もまだ私より年上の女が私の横顔へあびせる、あの凄い一閃を決してよこした事がない。將軍の方は正反對の大陽氣で、お饒舌で、安受合で、フランス人には珍らしくすらりと大柄で立派な大きな肩と腰をもち、まつたく陽氣な佛蘭西の將校だ。さぞ若い時には客間將校ではしやいだのであらう。ポ　テクニック出の秀才だが戰爭の時には戰場は好物でなかつた。下士出身の命をまとに戰つた連中は影でかれこれ言つてゐる。派手ずきで命はあまり費ひたくはないが、オペラコミックには年ぎめの場所を買つてゐる。紅い顏に鼻は少々ミケランヂエロのようで、耳の傍から殘つた柔い白に近いブロンドのぼつちりの毛を奇麗に禿げた白い頭の向ふの耳まで引ぱつて居る。帽子を取る時は細心だ。只、此人は人嫌ひがあつて、それが時には微妙な色澤を持つ皮肉な話し振りにかはる。不愉快の感情が微妙な毒をもつ雄辯な面白い、皮肉な觀察にかはつて來る。諷刺や直接のあてこすりなぞの決して　い、藝術家位でなくちや、彼の眞音心がわからない位の藝術的な皮肉を出す。

　このサボワといふ所は中部のブルボン家、オルレアン家に對してサボワ王國のあつた所でモンブランを挽ひにゼネバの湖を半分取り佛蘭西の平野がだんだん高くなり、山になり、山が重なりアルプス迄來て居る所なのだ、此のアヌシ湖と有名なエクス、レバンの傍のブルヂエの湖と——あのラマルテイーヌがよく詩にうたつた——と二つあつてブルジェの方は、まつたくラマルテイーヌが好きさうなすこし氣取つた憂鬱の、家もない岩山の足下の靜な碧い水なのに、このアヌシーの方は緣は向ひ岸はあたまに木のある低い山、此方は雲のよく掛る岩山や、又もつと高い山や、齒峰や角峰も、もう後から覗いて居る、その裾は鮮やかな青甍で小さな城があちこちの山や半島に建ち、大きなホテルも小さな家もいろんな色で點在してゐるのも、船付きでは百姓が釣をしたり、淺い太藺や芦の生へた所では生々した膚の若い男や、女や、子供が泳いだり戲れたりしてゐるのも親しみのある風景を作つてゐる。

　人の顏も落付いてゐる。女も美しい。中部のツール邊りにまけずいゝ美しい佛蘭西語を話す。まだシネマもダンスもなくても濟み、おそろしく信心深くて日曜のお寺は誰れもかかさない。其癖吝ん棒でお寺の坊さんには貧乏な教區なの　。

　昔、こゝから遠くない所から古來の大食通ブリアン・サバランが生れて、今でも料理人のでる所で、カイゼルの料理人は湖畔へ歸つて店を出し、うまい物を食べさせてゐる。湖には魚が澤山深いすき透つた水に游でゐる、皆うまい。王樣は影の騎士だ。あの珍重するガロンヌのトリット(岩魚と鮎の相の子)にまけない。鮭色の肉の小味でうまいこと。あの甘い味いムロンも遠くない南方から澤山くるし、山は淺くなく深くなく食餌は新鮮で豐富で、食べ物の好きな谷崎潤一郎氏でも來たらさぞ喜びさうな所だ。

　そんな事々が私を喜ばして、四角いこの庭で一人畫を描き、すこ

し本もよみ、晝寢をし、お茶を飲む生活をもう幾週間か續けてゐるのだ。

晝頃になると皆が庭へ集つて來る。ミラノから來たおばあさんの甥、B夫人と血を分けた公證人の一族三人、太つた人のいゝ老人夫婦で、四五日前皆でゼネバ湖廻りをやつて、雨で閉め切つた自動車の中でこの太つた夫人の吐く息と、前の公證人の大きな背中の間にはさまつてB夫人の抱いた矮犬の毛のしめつた匂ひとで、私と小さな矮犬が病氣になつてしまつた。主人のB夫妻、それに今日招ばれたのがコッピエ氏といふ版畫家の老人、美術學校のボナールと共に湖畔出身の畫家であのアヌシーの市役所の中にある、ジャン・ジャック・ルッソウが初めて戀人に出逢つたかはいゝ紀念碑の製作者だ。エッチングは相當うまい。それと從兄の學士院の一族、この妻君は金棒だといふ事は前から聞いてゐた。

ゆきつけの宿の亭主は往來にむかつた臺所で息子と一しよに朝から晩まで丸い顏を七輪の前からわきへ向けない。妻君になりかゝりの女中と女中達にあとの一切はまかせて、料理の事より外何にも口を出さない變つた亭主だ。

若い時は瘦せてキリストの樣な顏だつたといふ公證人は妻君の監視を逃れてはせつせと詰め込む。過食で肥えすぎたのだ。この人は他の宿にゐたのだが、食べ物がメダイユナポリタン（小盛り）なので宿換へした。

「今日はお茶には十五人くるよ」

「おやお　大變だ。ぢやすこし晝寢をしてきます」

「ハルコは寢坊だから卅分早く起こしにゆかなきやいけないよ。マダム」

公證人の娘カルラは此の春、人の惡い許嫁から引離なされて、二ケ月は何にも食べず煙草ばかり呑んでゐたさうだ。甘やかされすぎて頭の整はないこの廿年過ぎた娘は肢體にも何處となく不均整な所がある。九十七歳のトオション夫人の方がずつと顏も體もしまつてゐる。おばあさんには六つの戀愛があつたさゝだ。私を散歩に誘ひ出しては日本の男や女の話しがしたくてならない。

「マドモアゼル、プリマヴエラ」と大きな聲を出して追つて來る。

宿の小學校の校長さんの家へやつと寢に歸ると又、門口には松毛虫のような眉毛で荒神箒のような鬚の大男の校長さんが、破れ鐘のような大きな聲で

「ボンジユウル、マドモアゼル、コムフエイボウ!!」

今日は、何て上天氣です??

只一人の將軍殿で茶に集つてくる人達は近隣の田舍名士だ、大抵年寄りで、勳章のコマンドウルかオフイシエの略章がくつついてゐる。コッピエさんまでオフイシエだ。まづスタンダアルのプザンソ

ンの名士をおもい出す。湖水一面を見晴す美しい一番大きな庭園を持つ金持ちの工業家で村長の一族、山の裾の古風なお城を道具付きで買ひ取つて家中一ぱい骨董を並べてゐるこれも工業家の老人の一族、後妻がタイピストといつてゐるが女中か何かの上りで野性發揮なのでこの一族だけは一組成べく別によぶ。隣り村に滯在してゐる大統領付き武官のO夫妻、我儘で年中ぶつ〱云ふ小柄な妻君に、武官は紅ら顔で年中にこにことあしらつて居る。笑談ずきだ。
「今日、アヌシーの新聞にね、マドモアゼルがアヌシー、ヴェリエ間七キロメートル足で歩いたと大みだしで出てゐましたよ!!」

山の上に近代風な日本の城の腰をとり入れた夫人考案の家を建てたL氏の一團、L氏はリオン郊外選出の左翼の議員だ。

村長は方々の避暑地や海岸にある、大きな並木の散歩道が作りたくてならない。夢中になつて村民の愚と吝さを論じる。性急ちで村中せかせか歩きまわつては辻々で何か論じてゐる、臭ひ匂ひでもしよう物なら、其所迄嗅ぎに行かねば氣がすまない。小作爭議でもあらうものなら眞先に逆上つてしまひさうな人だ。

議員のL氏は左翼だけに一寸、髭にも態度にも野性があつて大柄でないがしつかりしてゐる、惡世辭をいはない。妻君はルーブルの研究會員で美術研究の發 もやる。妹夫婦は飛行機やであの一團が一番近代的な空氣だ。左翼議員夫婦と武官のO夫妻が一番垢抜けたいきなりをして居る。

お城の後妻と娘と議員の娘は湖で水浴をやつて日燒けの靴下なしの足を遠慮なくつき出す。

アカデミシアンのA氏は話には入らないで蓄音機とシャンパンをしきりと一人でやつてゐる。

コッピエさんは老人の癖に臆病で話しをする時には伏眼をする、話しにも老人のくせに少年のような藝術と術學の氣どりがある。議員のL氏が道樂に描く畫は、柄になく臆病な筆づかひでしなびた畫だ、村長の若夫人の方がアカデミ、ジュリアン出で一寸筋のいゝ畫だ。「このお菓子を伯母さんにもあげませうか」
「食べ過ぎて死なれたら大變だ。將軍と公證人夫妻が遺産めあてに義理の伯母を殺したと、あの連中から訴へられるよ」
「日本人のお孃さんも九十七の老婆殺しの共犯なんて珍らしい事件だ」
「然し、先生、吝ん棒の伯母さんから、×孃は一萬法も借り出したよ、豪いものだね」
「天才ですよ」
「エリオ氏は近頃リオンでは如何です」
「先日オルレアン公のお茶の會でお眼にかゝりましたけどね、爪を紅く染めていらつしやいましたよ」

湖水を渡つて雲が山に觸つてはきえてゆく。オペラのテイルや、ミラノのスカラ座の唄が夕方の甘美な空氣に一面に擴がつてゆく。

誰れも中々腰をもち上げない。

トオション夫人の客間は椅子もちやんと新しく張り替へてあつて夜はアルパゴンでもポルトオ酒にお菓子位出して皆に寄つてもらひたいのだが家中に流れてゐる古臭さと、おばあさんの疳癖と白犬が臭くつて逃げる口實を作る。一萬法借り出した英國の老嬢も時計を一時間進めておいて、おばあさんを寝かしてしまふ。いつも殘るのは犬とロザリーヌだけになる。

村長は往來で自働車を整へて先刻から花火を見にゆく約束をした將軍夫妻を待つてゐる。

散々待たした上に仕度の出來た私を人質に、外套を取りにいつて中々歸つて來ない。村長の妻君は怒りをこらへて電氣をつけて時計を見てはふうつと溜息をし、太い足を二本腰掛けの上へのばして默つて居る。

「お父さんどうしたの」

「將軍はお家へ歸つて大方寝ちまつたんだよ」

性急ちの村長もやつとこれ丈欝憤をもらす。氣の毒で、

「今日あれから、トオション夫人が椅子から轉げ落ちたのですよ。それで直ぐ出られないのでせう。」

ほんとうは大した事もなく濟んだが、一寸仕方がなく誇張して話す。九十七のおばあさんだから

「そりあ大變だ、どんなです。大丈夫でせうかね。」

山も見えない位眞黒な暗にアヌシーの丘の修道院もイルミネーして三越の新館のようだ。モンブランも、ラ・フランスも一ぱい明りをつけてゐる。町の方の黒い水には赤い提灯がごちやごちやに浮いて大きな魚や王冠や飛行機の舟が動き出してゐる。（終り）



愉快なる地圖

——大陸への一人旅——

林芙美子



1

馬賊！　此小さな日本女が、三百圓ばかりの金を、しつかり腹の上に巻きつけて大連へ渡つた時、私の頭いつぱいに擴がつてゐた、馬賊と云ふ字の妄想は、蹴飛ばしてしまはなければならなかつた。日本と云ふ國は、小さいくせに、妄想狂が多いのか、私が、ハルビンと上海と南京へ行くと言ふと、皆、馬賊だけは注意してゐらつしやいと云ふ。

さて馬賊に注意するには金がなくてはならない、私は三百圓の金を、三萬圓位のつもりに新聞紙に澤山包んで、腹の上に卷いた。

だが、どうも金に縁の薄い私が、金を身につけると、何だか體中がむづむづして、支那へ行くなんて云ひだした事が、わづらはしくさへなつて、ハルビンのロシヤ人と支那人の町へほうり出されるまでは、内地へ逆もどりする事ばかり考へてゐた。

だがいつたんハルビンの地を、踏むと、私の旅愁はまるで鳥が飛んで行くやうに遠く離れて、私はもう、ハルビンの地がとてもなつかしいところに思へた。

「ヤポンスキーマダム！」

銀色の頭髪を美しくかきあげた運轉手が、驛の前につゝ立つてゐる私を見ると、大きく聲をかけてくれた。

「ヤポンスキーホテル！」

「ヤポンスキーホテル？ナゴヤ・ホクマン？」

「ハラショ！ハラショ！ホクマン・ホテル！」

腸のはみ出したやうなオープンに、トランク一ツの私は當つてくだけろで、日本の壹圓札を握りしめると、晴々と走り去るハルビンの町を見た。

桃色、綠、卵、單色の女のドレスが、澄み渡つたハルビンの空にうろこのやうに光つて、走り去る街々は、油繪のパレツトだ。

「スパシイボ！」
日本の壹圓札が、大變好果があつたものか、運轉手君は、呼び聲をあげながら、私のトランクをホテルの三階まで持つて行つてくれた。
後で女中に聞くと、日本金の壹圓はハルビンでは約二ドル三十錢位になるから、一ドル三十錢もチップをやつた事になると云ふ話だつた。
さてこそ！運轉手君の瞳はキラキラ輝いてゐた。
北滿ホテル！これは思ひ出してもなつかしい宿屋だつた、女中が二人とも長崎女だが、粗朴で優さしくて、私の部屋は北向きで、窓から、バザールの軒が見える。
ベッドはおつこちそうに高いのだが、三圓の部屋代は、そう高くはない。下はキヤバレーで夜更け枕についてゐると、物語めいた唄が聞える。
こゝでは朝鮮銀行の小串任と云ふ、非常にスマートな美しい青年が、私を尋ねてくれて、知つてゐる限りのロシヤ人を紹介してくれた。
ヴエラ・ワシリエレヴナ・ラチノバ、これはチユウリン百貨店に近い郊外の家主さんのお孃さんだが、街の、肌の荒いロシヤ女にうんざりしてゐる私の瞳に、とてもとても美しく見えたお孃さんだつた。
珍らしい植物の澤山置いてあるルーフガアーデンの籐椅子で話した事は、實にたあいもない世間話であつたが、日本のブルジョワ令孃よりソウメイな事はたしかである。
「貴女はお國の事どうお考へですか、お國へ歸へりたかありませんか！」
すると、ヴエラ・ワシリエレヴナ・ラチノバは、兩手を乳房の上において、瞳をキラキラさせながら、
「シベリヤはなつかしい古里ですが、そんな事は聞かないで下さい。」
彼女はハルビンで生れて白色系の父さんを持つてゐる。大きい銀のサモワルが自慢で、彼女の父さんは、箱根で買つた實にまづい『日本風俗繪』をひとそろい私に見せてくれたりした。
毛並のフサフサした二匹の犬とピアノと、さゝやかな家具と、ヴエラ・ワシリエレヴナ・ラチノバは、溫室の薔薇のやうに美しい。

2

アレクセイ・アレクセイエヴッチ・グリゾフ、これは青年詩人だが、私は此人の詩よりも此青年の態度がとても好ましかつた。
「私は一人者で、何もおもてなし出來ないが、どうぞ日本の話を澤山聞かせて下さい。貴女の詩を一つ下さると、大變うれしいんですが……。」
部屋の中には、ベッドと洋服だんすと、机と、桃色の壁には、三

角で組み合はせた緑と白のシベリヤの旗がピンで止めてあつた。このひとの又の名をアチヤイル、粉麥色の肌の色に、茶のネクタイがとてもよく似合ふ脊の高いアレクセイエヴッチ・グリゾフは、靑いラシヤ紙の詩集を出して、菊の花咲く國のフミコ・ハヤシへ、雪の國の男、アチヤイルと云ふ署名をして私にデジケートしてくれた。

「どんな話から始めませう？」

「さあ！話をしなくちやならないつて憂鬱ですね。貴方も私も言葉が通じないし、私が少し位非常にうまい事を言つて、笑はせやうとしても、うまく話がとゞかないで、深刻な顔をしてゐらつしやると淋しいから。」

「マダム・ハヤシは睨みあつてゐる事が好きと見える。」

「アチヤイル！　貴方は、女のお友達をどの位、お持ちですか？」

女の友達？　そうですね、四五人ありますが、これは金がかゝつて私の貧しい原稿かせぎ位ではおいつきそうもありません。」

「四五人！それはうらやましい。」

アチヤイルは白色系の靑年詩人で、あんまりロマンチストすぎる彼はありつたけの書いたものを棚から引つぱり出して私に見せてくれた。

「これからの小說は、詩から出發した、線の太いカンケツなものでなくてはいけません。」

彼のつくつてくれたコーヒーは大變うまかつた。

ハルピンを出發するその夕方、私は佐倉家二と云ふひとゝ赤色系の詩人をマチヤコウに訪ねて行つた。別にどんな意味もない、私も會ひたかつたし、向ふも、露西亜新聞に出た私の記事を見て會ひたいと云ふし、急がしい思ひをして、ユカイな氣持ちで會つた。

通譯は、日露協會學校のアンプリー先生、日本の改造なんかすらすら讀めるひと、アンプリーアウドースチエンコフの、部屋を借りてゐる、マチヤコウは、靜かな學者町で、古めかしい白い家が並んでゐた。

このお家で會つた、赤色系詩人の名前はあいにく失念してしまつたが、ロシヤへ歸へつても重要なひとだつて事だつた。東支倶樂部員で、獨身者、大變ふけて見えるひとだつた。

アンプリー先生は、「私は經濟學の方で文學の事は判りませんが、何とか通譯の大意ははたしませう。」そう云つて、私の爲に美味しいブドウ酒、男のひと達には、輕いビールを拔いて、乾杯しあつた。

「いつたい、ソヴエートロシヤの文士や畫家や、音樂家は、どう云ふ風な生活をしてゐますか？」

「みんな兵隊さんですよ、通信部、計畫部、情報部、設計部、働く部署は廣いですからね。」

「なるほど、日本の文士たちもそうするといゝですね。靑べうたんが居なくなつて、もつと早く××は來るでせうからね。」

「日本にはそんなに靑べうたんの文士ばかりですか？」

「えゝみんな靑べうたんですよ。」

「ホウ……貴女はとても面白い。」

「コロンタイが、一時日本の若い人達をフウビしたのですが、お國でもそうでしたか。」

「コロンタイ？　あれは政治家で文士ではない、あれ（赤い戀）は代作で、かなりロシヤでも代作問題でゴタゴタしました。」

なる程、代作問題なんて、どこにでもある事なんだな、いまロシ

ヤで活働してゐる實力のある女流作家は、マリエッターシャーギニヤンと云ふひと、詩人で長篇作家で、美術博士、そして職業は、熟練紡績女工だと云ふ、なんとこれだけの肩書きを聞いただけでも、日本のプロレタリヤ女流作家は腰を抜かす必要がある。

マリエッターは、大變いゝ家の出であるが途中感ずるところあつて、紡績女工になり叩きあげた最もケンジッなる作家だと云ふ。

「日本ではどんなひとがゐますか？」

「日本？　そうですね、マリエッター位のひとでは、マダム・タイコヒラバヤシこれは、おそらくマリエッターシャーギニヤンにもまけないでせう、雪の國の人は非常に強いが、マリエッターも、日本のマダム・ヒラヤバヤシも雪の國の女です。雪と云ふものは、何かすばらしい××性を持つてゐるのでせう。」

「タイコ・ヒラバヤシ、私の心に大きくしるしませう。」

外、アンナ・カラワーエワとか、セイフーリナ、又は、ニーナ、スミルノーワなど、ソヴエートの女流作家はランマンときそつてゐるが、「日本のフミコ・ハヤシに似たひとでは、ニーナ・スミルノーワ、此ひとは、シベリヤのハムズンと稱されてゐて、貴女の詩に一脈通じるものを持つてゐます。」此詩人は大變私をなぐさめてくれる。アンプリー先生は、四杯目のブドウ酒を、私のコップにつぎかけてゐらつしやる。

3

エスチニア、ウラヂミロヴナ、クルゼンシテルン、この女性は、ハルビンで最も氣のあつた私の友達、ゲンバオ新聞の記者で、短篇作家、原稿で食へないので、英語を教へてお母さんを養つてゐるひと、一度破婚したので、こんどは牧師さんとでも一緒になりませうかねと、いたづらつ子らしく、目をくるくるさせて、兩手の表情のうまい女、男を持つなら英國人に限ると云ふ。なかなかきはどいところまでべらべら言つて、あとはヒニクだ。私は彼女に、あいさつする時は、

「おゝマドモアゼル・ドゼウさん！」

どぜうは、ぬるぬるして、つかまへどころがないお孃さんと、どぜう、なんと面白いコントラスト。

ハルビンはいゝ、空もいゝし物價も安いし、私はホテルに泊つてゐても、食事は外で取るやうにした。

朝、やかんをさげて、銅貨を三四枚も出せば、辻々で湯を賣つてゐるところから、熱い湯が買へるし、パンもトマトも腸詰も煙草もそこでそろうし、朝食は、たいてい拾錢ぐらいで濟む。

晝食は、アペードつて云ふんです。アペードつて言葉はとても私の自慢で、夜になつてもアペードつて吐唸つてボーイを面食はします。

キタスカヤの通りの料理店で、レコードを聞きながら、銀の鍋から、スープを皿にすくつて、食べる味、とても忘れられない。その

スープの中には、大きな肉のかたまりや、馬鈴薯、キャベツ、色々なごつた煮、パンは食べほうだいそして、お勘定は四十錢、日本金にすると、二十三錢あまり、何たるすばらしい事でせうか！

私が、ハルピンの女性をとてもうらやましく思つた事は、臺所から解放されてゐる事だつた。

臺所！　臺所！　臺所！　日本の臺所の何と、ごたごたした事でせう、食器店に行くと、皿小鉢の山、私はあれを見ただけでもおそろしくなつてしまう。

まして、日本のブルジョワ舊家となると、皿小鉢が百人前、塗椀が百人前、なんて倉にしまつて、年に一二度人の口にふれるのだがハルピンでの家庭は、とても明るいものだつた。お湯まで外で買へるのだから、主婦は朝、めをさまして、臺所へ出るかはりに、朝の屋外の空氣を吸つて、パンと湯を買ひに、そして一食主義である。お晝のアペードをしつかり食ひ込んで、朝と夜は、輕い食事。子供もお母さんも、お父さんも一緒に御散歩だ、街には、戀の花アスター（えぞ菊）の花束を軒の下で賣つてゐる。

若い女は自由である。四五人の男の間にブランコのやうにぶらさがつて、アスターを胸にかざして――モデルンのフイルムは、ロシヤ語と、支那語のタイトルしかないのだが、私は瞳をつむつて、音樂を樂しんだ。

煙草を賣る娘は、ブロドウエのキャバレーにでも出て來るやうなお姫様、何と日本女、マダム・フミコ・ハヤシの目玉はグリグリとんぼがへりをしたことだらう。

KISSの音、ミスター小串は、あんまり下の方は御覧にならない方がいゝと云ふ。まづいフイルムを追つてゐるより、暗がりのKISSの音に、私は十分に興味を感じた次第です。

4

キャバレー黒鷲のジプシーガールの靑くさい手を握つて、私は上海タンゴをひとくさりならつたんだが、變れば變る世の中ではある。

それから、煙草だ、モスコー煙草のスイスイする奴が、日本のバツトより安いと來ては、日本の煙草役人を一束にして、モスコー煙草の中へねじ込んでやりたいものだ。

日本の煙草は、ハルピンの土よりまづい。

ナハロフカ（これは暗黑街と云ふそうです）いはゆる貧民窟、日露協會學校の生徒さんの案内で、借間さがし、豚の子と遊んでゐたコオリヤと云ふ子供の泣き顏、角砂糖をそつとかじりながら、瓜と紅茶で食事をしてゐるキャバレー通ひの踊り子、ナハロフカには、美しく怪しい肌をもつた娘が多い。

貴方と私は船と波止場
別れてしまえば海ばかり

破れた窓のかげで、こんな唄をうたつて、シュミーズ一ツでゐるスンガリ（松花江）の河で見た娘。

雨でつかへたのだといつて、スンガリの向ふの太陽島の別莊地帶は、ドブドブに水につかつて、屋根の上には、ロシヤ男が、素裸で陽に干されて寢てゐた。

春は馬車に乘つて、横光氏の小說ではないが、赤いルパシカの上から、黑チョッキを着た、ゴルキーのやうな馬車屋が、二十錢も出せばどこへでも運んでくれる。

眉をおひそめになる方があるかも知れないが、ニッツア女も買つてみました。裸でみのみたいなアソコ、腕には綠色のいれづみで、何人もの男のイニシャル。かつぽれも踊れば、さよなら、い、い、い、い、ありがたうも云ふ。日本のお上りさんに出來てゐると云ふ話だ、道理で日本人は甘すぎる。

ホテルの前が、キャバレー・タベルナ、一ドルもやれば、こゝの踊り子は目をむいてうれしがる。ハルピンには日本の踊り子は一人もゐない、皆ロシヤ人、それも白色系のおちぶれ、氣品のあるのが澤山ゐる。

だが、抱きあつて踊つてゐると、ギンガムのゴワゴワした夜會服なので涙がこぼれる。

ハルピン、長春、奉天、撫順、金州、三十里堡、大連、青島、上海、杭州、蘇州、これだけ、私は三百圓の金でまはる事が出來た。居食ひしたところで、五ヶ月位、死んでいゝつもりで、渡つて行つたのだが、とても元氣で、歸へる事が出來た。

やれやれと荷物を玄關におろして、俥屋に俥賃を拂つたら、あとに六錢あまり、何とハッキリとつかつて來たものか、ハルピンでも書きゝれないのに、まして、上海の事、ボツボツ書いて行きたく思つてゐます。

フウジャテンの支那街で西瓜を食べながら歩いたり、夕燒けのスンガリの水の上で、支那の水上巡邏に、ケンツキデッポで驚されたり、エトランゼの私に、好意をよせて下さつた、ミスター柏木（これは私の踊りの先生）女人藝術の愛讀者山内さん御夫妻、トルコ人のイスマイルさん、繪描きの大部さん、皆にこゝからスパシイボと呼びかけませう。

告

林さんが、滿洲から上海の旅行を樂しくなされた一面に、女人藝術誌友諸氏の懇切なる御厚意があつたことを深く感謝いたします。

女人の一人旅で何處へいつても心おきない誌友によつて迎へられるといふ事が海外のことであるだけそれだけ一層嬉しく思はれます厚くお禮申上げます。

貧農

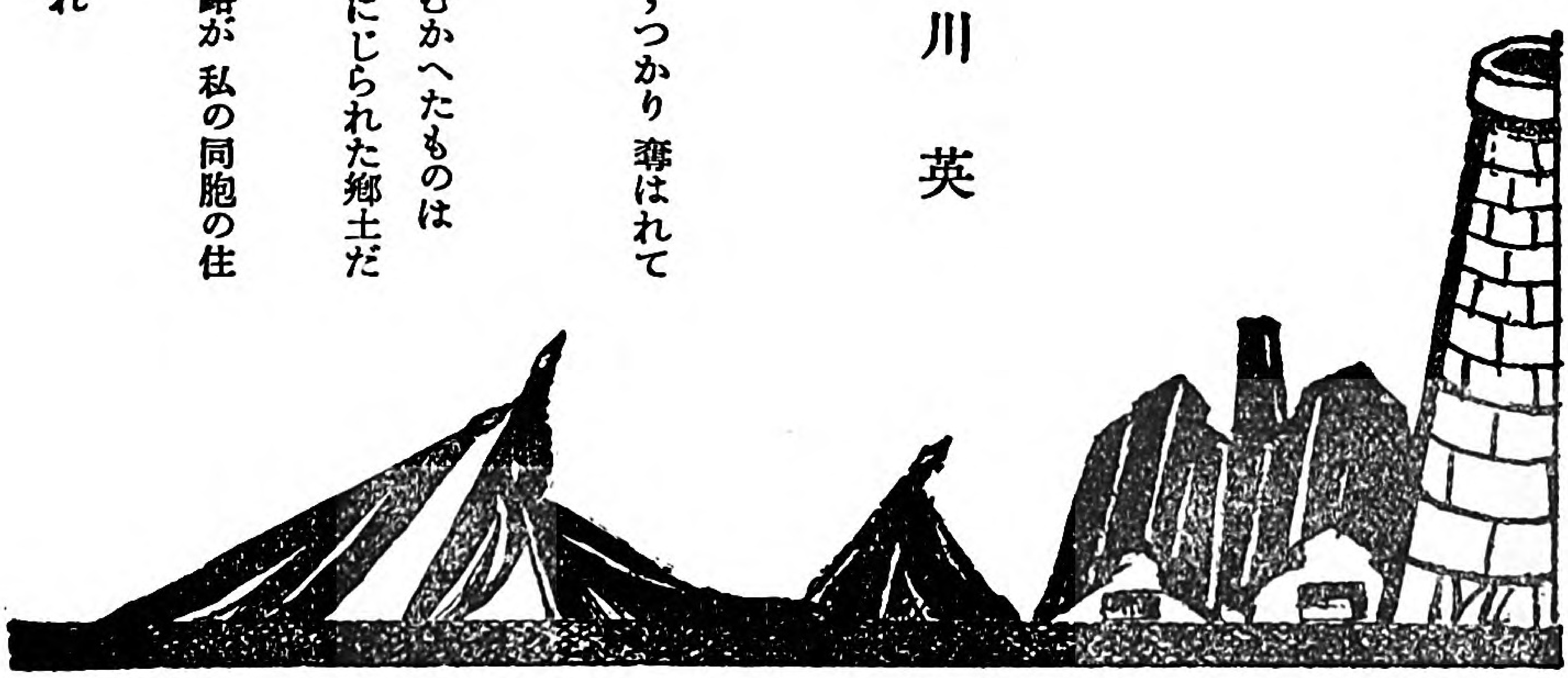
森本正子

夜更かしの常習者が
やつと床に入つた頃
貧しき農家の夜明がはじまる。
空はまだ眞黒く澄んで
星のキラメキは沃しいまでに冴えてゐる
すべてのものはいまだ
快よき睡眠に圓らかな夢を辿る。
牛にかひばをやる父
釜に火を焚きつける母
門庭を掃く子供ら。
手水を使ひ東の空を拜む頃
朝食の仕度はとゝのふ
黒い麥の入つた御飯と
たゞ貧しい香の物。
それでも彼等にとつては

手を連ねる

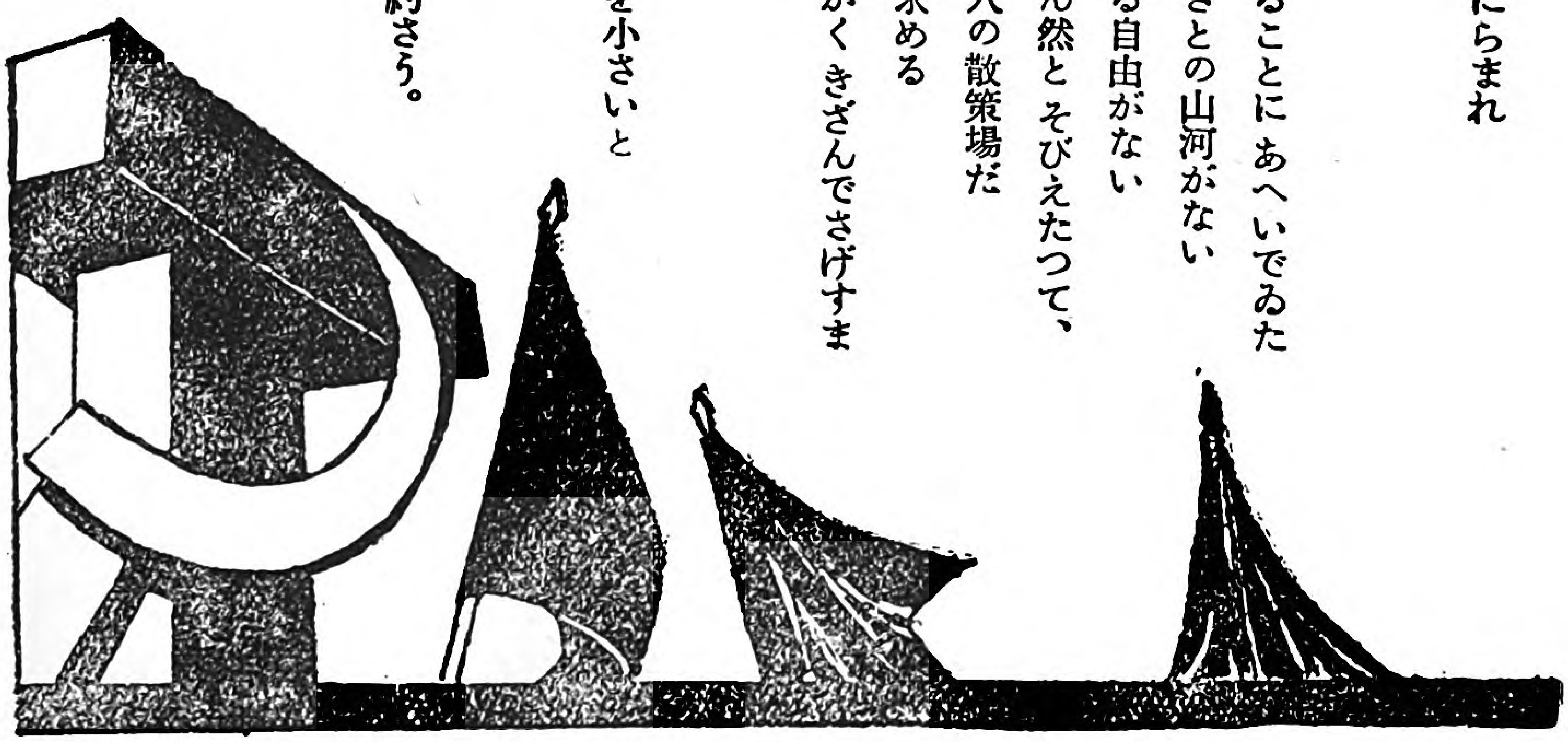
北川英

祖國のために
おゝ　祖國のために
そのことばは××人の私達からはすつかり　奪はれて
ゐる
永いみぢめな放浪生活から
ふるさとを望んで歸つて來た私をむかへたものは
すみからすみまで　××主義にふみにじられた郷土だ
つた。
街のはじつぽのじめじめした袋小路が　私の同胞の住
居だつた
あいつらは汚ならしいとさげすまれ



それ以上の食物はないのだ
粗食に慣れた彼等
否　それしか與へられない彼等なのだ。
一家は揃つて田甫へと出掛ける——
しつとりと足に濡れる草のつゆ。
太陽を孕んだ東雲は
いま刻々に明けてゆく
明星が一つ、かそかな名殘を止めて
輝いてゐる。
彼等が懸命に作つた作物も
やがて實のれば
みな地主へ治めねばならないのだ
お〻、そしてわづかな
餓えないだけの粗食の報酬
否、或時は餓えるかも知れないのだ。
子供だけがふえる——
そこにたゞ無智と
諦めがあるばかりだ。
榮養不良は皮肉にも姙娠律を高める
「産兒制限」の何であるかも知らず
第二第三、第四の出産を恐れつ〻

あいつらの根生は圖太いぞとにらまれ
私の老いた親達は
私の幼いけふだいは
友達は、隣人は、みんな食べることにあへいでゐた
私にはしみじみと親しむふるさとの山河がない
私達にははゞからず絶叫できる自由がない
大通りには××人の家屋がげん然とそびえたつて、
私達の廣場だつた公園は××人の散策場だ
私達はその中をかゞんで食を求める
今にみろ!!その合言葉を胸ふかくきざんでさげすま
れてもぢつと堪える
袋小路に充滿する××の炬火を小さいと
見るのか
××の××よ
手をつらねて一齊に立つ日を約さう。

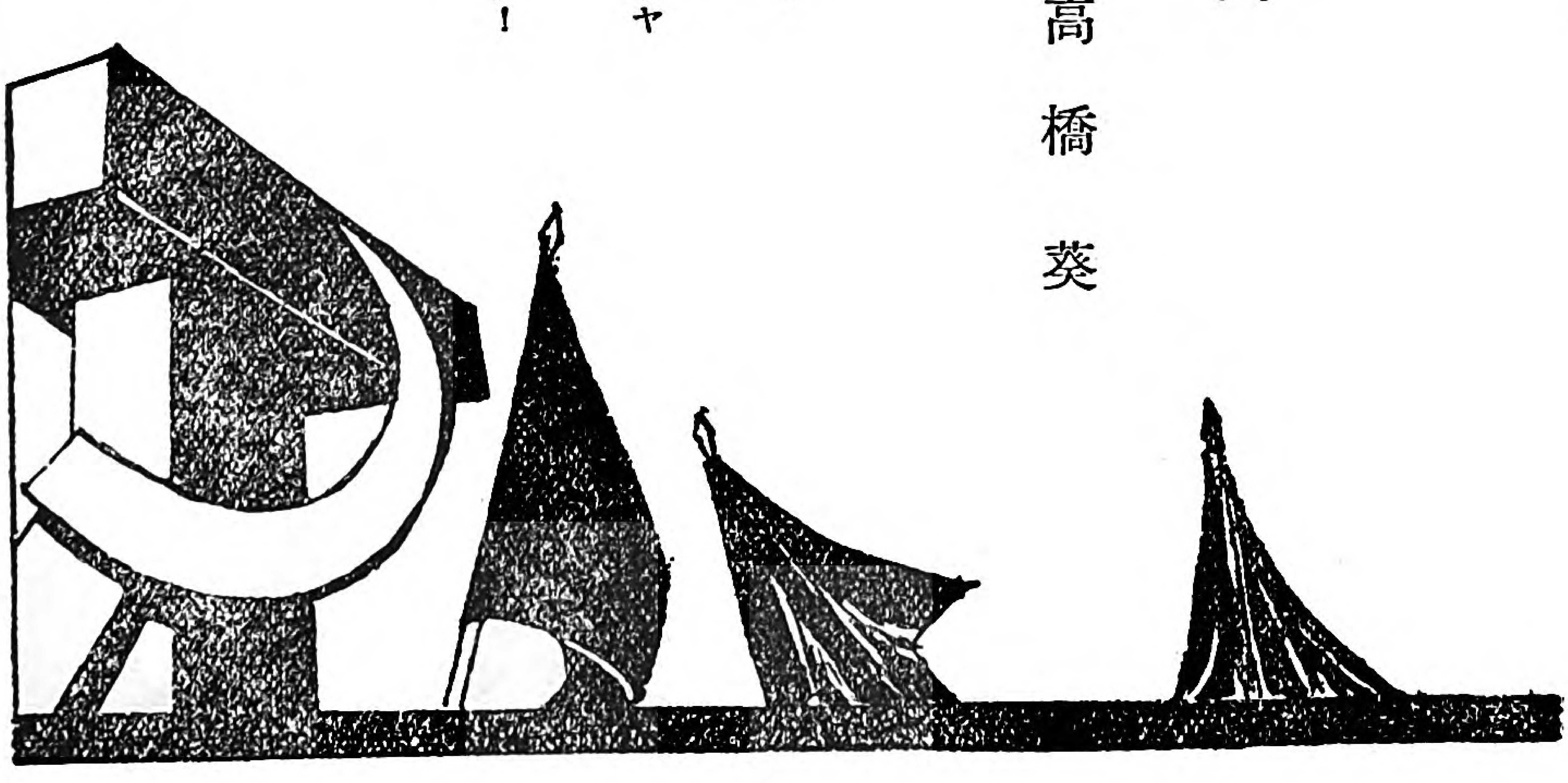


粗野な性慾を滿す。
照りつける強い太陽の光と熱
やきつけられた土とは
彼等の皮膚を松の皮のやうにして
榮養不良な肉體を
細く筋張つたものにする。
身に過ぎた勞働
時間の制限
休息
考へる暇もなく
休めばスク〳〵と雜草はのびるばかりだ
收穫に影響するのだ。
鍬を持つ事より知らない彼等には
改良もなければ自覺もない
たゞその體を牛の如く
酷使するが最上の方法と考へてゐる。
自分達の慘めさを知らない彼等
ブルジョア娘は
美しく畫がかれた農家の繪に
詩的な農村の生活をあこがれる
豐かに實つた黃金の田に

ポリ行進曲

高橋葵

ザツポツ　ザツポツ
××の調練よ
まあれ、ミギマエ——オイツ
ザツポツ　ザツポツ
ガツチヤ　ガツチヤ　ガツチヤ
佩劍の伴奏が……
クミ、クミイ〳〵、ヒダリツ！
ザツポツ　ザツポツ
暑いのに足並そろへて
御苦勞樣、
まあなんて從順な——
小學校の生徒の樣に
おとなしく——



たゞ夢のやうな　繪のやうな
讃美を捧げるが
農家の一日の過ぎた勞働は
肉體を綿の如く疲らせ
頭腦をにぶく海綿の如くする
粗食も空腹には夢中だ
たゞ胃を滿すばかりで滿足してゐる
食後の辛い煙草の一服が
彼等の最上の休息だ。
過勞の上に夜なべをする
食えない爲の副業だ
節約の爲の生産だ
なわなひ　わらぢ作り。
有閑階級の紳士淑女が
マーヂャンやダンスや酒に
醉ひ疲れる頃
貧しき農夫達は彼等の
勞働に疲れた眼を充血させてゐる
精神も肉體もスリへらした彼等が
やがて睡眠に入ると
あまりにも早く　また彼等の夜明がはじまる

ザッポッ　ザッポッ
校庭でやつてたのよ
窓から見てましたの。

最後のベル

武内利榮子

最後のベルのならぬまに
つかつたものを計算しやう
一ッ、二ッ、三ッ、四ッ
私は四人の子供に梨をやる
どれが腐つてゐたとても
割引はしてくれぬこと
友よ
最後のベルがなつたとて
私に誤算はない筈だ。



職場から!!!

女工の叫び

東洋モスリン一女工

一

私が募集人に連れられて始めて東京へ出てきました時、募集人は私の空想してゐた通りのことがみんな實現する樣に聞かせてくれました。私は家の貧しい小作人の生活を助ける喜びと共に、私の希望する事が、なんでも實現すると云ふ喜びの爲に夢中になつて戀しい父母に別れる悲しさも弟妹達と離れる寂しさも、人間らしい慾望にかき消されて出てきたのでした。

一足龜戸の東洋モスリン會社へ入つた時、そこには、私と同じ年頃の女工さん達の、赤ちやけたバサ〳〵の髮を、綿ほこりに白くさらし、顏色の惡い尼さんの樣な黑い作業服が異樣に眼に映じたのでした。そして、廣い工場からは、家庭的な和氣が一つも見出せなかつたのが第一の印象でした。

二

私の仕事は、第三工場の綿紡部の仕事で、そこには、五百人程の女工さんが、機械の中で繰り人形の樣に働いてゐます。

「管が廻轉する度數の早さと私の紡ぐ手の早さとが同じ位に働かなければならないのだ」と、見まわりさんに、幾度も〳〵も叱られたのでしたが、一時に、三十ケ所も切れる弱い糸を二本の手で一時に紡ぐことは出きません。私達は、機械だか人間だかわからない生活をしてゐるわけです。

場内の寒暖計が百度を超へてゐる時、咽喉には一滴の水氣もなく、カラ〳〵だのに、額

讀者通信

名古屋 杉崎富志江

皆樣いよ〳〵御健闘の事と存じます、私は御誌に師事致しましてからまだ日の淺い者でございます 女人藝術——女人の名は何處か强く響きますけれど藝術から受ける藝術至上主義的な妙に傾い精々インテリ的な婦人雜誌を想像して今まで御誌に一瞥も與へようとしなかつた私でした。今その輕率さを恥ぢて居ります、それも結局私自身の頭が古かつたからなのでせう。藝術と云ふ言葉の内容的變化を新鮮に感覺し得るんならとの產聲と共に双手を擧げて迎へたでせうに、數ケ月前でした、新聞紙上に神近市子氏の女人術藝三週年記念號に對する感想が載つてゐました、それを讀んで御誌の內容についての暗示を得て早速求めて見ました、今まで求めながら求め得なかつたものを發見した喜び!! 殊に周圍のものと苦しく戰つてきた私にとつて御誌の存在は、なんと云ふ强い力でございませう。私はもう淋しくない。御誌を通じて私の兩手の

から顔からも、汗が雨の様に流れてきます。足が棒の様に突張つて感覺を失つてしまひますと、中心がとれなくて、歩くのが見當違ひの方向に、フラ〳〵してゐます。始終かけ足で糸をつなぐのに、フラ〳〵してゐる時はかけ足が少しおそくなります。そうすると、見まわりさんは、組頭に告げて、組頭と二人で、毆りつけます。

ヘト〳〵になつて寄宿へ歸つてくると、室長の意地悪い叱言や、ヒステリックな不氣嫌な顔に出會すのです。でも近頃では、室長や見まわりの女らしい、せまい了見からの、意地悪位は、あきらめてゐますが、どんなに目を閉ぢて、あきらめてゐようとしても、あきらめられないものが、グン〳〵と私達の血を湧き立たせて、三年間の、あくなき勞働搾取に對しての叫びが、芽を出し始めました。

三

會社の中で産業合理化と云ふ言葉が一つの流行語になつてからの私達の生活の脅威は、會社の上役達が時々眠り薬を注入する様に勞資協調や、家族主義の話を説いてくれても、安心して、盲從してゐられなくなりました。深夜業廢止と共に、月に二回の休日が四回になり、一割減給と同じになりました。さうして、いろんな形で生活は刻々に切りつめられて行きつゝあります。やがては、解雇にまで及ぶことを私達は知つてゐます。資本家の産業合理化は、×をみなければ治まらない村正の名刀である事も今こそはつきりと知ることが出來ました。

エロとグロが滅び行くブルヂョアに支へられたる享樂生活であるなれば、失業と飢餓との中に資本主義打破の鞏固な團結を作ることがプロレタリアに課せられたる任務であり、すべてのプロレタリアは明日の運命になつてゐる階級であり、その時にのみ、私達女工のすべての要求が完全に貫徹され得るのだと云ふことも今こそ、はつきりとわかりました。

頑張れ、よし坊

京山あい子

内に多くの人々の固い强い握手を感じてゐますから——

東京 蒼野 尚

私達はいつも「正しい」と云ふ言葉に毫もひけ目を感ぜず地味ではあるが目的に向つて一歩より一歩と力强く踏みしめてゐる。

私達の務めてゐる所では危険思想と云ふ名の下に無慈悲にも幾人もの首切りをどし〳〵實行した。——表面はあくまでお茶をにごす程度でそれらの人々は働きたくも働けない就職難の渦のまん中に叩き込まれて生活苦にあへひでゐる。こうした様子をしみ〴〵見せつけられたら何の意識も持たない者だつて反抗を感ぜずにはゐられないだらう。當然の事だ。

長野 大澤いちし

思想的にも家庭的にも悩み拔いた揚句御誌に依つて思想的飢餓を始めて防ぐ事を得ました事を何んなに喜ばしく思つて居りますことか「此の雜誌は貧乏人の話つきりで面白い事はない」と云ふ同僚を熱と力を以て引入れ様と思つて居ります。

御池 千代

八月十四日京都女人聯盟支部の主催で講演會のある事を野生正子氏

よし坊
どうした
連絡はついたか
體はどうだ
お前の住所を――
昨日も今日も
ものすごい××だ

いゝか、よし坊
米代がなくても
職場訪問をサボルな
ミエ公と三公を必ず尋ねろ
職場ニュースの反響はどうだ

早く原稿を集めて
第五號の準備をしてくれ
夜店で買つた、十八錢の
赤い花緒のホー齒の下駄が
ペチヤンコになるころ
工場の社長や監督共を
ふるえ上がらせる
立派なニュースが
皆んなの手に渡るだらう
元氣を出して
頑張れ、よし坊

註 よし坊は交通費がないので一日に二里位歩く日が多い。

給仕の雑記から

大久保文子

鬱とほしく、雨が窓を叩く、頭がキリで、ほぐられさうに、痛むんだ。足の關節がまるで抜けさうに、だるいんだ。

「女給仕つて、辛いな……」

つくづく、自分が可哀想だ。

それにKの奴！思ひ出すと、悔惜涙が出て仕方がない。

五時に起きて、七時前には社に行つて居らねばならない自分だ。掃除から、應接の客の茶はこびに、電話の交換だ。

さつきも、さつきだ。

「おい！、郵便局迄、急いで呉れ」

より開き火膨をした足の痛さも忘れて二人で出掛けました。しかし始めてあのやうな場合に直面して私は多大に教へられる所のあつたのは何よりうれしい事でした。

すでに女人藝術社の皆様方は御存じの事と思ひますがエスペランチストのフランス人で（名一寸忘れました）世界漫遊を企て（自轉車で）自國フランスを出で二年余の間、ロシア、ドイツ、アメリカ、等を經て八月に日本の地をふんだのです、そして此のエスペランチストは日本全國を巡るのださうです。彼の旅行手記には種々美文を持つて、各國の狀態が細く記されてあり、私はエス語を解する事が出來ませんので、それを讀んでは見ませんが私の友達の話では、どの各國よりもソヴエートロシアがなつかしいと記されて居るさうです。彼は六ケ年間、ロシアの農家に世話になり、その間、共に氷を割つたり又、互にロシア語とエス語とを、敎へ合つたりして、樂しい生活をしたさっです。我々と違つた、政治下にある、ロシアの人々の生活は實にうらやましき限りであつたさうでその別れは實に悲しかつたと彼は讀むものをして別れの悲しみに引き入れずに措かな

虫の好かない、彼奴が奴鳴つたものだ。

「あらつ――、Kさん、厭ね」

思はず出る太息だ。

「何だよ、變な顔をするもんじやないぞ」

「だつて、郵便局、今行つて、私歸つて來たとこよ」

「それが、どうしたんだよ　一日ばた〳〵するのが、お前の勤めじやないか」

「畜生、何だと‥‥」私は唇を噛みしめた。

「それとも、文句があるかい、いやなら、もういゝ加減止したらどうだい」

私は、默つて、例の皮屈な上目で彼を見ると、何故か何も云へなかつた。郵便局迄壹丁半あるのだ。此の雨の降る中を、急いで電報を打つて、やう〳〵歸つて來た今だ。足が自分の物の樣に、思ひ出した今又これだ。

「いゝ年をして、少しは情つて事を、知らないのかい」怒鳴り度くなる。何だい、女宛の私用の手紙を、そつと、ポストへ依頼する時の顔つたら、厭に、ニタ〳〵して、

「急いでね、特別だ‥‥」だあだ‥‥

何も知らないと、思つてるのかね、重役に言ひ付けてやらうか‥‥だがそんな事を、したからつて、自分の、得にもならぬ事‥‥そして何時の折も、止して終ふ自分だ。

ドロ〳〵の高下駄で、事務服の腰迄、はねを上げて、雨に濡れに出なけりやならない自分だ、途中、ホト〳〵考へさせられる事はだ‥‥昨日も課長が、小さい聲で、近頃よく云ふ同じ樣な事を云つて聞かすんだ。

「山口、お前、幾つになつたんだ」

大きな椅子に、ふんぞり返り、香の高い、煙草の煙から、こう、じつと、私を見る眼が堪らなく厭なんだ。

「あのう！十八‥‥」

私は精々、はにかみながら、いつも云ふんだ。

「噓つけ‥‥」と、云ひた氣な侮辱した色が歪んだ唇で直ぐ、感じられるんだつた。

「大きいぢやないか」

課長の、赤い、だるんだ視線が、執拗に私の胸の、ふくらみに、そして腰の邊りに、こびり付くんだ。

「大きいじやないか」それは、何を意味するんだよ‥‥だ。

私は精々、小首を傾けて、赤くなりながら行き止まり、考へ〳〵、一生懸命に課長をごまかすんだ。そうでもしなけりや仕方がないんだ。十九にもなつて、普通なら、給仕だなんて、出來やしない年だし、だけど、私の場

い情愛のこまやかさを書いて居るとの事です。私もしエス語を解する事が出來たならもつとくわしい報告が出來るだらうと殘念でなりません。

横濱　小菅俊

私も改ためて女人聯盟員に加入させて下さい。女人藝術を手に入れ、力强い表紙や、熱情的内容を見ると私の血はおどります。そして心はます〳〵引しまります。

希望社の反動事業網バクロ、實にユカイです、そして血みどろの奮闘記を紙上に見る時、親のスネをかぢつてゐる自分がもどかしくなります。自分のフトコロを肥やそう爲の學校の僞善的、言葉にプチブル觀念でうなづいてゐる自分達を見る時淋しくなります。どうかして自分達のプチブル觀念を淸算させなければと沁々と思ひます、その度我等の女人藝術を見ると私の胸は生き生きとし、私の腕には力が入ります、どうか良き書報と奮闘ものをたくさん誌上にのせて下さい。

大阪　山崎よし惠

今年の二月に初めて御誌を、友人から借りてみまして深く感じます。女はつよく、生きねばならぬと言ふ事を、弱い女をつよく生か

合は、どうしても、私から、依願退職だなんて出せないんだ。一ケ月、たらずの退職手當で此の、せち辛い、今時に街頭に、ほうり出されたら、それこそもうお終ひだ。で私は、疲勞と、蔑視の社の空氣の中でも、凝乎と、我慢して居るんだ。
「山口、少ない給料で、一體どれだけの、つかい道があるんだい」
課長は、灰皿で灰を叩き、はえ上つた額をなでながら、聞くんだ。私は其の度に「カアッ……」と、血が頭に昇るんだつた。不氣味に、全身がこまかく慄ふのをどうする事も出來ない。
二拾圓たらずの給料、そしてそれが、朝、七時から、六時迄の十一時間勞働の報酬なんだ。正午の休憩時間だなんて、自分だけには與へられない多忙さなんだ。封筒の切手張りだつて、皆、私の仕事なんだから、
「そりや！色々にね、お米代のたしとか、家賃のたし代とかお母さんに渡すと、喜んでくれますし、お父さんの、お酒代を少しと……」
「ハッハッ……たいした、つかい道だね」
私は課長が、薄笑ひして居るのを感じ乍ら口惜しくつて、辛抱出來なくなるのだつた。
「お前位の器量なら、何もこんな辛い仕事をせずにだね、樂にして、金のどん／＼入る方法が有る……だがね……どうだい、一つ、給仕を止めて……」
そらッ！　來た。オッとそりや承知の沙汰ですよ、ずつと以前から、幾度も考へて見た事でさあ……華美な着物を着て、朝から晝迄ゆつくり思ふ存分眠れて、夜は夜であの浮き立つ樣な、シャンデリアとジャズの中で踊るんだつて、そして、秋波とキスでチップを貰つて、行くんだつて、一寸よささうだ、それに短い若い時代なんだ、そうして、暮して見たいなあと思はないでもないんだ。
どうして、こんな汚い。嘲笑と、無乾燥な空氣の中で、無感覺になる迄、棒の樣に、生きて、行かねばならない、理由があるんだ。……と、反抗もし、煽動もされる、だが、いけない事が有るんだ。
美代ちやんは、道頓堀のキヤフエーとかに出てたんだつた。羨望と、嫉妬に、取圍まれて、だが一年も續かない間に、美代ちやんは變な姿に變つて終つた。大きな下腹を、突き出て、それに反比例して、段々と體は痩せて行つた。薄い眉は、寂しくなつて、近頃じや、骨だらけの子供を抱いて、少ない髮をたばねて、近所の人達から冷たい眼で迫害され

してやらうと言ふ事にすつかり心を引かれてしまひました。
到らぬ者で御座います、けれど皆樣と同じ道を歩るかして下さい

大分　福田　美智

夜の勉強は良い時季です只今私は郷里に歸つてをります父母の許で何の拘束も受けず本を讀む事を宥される事はブルジョア娘が綺羅を飾つた時の樣な嬉しさだらうと思ひます、私の村にも青年のグループが出來て目醒めた青年が、正しい社會の見方を持つ樣になりました、併しまだ眠つた樣な無意識な人達ばかりです、私の送つて戴く女人藝術を青年にも讀んでもらつてをります。藝術社のためもう一冊求めたいのですが、未だそれを買ふ餘力のない者ばかりです、
以前私に女人藝術をすゝめてくれた同志の一人が心から歎稱してをりました。
無智な私が女人藝術に依て如何に多くの尊い事を學び取るか書かなくても明です、
昨日近所の友達が希望社の泉の花を讀んでおりました。裏表紙に大きく
終身社友を募る、
希望社とは永久に離れない！
此の決心のある方は、私達といつ

て居るんだ。

私のお母さんが言つた。

もうかる割合に、着物だ、白粉だ。食費だ等と、色々と差引かれて、借金がかさむんだつて、お前の方が、何もいらなくて、ずつといゝんだつて、それからもう一つ、お母さんがよく言つた。おとなしく勤めるんだよ、そしたらお前の器量だもん、誰か貰つて、くれはるからなー、おとなしい人だつたらな……だあだ……どいつも、こいつも、輕薄で蟲の好かない奴ばかりさ！ ラッパズボンに、赤いネクタイ。文學青年。活動狂。でなけりやカフエーへ行くにも金のない、ニキビ面の助平の集りだ、ああ……人世何處に春の日があるか。幻滅……悲哀……だ……

ふと！ 氣が付くと傘が重い事、雨が強くなつたのだ。郵便局に飛び込んでホッと、息付く。歸りが辛いなあ……

小降りになつたのを幸に、かけ脚で、社迄息せき切つて歸つて來たんだ。だのに、云ふ事が、シャクじやないか、

「山口、道で油を取つて居ると、支配人に、云ひ付けるぞ……」

「……」憤怒と興奮で何も云へない。

「さあ―茶だ、全部に配つてくれ―外に出る前には歸りが遲くなると思ふ時には、氣をきかして、茶を出して行くものだぞ！」

茶を出す時間、二時半より少し、長い針が廻り過ぎて居るんだ。返事するのも疲れて苦しい。默つて、茶をはこぶ。

「山口、本局の、四三の五番を呼び出してくれ！」

交換室は天井の無い、ドアーで區切つた、半間程の室だ。

ごーン……と、室内信號が、暗い闇の夜の豆自動車のヘッドライト其の儘に點滅して居る。コードをさす。いきなり罵聲だ。

「オイ、まだ出ないのかい」

「話中です、しばらく、お待ち下さい」

「ぼんやりせずに、早い事するんだよ」

何と云つてやらう。唯だ目の底が痛む、こんな、キリ〳〵舞をして居るのが解らないのか……大聲で泣き度くなる。

だのに、交換室の向ふの窓の方で、タイピストの淺野さんが縁なしの眼鏡を通して、何か空間を凝と、みつめて居る。淺野さんはよく沈む人だ。絶えず何かを考へ續けて居る。事務員のBさんが、其の原因のやり玉の一つに、戀愛の惱みと持ち出した。

「淺野さん、スピード時代はね、それじや駄

までも〳〵お友達になりたい方は終身社友として次の何れかに御申込下さい

甲　貳拾圓前納　永久に毎月希望を贈呈す

乙　拾圓　前納　永久に毎月のぞみを贈呈す、

一生涯何處へ言っても安心です。

月桂樹でハートを圍んだメダルを添へ終身社友の證を送ります、日本中何處へ行つても安心です。心の友が心から迎へてくれます。

それを讀んで私は肚の中で怒號しました。いつまでも貴樣に欺かると思ふか……今までだまされた鼻柱を叩きのめしてやるぞ、もうだまされはしない、私達の復讐を待つてゐろ。

地方では毒ガスにかゝつてゐる者で十圓二十圓の前納を喜んで果すお人好しがありはしないかと思ひます、

××　忠子

始めてお便り致しますが女人藝術創刊號から愛讀してゐます、けれど手許には只一冊もありません、何故それは小間物文房具商兼書籍商の家ですし、半商半農の此の町ではキングの四十册が最高で他は

目よ、ドン〳〵進行さしちまいなさいよ！」
浅野さんは、默つて、笑つて居た。Bさんの話では、浅野さんの、戀愛の相手と云ふのが妻も子もある人なんだつて、浅野さん、頰をついていつもの姿で空間を凝視して居る。

のんきだなあ……

仕事が、閑だから、そんな事も考へられると言ふものだ、事務員のBさんは、快活で、よく饒舌る。Aさんと話す事が面白い。

「人間つてね、或る時期、つまり青春の結婚期ね、誰だつて理想は有るけど、貴方はどう……」

「そりや色々な方面でね、先づ第一は人物ね、これが第一だと思ふわ、それから、こう不景氣じや一寸、經濟方面が肝要ね、結婚して、直ぐ、首になる樣じや辛いわ、少し位の財產があつて……」

「だけど、そりや理想的ね、現實的だなんてそう、うまく行かないわ、それに、誰だつて人物だ、人格だつて、やかましく云ふのね、だけど私、眞當は、人間だなんて、要するに第一印象……つまり、風貌が支配して居るんじやないかと思ふわ……」

「少なくとも貴方の場合はそうらしいのね」

「私だけでせうか……兎に角、誰だつて、初めは、理想がとても高いものね、追々、考へが變つて、いゝ加減諦めて、妥協して、行く者なのね……」

誰も彼も甘いな……實際厭になつちまふ――

給仕上りの、社員のKが近頃目立つて、生意氣になつた。閑さへあれば、廊下で、チャールストンを踊りたがる。此の間も、無中になつて、踊つて居るのを課長に見つけられて居た。私は知つて居たのだが、默つて見て笑つてやつて居た。以來Kは、私を激しく恨むんだ。月給が上らないつて、そんな事私に何の關係が有るも　か。

土曜日、今日は、サラリー日、

若い、自稱、天下のモダーンボーイ連が列をなして、心齋橋へ急ぐ、松竹座、森永へ、デパートへ……キャフエーへ、

「山口、奢らうか、コーヒ、一ぱい」
「今日は成金なんだ……」
「奢らしてくれよ……」

手を握りに來る不良中年がある。

「チエッー」何と不作法な奴等だ。

だが、唯一人。今年東京の帝大を出たと云ふBさん。遠くから、私を凝視して居る。いつも默り勝ちな人、そして鋭い視線でみ

五册十册位しか引けません、婦人雜誌讀んでさへ女の辯に生意氣なと爪彈きされます、御誌は只一册しか來てません。リクツ許りで一寸も面白くないとの事而も村のインテリである筈の女學校卒業者の言です有志者に云はせれば赤いとか、惡思想の本とかぬかします、只一人教員の友達が買ふのみです毎月廿日に來ても表紙許り見て配達し、五六日後に借りて讀む程です、家で販賣したら、一册も手許に置けないのが殘念です、廿三と云ふのに三兒の母、一日中炊事店番洗濯とはね廻り、夜は夜で針仕事家內の就寢後が私の自由な時間です、襲ひ來る睡眠を腿をつねつて覺し乍ら本を讀むのです、自分の時間をもう少し欲しいものですが、妻君業の悲しさ如何ともなし難しです、無學な私は失業すれば自力でパンを得る事が九分通り不可能事ですけれど母なるが故に子供に誤つた教育をしてはならない正しい方向に導く爲にはどんな障害物をも突切つて、進まねばならんと思つてます、家庭婦人でも聯盟員になる事が出來ませうか、市には三時間で行けますので講演會でもあるのでしたらどんな工面でもして是非行きたいと思ひます、

つめられる時、何故か私は、わく〱おびへるんだ。だが、とう〱思ひ切つたらしい、彼からの手紙を、私は貰つて終つた。
山口君、突然失禮、君に話し度い事がある明日僕の下宿迄來てくれたまへ。
期待して居る、
別に、阪急沿線の下車驛と、道順の圖解が添附してあつた。
愈々來たな！

私は、これを、どうしようと云ふんだ、彼は、實際好きだ。戀愛と云ふ事に就いても、自分は餘りに、幸福、過ぎやしないか知ら、いぶつて居た胸の炎、彼の存在によつて華やかに燃え上らうとして居るんだ。
だが、これが。ありきたりの、誘惑とか云ふ事だつたら…私は、いつ迄も、彼の力强いペンの跡を凝視したその判斷が、私に出來るかどうか…

箱根から　素子

やうやく天氣清朗になつたので元氣づいてとても規則正しい生活をする事にしました。即ち朝起きると三十分、午後一時間以上山歩き。午前中勉强、その間に湯、今日はまづ最初に、朝はアザミと野菊ともう一種とつてきました。午後の時には旅館のぢきわきから廣い新道がひらけていて、山の方には夕陽が一杯あたつてゐるので―こゝは朝も夕方も山の故で陽あたりが極一部分なのです。湯の花澤を見ると、私の血はおどります、そして、心はます〱引しまります、

で暫く日向ぼつこしてかへりました。この手前の白い道より右手です。左に繪ハガキの見える白い道は芦ノ湖へつゞく。（九月二十日）

二信　素子

發送は忙しかつたでせう、こゝにはまだ白いはがきがあるんです便利がよくても山のてつへん、家の數が十一軒で郵便局の番地が十一番地です。霧で、雨で、雲でまるで外へ出られません、さつき野花を積みに出ましたら、山は霧で眞白。秋が早いので花はみんな新らしい。だがこの雨が上つたら山はそろ〱紅葉しはじめ相な様子をしてゐました。も一軒の宿松坂屋で昨夜も今日もランチキ騷ぎこの山奥まで騷ぎに來る人の氣が知れない。靜かでお湯がきれいでいゝ氣持。社長さんをウンと、アジつてみんなで來ればいゝのに。

（九月二十二日）

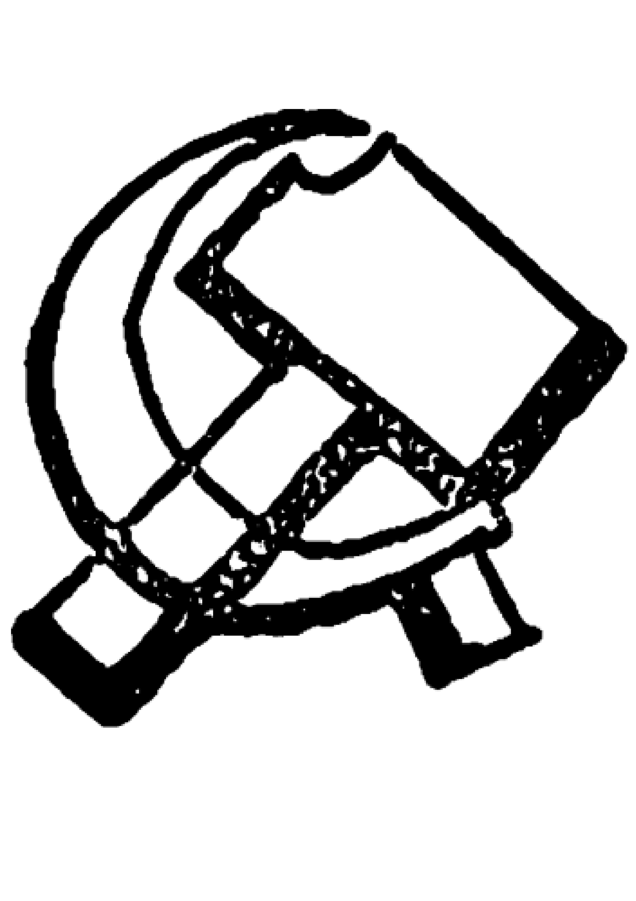
市には未だ支部も出來てない様ですが一冊では置かない積りです、何時迄も支部設立等は何時の事やらですが大いに遣る考へです。

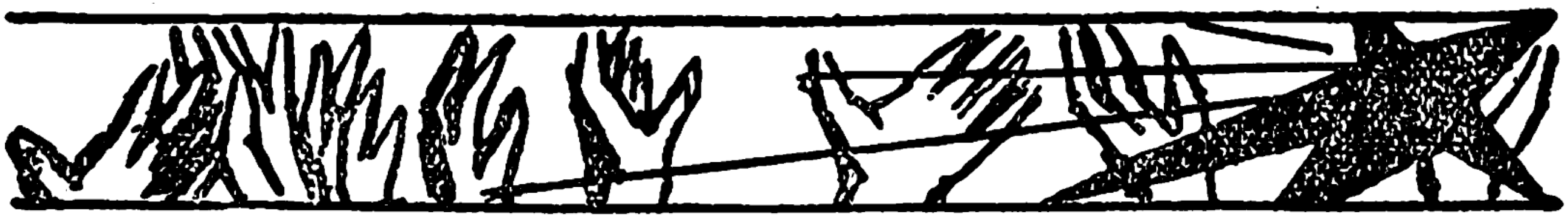
日向　上杉

發禁のことニュースで知りました。梅干と、澤庵から粗製した血液で心もとないながら解つてゆけるのが嬉しくかじりついたらはなれません、この粗製血液も女藝讀む毎に熱くたぎるのです。
日向の炭燒小屋にも女藝讀む女のある事をお知り下さい。

秋田から　生田花世

地下千二百尺の坑道の一部をこれから降つて行つて見て來ます。選鉱場溶針爐はもう見ました。この山へくるみちの二里半、トロで山から山へと快走しました、すばらしい道でした「白煙」の人々に女人藝術わけてもらいました。みな喜びました。（九月三日）





父に書く

島あやめ

父よ

あなたはまたしても病氣だと言つてよこした、それで金が入用だから至急に送れと言ふのである。若し送らないやうなことがあればそれは私が前夫と別れて明瞭と夫婦になつたせひであるとあなたは言ふ。さらにあなたはくど〳〵とこの問題が持つ仕方も無いことをばいつまでもならべたてる。

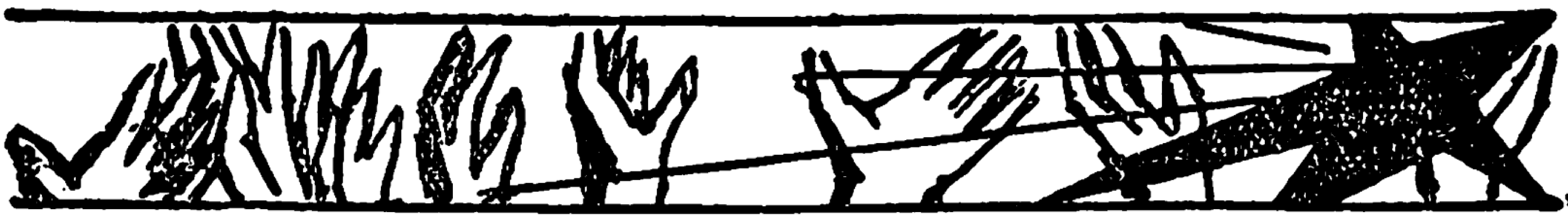
私としては振り向くのも嫌な前夫とのことをあなたに金が入用になれば必ず持ち出されねばならぬと言ふことは何と腹立たしいことであらうか。

更にまた不愉快なことはそのたびごとにあなたが頑固に自負してゐるところの私への恩義を遂は反駁し抗議する様な手紙を何遍も何遍も書かねばならぬことである、斯うして私は頭つからあなたの考へ方が正當でないことを發かねばならぬ運命を呪ふ、どんなにかどんなにかあなたはわびしからうから。でもしかたがない——。

父よ——

あなたは云ふ——お前のおつかあがオハナを産んで狂死してからと言ふものわしは中風のぢぢいに二年生になつたばかりのお前それにオハナを連れてのくらしに死ぬばかりの艱難辛苦をした、それでもわしはお前を賣る様なことをしなかつた源公が三百にならいつでも買手があるとすゝめてくれたがのう。

わしの仲間では辰公が娘を一人賣つたし吉公もたしか九ッになつたのを曲馬團に賣つた何と言つても人力を曳



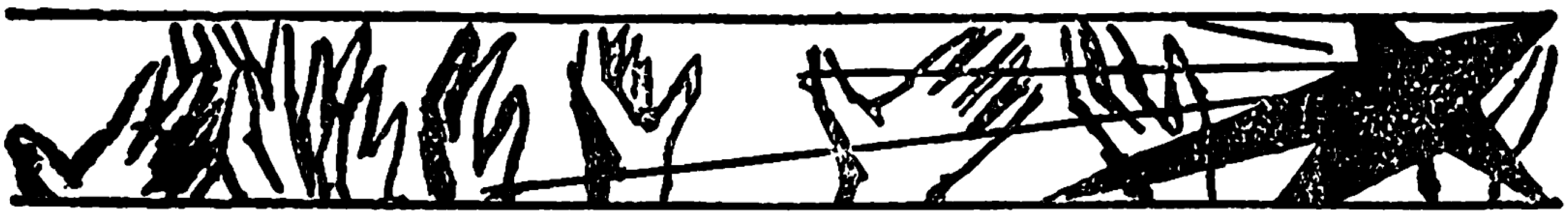
いてゐたのでは交際だふれで妻や子供迄は手の屆かないのがあたりまえぢやつたからのう。それでもわしはせめて六年生だけは上げてやらねば氣がすまんと思つてほんにほんに苦勞したぞ。

　それからでも普通の親なら工場にやるなり女郎に賣るなりするのぢやがわしは親馬鹿でそれが出來ずお前をお醫者の看護婦にしたのだつた、そしてお前が免狀をとるのを一番のこの世での樂しみにして三年の間一錢でもくれとは言はなかつた。仲間の者や二度目のお前のおつかあはどんなに言つてわしを嘲笑つたかしれなかつた、――いまにみろ頭ばかり高うなつて自分一人が大うなつた樣に言ふわ、おまけに金が取れるころにはちやんと虫がついてくれるわでつまりは親だけがゐゝ馬鹿をみることになる、それよりいまからお女郎にでもしとけばそのうちにどんな果報で良え旦那がつくか分らぬ、そした親もよし娘もよしと言ふものぢや――と言ふて。くそ、わしの娘だけは親孝行をするみなが何と言うてもわしは心のうちでさう言つてきた、それにどうぢやらうみんなが言ふた通りになつてしまつてお前は自分のしたいことばかりしてわしらのことはみむきもせん、金のことでも言つてやらうものならさかさまに說教をしてよこす、それでも前の男とゐたじぶんはどうにか送つてくれたがこんどの社會主義と一緒になつてからは一文でもくれたことはなしぢや、わしはこの樣なお前の恥を人には話せず近邊の人達には毎月五圓か十圓は送つてくれるし夫も良え人物でようしてくれると言ひふらしてをる。お前といゝがき友達ぢやつた人たちがみんな揃つてお女郎になつたり工場に出たりして親孝行をしてをるのにどうしてお前一人がなにひとつしてくれぬなど話しが出來ようか、思へば何と言ふなさけない子を持つたものぢやらうかと夜寢ては一人で泣いてばかりをる。

　わしはお前がそんなやくざな男と一時も早く別れてもとの人の所に歸つて少しづゝでも前通り送つてくれるならどんなに嬉しからうと思ふ、お前さへ改心して歸ればあの男はいつでも赦すとわしに手紙をくれてゐる、お前から頭を下げるのが嫌ならわしが仲に這入つてよく言はう。ともかくよる年波でお前一人が賴りぢやからどうぞいちじも早く迷ひから覺めて前通りになりこの年寄りに安心をさせてくれこれが一生の願ひである。

　父よ――

あなたが、私やオハナやちぢいの爲に艱難辛苦され



た昔のことを言はれると不運なことばかりで埋まつてきた自分たちがいとしくなつて泣かずにゐられない。

　私とて母親が狂死した前後のあの頃の悲しかつたこと、あなたは眞暗になつてもなか〱歸つては來なかつた。ランプの芯が幽靈のひ　たいに靑くなつたり赤くなつたりして遂に消へてしまうと乳を欲しがるオハナがどんな聲を出して泣いたことだつたらうか、ぢぢいはまたとなくオハナが嫌ひで泣きだすと無茶苦茶にぶつたゝくのだつた。私は本當に本當に暗闇の中でオハナをあやしながら悲しかつた。

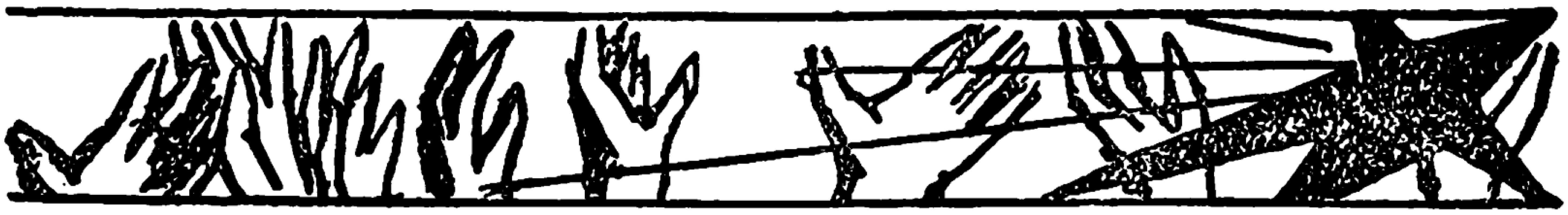
　十二時一時——ぢぢいと私とオハナは眞暗闇の中であなたの歸りを待ちあぐんだ、だがあなたは歸らないことが往々だつた、よし歸つて來てくれても散々酔つぱらつてゐるあなたは人力車を小屋に藏ふことも出來ずはいてゐるわらぢを脱ぐことも出來ず私はあなたのわらぢを脱がせて上げたり人力車を小屋に藏つたりしなければならなかつた、こんな夜は勿論晩飯は喰つてゐないのだつた私たちはあなたが歸つて來なければ一文の金だつて一粒の米だつて無かつたのだもの。

　もつと悲しかつたことは母親のことをおもふときであつた。夜中に夢からさめたときや、オハナが夜通し泣き續ける夜や、あなたが歸つてくれない夜はあゝおつかあさへゐてくれるならとどんなにどんなに思つたことか。

　私はことに母親に可愛がられてゐる場面のゆめからさめたとき悲しかつた、私は何遍かそおつと眞夜中におき出て小半里もある母の實家に素足の儘で走つて行つた．いまにして思つてみればどう　てあんな時刻に廣い野つ原や森の中やらを通つてゆけたゞらうかと當時の自分をだきしめて泣きたい程だ。それに母の母と言ふのが後入で母親と仲が惡くそんなにまでして會ひにきてゐる私に門前でガミ〱とどなりつけて夜中に人のうちに來る奴は泥棒だと言つて怒るのだつた。それでも提灯に火をつけて藏の中に寢てゐる母のところに私を引つぱつていつてくれた。

「おかよが來たぞ」

　その人が入口でこう言ふと母親はきつとなつて跳ねおきた、おかよ——氣の狂つた母なのに妙に私のことだけはおぼえてゐて鸚鵡がへしにおかよが來たおかよが來たと言つてよろこぶのだつた、私はさう言ひ續ける母にしつかりと抱かれて泣けて泣けて仕方がなかつた。そんなとき私は母親をどうしても發狂してゐる女だとは思へなかつた、あるひはもう治つてしまつたのだと思つたりし



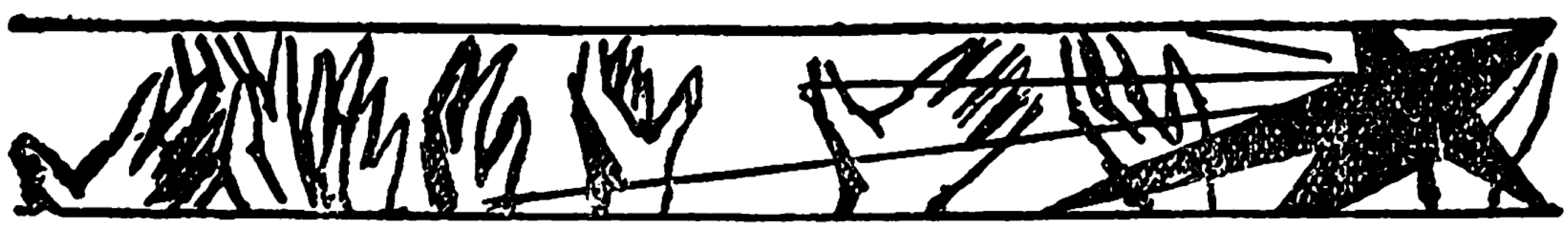
た、私が泣くと母親はもうどこにも行かないぞなお前と死んでも一緒にをるぞな　言つて共に泣いてしまつたりすることもあつた、而し斯うした場合とて完全に氣狂ひの狀態であつたのだらう、次第に衰弱が加はつてその年のくれに遂に死んでしまつた。

そしてあの葬式の日も悲しかつた、あなたはどうしてか自分の妻の葬ひなのに列席しないで私だけが行つた、いとこたちは綺麗な紋付を着て白い足袋を穿いて村の人々が一ぱいよつてくるのを喜んでゐた。母が作つてくれてあつた木綿縞の袷を着て足袋も穿かないで佛前に坐つてゐて私はなぜいとこたちだけあんなに綺麗にして貰へるのだらう私のおつかあが死んだのだから一番私がきれいにしてよい筈なのにと思つて涙が出てしようがなかつた、そして私はあなたを憎く思つた、あなたがあんまり酒ばかり呑んで私に紋付も足袋もつくつてくれないのだ、いとこの父親は働きがよいからあんなに幸にして貰へるのだにとおもつて。

それからもつとあなたを憎く思つたのは、あなたがおつかあを氣狂にさせたと言ふことであつた、みなは佛前にきてはあなたの惡口を言つた、全くおつかあを殺したのはあなたであると言つた、オアキさんも何の因果であんな呑んだくれの所に氣が狂ふ迄も辛棒してゐたのだらう可哀相にと誰も彼も言つた。

確かにおつかあを氣狂にさせたのはあなたの酒亂であつた——いまも私はさう信じてゐる、そしてやはり私はあなたを憎く思ふときがある。殊にあなたに苦勞した苦勞したの恩義をきせられるときは、一體おつかあを殺したのは誰だつたか私はおつかあの變りをあんなにさせられたのではなかつたか、一體どれだけ親らしいことをしたことがあるか着物一枚だつて作つてくれたことはないではないか、私が着てゐた着物はいつもそこらの子供のおさがりばかりだつたではないか、私に一文の小使錢だつたくれたことがあるか、私にやさしい言葉をかけてくれたことが一度だつてあつたか、皆無ではないか——さう言つて喰つてかゝりたくなる。

またあなたはお醫者の看護婦にしたことを無上に幸にした積りらしいが私は女工やお女郎にいつた方がどんなによかつたか分らないとお醫者のうちにゐるときいつも思つてゐた、犬や猫よりも惡い食物を與へられて無給料で掃除から子守から醫者の方の手傳ひから本當に朝の時から晩は十二時まで立ちづめに働かされて誰からも誰からもガミ〳〵どなられてばかりゐてどんなに悲しか



つたか分らなかつた。とにかく私は少女のころを振返つてみて何一つとしてなつかしい思出なんかありはしない、また親からして貰つた嬉しかつたことなんてひとつだつてない。

だから私はいつも生れてきたことを呪はしくこそ思へ一遍だつて生れてきてよかつたなんて思つたことはない。

それからあなたは直面の問題として明瞭と夫婦になつてゐることを非常に嫌ふ、いちじも早く別れて前夫のところに歸り少しづゝでも金を送つて安神させろと言ふ、無理もないことだとも思ふが何と言ふ得手勝手な下劣な心情を持つた親だらうかとしみ〴〵思つてなさけない。

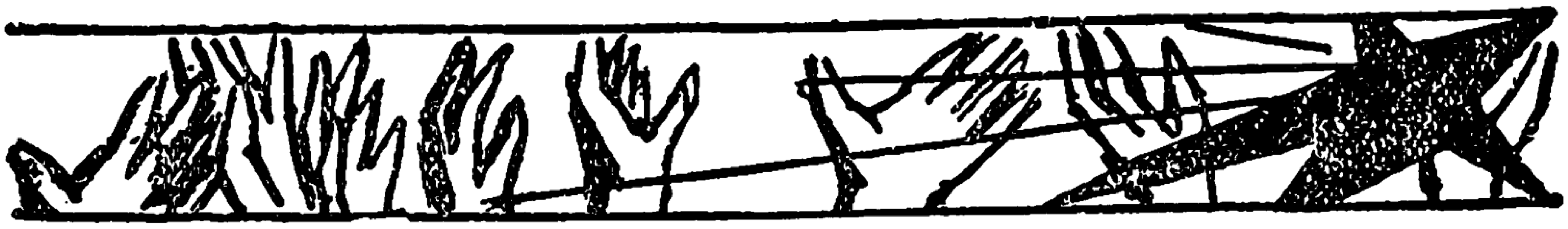
あなたはあの男の所にをれば和かで何もかもがよい様にばかりゆく様に思つてゐるらしいが決してさうではない、あなたへの送金の手紙はいつもあの男が書いてゐたからよほどあの男に好意を持つてゐられる様だが、あの男はあなたに微塵の好意も持つてはゐなかつた、糞馬鹿が、厄介者が、甲斐性無が、のんだくれが、あの男はあなたをいつも斯ふよんでゐた、二三度くらゐは貰つたがあなたに送る金はいつも私が工面した金であつた、たゞ私があの男をあなたによく思はせる様にさせてゐたまでのことだつた。いまになればあの男のことを惡くは言はれないが一緒にゐればゐるであなたはいつもあの男のことを不滿足らしく言つてばかりゐて聞きづらいので私は一寸でもあの男をあなたによく思はせやうと實に苦心したものである。とにかくあの男とゐたからとて私が働いてをらない限りあなたへの送金などゆめにも不可能なことなのだ。

勿論明瞭とゐたのでは尙更出來難いことだがそれは明瞭の惡意からではないのだから致方がない。

誰が好んで親不孝をしやうぞ――あなたの慘々な手紙を見るとき明瞭はいつもさう言つてさびしがる。

而し私はあなたに送金しなければならぬ責任はいつでも忘れてはをらない、だから私は毎日〴〵仕事を探して廻つてゐる。そしてあなたに言はれるまでもなく辛棒が出來る限りは辛棒したく思つてゐる、たゞ私は近頃になつて、單にあなたに送金し家賃を滯りなく拂ひ飯をくふ爲にのみデクの様にはたらくことは嫌になつてしまつたのだ、私は是非しなければならぬ仕事を持つたから。

殊に明瞭に自分たちのことだけにのら犬の様に仕事にぶらさがつてゐて貰ふことは斷然いやである。とにかくあなたの子がもろ〴〵の生活苦の中で世の中のからくり



に氣付いたときどうせ、私がどんなに頑張つてみたところであの男のところにゐても明瞭とゐてもあなたにも絶對の安心などさすことはあり得ないことだ、なまじかな送金などは血の出る樣な私の努力が拂はれてゐるに關はらず却つてあなたを不滿足の底にいら〳〵さすだけで結局私のあなたにしてきた、いまゝでの事事は馬鹿化きつた親孝行でしかなかつた――こんなふうに考へる樣になつたことをあなたは當然だと思はないであらうか。而して明瞭と夫婦になつたことや明瞭の仕事を助けていくために及ぼすあなたへのふとゞきなどゆるしてくれる氣になれないであらうか。

　私は悲しかつた苦しかつた思出と現實にばかり生きてきたからか卒直に明瞭の仕事を助ける氣になつてしまつた。うんと明瞭がよい仕事をして下されるなら私はられしいであらうとさへ思つてゐる。もし私をも×されねばならぬとしたら、あゝそれでも私はよい、どうせあつては私の生活は殺されることゝ大差ないし希望も無いのだからうんとうんとよりよく鬪ひ拔いて×されるならそれは雄大な私の純眞だ。

　あなたが無常になげくではあらうがあなたにとつてもこんな――呪ふ必要があるではないか。

父よ――

　私は隨分長い手紙をあなたに書いてしまつた、病氣だと言ふあなたへ逐々恨みがましいことも書いてしまつたが、私にとつてあなたは世の中の誰よりもなつかしい心安い人であるものいつまでもいつまでもからだを丈夫でゐて欲しいと思ふ。

　そして致方もないことはぐん〳〵あきらめてしまつてほしい。心の持ち樣で案外どんなことをも解決が出來るものであるから。

　金もそのうちに出來れば少でも送ることにしやう。ではさようなら。完

新刊紹介

綜合ヂャーナリズム講座

今まで現はれるべくして現はれなかつたこの講座をヂャーナリストへの教科書として推薦する。内外社發行

ゲニアイズムのルンペン化と產兒制限

山本有子

明治末葉自然主義運動の勃興期にあたり民族主義の幻滅とか國家至上主義の破綻とか種々の言葉によつて表現されるべき理想主義の破滅があつた。

一方に於ける勞働運動社會運動の擡頭をハイタイプブルジョアヂーは、極端に遊戲化しカリカチユアにまで引き歪めた。

かゝる時代に輸入されたサンガー夫人の產兒制限が、一般有閑婦人の間に獨占化されたに何の不思議もない。

產兒制限は一般無產大衆を對象としてのみ有意義であることは言を待たない。

（勿論有閑不良兒達の根絕てうユーゼニックな理論に適ふかも知れないが）

性的敎練に於いて無產婦人よりはるかに卓越せるブルジョア婦人がアメリカくんだりからサンガー婦人を招待して實地講習をうけたことが、いかなる社會的反響をもたらしたか。かゝるプチブル婦人の遊戲的講習が偶々一般無產大衆の緊要なる問題產兒制限と錯合混沌として社會的貢獻にまで引き歪められた。

理想主義の破綻についで日本に於ける既成の文化がにわかにその權威を失ひ中產インテリゲンチヤ階級の急速なる崩壞の過程に於いて大いなる懷疑は何人をも享樂主義性的放縱にまでひき入れた。かゝる時代に出現したコロンタイズムは階級的鬪志を缺き反階級的反鬪爭的方面のみ强論とせられ、「三代の戀」に於いて表現されたゲニアの性生活はプチブル不良青年男女及びルンペンインテリゲンチヤに於いて完全にはきちがえられた。

マルクスによつて規定された「ルンペンプロレタリアは一都市に於いて工業プロレタリアと全然異なつた階級を形造つてゐる。そしてそれ等のルンプンプロレタリア

なるものは各種の泥棒や犯罪人を補充する源泉となつてゐる。

「これ等の輩は社會のくづで生活しその國の組織によつて種々形態を異にするが「無宿者」たるところのなまけもの、犯罪者、淫賣婦、不具等である。」(フランスに於ける階級鬪爭より)マルクスの所謂無自覺な救ひ難き社會的貧民ルンプンプロレタリアの定義は完全にルンペンインテリゲンチャにもあてはまる。

マキシム、ゴーリキーのルンペン的墮落とルンペンインテリゲンチャによつて引き歪められた、ゲニアイズム――性的放縦へのプロセス――は愚劣なモダニチーとエロチシズムによつてゲニアイズムのルンペン化を强論されてゐる。

コロンタイがゲニアに於いて表現した所の女性生活――階級的社會的勞働に從事する多忙な若き黨員ゲニアは時間の浪費と感情の浪費との省略のために彼女一流の感情は高潮時に於る性的衝動の滿足は浮藻な性的享樂にあらずして最も神聖化されたブルジョア既成道德への反逆的實踐であつた。

ゲニアの性的生活の全部が、コロンタイの意企ではない。

レーニンは黨員達の性的放縦をたしなめてゐる。

性はかつえた者が水をのむ樣に易く得られると誤解されたセックスへの見界を極端に批難してゐる。

共産戀愛の錯覺的認識と産兒制限思想の亂用は有閑階級の間に小ブルインテリ階級間に尖端モダーニズムであるかの如き錯覺を起さしめた。

現在ソヴエットロシアに於いても黨員間に於ける性問題は愼重に考慮され、コムソルンでの重要なる論究對象になつてゐる。

日本に於いてブルジョア的頽廢の中に誤認され、引ゆがんだ實踐にうつされてゐる性道德と、産兒制限問題はレーニンの所謂、プロレタリア一夫一婦性にまで確立さるべきであらう。日本に於ける智識代表階級に於ける性的頽廢、離婚の高速度的發展は自己の道德的「?」大義に於いて殆んど何等の興味をもつてゐないらしい。エセマルキスト、モダニチーを追及して止まざるルンペンインテリゲンチャの誤まれるゲニアイズム産兒制限の實踐に他ならぬ。

かゝる時代に於いて吾々は正しきマルクスによる戀愛主張――プロレタリア的一夫一婦制――への認識と有意義なる無産階級的産兒制限を要望して筆を置き度い。

了

評　神秘の殿堂から、引き下された所謂性の問題を、今更再び偶像化する事は必要ではない。コロンタイがゲニヤに表現した行爲は、女性を性の抑壓から解放し、しかも本能の滿足を强調した樣に思はれる。本能の滿足は誰でも欲しい、が之に何等の階級鬪爭(黨員と:ての事務的仕事だけなる多忙な人は他階級にもある)に對する何物をも附加しなかつたのは、所謂ゲニャイズムの誤まつた方向への發展しコロンタイの意志に反して――があつたのではないでせうか。レーニンの戀愛觀は、決して將來を規定してはないらしい。また私もその必要はないと思ふ。一夫一婦制は、その發生時に於て私有財産制への移行のうちにあつたときゝます。その習慣性を克服する事なくして、それを欲する事ではなく、當面の問題はこの誤認された、ゲニャ主義的戀愛觀を階級鬪爭の陣營から、いかに放逐するかにある。最後の、ゴリキーのルンペン的墮落とは何んでせう。これはゲニャイズムと何か關聯がありませうか。以上校正のす感妄言をお詫びします。

現代ジャーナリズム批判・イロハ

木田力

此の論文は、八月中旬「女藝」大阪支部の夏季講座の最終日に於ける藤田進一郎氏の講演「最近ジャーナリズムの傾向」に向けられた一片の批判である。(氏はジャーナリズムを此處では狹い意味に用ひて居る)

藤田氏の解釋に依れば斯うだ。

「ジャーナリズムは、社會集團が擴大すれば、從つてその集團的低下に依つて、獸的な、低級なる意識がジャーナリズムを支配するに至る。併し、一方ジャーナリズム本來の機能は、無産大衆の立場に立つて、社會問題を批判する事にある。だから、此の點に、最近ジャーナリズムの矛盾が存在する」と。

而して氏は、此の低下した意識こそ、センセイショナルな、或は、エロチックな記事を造り出す所のものであると說明して居る。

だが、私は氏の命題に對し、批判を下すに當つては、氏が論ずる「社會集團」「本來の機能」に就ての正當なる認識を把握せねばならぬ。

私の考へる所に據れば、氏の論は、次の二つの認識不足から成り立つた謬論である事を發見する。即ち、

一、讀者大衆に關する認識不足

二、支配階級存在に關する認識不足

の二つであるが、論が進められるに從つて此の認識不足が暴露されるであらう。

ブルヂョア・ジャーナリズムの機能

惟ふに、資本主義社會に於けるジャーナリズムの機能は凡そ次の二つに分類し得る。

一、利潤の獲得

二、資本家階級の擁護

前者は、ジャーナリズムが一個の企業である以上、當然考へらるべき機能であり、後者は、ジャーナリズムの特質より生れる當然の機能である。一は直接經濟的なそれであり、他は社會的なそれである。

A 利潤の獲得

一般的に、より多額の利潤を獲得するには市場の擴張、生産費の低下、販賣價格の釣上等が、その採らるべき手段である。而して、新聞企業經營に於ては、主として市場の擴張、消極的にはその維持が問題視されるのである。市場の擴張は、取りも直さず、讀者大衆の擴大、增加である。だから、利潤の獲得と言ふ機能の問題に就て

は、讀者大衆の研究より始められねばならぬ。藤田氏は「社會集團」と言ふ言葉に依つて、如何なる階級を、また如何なる階級意識を意味せんとするものであるか、漠然として居るが、歸する處は讀者大衆の意味であらう。(氏の說く所よりしては、「社會集團」を支配階級自身とも看る事は出來ないから、卽ち「社會集團」の大部分を構成するものは無產大衆であると論じて居るからである)。

現在に於ては、新聞は、ブルジョア階級、プロレタリア階級、農民、其他中間階級たるサラリーマン、小市民、あらゆる階級を通じて、その販路を有して居る。併し、次の事は言ひ得る。卽ち、讀者密度は農村に於てよりも、都市に於て、其の人口密度以上に、より大であると。更に、ブルジョア、及びプチブルジョア、乃至プチブルジョア・イデオロギーを持つ無產大衆との集團に於て、より大である、と。

そこで、現在に於ては、讀者大衆のイデオロギーはプチブルジョア的なそれが、主流を成すのであると見る事が出來る。而してそれは、「現在に於て」である。藤田氏の如く、集團の意味を、獨逸のジムメル流に、只單に低下するのみのものであると把握するのではなく、私は、讀者大衆を、またそのイデオロギーをも、常に發展しつつあるものとして把握する。氏の如き、斯かる靜的なる認識を以てしては、凡ゆる社會現象に對して、到底明確なる解釋を下す事は不可能である。此の點に於て、藤田氏は認識の不足に陷つて居るのだ！（同時に氏は、ジャーナリズムの機能を、無產大衆の立場に立つて、社會問題を批判すると言ふが如き靜的な、普偏的なものと考へ方をして居るのだが）

だから、現在のエロチシズム、ナンセンス等に就ても、適確なる說明を爲し得ないのだ。氏に據れば、エロチシズムは、前述した如く、集團的低下が齎らした低級なる意識であるのだが、然らば、近代的に讀者大衆が擴大した過去に於て、既にそれは何故起らなかつたか。此の一事をも說明し得ないではないか。

讀者大衆のイデオロギー——正しく言ひ換へるならば、その主流となるべきイデオロギーは常に發展する。だが、一體それは如何なる發展過程にあるのか？　一般に社會意識は、社會的生產力に基く生產關係、その生產關係の總和たる、經濟的機構に依つて規定される。

私は、何らの明晰なる頭腦無くしても、現在の社會に、生產力と矛盾した經濟的機構を見る事が出來る。

生產力は有り餘つて居る。働き度くとも、仕事は與へられない。繰短、生產制限はあらゆる產業界の慢性的狀態である。商品は店頭に徒らに、陳列されて居る。だが消費大衆は充分に消費して居るのではなく、購買力の減退の爲に、必需品すら、購ふ事出來ずに、その日を喘いで居るのだ。農村の貧窮化、小賣商人の窮困化、失業軍の擴張、等、等、斯うした經濟現象、此れは言ふまでもなく、生產力と經濟的機構との矛盾を表明するに充分なものだ。

斯くの如き經濟的不安は、當然思想的動搖を原因する。卽ち、エロチシズム、ナンセンス、センセイショナルな記事は、その動搖したプチブル・イデオロギーがかもしたものであるのだ。動搖したプチブル・イデオロギーの陷る所は、強い刺戟であり、情事關係であり、エロチシズム、ナンセンス、センセイショナルな記事の欲求であり、眞面目に考へる事に飽いたプチブ

ルジョアの悦樂的なヘドイズムなのだ。即ち、斯うした廢頽的な意識は集團的低下が齎らした存在ではなく、ブルジョア社會の行詰りに氣付いた、プチブルジョア・イデオロギーをジャーナリズムが反映したに過ぎないのだ。だから、それはジャーナリズム自身が齎らしたものではなく、亦それ自身の墮落でもない。（ジャーナリズム自身の墮落に就ては後段に述べるであらう）。

斯く、論ずる事に依つて、始めて、廢頽的意識を正當に解釋し得るのだ。

然らば、斯かる廢頽的イデオロギーは一體何處へ發展して行くか？

翻つて、出版界を見る時、私はエロチシズム、ナンセンス等等の流に對抗するプロレタリア藝術の盛なる流れを見逃す事は出來ない。中間階級はそれ自身、本格的なる存在ではなく、ブルジョア、プロレタリアートの二大陣營の一に參加すべき運命を持つ階級である。經濟的不安の深刻化は、當然、鬪爭的プロレタリアート、農民は勿論、ジャーナリズムの「ブルジョア階級の擁護」と言ふ機能の遂行等々に依つて、「プロレタリア・イデオロギー化への發展」を阻まれて來た無産大衆を、奮起せしめ、更にプチブルジョア、ルンペンプロレタリアートを驅つて、勢ひ、プロレタリア陣營への參加を餘儀無くさせる。だから、讀者大衆の主流を成す、プチブルジョア・イデオロギーは、從つて、當然、尖銳化し、プロレタリア・イデオロギーへとその歩武を進めるに至る。

斯くの如く、ブルジョア、ジャーナリズムが、自己の階級たる支配階級、即ちブルジョアのイデオロギーと背離した讀者大衆の「プロレタリア・イデオロギーへの發展」に遭遇する時、其處に、始めて矛盾を見出すに至るのである。

そこで、次の支配階級擁護の職能が問題と成るのである。

B　資本家階級の擁護

現代資本主義社會に於ける文化は、凡て支配階級たるブルジョアの爲の文化であり、ブルジョア階級擁護として居る。

ジャーナリズムも、言ふまでもなく、資本家階級擁護の爲に、その主な役割を果して居る。

此のジャーナリズムの資本家階級擁護の仕方には、作爲的な、能働的なものと、受働的な仕方との二つがある。前者は、ジャーナリズム自身が、作爲的に讀者大衆のブルジョア・イデオロギーよりの背離を防ぎ、或は積極的に、讀者大衆にブルジョア・イデオロギーを詰め込む事である。ストライキ、小作爭議等に關する作爲的な誤報、不揭載等はその現れであり、一度發表するや、斷然連載中止はやらぬ意氣と勇氣（？）とを持ち合せて居ると言はれる「東京朝日」が、ブルジョアの白眼を恐れて、「眞理の春」の連載中止を斷行した事等は臆面も無く現はしたブルジョア・ジャーナリズムの勇氣（？）であり、醜體であり、ブルジョア擁護の職能を忠實（！）に果したジャーナリズムの善行（？）であるのだ。

或る論者は、ブルジョア・ジャーナリズムと雖ども、ストライキの眞相も、小作爭議のそれをも、更にその公正なる批判をも、迅速且正確に報道すると、横口を入れるかも知れぬ。然り。「迅速、且正確に」は現代ジャーナリズムの技術的スローガンであり、不偏不黨、嚴正中立、即ち公正なる立場は、その主義的スローガンである。だが、此の公正たるや、プチブルジョア・イデオロギーを一歩も出でない人道主義者流のそ

れであり、被支配階級、被搾取階級と利害關係相矛盾した公正なる（！）立場であるのだ。

だから、一旦ブルジョアの不利になるであらう。其の埒まで來る時、きまつて直ぐに廻れ右をする、即ち、「公正なる立場」、それは、その場限りの社會政策的立場以外の何ものでもない。此の曖昧な社會政策的立場――無產大衆の立場に立つのではなく、ブルジョア階級の立場に立つて、無產大衆に一片の同情を、ほんの「おあまり」を、人道主義者らしく、垂れ樣と言ふ――斯んな曖昧な公正さにか、然らずば、人が立ち止れば屹度自分も立ち止り、「何か素晴らしい事はないかなア」と考へながら、ぶらついて居る所のプチブルジョアの通行人根性を目宛にする、客引き根性に、そのモメントを求める事が出來るのである。

それは、一見尤もらしい記事か、或は興味百パーセントの、刺戟を與へる一片の記事に過ぎない。只、それだけだ。此の點、好色な文士の戀愛葛藤、或は第二の鬼熊事件の方がより重要であり、より有意義な、ニュースであるのだ。

更に市場擴張の爲にする××××××の場合に於て、ジャーナリズムが如何なる役割を演じて來つたかを見よ。此處にもブルジョア擁護の職能の存在をマザマザと見せつけられるではないか。

次に受動的な擁護とは、法律、政治に依つて、――される擁護を意味する。思想問題の記事掲載差止をその主なるものとして擧げる事が出來る。また――勿論この擁護に屬するものである。併し、此等の受動的な擁護と雖ども、ブルジョア階級が自己の爲に作つた組織、制度に依つて、爲し遂げられるものである以上、前者のそれと、何ら本質的な差異を有するものではない。

斯くブルジョアが要求する職能をも、藤田氏は「讀者大衆」の要求として認識すると言ふのか？　更に是が、「無產大衆の立場に立つて社會問題を批判する」事なのであるのか。

尚吾人は、エロチシズム、ナンセンスは、ジャーナリズム自身の罪ではなく、ジャーナリズム自身の墮落は他にあると説明したが、此のジャーナリズム自身の墮落に就て、次に若干の附言をしやう。

前述した如く、ブルジョア・ジャーナリズムは、ブルジョア擁護をその機能とするが、此の擁護と言ふ機能を逆用する所に、ブルジョア・ジャーナリズム自身の墮落は存在するのである。大阪某一流の新聞社が、廣告部員に、編輯部員を隨行させたと言ふ事が皮肉にもある業界新聞に依つて報ぜられた。これは言ふまでもなく體の良い×××！　それが紳士を以て任ずる一流新聞のやり方なのだ。そしてこれは文字通り九牛の一毛に過ぎない。他は推して知るべした。これは「墮落」以外の言葉に依つて説明される何物でもない。更に、ジャーナリスト――正確にはジャーナリズムの被使用人――は如何だ。かゝる墮落への沒落を辿るブルジョア・ジャーナリズム、讀者大衆のプロレタリア・イデオロギー化への發展と矛盾した職能を持つブルジョア・ジャーナリズム、の現實性に依つて決定される。だから、彼等は、尖鋭化したイデオロギーの所有者にあらざれば、エロチックなヘドイストか、ナンセンスなジャーナリストだ。

以上論じ來つた如く、讀者大衆のイデオロギーのプロレタリア化と、ブルジョア擁

護と言ふ機能を有する點との間に、現代ジャーナリズムの矛盾は存在するのだ。

即ち藤田氏が論じたる如く、「『集團的低下』に依つて普遍的にエロチシズム、ナンセンス等々に陥る」のではなく、讀者大衆のイデオロギーは經濟的機構に依つて、或は、イデオロギーと經濟的機構との相關關係に依つて、規定され、發展し、ジャーナリズムは、その時代的——發展的傾向を反映するに過ぎぬ。更に「無産大衆の立場に依つて、社會問題を批判すると言ふが如き、ジャーナリズム本來の機能」が、普遍的に存在するのではなく、むしろ、反對に、ブルジョア・ジャーナリズムは、ブルジョア擁護をその機能として居るのだ。それは、曖昧な公正さであり、カムフラージュに過ぎぬ。

私は、此論文に依つて、現代ブルジョア・ジャーナリズムの批判を終つたとは考へない。これは、批判のほんのイロハである。が、私は、斯んなイロハ的批判に依つても、倒されるであらう、所謂名高い新聞マンの「調査」(!)の結果の貧弱さにあきれる者である。たゞ、それ丈だ。

斯樣な「調査」がものした論は、それ自身、經濟的不安からかもされ、思想的不安に依つてでつちあげられた、プチブル的ナンセンス論である事を附言する。

追記、此の小論を書いた後、毎日年鑑のジャーナリズムの項に「ジャーナリズムは近代社會の怪物だ」と怪物扱ひにしてある。ブルジョア・ジャーナリズムは、確かに容易にはげないと彼等自身安心して居る、假面を被つた怪物(!)ではある。

「電報とダイヤ」の短評

小川済子

九月號の創作欄からとりあげてもの云つてみたい作品一つ、それは—電報とダイヤ—(藍川陽氏作)である。

その特異な構成感において、—電報とダイヤ—は讀む者に新鮮な飲料を與へる。だがその味ひはどうであつたか?

白い手に指環をかゞやかしてゐる讀者は、このカクテルの味に眉をそむけるであらう。

進歩的なインテリ婦人は彼女の咽喉の渇きにながれ込んだソーダ水があまりにレモン蜜が少なすぎていきいろいタンサンの苦味をしばらくは強く殘すであらう。

さて、めざめた無産勞働婦人の讀者は一ぱいの冷い珈琲の如くこれを呑みほす——はじめ、そのストローから吸上るつめたい液味に滿腔の凉味を感じるが次の瞬間にはもうストローが空つぽになつたことに氣づ

く、なんの足しにもならぬ皮下注射にやゝ馬鹿らしさを感じてやつぱり一ぱい二錢の冷飴をたくさん飲んだ方がよかつたかなとのおもひは成功にも拘らずしないだらうか！

『電報とダイヤ』此の作品はその主題を、電報とダイヤとを、實にはつきりと書き切つてゐる。その意味では此の作品は一先づ成功と稱はねばならぬ。だがその作者の『意圖』から獨立したところでこの作品の價値を落さしめてゐる。價値に社會的價値、政治的價値、藝術的價値ありとせよ、この作品は實にその何れの要素にも足をふみかけてゐる。そして作者の創作技功はその作品の各場面を連繫することに効果的な簡潔な筆致で統一づけてゐる。それにもかゝはらず、その作品から受けるところの感銘は甚だしく分裂せしめられてゐる。それは何故であるか。

姙娠といふ事實を前にした夫婦『プロレタリアートの社會、この未來は歷史的必然だと云ふ。夫婦はこんな理論は知らない』が『工場内での×××た勞働者達の組合——この仲間に加入して運動してゐる』夫婦である。裏長屋の夫婦の家へ、——、——見本の如き同志を抱へて夫が歸る。そこへ『Yが來た、Yは運動をやりながら小說を書いてゐる。』資本の攻勢に關する一般的なおしやべりがちよつぴり。そして『產制』に關する彼らの意見、『俺達の敵』が、きやつらが快樂のためにコツソリやつてゐた避姙を、俺達の間にも『やらせやうとしてゐるのは確かだ』とYらしい男に云はせてゐるが、キンシユク內閣の閣僚アダチは、これをはつきりと否定してゐる。彼らは母體保護の名の下ではそれを人道主義的な面つきで澁々認めても貧困のためにする避姙は決して認めやしない。

それはしかし、『子供がふえれば勞働者の生活は益々苦しくなる、賃金値上げ等の要求が激しくなる。こいつを恐れてやがるんだ』——それだけではない。實質的失業者數が百五十萬人を超えてゐても、三十五萬人（社會局統計）といつて涼しい顔で濟してゐる彼等だ。彼等が賃金値上げ要求——勞働組合による（但し、尚多く右翼、中間のダラ幹の指導下にではあるが）鬪爭にさへ、——————————だ。『子供がふえれば益々苦しくなる生活』ぐらゐを恐れるものか、そうした自然發生的な欲求に應ずべくカレラはあまりにも嚴たる一定の目的の上に權力を振つてゐる。子供が勞力を賣る以外に生きる道をもたない無產者、或は少年勞働者の增大はむしろ大いに彼等は歡迎する。それら產業豫備軍の增大は一般賃銀の比例的低下を招來するから。失業者は出來るだけケツコウな家族制度によつて食ひつなげ、それが日本固有の美風だと彼等は云ひたいのだ。而して、其の上に資本制度の永續的強化と安定策が彼等によつて幻想せられ徹られつゝあるのだ。

で夫婦は『おい、これを呑んでみろ』と夫は何處から持つて來たか、突然に白い散藥の包みを秋の前に投げ出した。しかし秋は遂にその白い藥を泣きながら工場の便所に捨てる。そして八ケ月の腹をかゝへて彼女は故里へ父の許へ身二ッになるために歸る。

事件は、こゝから主題を展開する。鐵道のために馬車屋を失業した彼女の父、曲りかけた背で沖で働いてゐる甚吾。親父の甚吾は初孫を手放さずに自分で育てたいと思つてゐる。秋にとつては百パーセント都合のいゝ誠に結構すぎる父だ。或る日秋はC市

の夫から一通の電報を受取る。――金五〇送れ――夫の居る工場は爭議中だ。(これが一切を說明してゐることになるやうだ)

彼女の 妹 お富がK市から歸つてきた。お富は姉のみすぼらしい姿を輕蔑し、そして多額納稅者だといふ主人達の豪奢な生活振りを我が事のやうに自慢氣に話すやうな女だ。その指に、奧樣から金庫に入れるまで假りに藏つておいてくれと云はれたのを宿下りの日にそつとはめてきたダイヤの指環が光つてゐた。それをお富は貰つたと云つて父や彼女の前でひけらかす。夫から來てゐる電報のために秋は遂に一日借してもらつた指環をもつて夫の下へ走る。お富は自ら欺いた言葉と行爲とのために轢死してしまふ。

急ピッチの作者の筆はどし〳〵とその主題へのためにテンポを早める。妊娠とその鬪士的解決もあいまいのまゝに、又五〇圓の金の必要な工場の爭議――それがどんな工場でどんな爭議だかも說明するヒマもない程に――

たゞ一切は『電報とダイヤ』のために合流させられてゐる。だから我々が此の作品から與へられるものとしては「身二つになるために故里の父の家へ歸つた鬪士の妻へ、夫から金オクレの電報が來る。そこへ彼女の妹かその主家の奧樣の指環を我物顏にコッソリはめて歸る。臨月の妻がその指環をもつて夫の下へ走る。」といふストウリーそれのみである。そこに一見して好個のプロレタリヤ文學と感ぜしめつゝもこの作品が含有する多分なるブルジョア的末期的手法の殘存のある事が氣づかれねばならぬ。われ〳〵は最早當來のプロレタリヤ文藝のうちにストオリーの面白さを求めてはゐやしない。作品の興味はストオリーに照應してハッキリとなつとくのゆくまで描破せられた現實機構の相關性にある。『電報とダイヤ』はその素材たる相關する現實を一應は左翼的に出發しながら、その重要な契機にあたつて、1、避妊に對する夫婦の態度が結局に於いてやゝアイマイであること。2、金五〇送れのその金が、夫の居る工場の爭議中とのみ說明しかないこと。このやうな狀態にある妻に對して何故この電報を發せずにゐられなかつたか！ その夫の切迫つまつた鬪爭的經過を描くことはその主題を大なる焦點にやきつける上に絕對的に必要であらう。にもかゝはらず、作者はその主題的意圖のために輕く飛躍々々を重ねてそのために嚴格なプロレタリア文藝からの落伍性の危險を敢へて持つてゐる。

たゞこの作品はもつと長い紙數のもとに書かれねばならなかつたのである。もし作者の『意圖』にこの作品を『女人藝術』のためにといふやうな一つの前提があつたためにかうした出來上りになつたと云へるところがありとすれば、これは『女人藝術』も作者も讀者もその相互關係のために考へねばならぬ。

その事は、その背後にわれ〳〵は如何にしてそれ自らの階級を形成してゆくべきか？ 自然發生的又は未組織的な大衆はいかにして眞にプロレタリア的統一性の下に結束せしめられてゆくか？ といふ問題を提出するからである。階級にめざめゆく婦人の意識に於ける差異や、職業の別による狹い差別感等を解消するに役立ち、お互ひに單一な強い組織的訓練に自ら踏み出してゆく導きになるやうに、其の作品に於ける統一性は、云ひかへれば戰鬪的辨證法は把握せられねばならぬ。女人大衆の眞の大衆化のためにはこれも果されてゆかねばならぬ事とおもふ。――一九三〇、八、二八、

ダンスの發展性と社會性

影山靜子

先日のこと或る人が云つてゐました。

『今ぢあダンスと、麻雀をやらないものは現代人ではないといふ有様だ』と、私は日本に現在行はれてゐるダンスは、其の殆んどがかゝる意味でのダンスだと云つても敢て差支えはないだろうと思つてゐます。

此の私の獨斷的極言の當否は他に讓るとして、私は以下上記の如き世間的解釋の下に在るダンスについて、一個のダンサーの立場から少しく考へて見たいと思ひます。

日本で現在盛んに行はれてゐるダンスは、外國に於ては古くから行はれて來たつてゐる、所謂、社交ダンスとは少しく、否、大いに其の性質を異にしてゐることを第一に認めなければならないと思ひます。外國の所謂社交ダンスは、一種の禮儀法です。社交的禮儀法としてのダンスは日本人間でも明治の初め頃から外交的舞臺に立つ人人なぞは、習得し來つた事でせう。

處が現在の日本で尖端的取材の對象となつてゐるダンスは、其の出現の必然的條件が、所謂禮儀作法としての社交ダンスの發生とは全然異なるのです。其の出現的條件は何か？　私はそれを現在の資本主義社會の發達（沒落）過程の中に見出します。

ダンスといひジャズと云ひそれは瀕死的社會層の心理に投合してゐるのです。歴史を見ても判る通り、或る社會の沒落行詰りの階段に於ては必ず享樂的、刹那的、感覺的た頽廢心理が横溢してゐます。私が茲に現在の日本のダンスの流行を指して、それは日本の現資本主義社會の沒落段階の反映であり、産物であると云つても決して失言ではないと深く信じてゐます。

所謂、ナンセンス、グロ、エロ、イット、シーク等の尖端的流行語も亦現社會の頽廢的心理を具象化せるものに投げあたへられた言葉にすぎないのです。

所で現資本主義社會の沒落期に於ては、其の社會に住む全員の心理が一樣に、享樂的、無希望的、刹那的、感覺的、頽廢的になるかと云ふに決してさうではない事は少し社會の生きた動向情勢に思ひを置く者には判然してゐるでせう。

現資本主義社會が沒落に瀕してゐる時、輝かしい社會的希望確信を持ち得る者は現社會よりもつと遠きを、廣きを、深きを看取し得る者であらねばならないでせう。若しさうでなくして現社會以外に希望、確信を持ち得ざる者は自づから現社會の行き詰りの、解決し得ざる矛盾の暴露、沒落過程を生活的に、生存的に、感取せしめられる時只絶望の淵に逐ひやられ、そこに焦燥と自己僞瞞、逃避的逸樂、刹那的享樂の世界

へ、感覺的變化へ走つて絶望的不安をマギらかさんとするのです。

成程、濱口ライオン首相が何日かの地方長官會議の席上でかう云つてゐた。

『私は日本の前途を少しも悲觀しませぬ』

類の現資本主義社會に飽く迄も確信を持つ、少數階級人がある事も確かです。

彼等は現在の資本主義社會に餘りに深き利害關係を織り成せるので貪慾心理が現社會に對する確信を持たせてるのです。科學的な客觀的根據に基づくものでなく貪慾主觀に基づいての確信です。

現在の日本のダンスホールに出入してゐる殆んどの人が生活的に、心理的にプチブルジャア層に屬する人であると言ひ得るでせう。即ち世の中の俸給生活者、自由職業にあるインテリ層、學生、商店員等が其の大部分を占めてるでせう。同じプチブル的頽廢心理に在る有閑婦人や有閑ブル紳士も極僅か乍らパーセンテージを持つてはゐます。彼等は非常に飽きつぽい氣紛れである感覺的刹那的刺戟を無からXへと求める、現社會の發展過程が彼等に社會的に抱かせる絶望、無希望心理がそれを意識すると否とにかゝはらず、彼等は只瞬間的に自己をゴマカシて來る日來る日を消して行つてるのです。彼等の心奥には人生に對する寂莫があります。彼等は現資本主義社會に對する確乎不動の信頼を持つには生活的に生存的に裏切られ、見棄てられてゐるのです。だが彼等大部分は自分等の置かれてゐる境地が現社會發達の必然的結果であることをハッキリ認識しません。即ち彼等は自分を知らざる哀れな連中です。勿論彼等の中にも自分等の境地を社會の發達過程に認識してゐる者もあります。

進んでは明確に社會發達の必然性を把握してその未來に希望と確信を持つてゐる者もあります。だが大部分の人達は退嬰的諦め主義をとり成り行き主義にまかせてゐます。又今迄餘りにブルジョア的生活教養に浸潤してゐるので未來に對する確信を把持し望んでもそれを生活行動化する勇氣を缺いてゐます。主として上記の如き生活心理境地に在る人達の逃避的、偽瞞的、刹那的享樂の自己忘却の消極的、退嬰的手段の一として存在してゐるのが、私が茲に取扱へるダンスなのです。

ダンスの社會的發生の根據をかく分析してみると現資本主義社會が愈沒落の途を深く辿れば辿る程茲に謂ふ種類のダンスの生命も存在すると思はれます。だがそれは先にも一寸云つた樣に社會の沒落過程に於て投げ落される階級人の心理は絶えざる不安にあるのだし、少しも固定性を持たず絶えざる變化、新らしい刺戟、益々露骨なる感能的享樂を求めて止まないのだから、かゝる變化性に富む心理の動向を、機微を捕へて對應さることに努むればダンスホールも茲當分發展性を持つと云ひ得るでせう。ホールの經營者も上記の如きダンスホールへ出入する階級人の心理の絶えざる動向を一足先に捕えて其のホールの空氣を經營方針を變化せしめるの末梢的手腕才能感覺を必要とすることゝ思ひます。

かく、結論しますと、ダンサーとしての私達はダンスは茲當分社會的に發展性を有するから尖端的な調子を合せて行けばいゝのだと思つてると解されるかも知れませんが、それ程無自覺でもありません。

次に私は少しくダンサーとしての自分等の利害、社會性等につき簡單に觸れ問題の除幕に手をつけておきませう。ダンサーも一個の職業婦人であると私達は先づ自覺せねばならないと思ひます。成程ダンスと云

ふ職業は上述せし如き社會の沒落過程から投げ出され階級人の消極的斷末魔的自己僞瞞的享樂の對象となることですから考へて見ればハカないアブクの様な社會的關連性の稀薄な職業ではあります。且つその職業の性質からしてダンサーが職業的意識を持つことには甚だ困難かと存じます。だが、私達が何故かういふ職業に就いたか、つゞけてゐるかを考へる時或者は老いたる父母や幼なき弟妹を養ふ爲めに又、失業に惱む家庭を支える爲めに等生活に迫られてかゝる職業につくに至つてる人が多い事を見出します。私自身生活に追ひ立てられて自分の本性や意識とは合致せない事を知り乍らダンサーになつてゐるのです。成程ダンサーの皆が上記の如き動機に迫られてダンサーになつてゐない事を聞知してゐます。だが其う云ふ人達は此の場合問題外に置かせて貰ひます。何時でしたか或るお客がこんな侮辱的皮肉を發してゐたのを忘れません

即ち『ダンサーは昭和の娼婦だ』とそれはホールの座席に列をなして自己をさらし御客の意のむくまゝにPick upされて瞬間的享樂の對象となつてやるんだからと、かく言はれて其れを甘受するには私達として多くの云ひたい事がありますが、大きく社會的に問題を取扱ふ上からは必ずしもそうするを要せないので多くのダンサーの不平を聞くでせうが、先づ話を進めます。私達は私達をかゝる職業につかせた原因を考へなくてはなりません。即ち家庭の生活苦、失業苦等の原因を社會の機構と如何なる關係にあるかを考へねばなりません。それを考へる時、原因の原因が現資本主義社會の矛盾に由來することを知ります。

然もその矛盾（例へば失業恐慌）は現在の支配階級によつては解決されないものなのです、すると私達のかゝる就職の原因が現社會制度の下に於ては除ぞかれないとせば私達が、現在の如き生活境地から脫することは現社會の存續する限り不可能事です。私達の現在就いてる職業は、成程アブクの様なものだが、よく此の發生由來を、出現の社會的根據に迄探究を進めると問題は急所に達します、此の急所的認識それは現在の勞働者農民無產大衆の解放運動と直接通じてゐます。次に少し目前の日常的利害關係について考へてみますならば、私達ダンサーは被雇人です。經營者支配人等は雇主です。ダンサーの場合は普通の工場勞働者なんかとその被搾取工合が違ひます。私達の場合は搾取歩合の規定を初めから知らして就職してるのです。

勿論ホールの設備待遇等の點では一般の工場なんかと同じ問題でせう。私達の場合第一の利害關心事は歩合規定です。現在の所經營者側の專斷的決定に惟々諾々と服してる狀態です。現在の被搾取歩合の改善には私達の利益の增進です。その爲に私達の第一の努力が向けられねばなりません。又ホールの設備待遇等細かい問題がありますがこれ等もダンサーの立場からの希望要求があります。初步的にはホールの經營（支配）に對する發言權の獲得です進んではホールの管理權獲得へと展開されねばならないと思ひます。それから對經營者のみが問題でなく對警察當局の問題も存します。若し私達がダンサーといふアブク扱ひされる職業について眞面目に考へる時、根本的にも、又、日常的にも利害關係は明確なる社會性を帶びてゐます。私は先づ私達自らがその職業に自覺を持つて叫びます。

そして私達の利益を擁護する爲に必要な力即ち組織(團結)を持つべきです。先づダンサーの組合をと私は叫んでペンを擱く。

講習會雜記

殘暑のまだまだ暑い坂內坂だ。したたり落ちる汗だ。社の二階にかけ上つて無中で風を呼んでる耳に、

「いい考へが出たのよ」社長さんの嬉しさうな聲だ。自分の思ひにピタリとはまるものを、何か考へ出した時の、何か思ひついた時のあのたまらなくたのしさうな、氣持をゆりあげる時のはれやかな笑ひが、仕事のものを一ぱい兩手にかゝへながら二階に上つて來た社長さんの顏に落ちさうに一ぱいで、

「なあに」

みんなの問ひかける目に答へて、

「文藝思想秋夜講座つていふ講習會を開く。」

いいぞいいぞ、みんなも大喜びだ。發禁記念に講習會を持つ。十月號の編輯と組んで、準備だ。講師は、演題は、期間は、會場は、で編輯室にぱあつと活氣が立つた。

講師は現代一流の人をさがさう、あれもだめ、之もだらしがない、あの人もあんまり、で選び出されたのが、「世界經濟恐慌について」の大塚金之助、「支那時局」の藤枝丈夫氏、「ソヴエート文學」の岡澤秀虎氏、最近歐洲文藝の木村毅氏、現代文藝觀」の千葉龜雄氏、「プロレタリア文學論」の平林たい子氏、「ソヴエート五ケ年計畫について」の神近市子氏、「婦人參政權問題について」の中島幸子氏の諸氏でプログラムの第一期は出來上つた。其次は此の方達を說きおとさなければならない

西川小りん

——日本橋——19

時雨

夏の朝、水をたつぷりつかつて、ざぶざぶと浴衣をあらふ氣輕さ、十月、秋晴れの日に張りものをする、のんびりした心持は、若さと、健康に惠まれた女ばかりが知る輕い愉快さである。親しいもののために手輕くつくる炊事の樂しさと共に、男や、貴人の知らない心境であらう。

私はときものの興味を、今でも多分にもつてゐる。背筋の上から、ずつと下の針止めに鋏を入れておいて、ツーと一筋に糸をぬくのがすきだ。それは空想好きの私のよろこんで引きうけた、娘時代の仕事のひとつであつた習慣からでもあらう。ときものの糸と共に、つきない空想を、とりとめもなく手ぐりだし樂しんでゐたのである。だが、その習慣がまた、ずつと昔の、あんぽんたん時代の家庭行事の一つに、夜々養はれてゐたのでもある。

奧藏前の、大長火鉢をかこみ、お夜食のすんだ行燈の許の集りは、八十八で死ぬ日まで祖母が中心だつた。ある年は、行燈の影繪を寫してよろこんだ私だつた。ある年は、小切れをもらつてお手玉をつくる小豆を、お盆の上で選つてゐた。ある年はお手習ひしてゐた。またある年は、燈心の麴を麻の葉や三升にかがつてゐた。ある年は妹たちときしやごをはじき、ある年はくさ草紙を見てゐた。母はつぎものをする時もある、歌舞伎（芝居雜

番だ。みんながそこで手分をしてたのみにまわりはじめた。

會場は、はじめ日日新聞社の講堂を借りて、そこでといふことになつてゐた。こつちの方の交渉は勿論社長さんで、日日講堂といふのは外部の公開催物に一切貸してゐない代物だ。これがうまくただで借りられゝば實にいい調子なんだが、多分大丈夫だらうと皆は思つてゐた。講師の方も大塚氏だけは旅行で不在だつたが後の方は皆都合よく逢えて、承諾して下さつた。大塚氏もやがて承知のむねを云つて寄こされた。それで講師の方は割合に何の行なやみもなくはじめ欲しいと思つたものがすらすらと手に入つた時のやうにきまつた。ところが會場が悲しくも行なやんで仕舞つたのである。日々新聞の講堂は十中の八迄大丈夫といふ目算を立ててやつてきた、ところが一週間では内部であの部屋が必要になつた場合に困るといふ理由で殘念ながら斷はられた。講習會の會期は九月二十九日から十月五日の日曜までで、全一週間、最後の日曜日は茶話會を開いて、プロキノ映畫をやるといふことになつてゐたのだ。で日日新聞社のお斷はりに合つて仕舞つては、いつまでも心をのこしてそこに低迷してゐることは出來ない新らしい會場の物色物色で文化學院を借りやうか、女子商業を借りやうか讀賣新聞社の講堂を借りやうかといふことになつてそれぞれぶつかつてみることになつた。はじめ講習會の發表をした時に一週間一人通期で一圓の會費といふことにした。之は日日新聞の講堂を只

誌、二六通や水魚連といふ連中から贈つてきた）似顔繪を見てゐる事もあるが、かき餅を燒いたり蕎麥がきをこしらへてくれたりした。女中たちは雜巾をさしたり、自分のじゆばんの筒袖をぬつたりした。

思へば、さういふ時に祖母は修身談をきかせたのであつた。だが、それが、どんなに面白かつたらう。後にきく種々な修身談は、はじめから偉さうに、吃々と、味のない、型にはまりきつたことをいふのばかりだ。それは、語るものが、自ら致へるといふ賢人面、または博識顔をするからだ。そしていふ事が非凡人のことばかりだからだ。

ところが、祖母は面白　凡人なのだ。この祖母、前にも言つたかも知れないが字を知らない。きくところによると、無學文盲とは、落語家などにいはせると馬鹿の代名詞だが、決してさうでないので、ただ、學をま　ばす、字に暗しであるので、文盲とは、文字だけに盲目であるといふのだ。この祖母はまさにそれを證據だててゐる。心の眼は甚だ明らかであるのに、文字だけが見えないのだ。氣の勝つた人だつたから、或は文字をよく空んじてゐたら、おそらくあんぽんたんの祖母ではなかつたらう。

だが、この祖母、一市井人として八十八の老婆で死んだのが、手習師匠へもつてゆくお彼岸の牡丹餅をお墓場へ埋めてしまつたのから運命が定まつたのだといへば、人間の一生なんて實に變なものだ。とはいへ、環境が人をつくるといふが、祖母自身も好學心がなかつたのだともいへる。しかし、德川文明の亂熟の結果、、、、でかたんになつた文化の昔、伊勢のお百姓の娘にそれをのぞむのは無理であらう。

――の大庄家の娘小りんの、美目のすぐれてゐたことも、領主藤堂家に腰元づとめをしてゐた花の十八、疱瘡になつて、許婚の男に斷はられやうとしたのを、自分の方から先手をうつて斷はつたのは幾章か前に書いた。江戸の兄をたよつて江戸で暮し東京で死んだ六

で借りて、會員が三百人集つて滿員になつた場合に於てのみはじめて講師の御禮、プロキノの御禮、茶話會の御菓子代が出、電車代が出る、わけだつたのである。

十月號の發送をすまして、さあ之からしばらくは講習會の準備準備で忙しいぞ、と思ひながら社にいくと、久し振りでお目にかゝる大家さんの顏だ。ところが大家さんとても御機嫌が惡い。そして女人藝術社一同社長さんはじめあたしたちみんな叱られた。長いこと、はじめつから大家さんに損をかけどうしで、それが三年も續いて來たのに九月號の發賣禁止、之が九分通りの損害で、その記念に持つ秋夜講座の會費が一週間で一圓、

「いくら君、何だつてそりや安すぎるよ、講師がせつかくのはなしに速記もとらねばならぬだらうし、講習會なんてものは不思議なもので安すぎると又妙に人が來ないからねえ…」目玉が光つて突出す、突出してきた目玉がギラギラと人を射す、その大家さんお得意の目玉だ、この意地の惡い目玉が出てくると、又ねう舌な惡口がとび出すのだ。會費一圓といふ事の安すぎさは本で豫告してしまつてすぐに氣がついたことで、社長さんがお金にこだわりたくない藝術家根性、あたしたちが又世の中に經驗を持つてゐない商賣の出來ない、わからないことばかりの多い若輩、そこでポカポカと常に元氣に何でもやつてのける。やつてから、やりはじめてから、ヘハアナルホド、やつぱりネエ、と感心することばかりだ。この點あたし達より長いこと生きて來て

十九年、彼女は三十三に私の父を抱いて、通し駕籠で故郷を訪れたきり二度とゆかない。

子供を理解しない親――それは この現代にもざらにありすぎる。男性的氣象をもつたものにも赤い襟をかけ、島田髷に結はせ、箱入りの人形のやうに玩器物として造りあげやうとする一方、白粉をつけて、しな〳〵したがるやうな女性的稟質男子を、鐵砲をかつがせたり調練をさせたりして、此子はなんでも陸軍大將にすると力んでゐるのもある。

小りんさんは男性的だつた。手習ひがいやなのではなく、寺院の夫人さんが、針ばかりもたせやうとするのが嫌だつたのだ。もつとも、近松や西鶴の生てゐた時代に遠くなく、もつとも義太夫節の噌炙してゐた京阪地方である。女子に文字を教へると艶文ばかり書くと、文字を教へたがらなかつたといふ土地から、文盲をつくるのに骨を折つたのであらう。

彼女はお寺の墓地で、竹の棒をもつて男童たちと遊びくらした。お彼岸の蒔繪の重箱の中には、お寺さんへもつてゆくお萩餅が澤山はひつてゐる。寺の門近くくると、重箱をもつて來た下男を歸してしまつて、遊び友達の一日の食料をもつてゐる事に滿足した。犬蓼の赤い花の上に座つて、お萩をたべる子供達の、にこやかな頭の上には高い空があつた。文化の昔の女國長の頭の、やつと結はへた蝶々髷には、赤トンボがとまつてゐる。

「もつと食べよ。」

「もうこんなにお腹大きくなつてしまつた。」

あぶらやさんをかけた男の子が胸をのしてみせる。あんこのついた指をしやぶるものもある。鼻の頭へ黄豆粉をつけてゐるものもある。上唇についた黒ごまと鼻汁とを一緒になめてゐるものもある。

そこで困つた事は、殘つたお萩の始末で、食べ殘しをお寺へもつてゆけない。

「投げちやへばいい。有難うございましたつて、からつぽにしてゆけばいい。」

ゐるくせに氣持の奇麗すぎる社長さんも同じこと、何邊か何邊かいぢめられ、いぢめられ、氣がつき氣がつきして、苦いものをのまされのまされして來られたことだらう。で此度もぬかつたなと思つたが仕方がない。

一疊一疊二圓とみて、ここが十疊、せめて二十圓でも、女人藝術のほんとの利益から、大家さんにと家賃を納めて貰ひたいもんですな、どうです諸君」大屋さんの目玉が笑ふ。二十圓でも三十圓でも出來さえすれば、早く出來るやうにならう、

「こん度のことは仕方がないとして、まあ出來るだけ成功するやうに一生けんめいして下さい。そこで一週間全部來る人以外にその日その日ききたいものをきゝにくる人のために臨時一日三十錢といふやつを作つた。

　さあ街に女人藝術の十月號も出たし、その初頁に發表されてゐる講習會の豫告をみれば、勉强をしたいといふ同じ氣持の人達が集つて來るだらう、どんなにたのしみな氣持であたしたちはそれを申込んで來る人達を待つたらう——ところが、又十月號が發禁になつてしまつた。日曜日についた納本を内務省のお役人はその夜の宿直室で直ちに發禁としてしまつたのだ。發禁になつてしまつてから何をあはて、何を思ひ切り惡くそれにこだわつてゐられよう、しかし秋夜講座の宣傳力は、その最も主力とするものをうばはれてしまつたのだ。こだわるまいとしてもともすればそこに落ちてゆく發禁といふ思ひ、それがかもしだすたまらない口惜しさとなんでもはじき

小りんさんはさうしなかつた。穴を掘つて重箱ごと捨ててしまつた。家へかへつて訊かれると、「捨てたよ」とはつきり、自分でした通りをいつた。家のものがいつて見ると、黑ぬり蒔繪の重箱が、殘つたお萩のはいつたまま土中にあつたので、却つて本當だつたのに呆れた。

女らしくないといつて、糺命のため味噌藏にいれられた小リンちやんは、大人たちの不當な仕置きに腹を立てた。あやまることなんぞ考へもしなかつた。自分のしたことのいいかわるいかは子供だから知らないが、つねぐ\、親たち師匠から、人間は正直が第一だ、ことに神宮の御鎭座ある伊勢は、「伊勢子正直」と名のあるのを誇りにしてゐるといましめるのに、なぜ正直に言つたことが惡い——それが不足だつた。

彼女は、自分をこんなに困らせる家人を、自分も困らしてやらうとばかり考へた。暗い陽の遠い味噌藏に這つてる青大將も怖くなければ、いたづらに出てくる鼠にも馴れた。

仕かへしは味噌樽の中へときまつた。彼女は自家用の幾個かの樽のなかへ、おしつこが出たくなると、穴をあけておいてした。味噌を掻廻しておいて知らん顔をして、それからおわびをして藏から出してもらつた。

おや？　この樽の味噌は——あら？　この樽のも——

やがて、日がたつてから家のものが變な顏をして、味噌汁を吸ふのを、彼女は小躍りしてよろこんだ。

「私のしつこを飲んでゐる——」

大人たちははじめは何をいつてゐるのかとりあはなかつたが、彼女があんまり伊勢子は正直だ、伊勢子は正直だ、私のしつこを飲んでゐる——と小躍りするので、やつと彼女の惡戯が、味噌をだいなしにしてしまつたのだと感じた。

かへしたいと身内に躍る力、皆なの何とも云へない緊張した顏にチカチカと走るやり通すぞとの意志の思ひが筋を作る。

さあ山場だ。社長さんは嘉悦さんの商業學校を交渉に行く。生田さんは文化學院に、とところが文化學院は狹すぎて駄目、女子商業は廣い部室に電話が一つしかないといふので駄目、そこでいよいよ讀賣講堂といふことになつた。讀賣講堂はしかし何と愛嬌なことだ。あの絶えまなしに耳にとびこんで來る輪轉機の音。狹い部室、まあしかしそんな事は我慢しなければならない。私達の女人藝術の乏しい財布、その財布をはたいて一週間分の講堂借用費を拂ひ込まなければならない。それに一週間何の差障りもなしに借りられればよいが、讀賣新聞社では毎木曜日は何年か前から特約した所があつて、どんな時でも必ず木曜日はふさがりますから木曜日はひる間かさもなければどこかで一日分都合してといふはなし。そこでその木曜日の借主をきゝ出して特別に一日だけ都合して貰へないものかと賴み込んでみやうと讀賣の企畫部へ行つてきいてみると「木曜日は習字の講習會で三年も前からしてゐる」主催はどこかときいてみると讀賣新聞社だといふ。それなら一日都合して吳れればいいのにどうにかならないかと賴んでみると、まだ木曜日が前にあるからその習字の先生と相談してみて何とかしませうといふことになつた。それからいよいよポスターだ。レポートだ。第一の宣傳力を奪はれたあたしたちに殘されてゐる宣傳はビラとポスタ

この祖母、江戸へ來て嫁入つて、すぐ大火事にあつて、救米のおむすびをもらつた時、傍にゐた者がお腹がすきすぎて、とうてい一個の握飯では辛棒がなりかねるとなげくと、さつそくに抱へてゐた風呂敷包に手拭をかぶせ、袖の下に寢させたかたちにして、

「お役人樣、ここにも一人をります。」

と、まんまと一人分握飯をせしめた。花婿だつた祖父びつくりして

「お前はおそろしい女だ」

と嘆息したさうだ。昔の町人の考へでは、大膽でも、機智があつても、女らしくない女としたものと見える。メソメソ、グズグズ、ブツブツ、ウジウジしてゐるのが女らしい女としたのであらう。女の人のすべてが低下したのは（祖父をわるくいつてはすまないが）かういふ男に、扶養されなければならない位置に長く〳〵おかれたからであらう。そしてさういふ善人といつていいかグズ男といつていいか、ともかくそんな男共の好みにあつた女をつくり、その女が、さういふ男の子を生んできたのだと思ふと、家の子はどうしてこう低能なんだ、なぞと、學校の試驗や、親の思ふ通りにならなかつた場合に、そんな勝手なことはいへない筈だ。

祖母、ある日、

「古道具屋で飯櫃を決して買つてはいけない。」

と變な教訓を垂れた。聽いてゐた壯士荻野六郎が、赤黑い、ヅングリ肥つた腕を撫上げながら、へえと腑におちない顏で返事をした。

「飯櫃だけ古道具屋で買つてはいけないのですか。」

「お前が出世前だからいふのだよ。」

毬栗のやうな男は大いによろこばされた。

ーだ、しかしビラを刷つてゐるひまもない、はつてまわるひまもない。それにもう無駄なお金は使へない。そこで優子さんのかきはじめのポスターを眞似したり、自分の思ふやうなのを考へ出してかいたり、編輯室は今度はアトリヱだ、繪の具と紙の中を隣りの部室から出て來て通りすがりの大家さん發禁を知らず「や、御勢が出ますね」「大家さん手傳つて下さい」「いや澤山ですな今度のは仲々めんどうくさそうだ、それ一枚書く間に原稿十枚書ける」「ぢや一枚書いて下さつたことにして原稿十枚分貰つちやほうかしら」「ハハハ」出來上つたポスターを壁にずらりとかけて、みんななかなかうまいぞ。勢よく川瀬さんうまいでせう、自慢するからドラドラとみると口の惡いのいきなり「支那料理のカンバンみたいね」「ひどいわうまいぢやないの、」一人で眺めて一人で悦に入つてゐる。

「若いものに負けないでどれあたしも書くな」社長さんも勢よく飛出して來て書きはじめる、ところがやつぱり社長さんは社長さんらしい書き方でどこかこう支那めいた古淡さ、あんまり古淡すぎて主催の女人藝術の名前をぬかしたりして皆なに商賣氣がないぞと叱られる。書けたポスターを惜しむ隙もなく盛場を目指してはりに出かける。ポスターが濟むと今度は時間割をきめて各講師に通知して正確なものを作らなければならない。そこで時間割を作つて各講師の都合をきく、はじめ作つた通りで承知が來る。さあ時間割はきまつたぞ、殘つてゐるのは會場の確定だけ

「僕が出世前だからでせう、御教訓によつて米櫃も買ひません。」

「馬鹿なことは言ひなさんな。お前の身分で、古道具屋からでも米櫃が買へればたいしたものではないか、米櫃といふものは、入れておける米が買ひおけるから入用なので、買ひおきの出來ない米なら、米櫃は入りはしない。古道具屋のでも結構だから、入れるだけの米が買へるやうになつたら米櫃もお買ひなさい。」

「へえ? どうもそれは、ちと腑におちませんが――」

彼女の嫁女がそばから吹出していつた。

「それはね、家で賣つたお飯櫃が、廻り廻つて、何處で賣つてるかわからないので、氣にしてらつしやるのですよ。」

壯士荻野六郎には猶更話がわからなくなつた。すると、彼女の息子も笑つて言つた。

「俺の失敗でね、おつかさん、子供の時の味噌樽をやつたのだよ。」

こんどは荻野六郎にもほゞ解つた。彼も吹出したい氣持ちで話を誘つた。

「俺が酒に醉つて歸つて來ると、ツベコベいやがつて面倒くさいから、藏ン中へ叩きこんで大戸を閉めちやつたら、阿母まで締めこんでしまつて――」

父はそれがくせの、左の手でやぞうをきめて、新進的代言人らしくもなく、ならずもののやうな卷舌で言つた。

「祖母さんが厠へゆきたくなつたとお言ひだから、開けてもらひましようといふと、なに頼みなんぞおしなさんな、先方から惡かつたと開けにくるまで投つたらかしておき、干乾しにすれば親殺しになるから、だまつてゐても明日の朝は開けにくるよつて――」

荻野六郎は、それで飯櫃へやつたのだなと、フ、とも、ウともつかないフウーといふ笑らひをうなつた。用心のいい祖母は、他家へ火事見舞に、握飯ごと入れておくる新しい大

だ。讀賣新聞社に返事を貰ひに行くと、やはり木曜日は都合が悪いから木曜だけのばして呉れ」といふ。今更そんな風に云はれては困るから、習字の講習に來る人に手紙を出すなり何となり方法を講じるからといっても駄目、そこであたしの手には合はなくなったので社長さんにたのむ、社長さんが出掛ければ一木曜日だけは始める時間を三十分だけ遅らして七時半から…といふ風にちやんと話しを通す。そんなら何故同じことを私に云って呉れないんだ。木曜日はそれできまつた。茶話會の餘興のプロキノ許可を受けることがその次の問題だ。はじめ講座の許可を受けに行つた時に築地署では、プロキノ自身で活動の方の許可を受けに來るやうにといふので、早速プロキノに通知をするとプロキノは煮え切らなくモサモサしてゐてみんなの忙しい神經のすぢをピクピクさせる。「プロキノには一體何人人がゐるのよう」電話をかける度に、合ふ度に、話をする度に、おやこの人、あらあの人、度んびたんびに違ふ人だ。それで話がその度にちぐはぐになつてかんしやくの起ることおびただしい。プロキノ係になつた川瀬さん「いやになつちやふわ、ほんとに築地署の人つたら、プロキネは一體どうしたんだ、生意氣でいかん使用機械や、やるものの名前を書いてちやんとみてからでなくてはさせないぞ」「プロキネつて云つたの」「さうよ、プロキネだつてさ」川瀬さん一人で面白がつてゐる。プロキネに云はせると何もさう七面倒くさい事しなくたつていいんですよで至極のん

きな飯櫃をつくらせておくのだつた。それが、藏の三階の棚にあるのを、勝手を知つた彼はよく知つてゐた。

「だが、賣つたのはしどいな。」

さうはいつたが、彼もそのほかの所置はおもひつかなかつた。

「なるほど、孫子の代まで、古道具屋の新らしい飯櫃は買ふなと申しつけます。」

彼は笑ひ〲頭をさげた。

世の中の物騒な時分、祖父母夫婦は奥藏の二階に寝てゐた。ある夜押込みがはひつて、祖父の頬つぺたを白刄で叩いて起した。祖母は小さな聲でみんな出してやれといつた。祖父は階下におりて金函の前にすはつたが、手が顫へて手燭へ中々火がつかなかつた。

祖母はその間に厠へゆくふりをしてすつかり家中を見てきた。外に見張が一人ゐるのが藏の二階の窓から月の光りで見えた。祖母がすつかりすましてきても、金箱の鍵があかないで、祖父は盗人におどしつけられてゐた。

だが祖父は祖母を信頼してゐる。早く出してやれといつたが——祖父は頭の上の階下から荷物をあげおろしする爲につくつてある簾の子に、階下の様子を覗いてゐる祖母の眼を感じた。一枚一枚、丁寧に小判を出してやつてゐたが、そのうちに盗人の方が焦燥つてきて早くしろといつた。

昔の金は重い。盗人が一足外へ出たと同時に、奥藏の二階の窓から、激しく、せはしなく「火事だ火事だ」と金盥を叩きたてた。それに應じて店でも騒ぎだした。火事早い江戸だから間髪を入れず近所の表戸が開く、人が飛出す——

きにかまへてゐる。こつちで築地署がプロキノ自身臺本や何かを持つて來いつていふ事を傳へても、「さうかなあ、行かなくたつて送つとけばいいんですよ」とところがやつぱり行かなくてはならなくなつて引ばりに行つた川瀬さんプロキネの佐々元十をつれて築地署に出頭やつと許可を受けてくる。

會のはじまる日、今日の廣告は何んな場所に出して呉れたかしら、朝起きてすぐ心配で心配で讀賣にとびついてみるとあつたあつた、下の方の變なところに、いやんなつちやふな何故もすこしいい所に出して呉れないのだらう、オヤ人が違つてるぞ、月曜はたしか藤枝氏大塚氏千葉氏の筈なのに、昨日の日曜に何か用がないかと社に電話をかけた時には何の變りもなかつたのに、それであはてゝ社に行つてみると藤枝　は一寸今あぶないので會の終りの方にのばして呉れといふことになつたのだと云ふ。それで昨日あたしがかけた電話のあとでその事が急にきまつて、いきなり穴をあけないために先生がつかれて、針をしていらしたのに、神近さんと中島さんにたのみにいつて中島氏が月曜と火曜の藤枝氏の代りに、神近氏が中島氏のあとに、といふことになつたのだといふ。まこと自分自身動きの中に働いてゐる人は心で思ふこともやりたいときめたこともまわりの波で許されないこともあらうに。でも時間割は變つても出て下されば、聞きたいと思つて來る人に對しての義理は濟む。

最初の夜の會場の入口はいつもの身體検査

盗人も火事だと怒鳴つて逃げやうとしたが、火元の方から逃出すものはない、取りかこんでくる人達に、ものしたものを投げつけて逃げていつた。

その祖母が女のたしなみを、いかにも簡明に女中たちにも、子供たちにも共通にはなしてきかせるのだ。その中で、あんぽんたんの耳に殘つてゐるのは、祖父が藏を建てやうといつた時に、一戸前の金が出來たからと悦んでいつたのを、

「も一戸前分の金が出來てからになさい。」

と祖母はいつた。自分たちの働きの成績を、一日も早く、黒塗りの土藏にして眺めたいと願つてゐた祖父は、明らかによろこばなかつた。

二戸前分の金が集まつた時に、祖母はまたいつた。

「も一戸前分出來たらにしませう。」

流石温順な祖父も、なぜだと、譯をきかないうちは承知しなかつた。

「ものは、思つてゐたより倍かかるものです。まして、長く殘さうと思ふ土藏を、金がかかりすぎるからといつて、途中で手をぬくやうなことがあるといけないから、どうしても二ッ建てるだけの用意をしておかないと、ちやんとしたものが出來ますまい。」

それは理由のある理窟だから、祖父は頷ひた。けれど、三戸前分なければといふのには不服だつた。

「それがなぜ、もう一ッ分入るのだ。」

「では、萬一、藏の出來かかつた時に天災が來たら、どうします。土藏は出來ましたが、藏に入れる何にもなくつて人手に渡しますとは、まさか言へますまい。」

なるほどと思つた祖父はうなつた。現今のやうに金融機關の そなはらない時代のことである。空手で、他人の助力をかりずに働かなければならないものには、それほど手强い用

だ。泣顔じみた不愉快さが若い娘さんの顔をよぎる。勉强しにくるのにあんなに丁ねいに身體檢査しなくたつていいでせうに、一週間あゝ　られちや　たまらないわ。ひよわげな女詩人が一人つぶやく。時間になる。三百人をとねらつてゐたのに集つた人數は百人足らず、しかし、讀賣講堂ではその人數はあまりうそさむくはない。もつと少くもつと貧弱かと思つてゐたのに、一生けんめな女の人達や男の人達の、うしろ姿をみてゐるとうれしい。社長さんのしやりんと張つてはゐるもののどこかにつかれの見える後姿に、よくまあと涙つぽい視線が走る。物おそろしい臨檢だ。私服が、官服が、――開會一番挨拶をした小池みどりいきなり後に呼ばれる「一寸來い」何だらう、のこのこ行つてかしこまつて顔をみると、「お前演説した事あるかね」「ないわ別に」「今したぢやないか」「あれは開會の辭ぢやない」「辭でもなんでも女だから許してやるが、何だ、十月號が發禁になつて私たちの最も主力とする宣傳力を奪はれたこの會に、今日之だけの皆樣がゐらして下さつたといふ事は豫想外な位で嬉しいしかし、あしたは一人が一人お友達を誘つてこの會場を一ぱいにしてくれ……發禁、發禁て、發禁ていふと人はみんな何で發禁になつたかと思つてその本を手に入れやうとするぢやないか發禁とは絕對に云つちやいかん、「へえ發禁て云つちやいけないんですか」「いゝん、男なら中止させてやるんだがそれにいい宣傳だ」「もういいんですか」「……之から氣をつけろ」で一あきれ。ところ

意も必用だつたであらうが、その場合の祖母の意見は、もうここまで來たといふ祖父の氣のゆるみを見通してゐたものと私は考へる。

私といふ人間はまた、さうした祖母の教訓をうけながら、利にうとく、空手でものごとをはじめる、赤ン坊のやうな勇氣？　時折自ら苦笑する。女人藝術にしてからが、この祖母の諫めを服用してゐたならば、秋風寥しなんて、しなびはしないであらうに――祖母は十九で自己を建設のために遠く出て來た人、私は時代の激しい潮流に押流された江戸人の殘物のアブクのやうなものをうけて生れて來て、文學をよく知らずに文學でお金をもらうことを覺えた不覺者、そこの相違である。だが、服用してゐることもある。

「芝居などにゆくのは三度を一度にして、そのかはりものを惜むな。」

芝居――それより娯樂をしらなかつた昔の女は、芝居といつたが、それは旅行も其他のこともおなじである。これは、當今の、いかに安價に、いかに手輕にといふのと、違ひすぎる言ひかただが、私はいい教へだと思つてゐる。チビチビ、ケチケチ、ならしにしてなまけてゐるのはいけない。自分ばかり愛すと物惜みにもなる。私の母はよく呟いた。

「あのやかましい祖母さんに、十八年も仕へるなんて、なまやさしい辛棒ぢやない。」

けれどまた、靜かに、祖母の長い間の教へを思出すと、

「だけれど、あの方にやかましく言はれなければ、私なんぞは何にもなんにも分らなかつたらう」

それはたしかに、さうで御座いませうと私は言ふ。あの木魚のおぢいさん(前出)と、そのおかみさん(前出)の子で、十三四に、お前濱一帶、お旗本士族といはず漁師までびつくりさせた、勇敢な汐汲み少女(前出)のおたきさんである。むちやくちやな勇氣と働きは愛されもしたであらうが、辛棒は祖母の方が多くしたかもしれない。

がその次に最初の講座に立つた中島氏、婦人參政權問題をはなし出して、現在の社民主義を批判し非難するところにきた「中止」つゞいて、又「中止」樂屋から、「中島さんがひつぱられた」驚いて社長さんあの階段をはしり降りて中島さんを取もどしにゆく。一邊中止と云つた時に、「中止になりましたから之でやめます」と云つたのが惡かつたのだ。やつと中島さんをもらつて、社長さんフウフウ云ってはしご段をのぼつて來る。千葉氏は面白いことを面白い位な早口でしやべつて、みんなを笑はせる。こう每夜おまはりに來られてはユウウツにもなるし、私達の仕事のさまたげにもなるといふので先生は署長さんに、講座はまじめな學校だから、とたのむ、署長さん「ぢやあしたからは少し手心をしませう」

會は每日無事に進行した。ところがいよいよ藤枝氏の日になつて、やつぱり藤枝氏は出られないといふ事になつた、それでむこうから氣の毒がつて、代りの人をよこすことになつた、それが、名前のすばらしい武藤丸楠氏だ、藤枝氏に承諾を求めに行った係りが川瀬さんだつたため自然藤枝氏のことは川瀬さんの責任のやうになり、何度この人はこの會の中にかけまわりをしたことだらう、健康な額に一ぱい汗をにじませて、或時はほつとした顏、ある時は泣きべそをかいた顏、ある時はかんしやくを起した顏、それで築地署に、丸楠氏のところに、又も一人の代りの寺島氏のところに、その寺島氏もあぶなくて又その代

祖母のお友達は變つてゐた。御隱居さんにちよいとお願ひがと、やつてくるものは、家へくる客とは違つて、木綿ものを着て、大層遠慮がちに訪づれた。だが、

「まあ、よくお出だ。」

と祖母が元氣よく玄關に現はれると、彼女たちは雄辯になつて奧へ通る。

あんぽんたんは夜泣きをして、父母の室から襖の外へ投りだされて、寒い室に丸くなつて泣寢入りして、祖母に抱いていかれた夜から、ちやんと心得てしまつて、泣いて室外へ投りだされると、藏の網戸のとこまでそつと這つてゆくことを覺えた。すこし大きくなつてから、夜半に祖母におこされてお灸を每夜すえてあげる役目をもつた。高齢の人には、心おきなきお伽坊主で、すこしは慰めにもなつたのであらう、何處へゆくにもお供をさせられるのだつた。

夕御飯がすむと、お氣に入りの松さんの車で、ソロソロと牢屋の原の弘法大師へ祖母は參詣にゆく。ある時は每晩のやうに出かける。あんぽんたんと女中とはブラ提燈をさげて車のわきを歩いてゆく。送りこむと松さんと女中は歸つていつた。

大安樂寺の門前までゆくと、文字燒やのおばさんとほうづきやの婆さんが聲をかける。下足のお爺さんは待つてゐたやうに援けおろしてくれる。本堂にはお說經の座が出來て、赤地錦のきれが燦爛としてゐる。廣い場處に定連の人達がちらほらゐて低い聲で讀經してゐた。

祖母は廣い廊下を通つて、おさい錢函の横の一角の、參詣人がお蠟燭と階下から怒鳴ると、お――と返事をする坊さんたちの溜りの方へいつた。そこには大きな角火鉢や、大鐵子があつて、世話人や、顏の賣れた信者の團欒する場處だつた。

時々高野山から說教師が派出されてきた。その坊さんが若くて、學僧らしい顏付きをし

りの中山氏のところに、とかけまわつた。やつと築地署に、とゞけなほして來るとその人が又出られない、又とゞけなほしにゆかなければ、その人が壇上に立つ事が出來ないといふわけだ、で川瀨さん終ひにとう〳〵築地署の高等と顏みしりの仲よしになつてしまつた。藤枝氏の變動だけで、會は無事に濟んだ、最後の日の茶話會の時、プロキノにいい加減かんしやくを起してゐた社長さん、ポツポツ切れてばつかりゐて、そして前に社で試寫した時のより惡い機械を持つて來たのにカンシヤクを起して、林房雄　奶みたいだ、つてみんなの云ふ目のほそくてにやにやしたのをつかまへて、「駄目ぢやないの、そんな煙草なんかくわへてなんか　るからうまくいかないんだ、」けんまくにその奶みたいなのニヤリと笑つて、スポンとひつこんでしまつた。茶話會で、みんな自己紹介をしてお菓子をたべながら感想を云ふ、男の人が一人、「平林さんは河馬のやうだつて戰旗派の人は云ふし、自分も自分の顏は河馬のやうだつて云つてるが、こん度、はなしをきゝながらつくづくみましたがすこしも河馬のやうではない、いい顏をしてゐます、で何故河馬つていふのだらうと思つてよく考へてみたら、平林さんは實によく水をのみます、話しをしながらあんなによくみづをのむので、で河馬つていふんだなと思ひました」みんな大笑ひ、よくみてた人もあるもんだ、たい子さんはほんとにだがよく水をのむ、「一寸一寸、あのフラスコの中に水入つてる、水がないと、あたしは困るの

てゐると人氣があつた。お婆さんたちがはしやいだ聲を出して御寄附の相談をする。麥酒なら水だから召上るだらうとか、白足袋を差上げやうとか、褌におこまりだらうとか――すると、番僧が大火鉢で、肘まで赤いたこをこしらへてガンばつて、あたりながら、拙僧にもくれよとか、雜巾の寄附がすけなくなつたのといふ。食物をつけとゞける人も少くない、毎晩くる中にもお茶菓子をかかさずもつてくるので、火鉢の邊りは有福だつた。

大店の內儀さんたちは嫁をそしる。中年になつたお嫁さんは、いつまでも姑が意地わるく生きてゐると惡口しあうのを、番僧たちはうまく口を合せてゐた。そんな時、祖母は口を決してださなかつた。傍のものが、あんぽんたんの顏をみいみい、圓曲に母のことに話をむけてゆくと、

「心の鬼の角ををりに來て、ざんげなさるのはよいが、後生がようござりますまい。家の嫁は孝行で孝行であんなよいものはござりませぬ。」

とやるので、合手は苦い顏をしてだまつてしまう。私はそこにも厭きて、錫の大空に酌みいれてあるお水をもらつて、飲んだり、眼につけてゐたりする人を眺めてゐた。

やがて和讃がはじまる。叩鉦の音が揃つて、聲自慢の男女が集ると、

有轉輪廻の車より、
三毒五欲の糸をだし
生死の瀨のひまいらぬ
さあてもたうとき、おんあぼきや、
べいろしやの、なかもふだらに、はんどく、
じんばら、はらはりたや、うん――

じんばら、はらはりたや、うんが面白くて、いい氣になつて高音にうたつた。

よ」話のはじまる前はいつも水、水である。それから最近歐洲文藝の話しをした木村毅氏、ビリケンの別名を持つてゐらつしやる事は若手の連中みんな知つてゐた、しらないの社長さん一人。水曜日の木村氏の時に中島さんが赤ちやんをつれて來た。その赤ちやんの頭の毛がビリケン樣そつくりにてつぺんでつんと上にはねてゐる。講師の控室で、その赤ちやんをあやしながら、ピッコの前でついピッコのはなしをするやうに、「のり子ちやんの頭はビリケンサマみたいね」と云ひさうで、そのその横に木村氏が居るので、かなりな努力でその言葉をおさへてゐたあたしから、赤ちやんを抱きとつた社長さん、いきなり「のりこちやんの頭はビリケンサマみたい」とその毛をつまみあげてしまつた、笑ふにも笑へず合づち打つにも氣 毒で、打たなければ變にシヤチコ張つて仕舞ふし、ウウンうなつたまんま、室を飛出してしまふ。木村氏のすつぱい顏が、氣の毒で、あとで社長さんに、「先生つたら、ビリケンみたいなんて云ふんですもの、木村氏のあだなだから、おかしくて氣の毒でとび出してしまつた」といふと、「なあんだ私は知らないから、何故おなかのいたいやうなかつこうをして出ていつたのかと思つてたら、どうも木村氏も變な顏をしてると思つたおしへないからいけないんだよ」でみんな大笑ひ、下手で、それでいて希望の一ばいあるあたしたちに一つの事は一つのいい經驗になつて濟んでゆく、でこん度の會も或點失敗なら失敗で、この次のものに對してのずい分いいこやしになつた事を信じてゐる。(みどり)

そのうちに、香染の衣を着た、青白い顏の、人氣のあつた坊さんが靜々と奧院の方から灰にゆらぎだして來て、衆生には背中を見せ、本尊菩薩に跪座立禮三拜して、說經壇の上に登ると、先刻、嫁を罵り、姑をこきおろした女達が、殊勝らしく、なんまいだ〳〵と珠數を繰つておがむ。

お坊さんは、壇の上の獨鈷をとつて押頂き、長い線香を一本たて、捻香をねんじ、五種の抹香を長い柄のついた、圓ちゆうの香爐にくゆらす。そして徐ろに衣の袖を掻きあはせ、瞑目合掌の後、しづかに水晶の珠數をすりあげ、呟くやうにひくく

ぢん未來さい——

歸依佛

歸依法經——

とかなんとか、涼しい低くよく通る聲で、だん〳〵に皆をひつぱつてゆく。

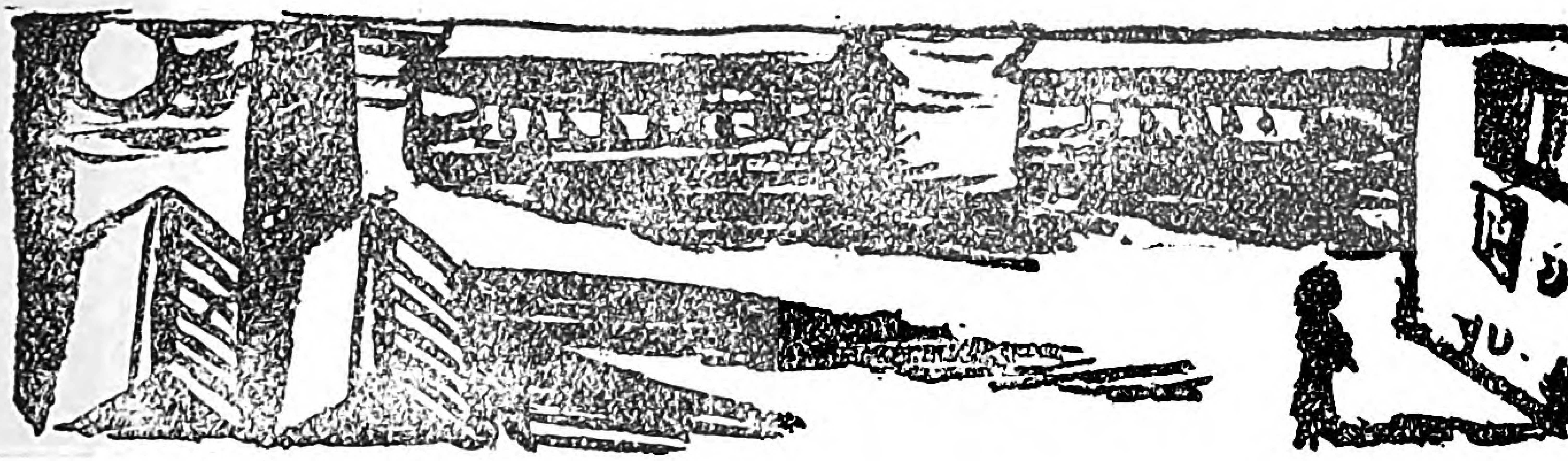
祖母は、有難い御僧に禪の布施をする時は、高僧から下足のおぢいさんにまで、おなじやうに二締づゝやつた。祖母は別段、和讃歌もお經も覺えやうとしなかつた。松さんがその事を歸りに訊いたら、

「空念佛だ。」

といつた。では、何故毎晩參詣なさいますといつたら、かう答へた。

「老人は、家もすこしはあけてやるものだよ。」

門前の汁粉屋は、人の歸り足をきくと、毎晩かかさず立寄る祖母とその仲間のために、おしるこを熱くし、おざう煮もつくつておいた。もんぢやきやのお婆さん ほゝづきやのおかみさん、下足のおぢいさんといつた仲間が、そのほかにも三四人は屹度くる。そして車夫の松さんと、迎へにくる女中と、あんぽんたんと、それだけが、あんまり上等でないおしるこを振舞つてもらう。



棒ふり虫

—俳句—

逢坂薊

秋風が吹いて虫に鳴かれても質札は着物に變らない今年だ。

ペタル一日おしてゐた足で扉をけつとばして來た。

首にしやがつた工場の上へ月見の月が出てゐる。

綿くず肺臓に今日も一杯入れて星空へ出た。

貼れば破られるビラでも又貼りに行こうぜ。

片腕をなくして故里の土をふまされてゐるんだ。

工場長が見送つて下さつて息子は片腕しかない。

眞新の作業服着せられた午後は處女會の奴等の工場御見學だとよ。

お土産にと出してゐやがるそれも妾等の搾取物だよ。

生花もお茶も教へてゐますと日給を棒引きしてねえ。

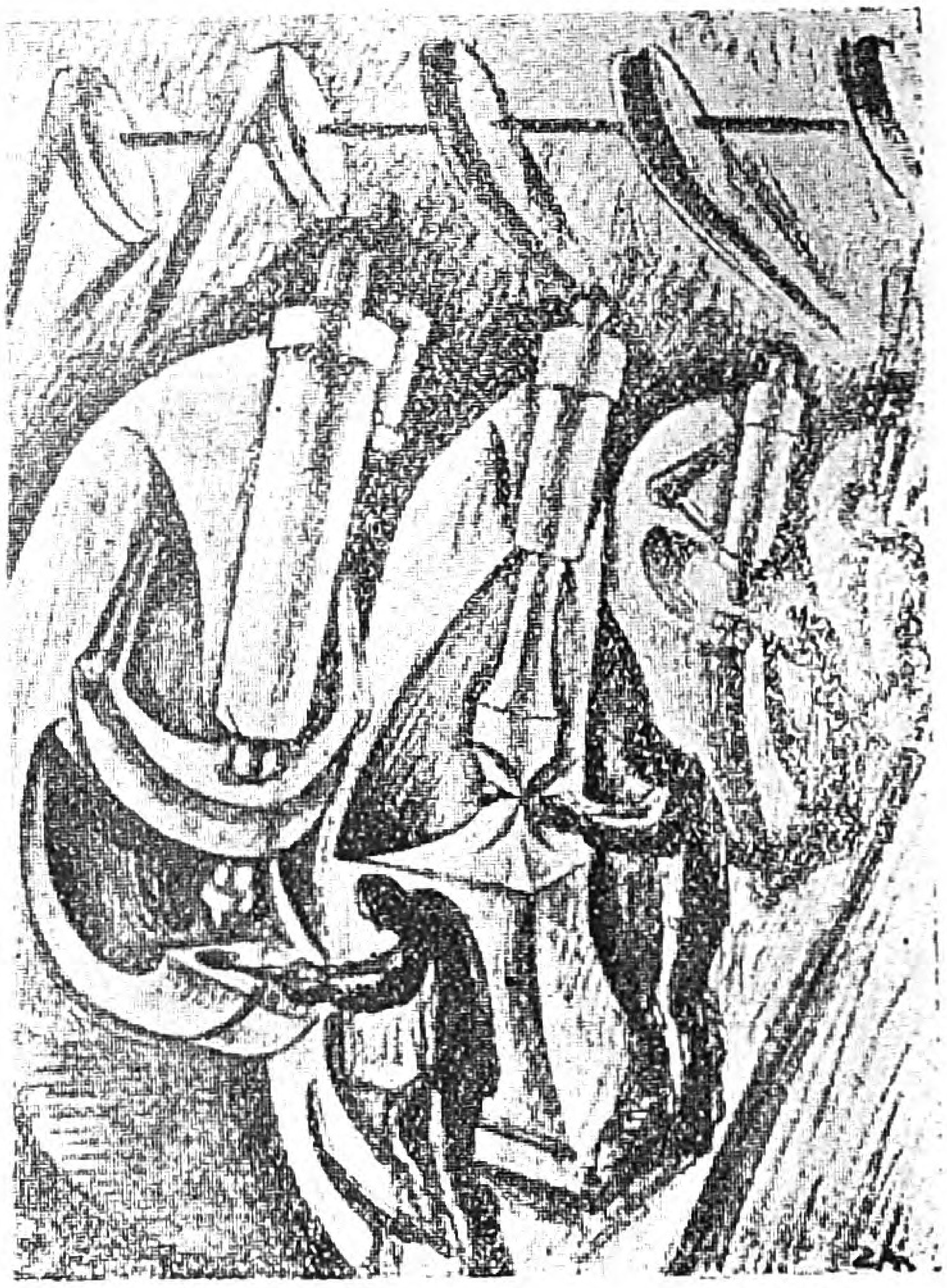
歸郷りや棒ふり虫の遊び場に立退をくわされた妾の家だ。

なす畑もおいらの家も棒ふり虫の遊び場に成つたと云ふのか。

（棒ふり虫とはゴルフをする奴の事）

鑄物工場

戸田豐子



町外れの原つぱと玉川を區劃る土堤の横が赤煉瓦の松金鑄物工場である。

土堤の上を時々陽氣なスピードでトラックが走つた。肥桶や青物を積み上げた牛車が通つた。白い埃がまき上つた。

土堤を降りた向側は山大に松倉。鑄物工場らしく、ハンマーの音が高らかに響き、エンヂンが陽氣に嘯く。松金の赤煉瓦だけが死骸の様に沈まり返つてゐた。髮毛一すぢ程の煙りも吹き上げない。

鐵管やトロッコ、レール等の既成、未成品を亂雜に投げ出した、工場內外を、警備の巡査が四五人、教練の歩調で往復した。

「松金爭議團バンザーイ！」

時々、土堤のトラックが皮肉な喚聲を浴びせて通つた。工場裏の爭議團本部は組合旗を幾本も突つ立て、トテツもない氣勢を揚げてゐた。

「おい、甲羅を干して來よう！」

さう言つて、ぞろ〳〵土堤へ這ひ上り、腕を振り咽喉を含らまし、勞働歌や××歌を爆發させた。日に五六遍は土堤へ押しかけた。

——資本家やつつけろ！

——ブルジョア倒せ！

——勞働者×裝せよ——、

眼鏡をかけた上原と、赭ら顏の杉が顏見合せて苦笑した。彼等は佩劍を抑へて建物の陰へおりた。頑固で何につけても融通のきかな

い石田老巡査だけが、この示威にまともにさらされてゐた。

「大分景氣よくやつてるな。」

「なあに、今日明日中にきつと賣りこみに來るよ、もう一週間にもなるからな。」

杉は空つぽな工場を覗きこんだ。

截斷機に噛ませた鐵材、投げ出したハンマー、石炭山に突立てたシヤベル、旋盤、鑄型、チーン、その他の材料と機械――、すべての位置とポーズが、一週間前、作業中交渉決裂、全員引上げを決行した瞬間をまざ／＼と語つてゐる、――

「何しろ、奴等ダラ幹ときたら性質が惡いからな、出來るだけ高く賣りこまうといふ算段をしてやがるんだ。」

「さう言へば此處の工場主なんかも言つてたよ、いつそ極左の奴等の方が仕末がいゝ位だつてんだ、そいつ等だと、私等が何も構はなくても、警察の方が來てすぐ引つこ拔いて行つて下さるし、後腹がちつとも痛めないし、――つてんだ、ハツハツハ。」

「ハツハツハ。」

土手の凱歌がやうやく鎭まつた頃、二人は日向へ出て行つた。暫くすると、學校歸りの子供等の一隊が土堤を占領してデモごつこをはじめた。

――資本家ヤッツケロ、

ぶるじよーあタヲセ――

彼等追ひ散らすと土堤の蔭へかくれた。其處で策戰を練つた。

「途中で笑ふ奴は裏切り者だぞ！」

大將株がさう言つた。

「いいか！始めろ！」

命令一下生眞面目な嚴肅さうな顏が、土堤の上にちよつこり出揃つた。軍艦マーチの節で唄つた。

豆やの小父さん屁を垂れた――タララン、

豆やの小父さん屁を垂れた――タララン、

鐵材を運搬するトラックが猛烈な塵埃をまき上げ乍ら疾走した。

子供等はバラ／＼になつて馳け出した。松金の本宅から使ひの者が來た。

「どなたでも手の空いてる方に一寸來て頂きたいんですつて。」

一番背の高い田口部長が隨いて行つた。ひよつとしたら×××になれるかも知れん、などと思ひ乍ら。

爭議團は大衆黨系の關東××勞働組合と、×同盟系の東京鐵工組合に、各々の所屬によつて二つに別れた。前者は工場のすぐ裏へ、後者は附近の二ケ所へ、本部を置いた。左翼の働きかけは全然なかつた。

町を歩いて見ればわかるが、Kの町は鑄物工場その他の中小工場を中心に發達した、勞働者小市民の町だ。世界的經濟的恐慌のあふ

りを食つた、工場閉鎖、破壊、失業者等の續出で、最近殊に戰鬪的氣分が濃つてゐた。三月中に發生した爭議數が、十數工場を記錄してゐることを見てもわかる。重なる要求條項は「解雇者を全部復職させろ、馘首絕對反對だ、徒弟制度を廢して雇傭制度にしろ。」等であつた。

爭議團は永く持ちこたへて五日、大抵は二三日で屈服してしまつた。

> 超スピード！
> ◇松爭議二十四時間で解決す
> 關東××勞働組合
> K支部

かういふ傳單が臆面もなく張り出されることすらあつた。改良主義者は大衆の×××を食ひとめることと、資本家と妥協すること以外に何もしなかつた。

田口部長が汗を拭き〱歸つて來た。

「困つたもんだよ！　早速本署へ急報しなくちや不可ん！　上原君、君一寸行つて與れんか――」

「何事ですか、一體。」上原が眼鏡を光らせた。

「實はね、爭議團から松金へ內通してゐる者の話によると、奴等今晩邊り××を起さうといふ計畫を立ててる相だ。」

「それは怪しからん！」

しかし、上原も杉もその他の者も半信半疑の面持であつた。

「何しろ！、今日これから松金が、工場から木型を持ち出さうとしてゐる際だから、吾々としては充分の保護と警戒を加へてやる必要があると思ふんだ、――ぢや、上原君でも杉君でもいいから行つて來てくれ給へ。」

その時、十人餘りの暴力團を乘せたトラックが門の前へ横付けになつた。

二

青色の乘合自動車が白い街道を走つた。Kの町へ入ると、油カスの匂ひがプンと鼻をついた。しるこやの赤いのれんがひら〱した。幟の立つた活動館の前や、そばやの角で、乘合は幾度か停車した。それから、白い埃をまき上げて、くねつた町を走り續けた。

「交通難所」と立札のしてある二叉道で、突然、車掌がやかましく警笛を鳴らした。乘客のおふじは頸を伸ばして窓外を振り仰いだ。前方へ立往生して動かない數臺の肥料車、――厚化粧の女車掌がハンケチでしつかり鼻を抑へてゐる。

何樣のお通りかと思ふ位、軒並に人々が固まつてゐた。おふじは夕陽の照り返しで眩しかつた。片手で庇をつくつて白い埃のまき上

る方向を見定めると、そこらの町工場から煤けた顔の職工等がぞろ／＼出て來た。
乘客は腰を浮かした。
「火事ぢやないのか？」
「さあ、しかし煙が見えん。」
「車掌さん、何です？」老婆が聞いた。
「さあ――」女車掌にもわからなかつた。
「お降りになる方は切符を頂戴いたします。」
先を爭つて降りた。文坊は飴の樣に手足を伸ばして眠つてゐた。おふじはそれを揺り上げ乍ら、人々の話してゐる方へ近づいた。
――最初、オートバイが飛んだ‥‥自轉車が數臺‥‥それから佩劍を抑へたお巡りが三十人程走つた‥‥
「俺ら、あの時も隨分吃驚した、すぐ松金だと思つたよ！」
林といふ町工場の職工だつた。彼自身好い加減興奮してゐた。松金――と聞き挾むとおふじは夢中で、その話の中へ割りこんだ。
「松金で一體何があつたんです？」
「酷い騷ぎだつたよ、つひ今しがた、十何人も病院へ擔ぎこまれたんだ、何しろ、――つけたんだからね。」
「えッ？　誰々がやられたんです？」
「そいつあ、よく分らねいが――小母さんとこのが松金へ行つてでもゐるのかい？」
「え。」
爭議が始まつてから一遍より家へ泊りに歸らなかつた――
「うちは村田つて言ふんです。」
「あゝ、組合の――村田君だね。」
若者は知つてゐた。坊主刈の背の高い男――
「そんなら、たつた今も此處へ寄つて行つた村田君だね、奴は職場々々をアジつて歩いてゐる筈だ。」
「おい來たぜ、シッ。」
誰かゞ制した。酒太りのファシスト倉吉親方だつた。彼はぶつつり短かい、臺十の樣な平手を振り廻して怒鳴り散らした。おふじは吃驚して遠退いた。
「オイ手前ら、何がや／＼してんだ！　何があつたつて作業時間中は一歩も外へ出ちや不可ん、と言つてるぢやないか！　オイ、すつこめ！すつこめ！」
「俺ら火事だとばかり思つて出て見たんだけど、ちつとも煙りが上らないね、親方。」
氣の利いた若者がさう言つた。
「ナアニ！　先刻から散々見てをつた癖に圖々しい奴だ！」
彼は職工等を完全に職場へ追ひこんでからも怒鳴り續けた。
「この不景氣に手前等に賃銀くれてゐるのは只與れてやる樣なもんぢやないか！　會社のもうけは一文もないんだぜ！　近頃の奴等と來

たら、子飼ひから飼はれた恩も忘れて、やれ、サボだの、ストライキだのと勝手な眞似ばかりしやがる、組合の青つ白いガキ等に煽て上げられやがつ…！　畜生！」

おふじは、夫が幸ケガしなかつたことを喜んだ。しかし村田はその夜も歸つてこなかつた。使ひの者が來て、着替へを持つて行つた。その時使ひの者は鐵ちやんが頭を負傷して入院したといふ話をした。翌日見舞にゆくと、鐵ちやんは頭へ白く繃帶したまゝピン／＼動いてゐた。却つて、母親の方が、産褥の様に頭の方を高くして、唸り乍ら寢てゐた。

「熱があるの婆さん。」

「熱だか何だか、私や思つても口惜しくてならないから、かうして寢てるんだよ、昨日、亂鬪の時、鐵が一番先に立つてゐたのさ、すると手向ひもしない鐵を亂暴にも板裏ぞうりで散々打ちのめし、他の奴は――で頭を突くのさ、それからいよ／＼拔いた、拔いた私ばかりぢやない、皆が見たんだよ。」

老婆は骨ばつた手で目を掩ふた。

「昨夜ね、何時もこの邊をうろつく奴がお見舞に來たとか何とか言ひ乍ら、家へ樣子を見に來たので、私や散々に惡態を吐いてやりましたよ、家ぢや、――ひには用事がありません、さう言つて追つぱらつてやつた。」

おふじは老婆の元氣さに驚いた。



三

對策協議會は××並びに、××、××等を告訴することを決議した

夜中、半鐘の音で目覺めた。文坊はとうにおふじの腕から外れて麥粉袋のやうに疊へ落ちかゝつてゐた。添乳をしたまゝ轉た寢したので、おふじの胸がすつかりはだかつてゐた。半鐘はとぎれ〴〵に鳴り續けた。

村上は今夜も歸らなかつた。用意のために敷いてあつた彼の寢床がそのまゝだつた。爭議が始まつて以來、殆んど本部へ泊りきりで――米櫃がおひ〳〵空つぽになり相なのに、一錢の收入もないんだ――そんなことをおち〳〵考へてゐるうちに、何時か半鐘も鳴り止んだ、隣り近所は何處も起きなかつた。

朝だ。共同井戸のポンプが鳴つた、パチ〳〵焚火のはねる音がした。朝だな、さう思つた時、何時もの通りもつくり起き上つたが、何だかひどく勝手が違ふ氣がした。さうだ、うちがゐないんだものこんなに早く起きたつて仕樣がない――

爭議がこんなにさせた――おふじはさう思つた。しかし、爭議を憎いとは思はなかつた。

翌日「警察のもん」がやつて來た。

「お前村田の女房だらう。」

「はい。」

「一寸訊きたいことがあるから、一緒に來てくれ。」

警察へ行つて見ると驚いた。夫の村田を始め松金の職工等が、十何人も豚箱へぶちこまれてゐた。

「村田は何時から家へ歸らないんだ？」

「はい、松金の爭議が始まつてからですから、もう十日餘りになりませうか――」

「その間一遍も家へ歸らなかつたのか？」

とか、色んなことを聞いてから、

「村田に二三年臭いメシを食はせてやるよ、今のうちだから、よく顏を見て行け。」

何故だ？ 何のために？ おふじは鐵の處へ樣子を聞きに出掛けた。組合の者が四五人よつて協議してゐた。

「お內儀さん昨夜の火事を知つてるだらう」

源ちやんといふ若者がさう言つた。鐵ちやんは、デンタン貼りに飛び歩いて家に居なかつた。――昨夜の火事を消してから、爭議團はポンプを持つて町中デモをやつて步いた。そして工場附近でまたもや一大衝突を起し、大分引つこ拔かれて行つた。今朝早く歸つた者の話によると警察はそのうちの數名を何々罪かに引つかけて起訴するらしいんだ。源ちやんがさう言つた。

此の二度の大衝突で松金爭議團は十一人の犧牲者を出した。そのうち七人は起訴されてＵの刑務所へ廻された。村田留吉も無論さう

であつた。

四

此の頃、爭議團本部宛に、松金の犧牲者と家族に對するメッセーヂを送つた團體があつた。

次には、この團體の活動と任務を説明したリーフレットを送つて寄こした。この會は馬鹿に永い難しい名稱を持つてゐた。

リーフレットはクリップで綴ぢたプリント刷りで、裏表紙に乳吞兒を抱いた、ほうけ髮のお內儀さんのカットがついてゐた。それが妙におふじの心を惹きつけた。しかし、まだ手に取つてろく〳〵讀まない內に幹部の木村に取り上げられてしまつた。

同じ幹部の鐵ちやんがすでに組合員全體に配布してしまつたリーフレットを、木村は一々回收して歩いた。

「我々の組合か　出た犧牲者は我々の手で救援してゆくのが當然ぢやないか、家族だつて吾々が面倒見られるだけ面倒みてるぢやないか、こういふ奴等が策動し出すから我々に對して警察の彈壓がひどくなつて來るんだ！　諸君は羊の假面を冠れる狼に充分警戒しなくては不可ない！」

木村は何處へ行つてもさう言つた。しかし、會が獄中への差入や家族の世話をやくために若いオルグを派遣して寄こした時、彼は出鱈目の××的言辭を弄し乍ら、

「結局は階級的聯帶性の問題です。お互に協力してやりませう！」

と言つた。

しかし、オルグの松枝は個々の家族や、組合員を訪問してゆくうちに、何處も同じダラ幹の本性を嗅ぎつけてしまつた。

「お宅へ會から送つたお米が屆いたでせうか？」

「いいえ。」といふ家が多かつた。

「いいえ、家ぢやそんなもん貰ひませんよ。」無愛想に突つけんどんに答へるお內儀さんもあつた。營養不良の眼を光らせ乍ら、荷札へ針金を通す手を一刻も休めなかつた。背中を丸めた白髮頭の老婆と二人で內職をしてゐた。老婆は手が不自由らしく、生物でも掴む樣な手付きで荷札を掴んだ。——

おふじの家へ廻つた時、彼女はやせた胸を擴げて、文坊に乳を吞ませてゐた。丁度あのカットの女がさうだつた樣に、おふじの髮毛は油氣もなくホーケ返つてゐた。

「あの暦みたいな薄つぺらな手帖を送つてくれた方でせう、あれ、組合の木村さんが持つてつちまつたんですけど——」

彼女は夫が未決へ送られてから、爭議團が造つた、灰皿や鍋類を分けて貰つて、行商に出かけた。巧い具合に品物がはけて、いくらか利益になると、未決にゐる夫へ、甘い餅菓子を差入れてやることも出來るのだ、——しかし、子供をおぶつた上に幾つも提げられない程重い鑄物を提げて、乞食扱ひや浮浪人扱ひされ乍ら、人の家の

玄關へ立つ時、心から口惜しさが湧き上つた。――

「針や糸を持つて歩いたらどうだい？その方が餘つ程はけ口があるよ、灰皿だの鍋だのつてものは、さう滅多に買ひ手がつくもんぢやないからね、今度來る時は塵紙でも持つておいで、家ぢやマニラだつたら買ふからね。」

恐らく、氣のいい閑人だらう、そんな忠告をしてくれる人々中にはあつた。――聞かれるまゝに、おふじは松枝にそんな話をした。

松枝自身、會のオルグであると共に、あの一九二九年、全國を襲つた二度目の白テロ犧牲者の――家族であつた。しかし、生活の窮迫はそれ程ではなかつた。Kへ來て、日常鬪爭犧牲者の家族の生活がいかに悲慘であるかと言ふことをまざ〳〵と目撃した。

或る家庭では、子供の辨當を滿たしてやる米がなかつた。仕方がないから空つぽの辨當で學校へ追ひ出してやつた。

萬一の空頼みから、ダラ幹引率の下におめ〳〵縣廳の袖へすがりにも行つた。しかし奴等は米粒一つ呉れなかつた。

にも拘らず、會が送つた米は誰の手にも渡つてゐなかつた。

木村はいくらか狼狽し乍ら、松枝の追求を胡魔化した。

「アレは取りに來る樣に再々家族の方へ言つてあるんですがね、臆劫がつて誰もまだ來ないんですよ。」

二度目に松枝が、救援金を持つて家族たちを訪れると、彼等はいかにも當惑相に斷つた。

「組合から固く言はれてゐるもんですから――貴女からお金を頂くわけには行きません。」

咽喉から手が出る程欲しい金を――斷らなくてはならなかつた、彼等は頬を不自然に剛らせ、お金からそつと目を外らせた。

「組合の方からそんな話があつたとすれば、きつと何かの間違ひでせう。私からもよく聞いておきませう。この金は決して貴方方に御迷惑がかゝる樣なお金ぢやないんです。東京やその他の地方で、ストライキや小作爭議をやる度に、何時も資本家や警察から苦しめられてゐる勞働者や農民が、Kの家族たちも嘸ぞ困つてるだらうから、これを屆けてくれ、と言つて會へ送つてよこしたお金です、どんなに遠く離れてゐて・親類の樣に皆さんを案じてゐる人たちの心からの贈物です――」

松枝にかう言はれると、彼等は成程と思つた。今まで人間並み外づれた苦しい生活へ追ひこまれたことを、自分達だけの不運だと思つてあきらめかけてゐた人達の心に、溫かい希望を感じさせた。

「ぢや、折角ですから‥‥」

「その方たちに宜しく申上げて下さい――」

「さういふ方たちに、お返し出來る時も何時かは來るでせうから――」

さう言つて、いづれも心よく受けとつた。此の期間に松枝對中間派幹部の對立が益々鮮明になつて行つた。會から、も一人の經驗ある

る同志が送られた。中島はやはり犠牲者の家族であつた。松枝は刑務所への差入れ、組合員との連絡などの仕事を受持つ樣になつた。

刑務所の同志も最初は可なりコチ／＼した態度であつた。かういふ左翼の團體と交渉を持つ事が爭議の經過に可なり惡影響を及ぼすから、――といふ幹部等の言に惑はされてゐた。會が所屬の辯護士を送らうとして、辯護人選定屆を造つて持つて行つた時も、彼等はまづ躊躇した。――

「一應幹部に聞いて見てから。」――

そして、その次に返事を聞きに行つた時は完全に斷つた。

しかし、家族の生活狀態を知つてる限り、それらに到底頼めない金品の差入要求や、家族に頼んでもわからない樣な差入本の用事を持つてる限り、松枝の存在は決して無用ではなかつた。――どころか、屢々面會に來てくれたり、外部の情勢や家族の樣子をこま／＼書いた手紙を送つて呉れる松枝に對して、個人的な親しみをさへ感じてゐた。

「彼等自身、××的勞働者の行動を取つてゐ乍ら――」

松枝はつく／＼この矛盾を齒痒く思つた。形式的で半ば傳統的な組合關係に拘束され、欺瞞されてゐる彼等だ、今では資本家地主の御用組合にまで成り下つた、右翼、中間派のカラを突き破れ！

第一回公判の直前、「爭議經過報告演説會」のビラが町中に撒かれた。

街角で偶然、木村に會つた。黒い蝶形ネクタイの位置を直し乍らそばやの店から出て來た。米の事や家族への干渉その他で、氣マヅイこと許り多いので、木村はまづ煙つたい顔をした。松枝に不意を突かれたくない用心から、故と、恬淡らしく「やあ！」と言つた。

「貴女、一つ應援演説をやつてくれませんか、頼みますぜ！　いいでせう？」

「えゝ」松枝は曖昧に笑つて、何氣なく訊いた。

「デモをやるんですつてね、場所は何處です？」

「そいつが、まだ決まらないんです。」――と此の方に巧く外づす。

「まあ、一つうんとアヂつて下さい。會場は大體六ヶ所です。僕等は本部で待つてますから！

出來るなら、デモの中へも潜りこんで直接大衆をアヂれ――キヤプテンからそういふ指令を受けてゐた。勞働者のあらゆる集會をこちらのアヂプロの機會として掴へなくてはならない――だから松枝は演説の事を引き受けた。

しかし、十重、二十重のサーベルは全然、彼女を立たせなかつた何處でも中止、中止。後でダラ幹はそれをいいデマの材料にした。

「見よ、極左の蠢動する處、彈壓の如何に加重するかを！　彼等ウルトラはかうして益々大衆から孤立してゆくのだ！」

と言つても、この演説會は松枝等にとつて全然無駄ではなかつ

た。ダラ幹によつて、孤立させられてゐた、彼女等を一人のよき同志――幹部として指導部にゐたが、プロレタ　アの魂を失はな同志鐵ちやん――と結びつける機會となつた。

五

一九三〇年、四、五月に至つて、ストライキの波の高揚、急激な大衆の××化は、――洋モス、市電、鐘紡、星製藥、岸和田紡等、各產業に汎る爭議の××化となつて現れた。そして巷にうごめく百萬の失業者――

國粹會から左右社會民主主義者に至るまでの、廣汎なブルジョア的動員線――を以てしても、到底食ひとめることの出來ない大衆の「惡化」。異常に昂まつてゆく×翼への關心が――。そこで「闇から闇へ」の矢繼早な彈壓を下して、左翼の組織力を弱めなくてはならない――。

ブル新聞によつて日毎報道される、これらの情勢に――松枝の目も耳も異常な緊張さの中におかれた。大衆の關心に對して左翼の組織力は比較にならぬ程弱い、しかし徒らな切齒扼腕であつてはならない。

まづ與へられた部署からコツ〳〵と築き上げる事だ！

松枝は今湧き上る感激を押へつけ乍ら、キャプテンへ冷靜な報告を書かうとしてゐる。餅菓子屋の裏二階三疊。窓によせた机。

近所の工場のエンヂンの音が響く持續した。松枝は机のはしに載せてあつた封緘葉書を取り上げた。――夫からの獄信であつた。一週間おきに出した三通が、最後の消印の日附から三日程經つて、一度に廻送されて來た。

この一月程、一回の音信もせず、面會にも差入にも行かなかつた松枝に對して「獄中」では可なり焦燥を感じてゐるらしかつた。「公の仕事以外に何者も持たない今の貴方でせうけど――」と可なり皮肉に聞える語調であつた。

今の松枝がどういふ氣持で仕事をしてゐるかといふことを「獄中」へ言つてやらなくてはならない、さういふ手紙が多分握り潰されるだらうことがわかつてゐるにしても。

かつての松枝は完全に差入女房であつた。一人の犧牲者――といふよりはまづ夫――への差入事業に百パーセントの感激を持つた。しかし、家族――として何かにつけて會から保護されてゐた狀態から拔け出して、進んで會の仕事をやる樣になつてから――この氣持は徐々に淸算されて行つた。

プロレタリアの强固な聯帶性――根强い同志愛――といふものに身を以てぶつつかる樣になつてから――今まで個人的な氣持にのみ終始してゐた自分がつく〴〵情なくなつた。

目を揚げよ！　そこには幾百幾千の×テロ犧牲者が溫かい救援の

手を待つてゐるではないか！

牢獄の厚い壁を突き通して、何時かはこの氣持が彼にも解つて貰へる時が來るだらう。――

「同志よ、貴方にはまだ定期的に差入をしてくれる肉親がゐるし、献身的に働いてくれる會の同志たちが、本の世話なんかはしてくれるでせう。――松枝が仕事の都合で一月位、面會に行かなかつた事位、充分我慢できる筈です。しかし、それにしても私は少し御無沙汰しすぎた。今日この報告を書き終はつたら、きつと、久し振りの、朗らかな手紙を書きますよ！」

階段のとこで松枝の名を呼ぶ者があつた。

「あ、おふじさんなの、默つて上つて來ればいいのに。」

鐵ちやんからの使ひだつた。明日の公判に關する打ち合せ――松枝は一通り紙片へ目を通してから、文坊を自分の膝へ抱き取つた。

「いい子ね。」

誕生近いのにまだくら／＼する樣なひ弱い子供であつた。松枝の口や鼻をピシャ／＼打つて喜んだ。

「坊や小母ちやんの髮を引つぱつちや駄目だよ、さあ、母ちやんへおいで。」

おふじは氣の毒がつて手を出した。

「いいわね、坊や。――鐵ちやんのおつ母さん相變らず元氣でせう」

「えゝとても。」

「今度の公判には鐵ちやんのおつ母さんだの關口の小母さんだの、組合員の家族を全部誘つて押しかけませうね。」

中島が歸つて來た。冴えない顔色だつた。出獄して病床にある彼女の夫が最近餘り快くないのだ。――今、組合員の家を一通り廻つて來たんですけど、餘り結果がよくないんですよ。明日の公判廷へ何れ位動員できるか、まだ見通しがつかないんです。山崎――つて言ふあの頭の禿げた親父さんとこのおかみさんなんか、とても猛烈に反對するのよ、木村や鐵ちやんが行くのだつたら俺もゆく――つて親父さんの方がさう言ふと、バカだね、此の人は何を言つてるの――つてお内儀さんが、いきなりおやぢを突きのけて、出しや張つて來るのよ、家ぢやそんなとこへ行きませんから！　え、行きませんとも！　なんて大した權幕なの。」

「あ、あのおかみさんと來たら！」おふじが笑つた。

「もう名代の女だもの。」

「さうを、でも、隨分驚かすわね。」

翌日の公判鬪爭は果して失敗であつた。組合員と少數の家族と松枝たち――合法的な傍聽券を持つた六十人の人間が、サーベル警備の下に靜粛傍聽席を埋めたに過ぎなかつた。しかし被告たちは無罪になり相な形勢だ――。

大衆黨からお歴々の辯護士が來た。おふじは頭の禿げた押しの强

さうな辯護士を頼もし氣だと思つゝ眺めた。
面會に行く時、胸から上だけを、見つけてゐるのとは違つて、今日は頭から足まで、完全な夫を見ることが出來た。留吉は別に弱つてもゐなかつた。
「村田留吉！」
彼の名が呼ばれた。文坊――父ちやんだよ、おふじは坊やをぐんと揺り上げた。坊主頭――背の高い後姿、それから目がもや〱して來た、前掛けの上へぼた〱落ちた。
「二三年臭いメシを食はせてやる！」始めて警察へ引張られた時刑事に言はれた事が氣になり出した。暮す先の不安が胸に迫つた――だから、留吉の言つてることも始めは耳にも入らなかつた。突然、皆なが怒號し出した。
「そうだ！そうだ！そこだぞ！」
暫らくしてそれが靜まると、留吉の聲が、かう言つてるのだ。
「俺たちがデモをやつた後で、工場の塀が破けてゐたとしても、それは俺たちがやつた仕事ぢやない。俺たちに罪をなすりつけようとして工場が御用暴力團にやらせたものに違ひない！」
――公判が終つてから、おふじは控室で留吉に面會することが出來た。看守が傍に立つてゐた。
「坊主も來たか。」
留吉は文坊の方ばかり見てゐる。こんな機會に後々の事も話しておきたいと思つてゐるのに――
「おふじ、雛はたつしやかい？」
雛？おふじは聞き返した。
「さうだよ。」
なんだらう？此の人は、まあ、――しかしそれで、毎も夫に話す様な氣輕い口調になれた。
「まあ、あんたは忘れつぽいのね、ホラ、あの爭議の始まる前に、二羽とも大屋のドロボー犬に捕られちまつたぢやないか。あれがあれば今頃卵位産むんだけどね。」
その他の事は何も話さなかつた。
拭つても拭つても涙が出た。其處に松枝が立つてゐることも知らずに、外へ出ようとすると、彼女がそつと肩を叩いた。
「ね、お互にもつとしつかりしませうね。」
松枝には珍らしい強い調子であつた。
「大丈夫、無罪になりますよ！」

六

中島が檢束されてから松枝は至急住所を更へた。今度は米屋の二階だ。鐵ちやんと連絡がついてゐるので、指導部や爭議團の様子がよく解つた。
爭議團は充分疲れてゐた。例へ賃金が半分に減らされてもいいか

ら俺は働きてい、といふ者が續々出て來た。

「無理もねい、勞働者は働くことが生命だからね。」と鐵ちやんは言ふ。

ハンマーを持ち馴れた手、「工場の香」工場の匂ひ、截斷機、旋盤トロツコ、——自分等の豆だらけの手が觸れてきた凡てに堪らない懷しさを感ずるのだ。その懷しさ——

「それは可なりルムペン的なもんだけど、正しいプロレタリア的な方向へ導いたら、すばらしいものになると思ふんだ——」

安つぽい色紙でつくつた芭蕉の葉が店中に擴がつてゐる、安洋食屋である。鐵ちやんはもう繃帶がとれてゐた。彼は頸を突き伸ばし乍ら、する／＼支那そばを啜つた。こんなに落着いて話し合ふのが始めてであつた。

「俺は十二の時からの鑄造工だ、——本來から行つたら、今年一年で年が明ける勘定なんだ、ハツ、ハツハ、お袋なんかそればかりあてにしてゐて、滑稽だよ、もう、そんな時勢でないといふことをいくら言つてもわからないんだよ。」——

遲くて、此處一週間、早ければ今明日の中に解決がつくといふことが爭議團全體の確信となつてゐた。

此の重要な時期に於けるこちらの對策を至急立てなくては不可ない——松枝達はせゝこましい裏通りを歩き乍ら、種々協議した。

黑い布で電燈を蓋ひ物音をしのび乍ら、松枝はその夜、夜明しで仕事をした。

七

土堤の兩側に、松金、松木、その他の工場が黑々と沈まり返つてゐる。松枝はビラの包みを抱へて、橋の袂をぶらり／＼してゐた。ちようちんを灯けた牛車が橋を此方へ渡り切つた頃、そのかげから、鐵ちやんがひよつこり現はれて來た。

「ビラだけ？　デンタンも出來たのかい。」

「あ、デンタンも出來た。」

「明日中にK署の樓上で、交渉開始といふことに決定したんだ！此方の準備が早くてよかつた——」

鐵ちやんは橋の上を身輕く飛んで行つた。

爭議團の頽勢に油斷して、警備の者が一人もゐないことを見定めてをいた——松金の塀はあの事件以來今だに人、一人通る程の穴が開いてゐた。鐵ちやんは其處から潜りこんだ。未完成の鑄物が、無氣味に手を突き伸ばしてゐる中庭を目がけて進んだ。

橋の向側で暫く樣子を見た後、松枝は反對の道を引つ返した。

「根强くじつくりと、へばりつかう。」

一語、一語へ力を入れて呟いた。



踊る戰線

——故郷に與ふる——

後藤かつ子

深澤紅子畫

1

子供が描いた下手な太陽の畫の樣な形なのだ。Ｎ市を中心として四方の接續町村にひよろ長く伸び走つてゐるところの、クレイヨン畫の樣に變に淋しい縣道。

その道はＮ市から放散するところの、あらゆる文化や思想や流行を四方の村落に運んで行く。そして又たこの足の樣に村落から養分を吸ひ上げてＮ市の體內に送り込むのだ。

Ｎ市はそれを吸ひ上げて美しく肥えて來た。實際Ｎ市にとつて四方の町村は市經濟の源泉地であり、市の發展を助成し支持するパトロンだつた。

古風な城下町であるＮ市は非生産的な商人の多い所だ。彼等は頭をしぼつて如何にして

四方の村落から利益を吸ひ上げ樣かと苦心する。そして近代的コンマシヤリズムに依つて店頭を彩る。又市當局は市の發展のために下手なクレイヨン畫の道をどしどし描き足して行く。

こうした近代都市的な化粧施術に依つてN市はめきめきと美くしくなつた。街には積木の樣な洋館がずらりと化粧してゐる。映畫常設館は軒をならべて近代調をかきならす。露店と廣告燈が盛り場で哄笑する。そして赤や青の自動車が、客をどんどん拾ひ上げてガタガタと四方八方に走り廻る。

だから四方の村人にとつてN市は素張らしいみ惑だ。彼等はN市の派手な生活狀態に憧れて來る。そして彼等はなけなしの財布を街頭にはたいて了ふのだ。こうしてN市の商人と當局の政策は圖に當つて、街は常に繁盛し、四方の道は往來が激しくなつた。そして市はますますふくれ上つた。市民は寄生的な商業搾取に甘んじて、呑氣な意識を背負つてゐる。こゝは純然たるブルジョアジーの街だ。

街の娘はよりよい物質條件の結婚を探して身賣する。彼女等は結婚費用の多いのを喜ぶ。實際N市の結婚費用は全國的にも有名だ。

德川時代から土著してゐる人々は、爪の垢ほどの土地や家屋を後生大切に守つて、次ぎ次ぎと世襲的大家族主義にたけのこの樣に古い皮を幾時代も重ね重ねてふくれて來た。實社會から遮斷された樣な退屈な街なのだ。

だが市の發展に反比例して四方の村は次第に生活の基調が亂れて來た。どしどしと洪水の樣に浸入するN市の派手な文化は、村を亂らせた。金はN市に向つて流れ出す一方だ。若者は汚ない村を見捨てゝ市に走つた。だが生産的機關のないN市には、市民の他に外來人を迎へる能力がない。彼等を收容するだけの余地がなかつた。仕事がないのだ。何等生産機能のない虹の樣に美くしい街。その中で商人は店頭を飾つて網を張つた。

だが——世界的な不況はこんな隅つこの農村にまで押し寄せて來た。

N市の周圍の村はゴム風船の樣にしぼみ始めた。村民はN市に出ても金を使はなくなつた。使ひ度くとも金がないのだ。彼等は必要に迫られた物だけを、しかも安物を出來るだけ値切つて買つて歸つた。

こうした不況は覿面にN市に波及して來た。周圍の農村に依つて支持されてゐる市の商人等は動搖し出した。彼等は品物を背負つて農村に走り出した。だが賣りつけた品物の代價に農産物をあづけられた。金がないのだ。

農村の窮乏は古風な物々交換の時代的奇現象を復活させた。

村の若者は煙草も吸へなくなつた。この餘波はN市のN煙草專賣局の横柄な官僚面にまで打つかつて來た。

耕作反別と收穫量、生産額に於て全國第一を誇つてゐたN專賣局

も本年四月以降七萬圓減と云ふ未曾有の記錄を示した。——N專賣局では敷島朝日その他きざみ一切を生産してゐるが、最近高級品の賣行きが減少した——その對策として當局では耕作反別の減少。元賣所の撤廢に依る局直接の賣さばき計畫。男女工の整理等を案出した。これは當事者にとつて死活問題だ。洪水の様な失業者は歸村にいいいはんらんしてゐる。失業者も百姓も官營工事を鶴首してゐるではないか？

N市當局の大都市計畫案の手始めとして、N市から東に伸びてゐる道路の擴張及び、市外と郡部の分水河であるK河の架橋工事が着手された。三百七間の鐵橋、一年間二十七萬圓。この大工事は地元であるS村の百姓を有頂天にさせた。彼等は日傭土方を希望して殺倒し歎願した。

だがそれは一切取上げられなかつた。その上橋側のS村入口に一萬圓のモダン交番を新築して『村の安寧を計る』計畫が具體化した。地主等の發案にN市の××部が大賛成をしたのだ。

こうして百姓等の怨恨と羨望を外に工事はどしどし進行した。羨まし氣に見物する村人の眼前で土工等は大聲にどなり立てる。調子のいゝ歌聲がひゞく。鐵骨が起重機で卷上げられる。科學の力が村人を驚歎させた。

その下手に架けられた假橋の上をガタガタと下肥車が通る。野菜の山積された車が行く。

下肥車は最近益々多くなつた。今まで下肥等見向きもしなかつた百姓も肥料を買ふ金がなくなつた。N市の下肥は急に値が出た。村人は暇が有ればN市に野菜を賣出した。だがそれは捨値にも等しかつた。彼等は勞賃にも當らない金を持つて歸らねばならない。

ガタガタと假橋は朝から夜まで淋しい勞力がゆれて動いて通る。馬も人も車も力がない。こうした窮乏はN市の周圍に氾濫した。

2

剝いた干瓢を竿に掛けて了ふと糸は疲れた腰を伸ばして庭前の川で大根を洗つてゐる母親の側に行つて手傳つた。しめつた土がきれいに洗はれると、ガチガチしたあばた面の大根だ。

糸はそのあばたが變に氣になつた。

「面の悪い大根だなあ。是れじや又幾らにもならないだらうね？」

「今年のは皆な是れだ。こんなのはどうせ無駄骨折だよ。市場へ出したつて難くせばかりつけられて、ろくな金にはならないさ。」

母親は身體を振り〱ゴシゴシ力を入れて洗つた。冷たい小川の水が洗つた土で濁る。

八月の曉方の空氣は冷たく霧を含んでゐる。

「今日もいゝ天氣で干瓢がよく干上るね。」

「あゝ。天氣はいゝが、今こんなに照つてゐて又二百十日頃に降り

出すんじやないかな。今年は切角豐作だと云ふんだから暴れなきやい丶が。百姓は天氣まで苦勞するんだもんな。」

「豐作々々つて又米が下るねえ。出來がよけりや安くなるし、小作人にい丶事はないや。」

糸は日燒けした痩た頰を歪めて笑つた。

農産物は一般に出來がよかつた。が野菜類等は馬鹿々々しい安値だつた。キヤベツ十個でバツト一箱買へぬ有樣だ。N市の市場へ出すのはまるで捨値だつた。青物市場では百姓の勞賃にも足りない金を値切り倒した。だが生命の短かい青物を抱へて百姓は默つて賣るより他になかつた。例へN市の街に小賣りに出かけても、値切られたり暇を潰したりして一日汗だくになつて歩いても結極幾ら取れるものではなかつた。市場へ出して了つて働く方がまだよかつた。

百姓は毎朝三時頃から働き出すのだ。機械にかけて干瓢を剝く。剝いた干瓢は其日の中に干上げねばならない。干しが足りないと赤くなつて了つて賣れないのだ。朝、山の樣に剝いた干瓢もサツと夕立が來ればもう駄目だ。

その干瓢が十貫目八圓だ。そんな値はかつて無かつた。好況時には四五十圓したのだ。十貫目の干瓢は山の樣だ。だからいくら安くとも金が無いから賣らねばならない彼等だ。

金に窮して賣拂つて了つて、今更ら自家用の米を小買ひする百姓も多かつた。

「どれ、陽が照らねえうちに一走り行つて來べかなあ。」

母親は水の垂れる大根を荒繩で引くゝつては車に積み上げた。

「重いだらう。後押しするかい？」

「大丈夫だ。い丶から干瓢の裾別けを頼んだよ。」

母親は手拭ひを被ると、うんと車を引出した。糸は道の曲り角まで車を押して行つた。

白い大根がガタガタと車の上で爽かな八月の朝に踊つてゐる。廣々と續いてゐる田には收穫期近いみのりが乳房の樣になつかしくゆれてゐる。二百十日を控へてゐると云つても今年の增收は見通しがついてゐた。だがいくら取れても取れればそれだけ次ぎ次ぎと地主に持つて行かれるのだ。去年の貸だ、その前の滯納だと……。

糸はでこぼこ道をゆれて行く大根の山を見送つて妙に賴りなかつた。

隣縣の製糸工場に働いてゐた糸は去年の夏はかなりの金を家に送る事が出來た。だが今年はもう盆が來るのに金もない。工場閉鎖の强制的な歸國の時の手當は旅費に過ぎない。

この村の小作人の娘のかなりの數が糸と共に歸つて來た。それでなくてさへ食へない村は益々窮迫して行つた。若い娘等のかせぎ高は小作人の親等より大きかつたからだ。

糸が家に歸つて見ると汚れた緣端にハンカチを敷いてたみが腰かけてゐた。白つぽいメリンスを着て、人絹の洋傘を持つて眞白く化

粧してゐた。

「誰れもゐなかつたから待つてたの。N市に行くんだけどまだ自動車は通らないねえ?」

「早いのね。用事でも有るの?」

「用なんか無いんだけど、今朝ね、又兄貴とやつちやつたの。あんまりしやくに障るからN市の親類にでも行つて二三日も遊んで來てやらうかと思つて、わざと當てつけに飯も食べずに飛出して來ちやつた。」

たみはそして面白相に笑つた。たみは村でも中流の自作農の娘だ。小學校は糸と一緒だつたがたみはN市の女學校に行つた。だから高等小學から製糸工場に行つてゐた糸とはあんまり親しくもなかつた。だが糸が歸つて來てからはよく遊びに來た。そして來る度毎に兄貴の惡口を云つた。兄貴がけちんぼで嫁にやつてくれないと云ふのだ。たみは美しい娘だ。だから相當緣談もあつた。だが兄の武が妙にひねくれて、おとなしい親等に反對してがん張つてゐた。家相應の所へ嫁るのには金が掛るし家に釣合はぬ卑しい身分の者には家の體面上嫁れないと云ふのだ。妙な意地だつた。

「誰れの財產だ。いくら長男だつて一人で全部貰ふつて法は無い。半分位吳れなきや嫁かないからいゝ。」

たみはたみで變にこじれて來た。そのくせたみの家は表面だけの小地主で、內面は借金だらけのやりくりだつた。それは田地か山でも賣らなければ整理がつかなかつた。でも意久地なしの父親には世間態を恥じてそれが出來ないのだ。——

たみは又何時もの樣に愚痴つぽく、此の近所で二十二にもなつて嫁に行かないのは私等だけだと云ひ出した。それはたみの口ぐせだ。同病相憐むと云ふ調子で盛んに愚痴るたみの氣持ちが、糸にはくすぐつたく思はれた。

「幾つになつたつて仕樣がない。私の樣な貧乏人は働かなけりや食つてけないんだから、嫁の事など考へてゐる暇などないのよ。」

「だけど普通ならもう嫁かなくちやならぬ年だもの。私だつて何も兄貴に首を下げて迄嫁つて貰はなくとも、一人で探して見せる。百姓なんかよりずつといゝ處を見つけて兄貴を見返してやる。こんな村なんか馬鹿らしい。」

糸はたみが自分と異る階級の生活苦を知らない娘である事を感じた。糸は今まで生活の爲の苦鬪より他に考へた事がなかつた。今後も結婚に就ての我儘や空想など考へてゐられない程、生活の爲に鬪はねばならないだらう。たみは一人で力んでゐたがやがて元氣よく出かけて行つた。

糸はたみの空想と憧れを不思議に思つた。たみだけではない。村の娘等はみんな汚ない苦しい百姓の生活を嫌つた。そしてどしどしN市に出て行つて奉公したりする。彼女等は其處から村を嘲笑する。惡口する。そして村を離れて出世したつもりでゐる。だが糸に

はそんな氣持ちはいやだつた。村を見捨てたつて貧乏人の娘は貧乏だ。同じ階級の貧乏人仲間を輕蔑する事は出來ない。それよりもみんな一緒に貧乏と闘つて働いた方がいゝ。

糸はたみの派手な後姿を遠くに見送つて庭に下りた。そして竿の干瓢の裾をスイスイとさばいて歩いた。キラキラと照り出した陽に甘つぽい干瓢の香がむしむしといきれ立つた。

糸は汗を流しながら元氣よく竿の下をくゞり廻つた。――

日が暮れてから兄の定吉が元田と連れ立つて歸つて來た。土間に積み上げた干瓢からカッカッとする陽のほとぼりが立上つて、馬鹿に暑苦るしくむした。母親は早く夕食を濟ませると裏の家に話し込みに行つて了つた。

定吉と元田は暑いと裸になつて飯をかつ込んだ。糸はバタバタと二人をあほつた。

「何んだか馬鹿に氣ぜわしいな。飯を食つてる間も落付かない。いよいよ×衆黨の奴等をけ飛ばして闘ふんだと思ふと氣が氣じやないよ。實際收穫期を控へてるんだから愚圖々々しちやゐられない。」

元田はいかにも忙がし相に眼鏡の奥から大きな眼を突出して、ガブガブと麥湯を飲んだ。

元田は定吉の友人の友人だが――。

定吉等小作人が本當に生き死にの苦しみから大地主の森山に反抗して立上つた。今までこの村には無產政黨さへ入つてゐなかつた。だから勿論定吉等は指導組合を持たなかつた。が苦しみ拔いた上の反抗が割合多數の小作人をしつかりと團結させた。

森山はS村一の大地主だ。そして又慘酷に强慾な支配階級の見本でもあつた。

不作、苛税、小作料値下げ、こうした小作人の血を吐く樣な訴へに耳もかさなかつたばかりか、彼はどしどし土地返還を迫つた。

『どつちにしたつて食へない』苦しい狀態が炎の樣に小作人等をもえ上らせた。割合平安な縣下の農村問題としては未曾有の時間と參加人員と流血の悲慘な爭議だつた。

此の中に小作人の味方ともつかず地主ともつかず地主との調停を買つて出たのが×衆黨N支部長の木村等だつた。

『どつちのためにもならない』この爭議を止めろと云ふのだ。そしてどつちの爲にもいゝ樣にといふ條件の下に案外易々と片が付いた小作人等の唯一要求である小作料値下問題は、支拂可能となる迄猶豫すると云ふのだ。それはあの森山にしては寬大過ぎて案外だつた。小作人等は×衆黨が眞に無產階級の爲の政黨だと思ひ込んだ。

だが――木村等の調停の僞瞞と策略もそろそろ曝露されはじめた今年は例年より五割方の增收だと云ふ聲は到る所で聞かれる。それは森山等地主が二重にも三重にも確實だと云ふ折紙をつけた。そうなれば當然小作料未拂分は可能だ。森山等が默過するはずはな

い。彼等は早速支拂請求の苛酷な攻勢を開始した。――何と先を見越した策略だつた事か。地主と調停者共謀の策略に乘つて一時喜びをした馬鹿な小作人だ。策略を田に當てゝ地主から喜こばれ、小作人から人氣を博したのは利巧な木村等だ。

それが×衆黨の手だ。彼等は到る所で家賃値下運動や爭議の調停をやる。それは來るべき政戰の下準備として、人心獲得を目的とする上手な自黨宣傳法なのだ。こうして彼等は爭議調停と同時にS村にも支部を設立して、黨の勢力擴張に着手したのだ――。

その僞瞞を曝露し、地主の攻勢に備へる定吉等の闘爭なのだ。今度こそ增收を楯にとつての支拂請求だ。彼等地主は際限ない搾取を開始するだらう。收穫期を眼前にして森山等の立入禁止の攻勢に如何に闘ふべきか？　それが定吉等の闘爭だ。

定吉は友人の杉本等と相談して村の小作人の中に××組合の××を入れる必要を感じた。そして杉本の友人の元田がオルグとしてやつて來たのだ。

彼等は×農の支部設立と再爭議の準備のために、H市からSへ、Sから東京へ眼まぐるしくかけ廻つてゐるのだ――。

「木村等の策略を曝露するんだな。なあに奴等の提灯を持つてるのは自作農階級だ。窮迫してゐる小作人はあんな奴等にだまされやしないさ。」

定吉は糸の差出した出がらしの麥湯を飲んで元氣よく笑つた。

その時鈍重な靴の音が角口に近づいて來た。

「今晩はあ。青年團ですが例の袋を貰ひに來ました。」

糸は緣端に立つて行つてそこに横柄な顏を並べてゐるたみの兄の武と、も一人の青年のカーキ色の服を見下した。

「借金調査袋です。入れといて呉れたでせうね？」

武は脊黑い陰險な額越しに糸を見上げてぶつきらとふくれた云ひ方をした。糸は默つて奥に引込むと、佛壇の側のすゝけた狀差しの中から、昨日投込んで置いたハトロン紙の小袋を取出した。

『借金調査役――

今度村の經濟狀態を調査して窮迫せる農村の振興と復活對策の資料にいたし度いと考へまして此の袋を造りました。この方法は絶對に他人にはわからないのですから本當に自分の家の借金額だけの豆を入れて下さい。方法は左の通りです。

一、大豆一粒を百圓とす。

一、小豆一粒を十圓とす。

一、嚴封にして絶對に無記名の事、

月　日　　S村青年團』

苦茶苦茶になつた袋にはこんな文字が刷つてあつた。糸は苦笑して定吉に渡した。

「今更ら人の借金を調らべて見たつて仕樣がねえや。苦しいのは解り切つてるんだ。」

定吉は不快氣につぶやくと合所に立つて行つた。そしてガサコソと戸棚の內を引かき廻してゐたが、やがて片手に一ぱい大豆を握つて來た。

「借金なんて數へ切れねえ。小作人なんて借金を返したら干死んじやうさ。」

定吉は大豆を袋の中にたゝき込むと、飯粒で口をぺたぺたとはり付けた。

「暇な奴等ばかしだから、こんな馬鹿な事をしやがる。豆が煮て食ふ程たまるだらう。」

定吉は舌打ちして袋をほり出した。中で豆がガサガサと鳴つた。辛い借金の音だ。

糸は袋を持つて縁に出た。どかどかと氣障に靴を踏鳴らしてゐた武は、憎惡と輕蔑の眼を袋に注いだ、そして突出した糸の手から袋を引たくると挨拶もしないで歸つて行つた。

宵月が明るかつた。糸は突立つたまゝ虫の細々とした聲を聞いてゐた。秋の聲だ。

「今來た奴等は木村の先棒だ。青年團が無産黨に共謀したり、如何にも未開な農村のプチブル的な青年らしいやり方だよ。」

「××黨なんて眞の無産黨じやないさ。あの木村なんて最近すつかり反動化したぜ。今迄は兎に角看板だけでも左翼陣營の本を並らべて置いたが、此頃は一寸も無いね。その上二階を麻雀倶樂部にして了ひやがつた。本屋なんかより面白くつていゝからね。變なマルキストが集まつて來るよ。合法的無産黨なんて派手で若い奴等にや好かれるからなあ。」

定吉と元田の哄笑が爆發した。

糸は二人の嘲罵をきゝながら、武の小面憎い態度を思ひ浮べた。そして今朝のたみの事を考へながら定吉等の側にしやがみ込んだ。

「たみちやんがさ、家を飛出したいつて。あんな兄貴と一緒にゐるのは堪らないつて云つてたつけ。嫁に行き度いんだろけどさ……」

糸は今朝のたみの言葉をぼつぼつと吐き出して笑つた。

「武の奴はわからず屋だからな。だけど一たい農村にはそんな風に長男の權利が強過ぎて後の子供等はちゞ込まつてゐるなんて風が多過ぎるんだ。そしてそれは小地主程度の中産階級に殊に多い。そんな古い不自由な事なんていやだな。親等からして家は長男が繼ぐものだ、長男は親を世話するものだときめてるんだから變さ。」

「人間を卑屈にする一方だね。家と云ふものゝ中に入り込んでゐて段々非社會的になる。家に食はせて貰つてる人間は決して働かうとしないんだ。これが無産階級の子供は親と共に働かねばならない。だから自然に家長制度的の不自由な束縛や不當な權力がなくなつて平等になるんだね。子供等が平等に生活出來る樣にならなければ駄目だな。それには現在の不合理のまゝでは、世襲的な大資本家の權力を增大する一方、無産大衆を增加する事になるんだ。一家族內で

も結極そうだらう？　だから女は女の立場から××的な闘爭を持つ必要があるさ。それを自分一人偉くなつて兄貴を見返してやるなんて氣持ちは古過ぎるね。そんな個人的なやゝこしい名譽心なんてもう通用しない。」

元田は明快な口調であつさりと斷定した。

「そんな問題は親の脛をかじつてゐられる連中のいがみ合ひさ。お互に慾張つてるからだ。俺等貧乏人には財產なんてものが無いからそんな心配はないね。たゞ自分等の階級のための爭ひがあるばかりだ。」

糸は定吉の淺黒い顔を見て肯づいた。實際兄も妹も同じ様に悲慘な境遇だ。それを反撥して爭はねばならないのだ。時代は、そして世の中は階級の闘爭なのだ。――

糸は身體が引緊るのを感じた。

3

豆袋調査の結果、S村の經濟狀態は――

全村戸數七百一戸。

債務總額九十四萬六千九百十圓。

一戸あたり千三百五十圓八十錢。

これを現在の田畑平均價額一反歩三百圓として債務消却に充てると假定すれば、三百十五町六反で、同村田畑全面八百六十町の約三割七分を失ふ事になる。――

なほ村民の生活狀態を生產別にすると、

一、純農者――村の大半數は純耕作者であるが、米は下落する一方、大小麥も例年より四五割の安値。野菜類は値無し。村の特產物たる干瓢も亦馬鹿安である。

二、耕作の片手間に養蠶をする者――村の三割位であるが、本年度繭の値は一貫匁一圓から八十錢位の未曾有の安値。しかもその上に蠶糸中央會臨時生糸處理委員會に於ては、保管糸全部の損失負擔方法及び保管糸の處分について、損失額を減少する爲、明年二、三月を期し全國製糸工場の一せい休業を敢行し十五萬梱の減產を計畫してゐる。この曉には今迄糸質素惡な初秋蠶を手控へて優良な晩秋蠶を増加し補塡し様としてゐた養蠶家は、又も二ヶ月の全休に依る繭の買控へから莫大な缺損を被る。

これでは春繭の低落、夏蠶初秋蠶の掃立制限、晩秋蠶の繭價低落等一年中損失續きだ。

尚是等の家の子女の多くは隣縣あたりの製糸工場、紡績工場等に出てゐたが、企業家の破產、工場閉鎖に依つて續々歸農して來たので農村は二重の窮乏に切迫してゐる。

三、黄葉煙草耕作の恩典を有する農業者――村の二三割方で大部分は隣村に多いが、今までこの耕作者は不況時代に於ても治外法權的な特殊保護を受け反當り最高二百五十圓から百二十圓位の收益を上

げてゐたが、最近N市專賣局區內の賣上高減少の爲當局では明年度の耕作反別を一割以上減少して生産過剩に備へる意向であるから、その結果は五千七百餘町歩の耕作面積と三萬四千餘人の耕作者を有する縣下の重大問題で、一人S村のみでなく、今まで全農家羨望の的となつてゐた彼等は大打擊を受けるであらう。——

以上こんな狀態であるが村民の借金の多くは地主又はN市あたりの高利貸の金だ。

昨年度の村稅滯納者に比して、今年度のそれは七月末までに既に昨年度の二倍近くに達してゐる。然も國稅にさへ滯納者を續出する狀態だ。この村稅の苛重は村債三萬圓の高等小學校新築費のためでもある。その結果敎員の俸給は支拂不能におち入つてゐる有樣だ。

その上今年度の豫算案にはK河畔の交番所建設費一萬圓が算入されてゐる。之は村長村會議員等地主階級の自己防衞的な遣口だ。

縣下農村の小作爭議記錄を破つて本年度は既に四十八件、しかも地主側の苛酷な土地返還訴訟に對する小作人の暴動化、この惡傾向は彼等地主を益々××と共力さすに到つた——

農村の窮乏はこのまゝ續いて行けば滅亡より他にない。何んとかしなければならない。

もれ上つて來る苦痛な怨恨と反抗の叫びはN市を巡る農村に巨大な火を點じ樣としてゐる。——

彼等はさすがにあわて出した。燃え上らうとする炬火を防衞し鎭撫しなければならぬ。

先に强竊盜犯防止の名目で自己防衞につとめた彼等は、農村救濟の種々策をかゝげてたけり立つ農民を鎭め樣とした。

帝國農會委員は全國町村長會委員と共力し農村救濟に右往左往した。

縣當局では縣下養蠶業者に晩秋蠶の乾繭保管を奬勵した。輸出向優良品を現在の安値で手離すなと云ふのだ。又屑繭利用の加工を農家の子女に奬勵した。一貫目五六十錢以下の捨値の屑繭を眞綿として加工すれば百匁三圓以上になる。一貫目の繭から百匁の綿は確實に製す事が出來ると云ふのだ。

非具體案、具體案、等々農村は騷々しくなつた。

定吉や元田も忙がしかつた。××組合の支部設立と鬪爭準備に忙殺されてゐた。

糸も炎天の下で身體を酷使してゐた。

4

小學校の汚たない體操場の中は汗と土埃の匂ひでむせ返つてゐる。

半裸體、絆纏、飯糊でしやちよこ張つた手拭の浴衣、眞黑い顏、太い腕毛脛等がぎつしりつまつてむれ上る。——

私語、私語。拍手。拍手。どなる。わめく。

××農民組合支部設立並びにＳ村小作人大會の眞黒い盛況だ。

開放した窓の外には汚たない小作人の女房や子供がざわざわと動いてゐる。

自作農のせがれやおやじは隅の方に氣を飲まれた樣に片まつてのぞいてゐる。

「小作料の減免を鬪ひとれ!!

農村生産資金の農民への直接補償要求!!

敎育費の地主負擔課税案可決!!」

「地主森山の攻勢に備へて團結せよ!!

森山をけとばして兄弟を支持しろ!!」

元氣なスローガンが板塀の上で踊り上つてゐる。赤インクの丸々が氣勢をそへてゐる。

會場の中では定吉や元田や杉本や本部から應援に來た青年等の意氣がかけ廻つてゐる。――

われる樣な拍手が起つた。定吉が立上つた。顔が赤い。身體が棒の樣だ。開會の辭。

『我々は此處に××農民組合の支部を設立して、我等小作人の結束を堅くし横暴なる地主の搾取に對抗せんとするものであります。我我の最初の爭ひは負けた、なぜ敗北したか？ それはかの×衆黨のダラ幹のために地主森山に賣られたのであります。小作料支拂可能迄の延期。我々はこの寛大な解決の陰にある彼等のわなを忘れてはならない。森山は今年の增收を楯にもうれつな攻勢を始めたではないか。我々は今度こそ團結して鬪はねばならないと思ひます。』

われる樣な拍手と喚聲を浴びせかけられて定吉は赤くなつて降壇した。入れ違つて元田がひよろ高く立つた。眼鏡が電氣に光る。

糸は窓にしがみついて明快な元田の語氣を聞き洩らすまいとした。

『……農村救濟を口にしながら彼等帝國農會と稱する地主階級の集團は果して何をやつてゐるか？ 彼等は首相農相の歷訪陳情を……事とし農村刻下の急務である小作料引下問題には一言もふれてはゐない。目下諸君の小作料の地價に對する利廻りは六分乃至六分五厘で銀行及び公債等に比べても尙高利なのである。その上土地には破損燒失等の危險のない事を考へて見ると、いかに地主が小作人を搾取してゐるかゞ明らかであらう。』

さうださうだ、拍手。

『帝國農會の農村救濟案である農村負擔輕減とは何か？ それは彼等地主階級のみが浴する地租税の輕減の事である。土地を持たぬ小作人にとつて地租税の輕減が何になるか？』

同感。地租税を引上げろ。喚聲。

『政府は農村救濟低利資金七千萬圓の融通に依つて、都會の失業者を農村に追ひ拂はふとしてゐる。だが現在農村人口と耕地面積から見て是れ以上の人員を収容する事は農村を益々窮迫させるばかりで

ある。なほ政府は全國製糸業者の要求に應じて、保管糸の損失負擔のため三千萬圓の補償金を融通したではないか。だが之等はみな資本家への補償であつて、小作人階級の養蠶家は少しもその恩典に浴す事が出來ないのだ。此處に於て我々は農民を救ふものは帝國農會でもなく、××でもなく農民自身だと云ふ事を知らねばならない。諸君の農民組合に依つて生産資金を直接農民の手に闘ひ取らねばならないのだ……』

わきかへる拍手が元田を押しつゝんだ。

糸もしつかりと握つてゐた掌を無中でたゝいた。側の女房等が糸にならつて拍手し出した。

次は東京から來た靑年だ。彼は若々しい態度で『××の指導の下に如何に闘ふべきか』と云ふ事を話し出した。いかにも尖鋭な顔が紅らんで美しく動いた。

「いゝ男だな。東京者はみなふりがいゝや。」

糸の側で感じ入つてゐる女房もあつた。

彼の熱を持つた闘志が滿場をうならせてゐた時、どかどかと雪崩れ込んで來た一團があつた。カーキ色の靑年團員と×衆黨支部の靑年等だ。武もまじつてゐた。

彼等は壇上に殺倒して飛行船の樣に膨脹してがん張つた。

『諸君、諸君は之等過激なる分子の言動に乘つてはいけない。諸君は自分の立場を自覺して、自らを破滅する樣な事をしてはいけない。諸君は……』

「森山の番頭。」

「地主の番犬ひつ込め。」

「馬鹿野郎、耻しらずの狐奴。」

嘲罵が燃え上つた。喚聲が渦巻いた。

『諸君は諸君の味方である×衆黨の恩ぎを忘れたのか？ ×衆黨のあの正當な調停を無視して再び不穩な行動するのは諸君の爲ではないぞ。今後こそ寛大な地主も容赦なく土地返還を迫る事は明らかだ。諸君は今地主から土地を返せと迫られたらどうする？ 百姓に土地が無いのは手足がないと同樣じやないか？』

「默れ。馬鹿野郎、そんなおどしは聞かねえぞ。」

「豐作だと云つて搾られ放だいに取られたら俺等が食へるかい」

「引づり下してやつつけろ。」

壇上では揉み合ひが始まつた。小作人等は立上つて壇に殺倒した。窓の外から石が飛んで來た。隅の方でガンと毆ぐる音がした。カーキ色が引づり倒されると皆んな其處に雪崩れ掛つた。打つ。蹴る。毆ぐる。揉む。

「××が來たぞ!!」

その聲にドヤ〳〵戸口に殺倒した。

「そら逃げたぞ。逃がすな。」

「狐をつかまへろ。」

ワアワアと揉み合ひ押し合ひ驅け出した。

みんなその後から驅け出した。苦茶々々になつた場內に女房や子供がのそのそと入り込んだ。糸も變に昂奮して驅け出した。

人影は葉つぱの樣に何處かへふつ飛んで了つた。

轉がり廻つた亂鬪の跡を涼しい風が吹きまくつてゐた。——

亂鬪で流れて了つた會の後で小作人は急速に鬪爭化して了つた。地主の攻勢も眼立つて來た。早稻田には立入禁止が見舞つて來た。青年團のカーキ色が頑張つた。小作人等は彼等の田畑を死守し出した。至る所に亂鬪が起つた。村は殺氣立つて來た。

N市の煙草專賣局では男女工整理に對する、巻上工の整理反對の結束が同局內の鬪爭のトップを切つた。ビラが打ち撒かれた。

5

K河の大鐵橋が出來上つた。

S村請願のモダン派出所も出來上つた。

三百七間の偉觀を堂々とK河の上に伸ばしてゐる鐵橋の側に、コンクリートの箱が四角に控へた。

N市とS村一帶を連絡する偉大な橋だ。村人は有頂天になつた。

橋の開通式には縣廳や市の役人等が並んで通つた。皆んな欄干をたゝいたり足踏みをしたりして、岸邊や河原に眞黑く集まつた見物人を見下してそり返つた。

派出所にも立派な官服連がつめかけた。森山等は得意然と招待されて行つた。

その夜から一週間、丁度舊暦の盂蘭盆にかけて橋と交番所落成の祭りが市村合併して行はれた。余興として此の地方特有の盆踊が催された。

河原には高いやぐらが築かれた。萬國旗がひらひらと河風にゆれてゐる。夜は提灯が一ぱいに下つた。橋の大電燈が河原を照らした。派出所には新しく來た巡査が立つたり腰かけたりそわそわとしてゐた。

ドドンカドドンカと鳴る大太鼓の響きはN市から近郊から人々を誘ひ出した。N市の方から、S村の道から人が眞黑く押し寄せて來た。橋の袂で自動車が止まると人がドヤドヤと吐き出された。見物人は垣の樣に輪をつくつて見通しがつかなかつた。その中で若い娘や男が揃ひの着物で踊つた。腰の提灯が太鼓と共にゆれて大きな輪がサクサクと砂を踏んで手を打つた。——

「今晩は私等仲まが踊るの。十人程だけど練習したからきつとうまくやれるよ。見に來てね。兄ちやん。元田さんも是非見て頂戴。とても面白いんだから。」

糸は白足袋をはくと笑ひながら元田と定吉を見下して云つた。浴衣に赤いたすきを掛けてめづらしく白粉を匂はしてゐた。
「馬鹿だな。そんなに面白いか？ あんな事。」
それでも定吉は笑ひながら毎晩同じ工場へ行つてゐた娘等と一緒になつて踊りの練習をしてゐた糸を、可愛いゝと云ふ樣に眺めた。
「僕は是非拜見する。糸ちやんの踊りつぷりをね。どうせ今からN市へ行くんだから丁度つひでに見られるよ。君も橋まで一緒に行つて見ないか？」
元田は煙草に火をつけながら笑つた。
「行つてもいゝな。」
「本當に來て見てね。」
糸は念を押して手拭で頰を包むとひらりと土間に飛下りて外にかけ出した。白足袋が暗い庭を走つて行つた。
「馬鹿だな、糸の奴は。」
定吉は微笑すると、身體を伸ばして糸の後を見送つた。
「無邪氣でいゝさ。僕はあんな風が好きだね。變に氣取つて何もかもイデオロギー的に不自由に行動する奴は嫌だ。僕だつて暇があれば踊り度いね。近頃自分が××の事以外のものに、次第に興味を失ひかけてゐる事が恐ろしいんだ。踊りなんか自分等の鬪爭には何んの役にも立たない。そんな風に考へる事は小兒病的でいやだよ。」
元田は輕快に笑ふと煙草を捨てゝ立上つた。
「今晩は杉本等も引張り出さうよ。僕は今晩N市へ行つて、明朝早く上京する。四五日用事あつて來られないぜ。今の所こつちも一寸手離せる狀態だからいゝだらう。森山の攻勢も影をひそめた形だからな。立禁を食はしたつてあんな純資本家的地主には算盤が合はんからな。今後どう云ふ手段で來るか知れないが、恐らく米の出揃つた時一齊に差押へと來るだらう。そうなりや奴等は世話なしに賣飛ばす事が出來るからな。最初から米屋を引張つて來て置いてどんどん運ばして了ふなんて、地主は全くすきがないな。」
「じやこつちでも先廻りして賣飛ばして了ふか？ 持つてりや取られるに決つてるんだ。」
「下手やると大變だ。法律にふれるぞ。」
全く巧妙な暴壓と搾取だ。彼等は決して法律にふれる樣なへまをやらない。だから小作人は氣がゆるせないのだ。何時津浪の樣にやつて來て、さらつて行つて了ふか知れないのに終日眞黑くなつて働くのは變に不安で腹立たしい事だ。
元田と定吉が杉本等を誘つて話しながらゆつくりとK河原に來た頃は踊りも盛りだつた。
人がぞろぞろと流れてゐた。橋の大電燈で流れる人の顏が浮いたり沈んだりした。
元田等はむれ返る樣な人混みの中に割込んで、伸び上つて見た。
つぼんだり開いたりしながら手を打つて踊る踊子の輪の中から時を

時野卑な唄が飛上つた。踊子の腰の提灯がずらりと揃つてリズムをとつてゆれた。

小粋な若衆の揃ひ。ピエロの假装、土人の裸體踊り。娘の一列。野良着の百姓、學生服の飛入り。サラリーマンらしい二三人。等々種々様々な人等の連續だ。それから大きな輪を形成して一つの律動の中にとけて踊る。

十人位の娘等の一列が踊りながら近づいて來た。その中から澄み透る様な高い聲がひゞき出した。

『今年あ豐作、地主さあはふとる――』

『ヨイヨイ』と若い女の聲が無數に和した。

『小作年貢でサ。わしや痩せる。』

その高い聲は人々の上を凉しく流れた。

「オイ、糸ちやんの聲じやないか？」

元田は定吉の横腹を小突いて低く云つた。

「ウン。うまくやりやがつたな。あいつ。」

定吉はにやりと笑つて伸び上つた。

「いゝ事をやり出したな。糸の奴仲々頼もしいや。」

踊りの列は左廻りに動いて、糸等の一團が近づいて來た。みんな同じ様な娘だつたが、元田は其の浴衣と赤つぽい帯で糸を見別ける事が出來た。足踏みにも手振りにもどこか反撥的な意氣を見せて堅い感じがした。その細い腰が前後のふくらんだ腰の間に交つて、ぎごちなく動いてゐる――

『米は作るけど、米の飯や食へぬ――』

『ヨイ〱』娘等の音頭がはつらつと響く。

『小作百姓はサー、水ばかり』

後を別な聲が引受けた。丸い太い聲だ。

サクサクと砂が鳴る。拍子が揃ふ。歌にとけ込んだ踊の輪だ。一つ一つの腰が微妙に大きな一つのリズムの中に連らなつて廻る。

元田はうつとりと糸の細い腰を見つめた。

「こりや新戰術だ。全くいゝや。俺も一つ飛込でやつゝけて來る」

杉本は素早く手拭ひで顔を包むと、人垣を押し別けて糸の側に飛込んで行つた。そして何か糸に私語くと、糸は手を振りながら後を振向いて元田の方を見た。高い元田の姿を見つけると手拭の下でくすりと笑つた。だが直ぐに亂れた足並を合せて踊り出した。

杉本が急にどなり出した。筒抜けて大きな聲がガン〱と河原に響き渡つた。

『米はとれても　金にはならぬ――
　鬼の地主がヨー　取りに來る』

『ヤレヤレヤッツケロ、そんな地主はやつつけろ。』と若衆等の間から恐ろしい勢の音頭が飛上つた。見物人は氣持ちよく哄笑した。それは忽ち周圍に傳染して行つた。そこ此處から『鬼の地主が』と云ふ唄が吐き出された。

糸等の組が遠のいて行くと、今度は粒揃ひの粋な若衆だ。片肌拔の伊達な揃ひだ――

元田は背中をたゝかれて振返つた。糸が汗ばんだ赤い顔をして近々と笑つてゐた。

「とうとう見に來て吳れたのね。どう？」

糸は元田を見上ると彼の手をつかんで人ごみの中をぐんぐん押別けて暗い土手岸に引張つて行つた。定吉は笑ひながら元田について行つた。

「どうだつた？」

「とてもいゝ。素張らしかつたよ。」

元田は糸の手をぐんと引張つて笑つた。

「馬鹿にうまかつたぜ。あの歌はお前が作つたのか？」

「みんなで考へたの。工場にゐた頃のをもじくつて作つて見たの。だけど初めはとても聲がふるへちやつてさ……。」

糸は甘へる樣に定吉と元田とを見上げて笑ふと、おくれ毛をかき上げた。

『小作爭議は、伊達にはやらぬ、
　食ふや食わずのサ、別れみち。』

杉本の太い聲が流れて來ると騷々しい無數のかけ聲が和してもれ上つた。

三人は顏を見合せて哄笑した。

空が澄み切つてゐる。風がうそ寒い。

歌は大きな二重の輪を統一して、人々はヨイヨイと連らなつて踊つてゐる。

むしむしと今まで體内でむれ返つてゐた××の歌だ。それを廣い河原の夜空に向つて思ひ切り吐き出して、踊る者も聞く者も胸のすく樣なすがすがしさだつた――。

6

新しい橋を渡つてS村方面から馬車が米俵を滿載して續々とN市に行つた。

二百十日、二百二十日の厄日も無事に濟んで全國的な大豐作の報導は米價を續々下落させた。新米出廻期を控へて農村は下落する米價におびやかされた。だが彼等は先行き尙一層の安値を見越して、又金に窮してどしどし賣急いだ。

N市に向つて四方の農村から殺倒する新米は九月一日――十日の十日間に二萬俵を突破した。

米の洪水だ。だが多くの農民は何時も同じ樣に窮してゐる。彼等は賣り急ぐ地主の矢の樣な請求の前に、彼等の生命を死守し樣としてゐる。――

秋。農村は今燃えつゝあるのだ。

―一九三〇、九、二〇―

姉妹

川瀬美子

熱田優子畫



1

「姉さん！」

人通りの少ない邸町に來かゝつた時正代は、どこか記憶に、はつきりのこつてゐる聲でよばれた。はつとふりむかふとすると、熱い柔い手が彼女の右手をつかんでゐた。

「あらつ！　冷ちやん」

この三年間會つた事のないたつた一人の妹の冷子だ。簡單な斷髪に、ワンピースの記憶しかない正代の目に、耳かくしに、薄化粧をした冷子の姿が異樣にうつゝた。一體どうしたと云ふのだ？

「やつぱりねえさんだつたのね。驛で電車を、下りた時から氣がついてたんだけれど、人目があつたもんで、こゝまで默つて、つけてきたの。あたしんち、すぐそこだから、ともかく寄つてらつしやいね。」

冷子は姉にうんとも云はせず、左の手で正代の右手をひつぱるやうにしながら、荒いめいせんの單衣の裾をけつてあるき出した。

やけつくやうな眞夏の太陽の、やうやく沈んだ道は、打水でしめつて、歩く度に、はねのあがるのがわかつた。

正代は、わけのわからぬジンとした感情が胸一杯になつて、冷子の後について歩いた。黒板塀の古風な家、石造りの門をもつ、スマートな洋館、ブルジョアの多いこの邸町にはさうした家がたちつゞいてゐた。その通りを一寸右へ入つた格子戸のはまつた小さな家の前で、冷子は止まつた。

「さあどうぞ」

門にかゝつた女文字の「中田寓」の表札をけゞんさうに見上げてゐる正代に氣がつくと、冷子は一寸笑つて云つた。

「これ、あたしの名よ。」

家の中は、外から見るよりせまかつた。

三疊の玄關に、四疊半の座敷、冷子の居間とも、書齋とも、寢室ともなるらしい簡單な調度のそなへられたその部屋で、むかひあつて座ると、正代は、何から話し出していゝのか、わからなくなつて、人のよい微笑を、目にうかべながら、だまつてゐた。

「ねえさん。相變らず相川さんと御一緒？」

冷子は、姉に冷たい物をこしらへて來るとそれを、すゝめながら、輕くきいた。『相變らず』と云ふ言葉が、その場合の、正代には、かなり侮蔑的にひゞかずには、ゐなかつた。

日本においてまだ共産主義と無政府主義がはつきり區別されなかつた頃からかなり活動的な働きをしながら、惜しくも夭折した闘士を父に持つてゐた彼女等は、夫の死後しばらくで、二人の子を捨てゝ了つた母親に、代つて、太田氏とよばれる、今も尚はげしい彈壓と戰ひながら、幾度かの牢獄生活にも、ひるまず、日本の××主義者達からつねに得がたい指導者として尊敬されてゐる父親の親友の家庭で、育てられた。そして正代は、成長すると、その頃太田氏の許に出入りして非常な戰鬪的な意志と、明晰な頭腦とで太田氏からも愛されてゐた學生相川と、愛し合つて結婚した。

相川は學校を出ると、太田氏の許しを得て烈しい熱情をもつて、正代をともなひ、左翼組織の未開地とされてゐる、××と云ふ工場地帶に入つて行きはしたが一年餘りの間に彼のもつて生れたヒロイズムと功名心がさうさせたのか、××同盟と云ふ社會民主々義政黨に動員され、その工場地帶を形成する紡績勞働者の大部を組合員としてゐる右翼勞働組合の指導部に入り遂に太田氏を失望させるやうなダラ幹になりおほせて了つた。正代は、その頃さうした相川の行爲に反撥出來る程、思想的な根據も、性格的な强さも、もつてはゐなかつた。たゞ愛する者に愛されてゐると云ふ小さな感激だけが、彼女を、相川の造つた鑄型に、完全に、はめこませて了つた。それ以來、まだ太田氏の家にのこつてゐた冷子とは、會ふ機會をもたなかつた正代だつた。

「えゝ、×モスのストライキで、職工を煽動したつて云ふんで相川や外に七八人つかまつたので、差入物の工面に一寸××の邊まで行つてきたかへりなのよ。」

正代は、冷子の前に、さしあたり云ふべき適當な言葉がなかつたので、これだけ云つた。

「さう。大變ね。でも相川さん達すぐ出てくるにきまつてるんでせう。あそこのストライキつてだめよ。きつと今のまゝぢやあ。」

冷子は、事もなげな表情で云つた。冷ちやんは一體今、何をしてゐるの？と正代がきかふとすると、冷子が言葉をつゞけた。

「姉さんの前ちや悪いけれど、今時××同盟なんかの指導でストライキを勝たせやうなんて云ふのがまちがひよ。結極又いつものやうに、工場主に高く賣るか、××に調停をたのんで、圓滿な解決をするか――それで幹部さんはいゝだらうが、血の出るやうなたゝかいで、いつのストライキにも〳〵みじめにまけちやつちやあ勞働者はやりきれやしない。ほんとにあそこのストライキと來たら右翼の組合に屬してゐるおかげで、いつも〳〵慘敗ですもの。それが又戰鬪的な分子に、左翼の組織をもたせる動機にもなるのだと思へばそれまでだけれど――。相川さんもとんだダラ幹さんになつちやつたものね。ハハ……。」

今までの冷靜さにもにず、やゝヒステリックにも思へる強い調子で、姉の氣色など、まるで無頓着にしやべりつゞける冷子に、氣が強くて、姉を姉とも思はないやうな態度をとるのが常だつた彼女の幼時を正代はふと聯想的に思ひ出しながら冷子が左翼の運動に何らかの形式で關係してゐる事をその口吻から漠然と知つた。

しかしどう云ふ形式で？ どんな連絡で？ 正代は、その時自分でも不思議な程熱してきて早口でたづねた。

「ぢやあ冷ちやんは一體どう云ふ具合にやつてるのね？ 私に敎へられない？」

冷子は姉の意外に熱心な樣子に一寸おどろいた樣に見えた。小さい時から、冷子とは反對に何事にも滿足しやすいひかへ目な正代だつた。彼女のその性格が、彼女を右翼社會民主々義者に脫落した相川の妻としての位置に十分滿足させてゐるに違ひない事を、意識して自分でも烈しすぎるかと思はれる言葉を姉に投げた冷子だつたので、この姉の言葉に、かるいおどろきと、それから漠然とした希望を、敏感に感じた。

――姉は、今の位置に、十分甘んじてはゐないらしい――。かうした冷子自身にとつても意外だつた豫感が彼女を雄辯にした。

「あたしは現在直接鬪爭はしてゐない。けれど、それを恥ずべき生活だとは思つてなくてよ。直接鬪爭してゐる人々を發展させ、保護するために、今の情勢が、私のやうな生活をしてゐる存在を、必要としてるつて事、自分で固く信じてますものね。それに今までやつて來た事だつて、私自身に對しても、育てゝ下すつた太田のパヽに對してもともかく私としては一番なすべき事をなしたと云ひ得る自信はあつてよ。例へばあたしは、小さい時から姉さんに比べてずつとませてたんで、死んだ父さんや太田のパパのしてる事がどんな事かと云ふ事も子供心にいろ〳〵考へてたし、大きくなつてからは、パパのやつてる事以外に、私にとつても大切な事はないやうな氣がして、焦點をそこにおいて生きぬいたつもりよ。それで姉さんは相川さんが、社會民主々義者になつちやつても、すぐ社會民主々義者のおくさんにふさわしい自分をつくりあげたけれど、あたしはさうはしなかつた、あたしは、あたしと一緒にゐたかなりはつきりした君

い男が、父親の死んだのが動機で母親の涙にすつかりまるめられちやつて、今まで出てゐた九州の大金持の家にそこの戸主になつて又かへつて行かうとしたとき、さつさとその男と別れちやつたのよ、一人の失戀男をつくる事は私にとつて一人の階級的な裏切者の女房である事とは比較にならない程小さな事なんですものね。」

　そこまで云つて、ちらと正代をみながら冷子は、思ふともなく母親の涙の爲に思想をすてた男との戀愛關係の結末を、わづかな感傷をともなつて思ひ浮べた。その頃から直接の爭鬪はしてゐなかつたけれど、彼女自身の能力がもたらすわづかな報酬による經濟的な援助、その他にかくべからざる重要な一つの部署をもつてゐた彼女はあらゆる虛榮をかなぐりすてゝ彼女の愛情の復歸をせまるその男をはなれて再び太田氏のよき助手として働きつゞけた。そして、太田氏の指導の下で未組織勞働者の組織に、右翼勞働組合に組織された勞働者の××化に、果敢な鬪爭をつづけてゐた青年岡野と知つた冷子だつた。

「夫婦と云ふものは、同心一體とか何とか云つて、同じ壘の上でくらすものなんて事はもうあたし達には問題ぢやない筈だし。あたしとしては、思想をすてた男なんかに、一寸した感傷やなんかで、ぐづ〳〵くつゝいて戰列をはなれてはゐられないのよ。」

　冷子の言葉が正代をかなり刺戟した。

　この人はたゞ一つの道を歩むためにこんなにも朗らかに自分自身の戀愛を左右してゐる――。正代は比較的に彼女自身を思はないではゐられなかつた。彼女は、太田氏の許にゐた頃も、たゞ漠然と、――一つの系統的な思想としてゞなしに、爭鬪意識を、植ゑつけられてゐた。そして相川と結婚後彼女にとつて相川は絕對だつた。相川の思想は――相川の行動は、すべて正代の思想であり、行動であつた。夫に從ふ――さうした意識は女性に不知不識の中につたはつた一つの傳統とも云へるものかも知れない。彼女は社會民主々義の正體をみきはめる前に、相川が奉ずるものであるが故に社會民主々義を絕對なものとして、受けいれた。

　しかし×モスにおいてこの一二年間、工場主の無暴に抗してストライキが相川の屬する××同盟の指導で、いつも〳〵勞働者達によつて血みどろに爭はれながら、幹部と工場側の協約によつて、勝利の結果を得たためしのないみじめな事實を目擊しつゞけて來た事が彼女を科學的な思想でない、もう一つの漠然としたもので、めざめさせた。

　これぢや仕樣がないではないか。――さうしたかなり複雜な精神狀態にあつた正代に、妹の言葉が砲丸のやうに、くひこんだ。

「あたしだつて、この頃ぢや、いろんな事柄をみて、決して、相川のやつてる事が、今の勞働者のための最善の方法だとは思はなくてよ。しかしもし今私が相川をはなれて一人になつたら何ができるかと思ふと……」

「そりやあ姉さん。とりこし苦勞よ、そんな事一々心配した日には、何もできやしない。第一男にくつゝいてゐなければ、働けないと云ふわけのものでもないし、そのまんま姉さんが相川さんに、くつついてるつて事は、結極姉さん自身にとつては一歩の進步もない事だし。――相川さんだつて、姉さんの意志位は尊重するだらうから、一つこゝで、はつきり別れて働いてみたら。姉さんは私とちがつてともかく今まで勞働者の中にゐたんですものゝそれを利用したら、相當働けると思ふのよ。相川さんが左翼になるつて事は全然不可能らしいものね。今が一番大切なときよ。姉さんにとつては――。」

正代が何か云はふとすると、門の戸ががらりとなつた。

「ああ」冷子は敏感にその人が誰だかをきづいたらしく一人でうなづきながら立ち上つた。

入つて來たのは、白い背廣で汗くさくなつた岡野だつた。彼は上着をぬぐと、冷子のさし出したぬれ手拭で顔をふき終えて、正代をけゞんさうに見た。

「姉さん。これ亭主。」

「あゝ、君の姉さん！ぢやあ相川夫人だね？」

岡野は、正代の會釋に、一寸答へながら云つた。

「でも、姉さんは、よき意志をもつてるから、『相川夫人』で、なくなるかもしれなくてよ。」

「ほゝお。そいつは――」冷子とのみじかい會話をのこして、岡野は、四角な後姿をみせながら、二階へ上つて行つた。

「あの男、今は江東にゐるんだけど、そつちでの仕事がどうやら一くぎりついたから今度は、姉さん達の××の方へいよ〱まはるらしいのよ。そんな事で、姉さんが一緒に、働いてくれゝば、とても便利だと思ふんだけれど――。」こゝで一寸聲を下して、

「あさつて、××デーでしよう。だから豫備檢束を、にげてるのよ。あたしこの頃丸の內の銀行へ、英文タイピストになつて、行つてるんでこゝは割合に安全なの。」

久しぶりで會つた正代に姉妹として以上の、特殊な親しみをみせてさゝやく、冷子から、正代は、何にもわづらはされずに、思ふみちを、突き進んで行く事の出來る者の滿足を見た。

夕方、日影のできるのを待つて冷子の家を出た正代は、一つの決意が彼女の頭の中で、冷子の顏の幻によつて、だん〱固められるのを、はつきり感じながら、市電にのつた。

2

ストライキは、案外長びいた。相川はまだ出て來なかつた。會社側の臨時休業の宣告及び女工全部に對する歸國命令に、激昂した爭議團は、幹部と××側の調停を、けとばして、他の二つの分工場と聯絡をとつて、持久戰に入つた。

正代は、さうしたいつもと違つた爭議團の强硬な態度が、冷子との邂逅以後の彼女自身に、何らかの暗示をあたへてゐるやうに思は

れた。

彼女は、彼女自身の決意を判然としたものにするために努力した。相川のゐない一人つきりの彼女は、明らかに――――者の妻としての意識を、完全に蟬脱して、新らしい運動の第一歩を、踏出すための周到な心づもりが出來たやうに、彼女自身にも感じられた。

しかし今こゝへ相川があらはれたら――。やがてそれはおこるべき事だ。その場合彼女は敢然と、冷子によつて、示された彼女自身の道を、あゆむ事が出來るか？ それが時々正代自身の心に大きな不安となつて、のしかゝつて來るのだつた。――――が、闘爭過程において、誤つた方法であり、それに精力を費す事は餘りに、見えすいた誤謬である事は彼女自身、今はつきり相川にむかつても斷言するだけの勇氣はあつたが、相川は、彼を、彼自身の造つた鑄型にはめる以外、彼女の、さうした方面での申し出に耳をかす男ではなかつた。

――女は男に愛されて、男の行く道に從つてさへくれば、それでいゝのだ――。平たく云へばかうした女性觀によつて、正代に對してゐる相川でしかないのだ。そして彼は正代を愛するが故に、彼自身の、思想と、行動によつて完全にあやつられた人形と彼女をしてゐるのだつた。

――別れやう。相川だつて、かりにも、階級運動に、たづさわつてゐる男だもの。こゝまで來た自分を知つたら、正しい理解の下に、自分と別れてくれるだらう。――正代はいつも、考へぬいたあげく、この結果に到達するのだつた。

爭議團が、とじこめれた寄宿舍の中で、盛んなデモを決行してゐると云ふ情報が、××同盟の、相川の仲間達から正代につたわつてきた。

「彼奴等は、我々の調停の申出を、生意氣に、拒絶してゐて、手のつけやうがありませんよ。或は××の奴が潜入して、煽動してゐるのかも知れません。」ある男は、かう正代につたへた。

正代が冷子と邂逅してから、十日餘りたつたある夜更だつた。

正代はその夜も一人で相川によつて彼女自身に働きかけられるであらうある場合には、彼女自身、たちきるのに困難なやうに思へる今の生活への吸引力、それからそれを踏破してもう一つの階段へ上らうとする彼女自身の止みがたい希望――さうした複雑な思ひの中に彼女自身をおいて、考へこんでゐた。

暑い夜だ。

すると、このせゝつこましい露路をまがつてドブ板をふんで來た、女の足音が、彼女の家の前で、止まつたのに、正代は、ふと氣がついた。彼女は、直覺的に、冷子だな！ と思つた。

せまい玄關に、つゝ立つた冷子は、白い浴衣に、メリンスの帶をしめて、一見女工のやうな、みなりだつた。

「隨分わかりにくいとこね。」

冷子は姉の顔をみると、なげつけるやうに云つて、さつさと上に上つた。

「姉さん。」彼女は、たもとで顔の汗をふき〱、一寸聲を下した。

「早速、姉さんを、我々のよき××としておねがひに來たんだけれど實は姉さんも、わかつてるでせうが、こゝの今度のストライキが、今日まで××同盟の幹部の調停をけとばして、勇敢に、がんばつてるのは、はじめストライキが起つたどさくさまぎれに左翼のオルグがもぐりこんでる結果なの。それでいくらかの爭議團の人達は組織されはしたんだらうけれど、何しろ大勢を相手に小數で短時日でやらなくてはならないので、やつぱり一番効果的なのは××でせう、ところが何しろ、あの通り、××と暴力團がかためてゐるところへ、今更外部からビラをもつて入つて行くつて事、とてもだめでせう、だから、岡野は、今の場合、外部から、もつとも安全な方法で、爭議團の人達へ、××を渡すのが當面の手段だつて云ふのよ、それで姉さんに、たのみにきたんだけれど、今夜十一時頃、姉さんはよくあの工場の勝手をしつてらつしやるから、自分で責任をもつてもつとも適當だと思ふ場所から、塀ごしにでも中へ××××××ほしいと思ふんだが、どうかしら？」

　正代は、しばらくだまつてはゐたが、彼女は彼女の知つてゐる工場の地圖を頭の中でゑがいてゐた。

　西側！　寄宿舎の西側は河にそつた細い堤に面してたてられてゐて、五六尺の塀がめぐらしてあるだけだ。寄宿舎に籠城してゐる爭議團の人々は、暑い今夜、涼をとるために、西側の戸を開け放してゐる事はたしかだ。塀の上には、がん丈な針金がわたしてあるので潜入は全然不可能だけれど、その事がかへつて、警戒をゆるめさせてゐるに違ひない。

「えゝ。いゝわ。私、出來るだけの事やつてみるわ。」

　正代は、ぐつと熱いものが、頭の中心に、こみ上げてくるのを意識しながら云つた。

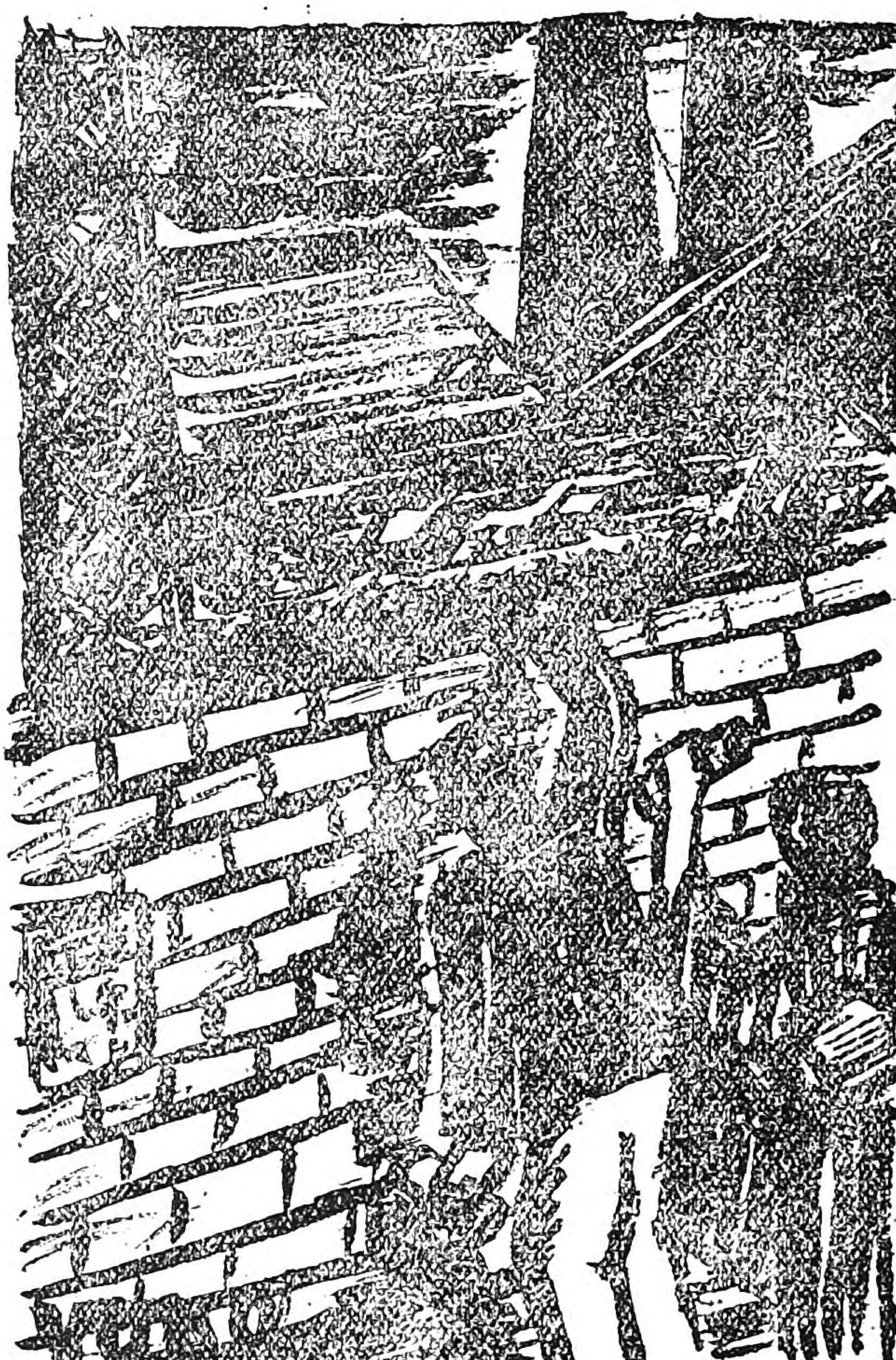
「さう。どうもありがたう。ぢやあ、その店屋のどつさりある四角に岡野をまたせといてあとをつけさせますから、よろしくたのみます。十一時に行つて下さいね、岡野、ついそこのめし屋に今ゐるから、すぐ行きますからね。」

　これだけ云つてあはたゞしく冷子が彼女の許をさると、正代は、ひどく興奮してゐる彼女自身をおしゝづめるやうに努力した。

　――あはてゝはいけない、落着いて、この仕事を、果さなくてはならない。冷子は、自分の新らしい生活の第一歩を、價値づけるために、かうした役目を、自分にあたへてくれたのだもの――

　正代は、長い間疎遠にしてゐた冷子が一度の邂逅で、彼女自身を、かなり重要な、ものとして、扱つてくれた事に感激的な感情を湧かせた。

　今、正代の腦裏に、相川の存在は消えて目の前の新らしい役目へ



の抱負が潮のやうにおしよせた。

時間がくると、正代は、きはめて冷靜に、いつも外へ出る時にするやうに門の戸を下した。明るい通りへ出ると、冷子の言葉通り黑い背廣の岡野がだまつて、彼女の後をつけた。

屋並の低い町の家々の、列がとぎれるとよどんでゐる川に沿つて、工場の西側に通じるくらい道になる。そこまでくると、追ひついた、岡野が、はじめて、低く聲をかけた。

「どうも、御苦勞でした。おたのみします。」

岡野は歩きながら、ズボンのかくしから、ギリ〳〵まいたビラの束を正代に渡した。彼女はだまつて受けとると、一枚だけのこしてたもとに入れ、そのたもとをかゝへるやうにした。

街燈の下に來た時、手に持つてゐた一枚を手早くよんだ。

『勞働者は勞働者の組合に！』と云ふ字が夜目にもはつきりよめた。

小さな土橋をわたつて、工場の塀にそつてはふやうに、二人は闇の中を歩いた。

よどんではゐるがさすがに、川面からは、涼氣がのぼつてゐる。塀ごしに、中の爭議團の人々の、ざはめきがみじかにきこえて、二人をあふりたてた。

「――。」

寄宿舍の眞西に來たとき、正代が云ふと、岡野は、だまつて、い

きなり、とびつくやうに、塀ごしに、――――――。――は塀の上の針金に、一二枚ひつかゝつたけれど、のこりのものは完全に中に入つた。正代はおされたやうに、とび上つて、手をのばした。もう一度。つゞいてもう一度。

完全に工場の塀の中に――――明朝早く爭議團の入口によつて見出されるに違ひない。そして彼等を鼓舞するに違ひない！

正代はキリッとした興奮と、ほつとした安堵に一息ついた。

「表門の前を、買物のかへりのやうなかつこうで、歩いてかへつて下さい。僕は、みつかると、めんどくさくなるからこれで失禮。」

岡野が相變らず低い聲で、さゝやいて、すばしこくもときた道を、ひきかへしたのをみると、正代は、反對の方向に引かへした。――無事に、役目を果さねばならぬ。最後まで――それが彼女を、かへつて冷靜にさせた。

正代は岡野に云はれた通り、警官が大勢で、かためてゐる、表門の通りへ出た。とつさの機轉で浴衣の右袖のたもとを、折つて、ふろしきのやうに、小わきにかゝへると、ゆう／＼と歩いた。

爭議團はます／＼、强硬な態度で持久戰をつゞけたまゝで、正代の上に、しばらく事もない日がつゞいた。

檢束されてから三十日目の朝相川は出て來た。

それ位で、出て來るだらうと、豫想してゐた正代は、さすがにその前夜、混然とした、いくつかの思ひに、まどはされて眠られなかつた。結婚してから三年間の相川と彼女との生活。その生活のどの一片を思ひ出してみても、相川は、常に、正代を熱愛してゐた。もしもこの夫婦が、古い家庭と云ふ組織に、滿足した男女の結合であるなら、正代は、旣に、この上もない幸福な妻と呼ばるべきであつたらう。しかし相川は、彼自身の反映としての外正代の思想を完全に必要としてゐなかつた。そしてその思想の自由な發展と云ふものを、全然無視してゐた。

――それこそ、もつとも今の自分の唾棄すべきものなのだ！　別れやう。別れるのだ――

正代の結論は、こゝまで來て固定した。

その朝早く、歸つてきた相川は、正代の顏を、みるとわだかまりもなく、二十九日の留置場生活に少しやつれた頰に、笑ひをうかべて云つた。

「あゝあ。ひでえ目にあつたよ。しかしブタ箱つて所程、女房の有難味を知らせてくれる所はねえな。なあおい。」

から云ひざま、相川は、いきなり、正代の首を、はげしくだいた。

壓制されてゐた情慾が、火華をちらして正代をまきこむと息づまるやうな瞬間が、つゞいた。

―留置場からかへつた男の、最初のあいさつがこれだ！

それに反撥出來ないとは何と云ふざまだ！

正代は、彼女自身の今の瞬間までの冷子によつてよびおこされた決意が相川のはげしい情慾の一擧によつて、くつがへされたやうな感情にかられて彼女自身の不甲斐なさにはげしく泣いた。何と云ふもろさだ！

「どうしたんだ、正代？」

相川の聲が、耳元でやさしくひゞき、兩腕が再び、彼女の肩をだいた。名狀しがたい、甘い陶醉が正代に來た。彼女は、彼女自身の涙の原因もわすれたかのやうに、相川の腕の中で、子供のやうに、しやくりあげた。

「どうもかう長くちやいゝかげんに、けりを着けなくちや仕樣がないんだが……」

から云ひのこして相川は翌日からは組合事務所に出た。そこで彼等が、この爭議を、工場側に有利な條件で、解決する爲の協議をするに違いないのだ。——その豫想が正代を、愕然とさせた。

このまゝで行つたら、もとの生活を一歩も出ない自分ではないか——冷子にどうして會はす顏があらう——

相川の留守が二日つゞいた夕方、彼女は自分自身を、ひきづるやうに、冷子の家に運んだ。

冷子はつとめ先からかへつたばかりで、裸體になつて涼んでゐたが、姉の顏をみると、浴衣をひつかけるやうにしながら云つた。

「姉さん、こないだはどうもありがたう。効果は、てきめんだつたわね。」

冷子の、ひどく明るい、生々した樣子に、正代も、彼女自身の中にわだかまつてゐた陰欝さを忘れたやうに朗らかに、微笑した。

「ともかく、あゝして皆強硬に、がんばり通してゐつて事も今までにない事だし、それに例へ今度のストライキには勝つゝて事は、斷言出來なくても、あゝした事實はこの次、又はその次の勝利の前提となるべき性質のものだつて事は、たしかだし——。姉さんのはじめての任務は、成功したわけなのよ。ね。」

冷子は、心から喜ばしさうに、つぶやいた。

「それから、姉さん、相川さんもうでてきて？どうしたの？」

思ひ出したやうに、きゝかけた冷子の言葉が、正代をぎくりとさせた。この問に對して餘りに、みじめな返事をしなければならない彼女自身であつた故に。

「あたし、その事で冷ちやんに會はす顏がないの」

正代は正直に云つた。

「相川がゐないところでは、私の思想はどん／＼自由にのびて、それの命令通りの事がやれるんだけれど、相川にかゝると元の、もくあみなの——。こんなにいろ／＼考へぬいたあげく、いろ／＼決意しておきながら、それが相川のわづかな愛情の表示で一たまりもなく、くづれちやふなんて——。過去がいけなかつたのね。たゞ相川

が私を、何よりも愛してるつて事だけに滿足して相川を絕對なもんだと思つてた私の過去の習慣が私にはどうしてもこびりついて、はなれないのよ、これぢやいけない。バカな、しつかりしろつて自分で自分を叱つちやゐるんだけれど――。あたし自分の不甲斐なさにつく〴〵愛想がつきたのよ。相川がこんなに私を愛してさへゐなかつたら私はどん〱活動的に私の意志を發展させる事ができたらうなんかと思つたりして、餘り意久地がないつて冷ちやんに叱られるつもりで、あんたんとこへきたの。相川さへゐなきや私はどこでゝも、私の思ふ通りふるまへるやうな氣がして」

「おやまあ。」

みなも云はせず冷子が口をとがらせて云つた。

「相川さんの姉さんに對する愛情が姉さんのよき意志の發展を阻止するなんて。そんなもの果して愛情つて呼ばれるべきもんかしら。そんなもの一つの動物的な感情でしきやないぢやないの。人間に考へる力がある限りそんな犬にだつて猫にだつてある感情で女學生でもあるまいし今の姉さんが、一たまりもなくまいつちまふなんて、お話しにならないわねえ。」

怒氣を含んだ冷子の舌鋒が烈しく正代をうつた。

「さう云はれちや、とりつく島もないけれど――。それで相川とはなれる一つの手段として、冷ちやんとこへやつて來たわけなの。」

「姉さんのやる事、餘りはつきりしないけど、ぢやあさうするより他仕様がないわね。」

冷子は、プン〱した口調ではがゆさうに云ふと、立ち上つて勝手元に出て行つた。

「さうだ。ほんとだ。あんなもの本當に愛情と呼ばれるべき性質のものぢやないのだ――」

一人正代は、從順な心に妹の言葉を肯定しつゞけた。

正代は、冷子の傍で、拘束されない日をつゞけた。彼女の意志の動きは、こゝで順調な成長をとりもどしたやうに思へた。

五日目の午後、その前夜とびこんできた岡野のために、冷子の留守を、臺所の仕度をしてゐた正代は、あはたゞしい二三人の男の靴音に、おどろかされた。玄關に出た正代は、訪客の顏をみると「あつ」と、ひつゝた聲で叫んで、倒れさうになる彼女自身をあやふく支へた。

相川だ。ひどくとりみだした姿の相川が、二人の乾分格の男をつれて、正代を、つれに來たのだ。

「正代。ともかくかへれ。どう云ふわけがあるか知らんが話しはうちできかう。」

極度に驚いてゐる正代へ相川がきはめて落ちつきをよそほつた態度で云つた。

「まあ。餘り亂暴ぢやありませんか。他所の家へ、無斷でゾロ〱入つてきたりして」

いつになく、正代は、こんらんした彼女自身を、しづめながら、大膽に相川に云つた。
「いや、お前は俺をそんなにまでせめる前に、ともかく俺と一緒にかへる義務があるぜ。さあ。ともかくかへらう。後の話しは、家でどうにでもつけやう。」
平氣をよそほつてはゐるが相川の顔が眞劍な表情に動いた。そして彼は、奥の間で煙草をふかしてゐた岡野の、後姿に聲をかけた。
「僕はこの女の亭主として、この女をつれてかへる事にしますから。」
「あなた。そんな事餘り……」
正代が何か云はふとすると、岡野が玄關に出て來て相川にではなく、彼女に向つて、さとすやうに云つた。
「後の話しはどうにでもつけやうと云ふ相川さんの言葉を、信用して、今の場合、おかへりになるのが一番妥當ぢやないですか。」
これから、相川と共に、再び彼の許へかへつた後の自分はどうなるのだらう？　正代はかうした不安にかられながらも、今の場合、さうするより他仕方のない破目になつて了つた。
一時間程たつて正代は三人の男に守られて、護送されるやうに、××の停留所で、電車を下りた。下りるとすぐ前か廣大な×モスの工場の表門だ。正代はこんらんした頭がヒヤリと興奮するのを感じた。次の瞬間、彼女は何かひどく烈しい調子の歌聲を、きいたやうな氣がした。工場の塀にそつて、その歌聲は、はつきり冴へた調子で彼女の耳朶を打ち歌詞も明確にきゝとる事が出來た。

「…………
力無く道暗けれど
××××××
勵と奮の旗をみよ
×××××××………」

××の歌の一節だ！　爭議團の人々によつて唱はれてゐる歌の一節だ！
正代は身の中が、かつと熱くなるのを感じた。自分がぐず〱してゐる中に、彼等は、かくも硬度な意識を獲得して、勵と奮の旗をかゝげながら爭ひを、いどんでゐるではないか！
「まだやつてますね。」
一人の男が相川につぶやいた。が相川はそれに、一寸うなづいたゞけで、默々として歩いてゐた。
かりにも、このストライキの指導者の位置にある彼がこの戰鬪的な爭議團の動靜に、注意しやうともせずに、自分のあとを、おつかける事に腐心してゐるとは、何と云ふ輕蔑すべき男だらう！　正代は、相川の横顔をはげしい侮蔑の目でながめた。
二人の男を途中でかへして家につくと、先づ正代は、相川にむかつて、きはめて冷靜な態度で云つた。

「ぢやあ、さつきあなたがおつしやつたやうに、はつきり話しをつけませう。こゝまできた以上何も云はずに、あなたは私と別れて下さる事と思ひますが」
「何つ？　別れる？　どうして別れると云ふのだ、お前は、俺以上に、お前を愛してゐる者が他にあると思ふのか。バカな。俺は、お前が今日のあの若い男と、工場の中へビラをまいたつて事をうすうすきいてしつてるんだ。だが俺は、そんな事は問題にしない。俺は俺以上お前を滿足させる愛情を、お前に對してもつてゐるものはないと信じてゐるんだ。だのにお前は――」
「いゝえ。」正代は、我ながら驚く程、はつきりした調子で云つた。「私は愛情しか〴〵を云つてるのではありません。私の思想は、もうこれ以上あなたに從つて行く事はできなくなりました。それで」
「いや、俺には、お前の思想がどうならうとそんな事は問題ぢやないんだ。お前の思想なんか俺のお前に對する愛に比べたら問題にならない程小さいものぢやないか。なあ正代。ともかくお前は、今日まで俺がお前をこんなにも愛してるつて事で滿足してゐながら、あんな男がたつた一人あらはれてきたゞけで――」
「…………」
「さうぢやないか正代。お前は俺に愛されてゐるだけで滿足さへしてゐれば、俺達は今迄通りの幸福な生活が出來るんぢやないか。それにたかゞあんな男一人で、俺と、お前の生活の基調がメチヤ〳〵にされるなんて。」
　正代の申出がたゞ岡野と、正代の戀愛關係によるものであるとしか解釋し得ない相川が、今の正代にはわけのわからぬ憐憫を感じさせた。
「あなたの解釋の仕方、根本的に、まちがつてますわ。何も私はあの人とは何の感情的な關係もない。たゞ私は私として獨立した立場から社會民主々義者としてのあなたとはなれなくてはならない」
「いや、俺は、お前が一寸した一時的なものゝ考へ方位で俺をはなれやうとしやうとは思へない。俺はどうしても、あの男が原因としか思へないのだ。俺は、今あの男さへゐなかつたら、お前を完全に俺のものにし得る自信があるんだ。俺はその爲に方法を選ぶ余裕はない。その方法として例へば俺があの男を黨員だと密告すれば……」
「えゝつ。何ですつて。」
　正代は思はず叫んだ。彼女への愛情を獨占するために、あらゆる良心も恥も、忘れはてゝしまつた餘りにもみじめな相川の態度が、彼女を、よろ〳〵させた。
「何と云ふ、卑怯な事を――」
「卑怯――。そんな卑怯者に誰がさせたのだ。俺のお前に對する愛情は俺にとつてこんなに絶對なものなのだ。だのに。正代たのむ。今迄通りでゐてくれ。」
　涙ぐんだ聲で歎願する相川の言葉が、ふと正代を感傷的にした。

そんな卑怯者に誰がしたのだ？　それが彼女を理窟をはなれた感傷におとし入れた。

自分を愛するために、何もかも忘却して了つた相川――。彼女は、涙をゴブ〳〵のんで云つた。

「そりやあ、あなたが私を愛してゐて下さるつて事よくわかつてますけれど」

――そんなもの果して愛情と呼ばれるべきものなのか？　そんなもの犬にでも猫にでもある感情ぢやないか？――口をきつたあとから、冷子の言葉が、正代にガーンと想ひ起された。

相川のこの感情によつて、いつも〳〵無爲な感傷に打まかされて、それが揚棄出來ないばかりに自由に意志を貫徹させる事のできないのが、あきらかな自分の弱點ではないか！　正代は愕然とした。

相川が正代の言葉に何か二言三言答へて、彼女の肩に手をまはした、と、正代の意識は錯亂した。

彼女の瞳は焦點を失ひ、目前にあるすべての物體がぐわーつと一つになつてぐる〳〵まはつた。

「あつ！　何をする！」

相川の必死の叫びだ――。それは、わづか幾分の間の出來事だつた。

3

「冷ちやん。姉さんはやつたぞ！」

その夜用向で一寸外出した岡野が、夕刊を片手にあはたゞしく、冷子のところへ、かへつて來た。

「えゝつ！　何を」縫物をしてゐた冷子は彼の云つた意味が卽座にはつきりわからなくて、岡野の示した夕刊に、目をうつしながらせきこんできいた。

……發狂した主義者の妻
剃刀で夫を刺す……

初號活字の大みだしが、ガーンと冷子をうつて、彼女は、しばらく自失したかのやうに、見へた。

「相川つて男、もう少しわかる男かと思つて、あの時姉さんを、俺がかへしたのがわるかつたのだな。」

「いゝえ。相川に、そんな事のぞむのは無理よ。たゞ姉さんがそれを十二分に知つてながら、おめ〳〵かへつて、こんな仕末になるなんて、餘りはつきりしなすぎる。餘りだらしがない。」

岡野の言葉を否定して、狂氣のやうに、つゞけながら冷子にふと、名狀しがたい感情が來た。彼女は、わつと泣き出した。

十分に飛躍すべき意志をもちながら相川と云ふ男性の「愛情」とよばれる非科學的な感情のきづなにしばられて、過去を精算し得なかつた餘りに不徹底な、弱い姉――と冷子は輕蔑しやうとする意識の下から、過去を精算して、新らしい意志の飛躍をこゝろみやうとす

る努力と、男性の「愛情」とよばれる非學科的な感情のきづなを、たゝうとしてたち得ない弱さがもたらす焦燥の葛藤に壓倒されて錯亂した意識の中から尙最後まで、それをたちきらうとしたいた〳〵しい姉の可憐な努力が冷子をしばらく慟哭させた。

「一度、會ひに行つてみるか？」

その場の雰圍氣に、同化したやうに岡野が云つた。

「ばかな！」

相川の言葉に相呼應しやうとする彼女自身の中にある感傷を、ふりきるやうに冷子が云つた。

この事件に對する何らかの形式での關係者としてあなたも私もその筋から、問はれやうとしてゐる今の狀態で、さうする事が私、ひいては貴方にとつてどんなに致命的な事であるかを忘れたのか。發狂した姉に對する妹としての一時的な感傷に、打ちまかされて、貴方と、貴方につながる幾多の同志と、それによつて支へられ育てられてゐる重要な組織とにせまる危險を忘れる程、私は自分の立場に鈍感ではありませんよ、冷子の血ばしつた目が、岡野に、云はふとする事をはつきりつたへた。

「あなた。すぐ逃げなくちや。こんな事で藪蛇になつちやつまらない。」

「うん。有難う。ぢやあ、君も」

「いや私の事よか、あなた。早く。これをもつて。」

冷子は、すばやく彼のズボンのポケットに、彼女の財布からとり出した二枚の紙幣を、つゝこみながらせき立てた。

「ぢや、當分あふまい。からだに氣をつけて。」

岡野は、あはたゞしく冷子の手をもとめて靴をはいた。

岡野の靴音が、彼女に、きこへなくなるとつゞいて冷子も又しばらくどこかへ姿を、消す事が必要だと感じた。すばやく、身のまはりを、まとめて、小さなふろしきづつみをこしらへると彼女は、それをかゝへて表へ出た。

――姉さん！　あなたの、勢一杯な、一生懸命な努力はみとめる。けれど、もうあなたのさうした努力を一々とりあげてかまつてゐられない今の私なのだ。もつと、大きな、もつと大切な事のために――。

一月餘り前幾年ぶりかで正代と邂逅した道を逆に、歩きながら、ともすればこの短い期間に起つたさま〴〵の事件の追憶がよびおこす姉への涙ぐましい感傷を、ふりすてるやうに冷子は心の中でつぶやくと、暗い道を、省線の驛へと、歩いて行つた。

三、九、一五、夜



嵐の後（みちづれ）

V・マルグリット作
望月百合子譯

第三章

一

三ケ月後、ラスパイユ街で。

眠むつてゐる子供の搖籃の傍に靜かに腰かけて、機械的に動く手で幼な子の顏に止まる蠅を追ひ乍らアニックは、あの突風通過から起つた自分の周圍の變化を、距離をおいた今、はつきりと思ひ出してゐるのだつた。

彼女は、ヴエルサイユに行つて、それからクロオデイネと一緒にやつと、なつかしい家に歸つて來ることが出來たまでの間、どうして暮らしたか少しも分らなかつた。……

それは肉體的にも、精神的にも四裂の責苦を伴つた突き刺すやうな苦痛の時間であつた……獸のやうな悲鳴を伴つたその苦しみの時も、いまは殆んど彼女が忘れてしまつた過去のものとなつた。あの魂の苦惱も、いまとなつては大きな鎭靜でしかなく、生命を與へるためには苦しんだことは誇でしかない。

考へ込んで、膝の上に置いた本は、自ら閉らいて、彼女が頁を切るために間に挾んでおいた葉書を落し乍ら、滑り落ちた。彼女は本もその葉書も同時に拾ひ上げた……クロオドの出産通知狀だ！

彼女は面白がつて讀み直した。『アニツク・ラムベエル孃とアメデエ・ジヤクマン氏は、男兒クロオド・アメデエの出産を愼しんで貴下に御通知申上げ候……』

何んといふ破廉恥だ！　彼女はその言葉をいまもまだ笑つてゐる。事件は待つてゐたと言はんばかりの蛙沼に落ちたやうなものだつた。そこから騷然と蛙の鳴き聲が湧き立つたのだ！　彼等は反對者側から、非難やお祝ひの手紙や、未知の人々からの手紙や、無名の手紙を山程受とつた。慣例破りの通知は新聞紙に發表されて、大

論議をまき起した。新聞屋達は低級な文字を連らねてその問題を長びかせた。

數日後には、モルヴル夫人が息子に對して激しい抗議を持ち出した。ラッペル紙にはヴァンデックスと署名された皮肉な文章が載つた。それは結婚や、家族を冒瀆するこの無禮な『挑戰』を、非常な偉大な筆でやつつけてゐた。それがいかにも偉大だつたので、彼等はそこにモルヴァル氏の雄辯を認めたのだ。

そこで叛逆した息子と、怒つた兩親との間に戰ひが宣告された。モルヴァル夫人に依つてぶちまけられた非難の袋は、アメデエが感情を害して退却した程の惡臭を發散した。勝手に牙塔の上から、罵詈や泣言をぶちまけるがいゝ！

『貴方がたが御自分の間違ひをお認めになるまではお目にかゝりません……』と彼は言つた。

『可哀さうなお馬鹿さん！　お前こそ欺されてゐるんだよ！』

『さよなら。僕は貴方がたが詫びをなさるのを待つてゐませう』

『そんなことは決して！』

『では決して』

このはつきりした品位ある態度にアニックはすつかり感激してしまつた。そしてアメデエのこの凡ての勇氣がどんなに偉らいものかを感じて、一層熱烈な愛情をもつて、その疵の手當てに努力した。

苦味はまだ殘つてはゐるが、それを紛らすことは（アニックの直感は直ぐそれに氣がついた）自然モルヴァル夫妻に對して、彼の心にまだ癒しえないでゐる怨みを、外らして行つた。

敵對は少くとも鋭い狀態では、長く續かなかつた。併しアニックはやはり數日前から母親が申出した追從に對しても喧ましい敵討をしか感じなかつた。母親はアメデエに長い手紙を書いて、自分の善良な心が不意打ちに會つたのだと言つた。そして『ラムベエル夫人』との結婚に就て彼が執らねばならないと思つた形式は贊成出來ないけれども、ラムベエル夫人の正しさと價値の前には頭を下げる。だから喜んで息子に會ひたい。そして過去のことは言はず、ともかく孫を抱かして欲しいと書いて來た。

新らしい危險だ、そんなことを言つてゐたつてまた口說くかも知れないのだ……併しアメデエは彼女が心配する程、この速やかな悔悛を喜んだ。そして前日既にもう、仲直りの約束を固めるために、兩親の家の晝餐に招ばれて行つたのだ。その時の樣子は極く手短かにしか彼女に話さなかつた。心の底で彼は何を考へてゐるのだらう？　どうも彼女を信用しきれない樣だが、何にも彼女にかくしてはゐないのだらうか？

彼女は絕えず、彼の上機嫌と外見の平靜が何を匿くしてゐるかを考へてゐた。……償ひ得ない事件を承認し、義務を果した（巴里に歸る前にクロオドを認知した）にしても、彼がほんとに心から幸福になり得るだらうか？……彼女はそんなことは信じなかつた。併し微妙さと不斷の親切さで、時代の事業を完成したいと希つてゐた。……アメデエの創痕はいつか癒えるだらう。それに、今迄より、もつと動搖の激しいもつと多忙な生活だから……

選擧は大方議會から『無知と愚劣』とを一掃した。巴里はルボオを落して、再びピエール・ルウソオを選んだ……だから時々、正義が復歸することもあるものなのだ！……シペロンの專制に次いで右翼の内閣が起ち、國をして世界的平和と、ヨオロッパ再建の時代へ向はしめた。ルウルは撤兵され、聯盟諸國の決議のお陰で、やうや

く賠償問題も一決して、世間では大統領ヴイルフオの進退が噂されてゐた。つまり、『承認するか辭任するか』と。併し勿論、アメデエはヴイルフオの人物をよく知つてゐたので、承認するだらうと確認してゐた。

ラッペル紙はやはりロンシャアルや、メタリュルヂイの共同利害關係のために、半ば反動、半ば進歩的な曖昧な政治上の態度を續けてゐた。ルボオは第一回の代議士立候補に失敗したので、翰林院に向つて、出産率低下に就て挑戰することで自ら慰めてゐた。それは彼が『贅澤の波』に就てこの前に挑戰した時かち得た人々にとつては、愛國的博愛の性質が更らに一つの理由となつた。レイクメイヤアは、薔薇花形の勳章を得たので、『民衆のスウプ』を取り去つて、『諸元師(レマレシヨウ)』を六十萬法でアメリカに賣りつけた。一方、ジヤン、ルウソオは、ガイヤルド(モウルの森かげの海岸)の日當りのいい靜寂の中で、心靜かに『戰爭後』といふ大三曲畫を完成した。

アニックは次の暑中休暇に、若しアメデエが、いつも延び〱にしてゐたアメリカの旅行に出かけたら、八月と九月を、クロオデイネと一緒にこの畫家の近くのサン・エイギュルフに行つて過さうと思つてゐる。彼女はブルウサ夫人やゼロノフと一緒に別莊を一つ借りるだらう。そして若しメレットが――近頃疲勞が見えるので――暑さを恐れるにしても一緒にこの南方の海岸に行くことに贊成したら……

彼女はこの年寄つた友達にそれを同意させることを考へると樂しかつた。一年の苦しい勞働の後に、ふら〱遊ぶことは、どんなに樂しいことだらう。『だから、いまこそ、休止は濟んでしまつたんだ! 再び女辯護士に歸つて、失つた時間をとり戻さなければならない……』と彼女は思つた。

彼女は、兩手を握り締めて、かすかに鼾をかいてゐる赤んぼに笑顏を向け乍ら起つて搖籃に紗の覆ひをかけた。それからストオヴの所に行つて、事務室から持つて來ておいた訴訟記錄を開けた……彼女がその頁を繰り始めた時、アメデエが安心しながら入つて來た。

彼は醫學的正確さで時間が定つてゐる食事の後には必らず子供が眠むることを知つてゐる。アニックが書類の上に頭をかしげてゐるのを見ると、いまゝで彼の顏を輝やかせてゐた安心の色は――(彼は外出の前に彼女を抱擁しに來たのだ)――消えてしまつた。

『そんなものは放つときなさい!……ジヤック(彼の祕書の一人で、九月以來、アニックの代理を務めてゐた男)がそんなことはするだらうから』と言つた。

彼女はびつくりして彼を見た。そして笑ひ出した。

『だつて貴方のためにではなく、私が働らくのは自分の爲めなんですもの!』

『またそんなことを云ふ! 僕は今こそ、あなたがそんなことは抛うてるだらうと思つてゐた――おゝ! 勿論、すつかりといふのではないが、もう少しの間少くともあなたの仕事の一部分でも……赤んぼがもう既にこんなにあなたの手を一杯に塞さいでゐるではないか?』

アニックは急に咽喉が引締まるのを感じた。休止はもう濟んだのだ! アメデエの夢のまゝに彼女が小さな母親であり、家庭のよき主婦の役割の中に光りを消してゐた間は、おゝ! 平和だつた! ……だがいま、彼女が決心でさへもない只單なる仕事に着手し始めようとする氣持ちを表はしただけなのに!……

彼女は靜かに言つた。
『貴方にも分つてゐらつしやるやうに、私自身でクロオドを育てようとして、いくら養生しても、もうちつともお乳が出なくなつてしまつたんです……一週間前から殺菌乳をやり始めなければならなくなつたのも、何も私が好んでしたんぢやないんですよ…幸ひアメリイは淸潔そのもののやうな女です。準備と哺乳器があれば、申分はありません。彼女は完全に私の代りになるでせうから』
『まだそんな勝手なことを！ ぢやいい乳でも…』
『いいえ！ いい牝牛があればいいんです…めいめいが自分の仕事を持つてゐます。母親達の仕事は、出來るだけ自分の子供に乳をやることで、貧乏だからといつて自分達の子供を失望させて、乳を金持ちに賣ることではありませんわ…ほんとに！ 女を搾取することは、イヴリンの人々も言つてゐるやうにその女を最も家畜に近づけるものだと私は思ひますわ！』
『ぢや、あなたはやつぱりアメリイをこのまま置いておくつもりなんだね？』
『さうですとも、だつてブルウサ夫人が保證して下すつたんだもの！ 何かいけないとお思ひになつて？』
彼はためらつた。併しやがてはつきりと言つた。
『いや少しも。あの人が安心していいと言はれるんだから…併し、オオトイユの庇護所と僕達のとでは狀態が違ふと思ふんだが…』
『ぢや貴方はもつといい方法があると仰有るんですね？』
彼はまたためらつた。
『いや。だつてもう決つてしまつたんだから。それにきつとそんなことはあなたがいやがるだらうから…』
明敏な彼女は頭を振つた。
『貴方のお母樣のお指圖だからでせう？…昨日、貴方が御晝餐にいらした時に、ねさうでせう？…仲直りの最初から何んといふお心盡しでせう！…どうしてそのことを私に何んとも仰有らなかつたんです？』
『僕自身、そんなことは何んとも思はなかつたからさ』
彼はやさしく彼女を見た。戀愛の後に、母性は彼女のうちに完全な肉體的成熟の美花を開らかせたのであつた。彼は見惚れてしまつた。彼の偏見も、この黄金色の瞳と向き合つては決して長くつゞかなかつた。
その偏見は、どうかして彼が一人でアニックに對する不服を反嚼してゐる時、その不服を償ふためかのやうに一層激しくやつてくるだけだつた。彼はどうしても諦らめねばならなかつた屈辱をまだ忘れずにゐた。父親としての權利を奪はれた彼は、この奸計を用ゐて彼の意志に反して敗北させたアニックをまだ赦してはゐなかつた。彼は復讐を考へてゐた。そして彼女を、疲勞や、家庭生活の習慣からの趣味を利用して、彼女の眞實の役割につまり家族の母としての役割と、それに彼の助手であり秘書としての仕事をさせることに習慣づけようとした。
アニックは要心深く訊ねた。
『貴方の仰有る女つて、どんなひとですの？』
『相當の年配の女で、地位のあつた人の未亡人ださうだが、不幸にも…』
『かつて金持ちだつて仰有つた方がいいわ！』

『さうでもないんだらう?…だがまあそれに近い』
『御免ですわ! 私は若い何んでもない娘の方が好きですわ…かつて貧しかつた女だつたら!… 小くとも私はすつかりその女を私の思ふやうに導き乍ら、何か爲になることをしてやれますもの』
彼は分つた樣子で、兩手を揉り合せた。
『あなたに任せますよ、主權夫人に!…おや! あなたの子供が眼をさましたよ』
彼女はおどけて拳を振り上げて脅かした。これは、惡意のあるものではないが、併しともかくも怨みを含んだ、彼の最近考へ出した冗談だ。『あなたの子供!…』彼はアニックの前では決してクロオドを、さうしか呼ばなかつた。
子供はぐづつき始めた。彼女は紗を取り除けた。併しもうまた規則正しい呼吸をとり戻してゐた。
『あなたのお父さんはいけない神經屋さんですよ』と言つた。
『ぢや、もつとおとなしい男を澤山探すがいいよ』と彼はアニックを抱擁しながら言つた。『…さよなら!…あゝさうさう! 忘れてゐた。今夜僕は夕飯に歸らないよ…宴會があることを、今ジャックから注意されたところだ…『ジョンスの友』の會だ』
『さう! ぢや私もボオルの處でお夕飯をしますわ。あのひとは一人ぼつちで、あんまり體の工合もよくはありませんから。離乳はうまく行つたんですけれど…無論、ロヂエから便りがないもんですからね! あのひとはいま海の上です…だもんだからボオルは長びくばかりのあのひとの旅を心配してばかりゐるんですの?…このまゝでは迚も長つゞきはしませんわ。だから一層、マルチネとはうまく行かないし…』
『若しあのひとが、あなたの忠告に從つてゐたらこんなことにならなかつたのに!』
『ぢや、時としては私の意見もいゝことがあると見えますね』
彼は負けたことを白狀したくはなかつた。
『あゝ! いつでも他人のことはよく分るものなんでね』

プロレタリア・エスペラント講座

親切なエスペラントの自習書が出た。プロレタリア・エスペラント講座の第一巻です。第一週一日が總論、發音及文字。二日が社會生活の發展、發音及び文字。三日社會の發展と言語。發音及文字。四日頭の働きと手の働き、發音及文字。五日頭の働きの發展。六日、物の考へ方の發達と言語の發達。七日、總論。第二週一日——二日言語の正體などから文字と發音。言語の形、言語の機能樣式、文例、練習、單語の活用、習慣的法則と論理的法則、學習の色々な部分と綜合、日本語との關係、エスペラントの實用についてから、科外講話としてエスペラントの文化的意義まで第四週七日まで一冊にしてある。發音は、i e a o uと、口の開き方が圖で示してあるから解りがよい。代表編輯者武藤丸楠氏、發行神田一ツ橋通九、鐵塔書院、定價八拾錢。

婦人彙報

◇空氣淨化のための取締令

京市內外の空氣中の細菌分布狀態は、市內住宅地帶に於て一立方米の空氣中、一萬四千個、市內商業地帶では、一萬四千五百個、工業地帶では、一萬四千八百個といはれてゐる。ましてや公衆の密集する劇場、デパート、ビルヂング、工場の空氣の汚染は驚くべきもので、警視廳では、衛生的見地から取締りの必要を感じ、來年度の豫算に空氣檢査に必要な機械購入費を提出し、更に「空氣取締規則」をも發令する筈。

◇金と人生

人事相談所の調査に表はれた數字によると、今年一月から六月までの取扱件數は、二萬三千二百九十二件で一ケ月三千八百二十三件一日平均百五十件で、昨年同期に比し約二千件の増加である。之等はいづれも家庭爭議、職業上取引の紛議など百般に亘つてゐるが、金に關しない事はなく、そのうち婦人四千七百三十三名（昨年同期二・七二八）更に七百名（昨年同期）は金のない夫に愛想づかしの離婚の相談 ある。

◇他に聞こえぬ無線電話

秘密無電に關する研究には、軍事外交その他の必要から、各國とも力を注いでゐるが、和蘭本國と蘭領印度間に於て行つた秘密無電は、或程度の成功を齎した。それは一種の機械裝置で、一方で話す言葉を途中で傍受してもその意味が解せぬ樣音響を錯雜させ、受信者に達した時に、特別の裝置ある受話器で、自動的に正確な、音響に復歸するのが、絕對に他に秘密が洩れる事がないといはれてゐる。

◇第二回國勢調査

第二回の國勢調査は、二ケ年の準備と、二十五萬餘の人員を動員して、十月一日午前零時いよ〳〵行はれた。經濟恐慌と失業者の增大化、農村の窮乏とを前に行はれたのであり、且この統計は、國家の失業者對策の基礎となるものなので、緊張的注意を以て見られてゐる。

◇爭議から生れたプロ學校

小作爭議から農民學校が生れた經驗はあるが、爭議からプロ學校の生れたのは大島製鋼所が始めてゞある。同爭議團は、勞農黨系東京金屬勞働組合大島支部指導の下に爭議を續けてゐるが、非常に結束堅く、婦人の結束、ピオニールまで結成され、且學校を開いて氣勢をあげてゐる。（因にこの學校は、デモを決行し、解散させられた。）

◇芝居王國に階級斗爭の芽生え

超世間的に、因習と傳統に堅められた芝居王國も、吹きまくる不景氣には勝てず、減俸また人員整理と矢つぎ早の生活の脅威に、松竹系の下級從業員温なしくばかりもしてゐられず、資本家には、組合に加入して對抗するに限ると、續々勞働總同盟に加盟したので、今後の劇場從業員の行動は注目を以て見られてゐる。

◇社會局少年保護に乘り出す

東京市外板橋岩の坂部落の貰ひ子殺し、新宿の托送小荷物の七個の幼兒の死體發見、瀧田の娘地獄や少年に行商を强請するなど、幼少年虐待の事實が最近頓に頻發するやうになつた。しかも最近一ケ年間に明るみに出された兒童虐待は、百二十二人、報酬をもつて養育する數は五千五六百人であり、之等多數が、殆ど何等現行法律では保護されてゐないので、いよよ社會局では、親權行使に關する制限、輕業曲馬團、遊藝幼少年、一般雇傭關係にあつての虐待防止の規定を設けやうと目下立案中。

◇大阪市の電燈値下げ

全國的に見て電燈料金の安いとされてゐた大阪市では、この程大同電力との料金改訂で、年額約七十五萬五千圓浮いて來たと噂さされてゐたが、更に物價値下げの潮流と相俟つて、電燈料及小口動力料金の値下げを斷行し、新に取付けられる十燈以上の電燈をメートル本位制にする事を發表した。値下げの範圍は、電力料高平均七分五厘から最高一割一分八厘、電熱料金は一割一分で、年額四十五六萬圓の減收の見込み、更に電車賃、市バスの値下げの議もより〳〵協議されてゐる。

◇東京市電へ購入料値下通告

世帶のヤリクリを從業員の待遇改惡でのみ切り拔けんとして來た東京市でも、いよ〳〵長年の弊風に氣付き東電に對し、電燈購入料金値下げの强談判をしてゐる。市電氣局では從來の電力購入料金一キロ二錢二厘八毛（負荷率五十五パーセント）を一キロ二錢八毛（負荷率六十パーセント）にする事を要求し、要求が通らぬ時は斷然需要關係を斷つとの意氣込みである。現在市電氣局が東電から購入してゐる電力は、一萬五千キロで、右値下げが實現すれば、年約

十五萬圓浮くといふ。

◇禁酒デーに酒のたゞ振舞ひ

金澤市の酒造組合では、最近禁酒運動が猛烈になつたのに對抗し、十月三十日教育勅語三十周年紀念日に行はれる禁酒運動の向ふをはり、全國酒造組合聯合會に計り、當日市內の酒造家二十五名は各々四斗樽一本宛を持ち出し、目拔きの場所で、無料でたらふく飮ませる事になつた。

◇東洋一の大屠殺場

東京市では失業救濟と新鮮な安い肉を市民に供給するために、大屠殺場設立を建案中だつたが、いよ〳〵建設場所を芝浦埋立地とし總工費三百五十萬、三ケ年の繼續事業で、十一月から取りかゝる事になつた。現在東京市民の一ケ年の鮮肉消費量は、三千四百六十二萬五千百八十二斤、日本全體から見ると、一人一ケ年五百五匁を消費してをり、大崎、三の輪、寺島、千住の四屠殺場で一ケ年に牛、犢、馬、豚肉二十萬頭、一日平均五百五十八頭を處理してゐたのであるが、屠殺場が竣工すれば汚物處分法も完成、廢物も一つ殘らず利用される事になるといふ。

◇騷音防止にも取締り規則

夫婦喧嘩の原因は街頭の騷音である等々、一九三〇年の文化は、原始人の思ひも及ばなかつた事實を示してゐるが、それは冗談事ではなく、自動車やオートバイの爆音、トラックの振動的騷音等は、人々をして不眠症に陷らしめ、神經衰弱を招く實例が多いので、警視廳交通課では、課內に交通騷音防止の專門係を設け、歐米都市の騷音防止施設を參考に、いよ〳〵取締り規則を作る事になつた。

◇村尾船渠爭議團百餘名檢束

海員の失業者が增大して行く折柄、神戶村尾船渠の爭議團は、要求嘆願のため百九名同市山本通三丁目横田支配人邸に到り面會を求めて全部檢束。

◇滿洲へも直通無電

名古屋無線電信局では我國滿洲間、四千百餘哩の直通無線電信を開始する事になり、四日市通信所を通じてシドニー無電局との間に短波長を以て試驗を行ひ好成積、兩國間の諒解あり次第開通の筈。

◇選擧權の年齡制限低下

內務省では九月二十五日省議を開き、選擧權を私法上の成年年齡と一致せしむる事は、理論上も當然であり、輿論も之を希望してゐるとの理由で、選擧權の現行年令制限滿二十五歳を滿二十歳に低下する事に決定した。これが今議會を通過すれば、一躍約二百五十萬の有權者が增加する事になり、現在のと合して千五百萬乃至千六百萬となるといふ。

◇思想の相違で廢嫡が出來る

共產黨事件に關係したとて、中石龍一君の父親が、同君廢嫡の訴へを東京地方裁判所に提出してゐたが、この程同所民事第一部尾島裁判長は、原告の申立を正當とし、長男でも親子間に思想的相違ある時は、廢嫡出來る判決を下した。

◇左右兩翼が進出した獨逸議會

失業者の洪水、增稅又增稅とどらにもやり切れぬ屋臺骨に、內閣を投げ出したドイツ社會民主黨に代つて出た中央黨の下に總選擧が執行された。歐洲大戰に極度に痛めつけられたドイツは、今は賠償金で世界列强からこづき廻されてゐる。この苦境は民衆をどんな方向に進めてゐるか、と一齊に視聽が集まつてゐるが、選擧の結果は若きブリューニング首相の率ゐる中央黨は、第二黨から第四黨になり、社會民主黨は相變らず第一黨だが、約一割の減員、而して中間派は三割の減員を示してゐるのに極右の國粹社會黨(フワシスト)は僅か十二名から百七名といふ九倍の跳躍ぶり、共產黨は、五十四名から七十六名の進境ぶり、これを見ても、いかにドイツ人が、ヤング案の放棄を望んでゐるか、失業に苦しんでゐるかゞわからう。

◇暗夜秘密に遠くと話が出來る

東北帝大工學部教授千葉茂太郎博士の研究室で、赤外線を利用して、暗夜誰にも感づかれず遠距離と自由に話の出來る事が好成績で試驗された。それはアーク燈に電流を以て音波を送り、アーク燈の前面に赤外線透通グラスをあてがふと、目に見える光線は全部遮斷されて、暗夜と異らない。たゞ目に見えない赤外線のみは、一直線にアーク燈から放射されて、遠距離に屆くので、それを光電池利用の特殊裝置でうけて、赤外線を通じて來る音波で自由に話を聞く事が出來るので、これが完成されゝば、軍事上に非常に貢献するものと言はれてゐる。

◇農民が堤防の共同修理

先月の天候で靜岡縣富士郡の河川が洪水になつた。堤防が切斷された。全農縣聯富士支部では、二百五十人の支部を總同員し、潤川堤防の修理を數時間で行ひ、後鐵鍬等で武裝し、大地主の門前にデモを決行した。

編輯後記

秋晴れだ、高い空だ、深い蒼だ夕暮れ、長延寺の谷の西側は陽を受けてあかるくどこか靜かな山のひだを思はせる、木の多い處だな少し肌寒さが何となつかしく身にしみる秋だ。大きな希望と抱負で企てた秋夜講座も、十月號引續き××でその宣傳に不足を感じ、一つの不安で九月二十九日を待つたが、最初の計畫の時の豫定には程遠い人數であつたとはいへ、集つて來た方達の眞面目な熱心さ、入口に坐つて切符を受取りながら、顔見覺えた人達にほのかな會釋を送る時のうれしさ、經濟的には全々失敗であつたとは云へ、もう一つ考へなほして見る時には、そんな事の云へない位な大きな收穫があつたのだ。しかし何よりも惜しいのは立派な講師の方達の話が比較的少數な人によつてよりきかれなかつたといふことだ、座席のあきをみつめる時に、せつかくのはなしがそこにここにと無駄に散つてゆく樣なさびしさ、しかし今月號にそれ等のよきはなしがのつてゐるのをみると、やつと心落着く思ひがする。(みどり)

もう編輯後記を書く時分になつた。今月は、いやに早く、くる〳〵經つてしまつた。ハテなと思へば講習會準備を皆んな夢中だつたのと、一週間讀賣講堂へ出張したりして落ち付かなかつたのだ。暫く「女人藝術」が街頭に顔を見せなかつたので、物足りなく思つていられるであらう讀者の方達よ、此の靜夜讀書號は豊富な記事を滿載して皆さんの懐へ飛び込んで行くでせう切なる御支持を希望して止みません。(美智子)

この春から夏にかけて、順調に健康な歩みをつゞけて來る事の出來た女人藝術が、今一つのシリアスな場合に直面してゐると云ふ事を、讀者はお氣づきの事と思ふ。一つの大きな目的にむかつての長い途上において、かうした場合に出會す事は一つの週期的な、當然な事とも云へるだらう。私達はこの場合に各々の立場からよく内省して今後の見透しをつけなければならない。その事こそ今後の女人藝術の成長を決定するものであらうから。(美子)

二タ月續いた發禁に大分あはてた。九月號にくらべて十月號ははるかにやはらかくなつたと思つてゐたのだが。ある程度まで行くとどゝで消せばよいのかさつぱりわからない。間拔けだと云はれれば間拔けかもしれない。だがそうなれば、少し位の字を消すだけぢあ結局だめなんだ。おまけに今月は素川さんも體を惡くして休んでゐる。秋夜講座が一週間續いた。そしてやつと十一月號が出來た。でもどんな風に出來たか出來上つて本を手にして見なければさつぱりわからない。だが女人藝術がこれから先どんな風に發展してゆくか、唯讀者諸君の御力添へを待つばかりだ。(優子)

今月私は病氣で完全にお手傳ひが出來なかつた事を心苦しく思つてゐます。貧乏人にとつて病氣は贅澤の部類だといふ事を身を以つて知り乍ら、このやくざな身體がすつかり快復したら新しい意氣を持つて大いに雜誌の爲に努力したいと專心靜養してゐます。(素子)

二度繰返した失敗は私の不明のいたすところである。「靜夜讀書號」は落付いたものをつくつて見たいと思つた。意氣ごんでゐた「秋夜講習會」はよき講演である故特輯記事にした。講習會には川瀬、小池、熱田が實にけなげに、よく働いてくれた。山本も一生懸命にやつた。みんなの先輩素川が九月中旬先號の校正をすますと疲勞で温泉にいつたので、元氣な人達は其分も引受けて働いた。私は蟻のやうに夏動いておいて、秋にはちつと書いたり讀んだりする時間がほしいと思つてゐたら、しつくり物を考へる時もないほどの忙しさを受取つた。人世の皮肉だ、毎晩讀賣講堂へ出かけるのにカンフルを用心していつたが、どうやらツンのめらずに漕ぎつけた。荒波も乘つこせばなぎも良き日和もある。もう麗かな空を仰げるだらう。お願ひは今月號をこんどは愛讀者側から買〆て即日賣切れにして頂きたい。(、雨)

昭和五年十月十五日印刷
昭和五年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

送料一部壹錢五厘

定價	
1部	……40錢
6部	……2.40錢
12部	……4.80錢

□誌代の拂込みは成可く振替利用を乞ふ
□郵便切手代用は一割増の事。

發行者 印刷者 編輯者——長谷川ヤス
印刷所——秀英舍
大賣捌——東京堂 北隆館 大東館 東海堂

發行所 東京市牛込區左内町三十一番地 女人藝術社
振替東京七五八二五 電話牛込(24)一七八九



上
品質日本一
ヤマサ醤油
秋の食慾
ヤマサの風味
宮内省御用達
ヤマサ醤油株式會社

昭和三年九月六日第三種郵便物認可
昭和五年十月十五日印刷納本
昭和五年十一月一日發行（毎月一回一日發行）
第三巻第十一號
定價金四十錢（送料金一錢五厘）

